宮城県文化財調査報告書第163集

藤田新田遺跡

平成6年3月

宮 城 県 教 育 委 員 会
日 本 道 路 公 団

序　　文

近年、各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、それを地域づくりの拠点として整備し活用していこうといった考え方を持つところが多くなってきております。

宮城県としても本間知事の提唱により平成2年度から「われらみやぎの東北学おこし事業」を実施するなど、国際化の推進や産業経済の発展の基盤となる歴史と風土に根ざした東北の「地域らしさ」の確立に努め、21世紀に向けた新たな県土づくりに取り組んでいるところであります。

一方、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。道路建設や圃場整備など生活関連事業をはじめ、ゴルフ場などの大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなってきています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を即物的に解明することが出来る貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものであります。まさに「東北学」を考える上での最も基本となる資料と言えます。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成5年度に当教育委員会が行った発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成6年3月

宮城県教育委員会教育長　鈴 鴨 清 美

例　　言

1. 本書は日本道路公団仙台建設局が担当する仙台東道路建設計画に伴う藤田新田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』（1973年）を使用した。
4. 本書の第1図は建設省国土地理院発行の1/25,000「仙台東南部」を複製して使用した。
5. 発掘調査の測量は、道路のセンターライン上の第Ｘ系座標Ｘ＝－197885.380、Ｙ＝10496.444を原点とし、道路センターラインの方向に従って直行座標を組んで行った。南北基準線は、座標の北に対して18°09′21″東へ偏している。
6. 発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々および機関からご助言やご教示を賜った（アイウエオ順、以下敬称絡）。

   相沢清利、青木和夫、浅野春樹、荒井　格、石川俊英、石本　弘、内山敏行、太田昭夫、大橘俊男、岡田茂弘、小野山節、斎藤義弘、斎野裕彦、佐藤甲二、菅原祥夫、鈴木拓也、須藤隆、高荒　淳、高槻成紀、田熊清彦、田代　隆、田中清美、田中広明、千葉孝弥、次山淳、辻　秀人、坪井清足、寺沢　薫、長嶋榮一、中富　洋、西中川駿、長谷川厚、服部敬史、原田昌則、坂野和信、深澤芳樹、福田　聖、福田健司、藤沢　敦、松井　章、村田健二、村田章人、柳沼賢治、梁木　誠、吉田博行、吉村和昭、米田敏幸、宇都宮市教育委員会、橿原考古学研究所、(財)埼玉県埋蔵文化財事業団、桜井布教育委員会、仙台市教育委員会、(財)栃木県文化振興事業団、東北歴史資料館、奈良国立文化財研究所、宮城県多賀城跡調査研究所、八尾市教育委員会、(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会
7. 土器観察表の法量は、高坏と器台については、口径＝坏部（受け部）口径、頸径＝脚部上径、体径＝坏部（受け部）底径、底径＝脚部底径、といったように対応する。なお、（　）で示した数値は復元による推定値または残存状況の数値である。
8. 土器観察表の胎土は、Ａ：砂粒　Ｂ：白色粒子　Ｃ：石英　Ｄ：角閃石　Ｅ：白色針状鉱物　Ｆ：赤褐色粒子　Ｇ：その他　で示した。
9. 土師器については、成形にロクロを使用したものを“ロクロ調整”、ロクロを使用しないものを“非ロクロ調整”と、また内面を黒色処理しものを“内黒”と呼ぶことにした。
10. 本書は以下のような分担で執筆した。

    本文の第Ⅰ・Ⅱ章は19890年度と1990年度の概報（宮城県教育委員会第142集、第148集）に一部加筆して転載し、第Ⅲ・Ⅳ章の一部についても同様に加筆・修正を行って転載した。第Ⅰ～Ⅳ章、第Ⅴ章1.Ａ〔弥生時代〕・〔古墳時代〕・1.Ｂ・2、第Ⅴ章は岩見和泰が、また第Ⅴ章1.Ｃは菅原弘樹が、第Ⅴ章1.Ａ〔平安時代〕は村田晃一がそれぞれ調査員との協議の後に執筆し、後藤秀一・村田晃一が編集した。

    なお、本書と概報の内容が異なる場合は本書が優先する。
11. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が管理・保管している。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 3
Ⅲ．調査の方法と経過 …… 5
　1．確認調査について …… 5
　2．事前調査について …… 6
Ⅳ．発見した遺構と遺物 …… 8
　1．概要 …… 8
　2．発見した遺構と遺物 …… 8
Ⅴ．考　察 …… 151
　1．遺物について …… 151
　　Ａ：土器 …… 151
　　〔弥生時代〕 …… 151
　　〔古墳時代〕 …… 152
　　〔平安時代〕 …… 177
　　Ｂ：木製品 …… 196
　　Ｃ：動物遺体・骨角製品 …… 199
　2．遺構について …… 205
Ⅵ．ま　と　め …… 211

調　査　要　項

遺　跡　名：藤田新田遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号01028　ＮＥ）
所　在　地：仙台市若林区荒井字藤田新田
調 査 面 積：約12000㎡
調 査 期 間：1991年4月8日～11月11日
調 査 主 体：宮城県教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：白鳥良一・後藤秀一・菊地逸夫・須田良平・岩見和泰・木皿直幸・吾妻俊典・金子勇一・早川英紀
調 査 協 力：日本道路公団、三井建設・福田組共同企業体

Ⅰ　調査に至る経過

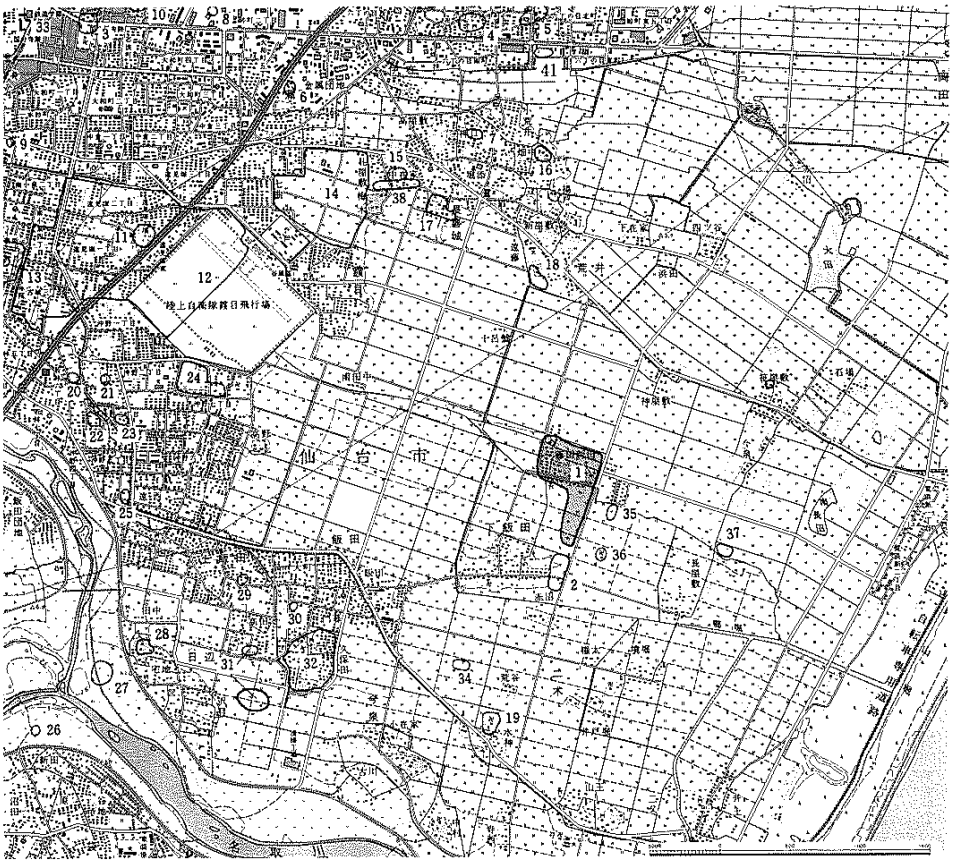
仙台東道路は、仙台市内の通過交通を分離して現道の機能回復を図るとともに、宮城県・仙台市などが国際化を進めている仙台空港・仙台新湾の連絡道路として、仙台都市圏の発展に寄与しようとするものである。亘理町中泉を起点とし、岩沼市・名取市・仙台市・多賀城市・利府町・松島町・鳴瀬町・矢本町・石巻市・河南町・河北町を経て桃生町太田を終点とする仙台湾高規格幹線道路の一部として、亘理町の一般道路6号線から仙台市宮城野区中野の一般道路45号線までの延長約26.3㎞の路線である。このうち、仙台空港ＩＣから仙台東ＩＣまでの約14.1㎞の区間は日本道路公団が4車線の一般有料道路事業として施行することになった。

昭和56年12月に示された計画案によると、その時点での周知の埋蔵文化財包蔵地は避けられていた。しかし、ルートが阿武隈川と名取川の河口にひらけた仙台沖積平野を南北に通過するものであることから、自然堤防や浜堤部分には遺跡の存在する可能性があり、改めて詳細な分布調査を実施する必要のある旨を日本道路公団仙台建設局へ申し入れた。

昭和63年11月に日本道路公団仙台建設局仙台工事事務所長から仙台東道路の建設計画と文化財のかかわりについての正式協議がなされたのを受けて、県教育委員会は仙台市教育委員会、名取市教育委員会、岩沼市教育委員会、亘理町教育委員会と共に平成元年3月に路線敷の詳細な分布調査を行った。その結果、微高地上に位置する仙台市下在家地区、同藤田新田地区、名取市大曲地区、同鶴巻地区、同六角地区、同耕谷地区において遺物の散布が見られた。また同様に微高地となっている仙台市下飯田地区、名取市雲南山地区、岩沼市浦条地区にも遺跡の存在する可能性が想定され、さらに低湿地部分においても水田遺構の発見が予想されたため、その分布調査の結果を早速日本道路公団に回答した。

これらの地区のうち仙台市域分については、用地の買収完了を待って、平成元年10月に県教育委員会が下在家地区から下飯田地区にかけての約3㎞にわたるほぼ全線の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、下在家地区では遺構・遺物は発見されなかったが、藤田新田地区と下飯田地区において古墳時代の竪穴住居跡や溝跡・土壙などが多数発見され、両地区とも古墳時代の集落跡であることが判明した。路線敷にかかる面積は、藤田新田遺跡が約24,400㎡、下飯田遺跡が約7,500㎡であった。

両遺跡の確認調査および事前調査については、県教育委員会と仙台市教育委員会が協議しながら協力してあたることとし、県教育委員会が藤田新田遺跡を、仙台市教育委員会が下飯田遺跡をそれぞれ担当することにした。藤田新田遺跡については、県教育委員会が日本道路公団からの委託を受けて、平成2年の5月と10月に、路線敷内の遺構の有無やその



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	藤田新田遺跡	浜堤	集落跡	弥生、古墳、平安	20	砂押Ⅰ遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
2	下飯田遺跡	浜堤	集落跡	古墳	21	神棚遺跡	自然堤防	包含地	縄文、弥生、古墳、古代
3	陸奥国分尼寺跡	台地	寺院跡	奈良、平安	22	砂押Ⅱ遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
4	北屋敷遺跡	自然堤防	包含地	平安、中世	23	中棚西遺跡	自然堤防	包含地	弥生、古墳、古代
5	明屋敷遺跡	自然堤防	包含地	平安	24	沖野城跡	自然堤防	城館	中世
6	曽利松明神古墳	沖積地	円墳	古墳	25	河原越遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
7	押口遺跡	沖積地	包含地	古代	26	大塚山古墳	河川敷	円墳	古墳
8	谷地館跡	自然堤防	城館	中世	27	目辺遺跡	河川敷	包含地	古墳（中）
9	法領塚古墳	自然堤防	円墳	古墳	28	目辺館跡	自然堤防	城館	室町
10	志波遺跡	沖積地	集落跡	古代	29	上屋敷遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
11	遠見塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳	30	小兎塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
12	南小泉遺跡	自然堤防	集落跡	弥生、古墳、奈良、平安	31	高田遺跡	自然堤防	包含地	弥生、古代
13	若林遺跡	自然堤防	城館地	古墳、平安、中世、近世	32	今泉城跡	自然堤防	城館	中世
14	仙台東郊条里跡	沖積地	条里跡	奈良	33	陸奥国分寺跡	台地	寺院跡	奈良、平安
15	中在家遺跡	自然堤防	包含地	平安	34	桑道遺跡	沖積地	包含地	古代
16	荒井館跡	自然堤防	城館	中世	35	屋敷末遺跡	浜堤	包含地	古墳、古代
17	長喜城跡	自然堤防	城館	中世	36	下飯田薬師堂古墳	浜堤	円墳	古墳（後）
18	下荒井遺跡	自然堤防	包含地	平安	37	岡崎囲遺跡	浜堤	包含地	中世、近世
19	二木館跡	自然堤防	城館	安土桃山	38	中在南遺跡	旧河道	包含地	弥生、古墳

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

広がりをより明確に把握することを目的とした確認調査と一部の事前調査を実施した。

調査は、路線幅である東西約 50m、南北約 480m の約 24,000 ㎡を対象に、道路中心線に沿わせた東西幅 6m、長さ 50～60m の南北トレンチを東西 6m の間隔で設定し、任意に設定したトレンチと合わせて合計 24 ヶ所のトレンチを設けて行った。

その結果、試掘調査で検出された竪穴住居跡の他に、掘立柱建物跡、円形周溝、土器集中遺構、土壙、溝跡、さらに河川跡、水田跡を検出した。この中で、竪穴住居跡、円形周溝、土器集中遺構をそれぞれ調査し、竪穴住居跡が古墳時代中期の南小泉式期のもの、円形周溝が古墳時代から古代にかけてのもの、また、掘立柱建物跡は平面確認だけであるが古代のものと考えられた。

この他、少量ではあるが弥生土器も出土していることから、当該時期の遺構の存在も想定された。さらに対象地区の北側や西側では古墳時代以降の水田跡や近世と考えられる水田跡も検出され、本遺跡は弥生時代から近世にわたって長期間営まれた遺跡であることが明らかとなった。集落跡の広がりは、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、円形周溝などの主な遺構の分布状況から、東西は路線幅を超える 50m 以上、南北は約 250m と捉えられた。

以上のような調査成果を踏まえ、県教育委員会は日本道路公団の委託を受けて、平成 3 年 4 月 8 日から同 11 月 11 日まで事前調査を実施した。調査の対象としたのは、東西が道路幅いっぱいの約 50m、南北が約 250m の範囲で、面積は約 12,000 ㎡である。

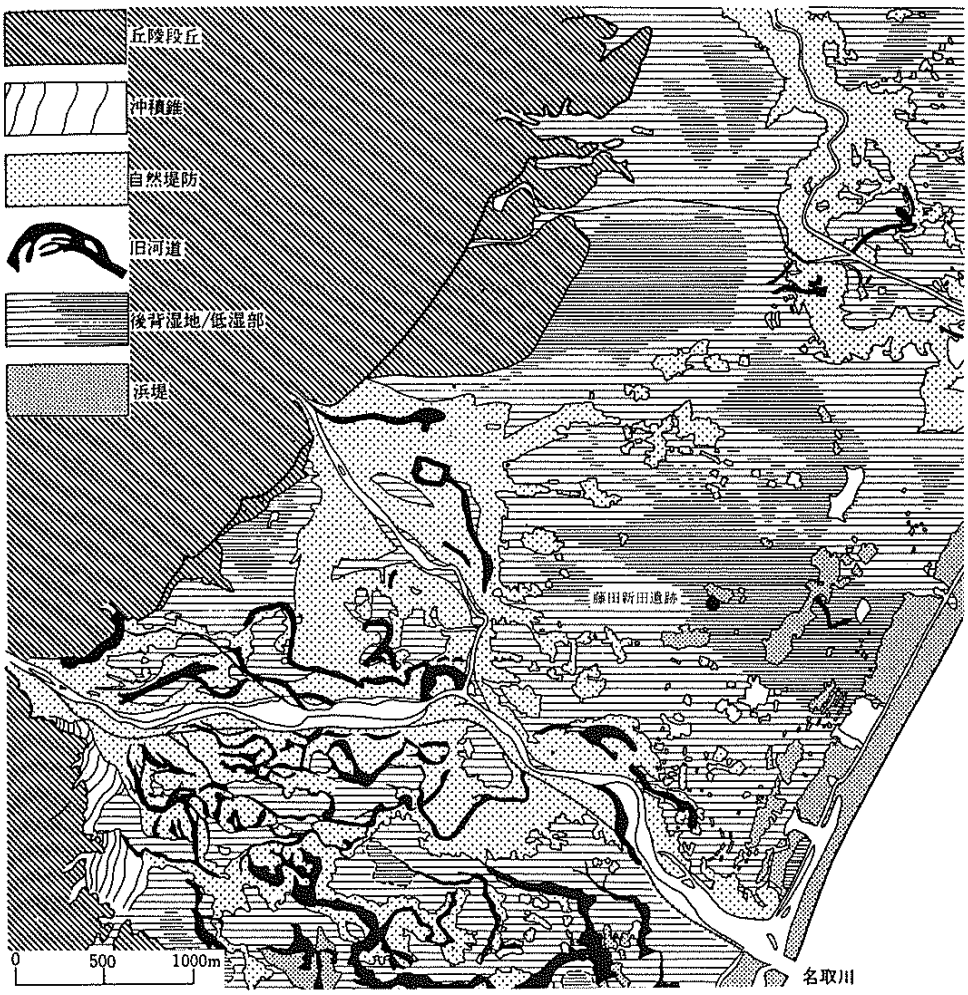
Ⅱ　遺跡の位置と環境

藤田新田遺跡は仙台市若林区荒井字藤田新田にあり、ＪＲ東北本線長町駅の東方約 10.5km の地点に位置している（第１図）。藤田新田地区は江戸時代、仙台藩二代藩主伊達忠宗の代に盛んに行われた家中の新田開発によって成立した集落としても知られており（注 1）、また旧名取郡と宮城郡の境界があった場所でもある（注 2）。この地域は南北に仙台平野が広がり、東方は約 3 kmで仙台湾に面した海岸に達し、南方は約 3 kmのところに名取川が東流し、西方は仙台市街地の背後に遠く蔵王連峰を望むことができる。標高は 1m 前後と低く、付近一帯は小規模な集落が点在する以外、おおむね水田地帯となっている。

仙台平野は地形的にみると、仙台市の東部付近において浜堤や自然堤防などの微高地が随所に発達している。松本秀明氏によれば、この地域には海岸線とほぼ平行して南北に延びる 4 本の浜堤列が認められ、最も西側位置する浜堤が古くその形成年代は約 5000～4500 年前頃であるという（松本：1984ａ）。それによれば、本遺跡は北から下在家－藤田新田－下飯田と連なる内側の浜堤に該当することが明らかであるが（第 2 図）、現状では耕地整理のため平坦化されており、旧地形を知ることはできない。本来は浜堤と後背湿地から

なる地形に小さな河川が入り組むなど、変化に富んだ地形であったようである。なお、本遺跡の時代である弥生時代から古墳時代の頃は、海岸線がかなり近く、遺跡の東方約1㎞、すなわち現在よりも2㎞ほど内側にあったと考えられている（松本：1984b）。

この浜堤上にある周辺の遺跡についてみてみると、現在のところ本遺跡の他に南に近接する下飯田遺跡や下飯田薬師堂古墳、屋敷末遺跡など古墳時代の遺跡のほか、築道遺跡や二木館跡などいくつかの古代から中世の遺跡がある。これらはいずれも弥生時代から古墳時代に以降に属し、縄文時代以前のものは確認されていない。このことは前述したような立地基盤の形成年代が比較的新しいとされることに起因するものと思われ、この地域の歴史的背景を考える上で興味深い現象といえる。



第2図　周辺の地形分類図

この他藤田新田遺跡の周辺には、北西に東北地方有数の規模を誇る遠見塚古墳や古墳時代の大集落として知られている南小泉遺跡といった古墳時代の遺跡が、南西には古代の郡衙跡として知られている郡山遺跡が存在している。また北方には、近年の調査で河川跡から弥生時代～古墳時代にかけての多くの木製品などが発見された中在家南遺跡や押口遺跡があり、これらの調査や本遺跡も含めた仙台市教育委員会による下飯田遺跡の調査によって、仙台平野東端部の歴史の一端が次第に明らかにされつつある。

ところで、この地域の遺跡数は仙台市内の他の地域と比較して必ずしも多くないが、最近、開発工事計画に関連して新たに発見されたり、範囲が大幅に広がったりするものなどがあり、漸次、増加・拡大の傾向にあることが指摘できる。このことは、浜堤が南北に長く連なる地形的状況との関係からみても予想され、低湿地ということで、これまで遺跡の把握に充分とはいえなかった本遺跡周辺については、今後詳細な分布調査や確認調査によって、低湿地における遺跡の分布やあり方などを明らかにして行く必要があろう。

注 1)菊池武一「旧藩時代の新田開発」(『宮城県史』8　宮城県史編纂委員会　1987 年復刻版)

2)1900 年に測量し、1911 年に大日本帝国陸地測量部によって発行された旧仙台市街地の地図によると、旧名取郡と旧宮城郡の境界は藤田新田地区と下飯田地区の間にあることがわかる。長嶋榮一氏のご教示によると、江戸時代まで遡ることが可能なようである。

III　調査の方法と経過

1、確認調査について

確認調査は 1991 年 5 月 7 日に開始した。対象面積が約 30000 ㎡の広域にわたるためトレンチ調査を行うこととした。まず、道路の中心線に沿わせた幅 6㎜、長さ 50～60㎜ のトレンチを 24 本設定し、北から南へ進む方向で確認調査を行った（第 3 図）。その結果、6 月 1 日までに調査区北側にある 4～6 トレンチから近世と思われる水田跡と水路を検出した。7 トレンチでは 10 世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰を耕作土中にブロック状に含む古代以降の水田跡を確認し、部分的ながら畦畔の一部と溝の一部を検出したが、後世の水田耕作により水田跡の区画と方向は把握できなかった。

調査区中央部の 9～14・16・17・28・29 トレンチで幅 30㎜ 程の河川跡（ＳＤ302）を検出し、この河川跡の南西部分にある 16～25・31 トレンチでは竪穴住居跡や掘立柱建物跡、円形周溝、土壙・溝多数、土器集中遺構などを検出した。さらに調査区の南端部では東西に延びると考えられる河川跡（ＳＤ115）を検出した。

その後、6月4日からは主な遺構の内容を把握するために、竪穴住居跡1軒（ＳＩ21住居跡）、円形周溝1基（ＳD211円形周溝）、土壙2基（ＳK02土壙跡・ＳK03土壙跡）、土器集中遺構の（ＳX01土器集中遺構）の精査を行ったが、湧水のために十分な精査はできなかった。また、工事用道路の付け替えのために調査区西側の幅15㎜の範囲を事前調査する必要が生じ、遺構が検出された19・23トレンチを拡張して精査を行った。その結果、竪穴住居跡1軒（ＳＩ23住居跡）、時期不明の水田跡とこれに伴う溝数条を検出した。一切の調査が終了したのは6月14日である。

検出した遺構のうち、精査を行ったものについては平面図・断面図とも縮尺 1/10～20、その他については1/200の平面図を作成し、層序については層相に大きな変化が認められなかったため、主な地点の柱状断面図を作成することにした。

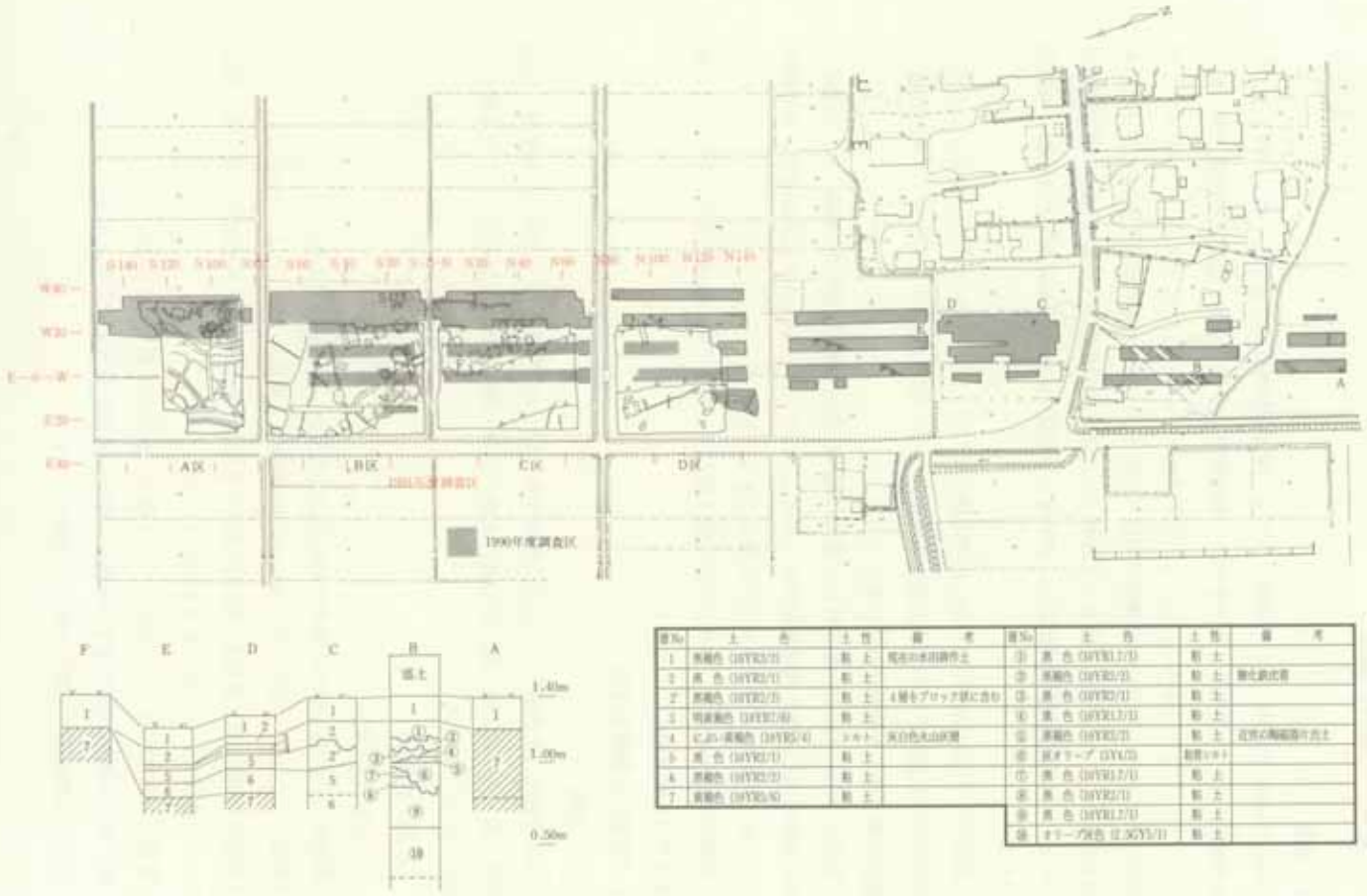
2、事前調査について

事前調査は、1989年度の試掘調査、1990年度の確認調査の結果を踏まえて実施した。調査対象地は東西がほぼ道路幅の約50㎜、南北約250㎜の約12,000㎡である。調査区は現在の道路や水田の用水路との関係から4地区に分けて設定し、南からＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区とした（第3図）。また、これまでの調査で、表土除去後の遺構精査や遺構の掘り下げ時に湧水が見られたことから、その防止に調査区の周囲に排水溝を設けた。

調査は、排水溝の設置で西端部付近の竪穴住居跡が壊されるＣ区、次いで工事用道路の付け替えが行われるＡ区の西半部、そしてＢ区、最後にＤ区とＡ区の東半部といった順序で進めることにし、4月8日から開始した。

調査の結果、Ａ区では竪穴住居跡8軒、方形周溝墓2基、掘立柱建物跡1棟、円形周溝3基、Ｂ区では竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡5棟、円形周溝2基、Ｃ区では竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡1棟、Ｄ区で竪穴住居跡1軒を検出しているほか、ＢからＤ区にかけて続く河川跡（ＳD302）、Ａ区南端部の東西方向の河川跡（ＳD115）、Ａ区東半部とＢ区南端部で水田跡や各地区で多数の溝・土壙なども検出した。これらの遺構は、水田跡以外をすべて無遺物層である第3層やその下の浅黄褐色砂層上面で検出しており、Ｄ区のＳＩ401住居跡を除き、東をＳD302、北をＳD302とＤ区で合流する東西方向の河川跡、南をＳD115によって囲まれた場所に分布していることが明らかとなった。

調査した遺構については、写真撮影・平面図の作成後に断割り調査を実施し、細部の写真撮影・断面図の作成・平面図の補足を行った。最後に土層の注記と図面のチェックを行い、一切の作業を11月11日に終了した。その間、8月1日に記者発表を行い、8月3日に一般の人々を対象とした現地説明会を開催した。



層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	現在の水田耕作土	①	黒色 (10YR1.7/1)	粘土	
2	黒色 (10YR2/1)	粘土		②	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	強化鉄沈着
2'	黒褐色 (10YR2/3)	粘土	4層もブロック状に含む	③	黒色 (10YR2/1)	粘土	
3	明黄褐色 (10YR7/6)	粘土		④	黒色 (10YR1.7/1)	粘土	
4	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	灰白色火山灰層	⑤	黒褐色 (10YR2/3)	粘土	近世の陶磁器を含む
5	黒色 (10YR1/1)	粘土		⑥	灰オリーブ (5Y4/2)	粘質シルト	
6	黒褐色 (10YR2/3)	粘土		⑦	黒色 (10YR1.7/1)	粘土	
7	黒褐色 (10YR3/6)	粘土		⑧	黒色 (10YR2/1)	粘土	
				⑨	黒色 (10YR1.7/1)	粘土	
				⑩	オリーブ黒色 (2.5GY5/1)	粘土	

第3図　調査区と層序模式図

Ⅳ　発見した遺構と遺物

1、概要

今回の調査で検出した主な遺構としては、竪穴住居跡31軒、建物跡7棟、柱列1条、方形周溝墓2基、円形周溝6基や水田跡・河川跡があり、その他には多数の土壙、溝、ピットがある。これらの遺構は、出土遺物と10世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰の存在から、大部分が古墳時代前期・中期を中心に10世紀代の平安時代にかけてのものとみられ、古墳時代のものとしては竪穴住居跡・方形周溝墓・土壙・溝跡、平安時代のものとしては掘立柱建物跡がある。その他には長期間にわたって存在した水田跡と河川跡がある。

遺物としては、古墳時代を中心に平安時代までの土器が多量に出土している。その他に河川跡から古墳時代の石製模造品や古墳時代から平安時代にかけての木製品・動物の骨・植物の種子なども発見されている。

記述は南側のＡ区から順に行い、遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・塀跡・方形周溝墓・円形周溝と主な土壙と溝跡を抽出して行うことにする。水田跡はＢ区の最後で、また河川跡はＤ区の最後でそれぞれまとめて扱うこととする。

遺構の検出面は大部分が地山である第7層上面かその下層の砂層であり、それ以外の場合はその都度記述することにする。

2、発見した遺構と遺物

（1）、Ａ区

Ａ区で検出した遺構には、竪穴住居跡8軒・掘立式建物跡1棟・方形周溝墓2基・円形周溝3基・水田跡3面・河川跡の他、多数の土壙・溝跡・ピットがある。以下住居跡から概要を記述してゆく。

①、竪穴住居跡

ＳＩ101（第5図）

調査区の北西側に広がる微高地状の平坦面で検出した住居跡である。

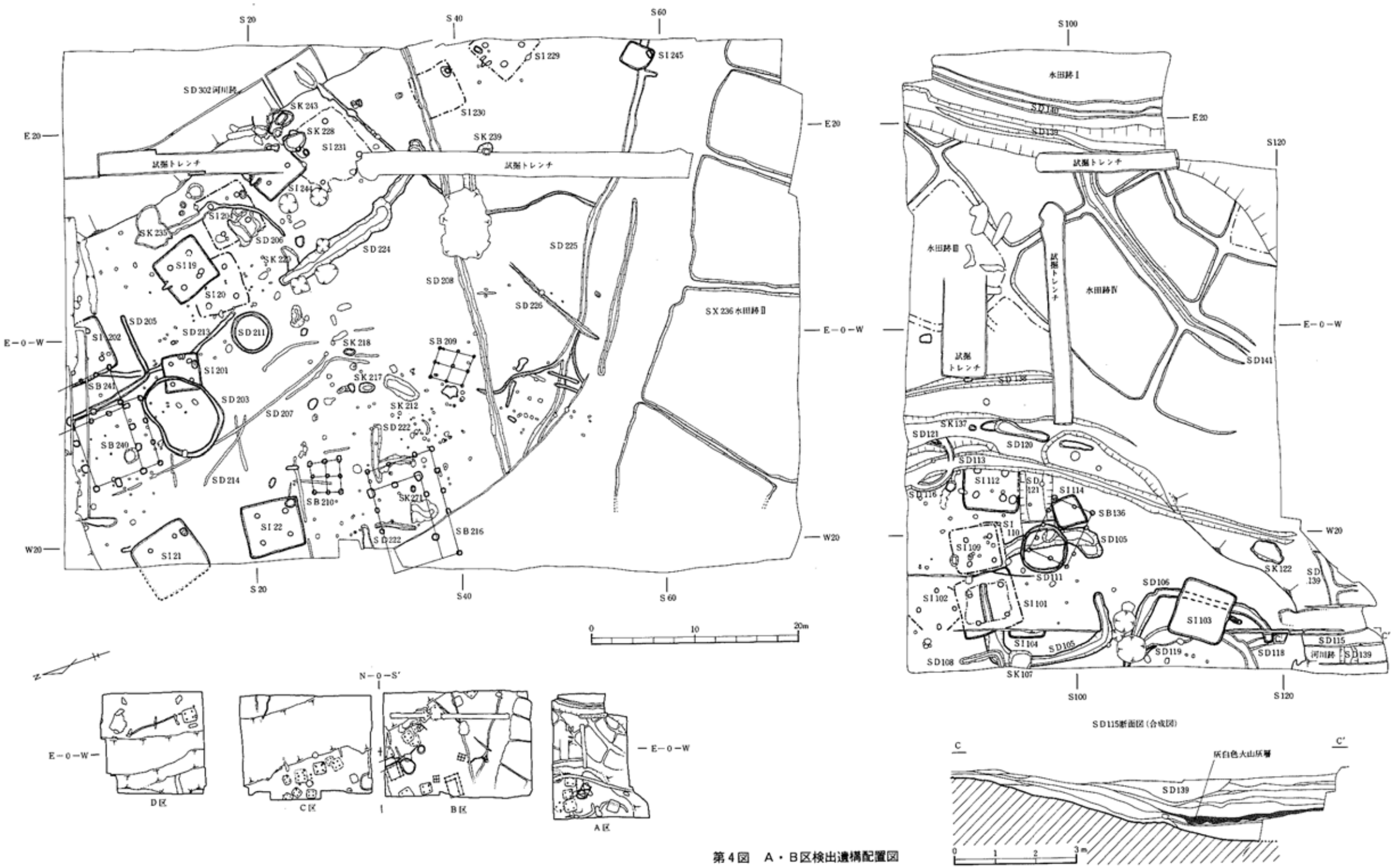
［重複］ＳＩ102・104住居跡、ＳＤ105方形周溝墓と重複し、いずれよりも新しい。

［平面形・規模］掘り方埋土の残存状況から見ると、各辺が5.5m程の方形を呈する。住居の方向は西辺でみるとほぼ真北を向いている。

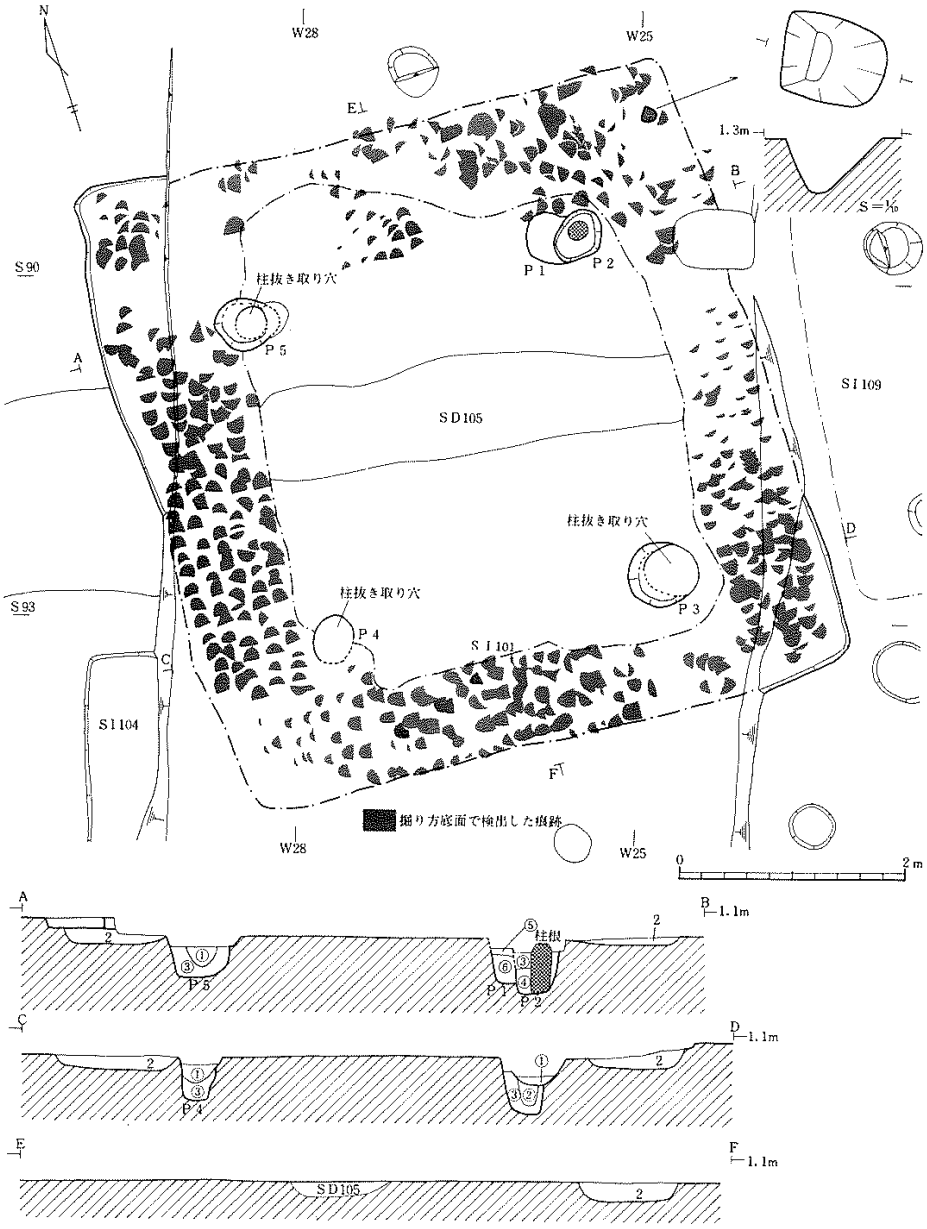
［堆積土］床面が残っていた部分では1層で、床面を直接覆っている。

［壁］残りの良い西隅の壁で9cm残っており、比較的急角度で立ち上がる。

［床面］ほぼ平坦で、掘り方埋土を床面としている。



第4図　A・B区検出遺構配置図



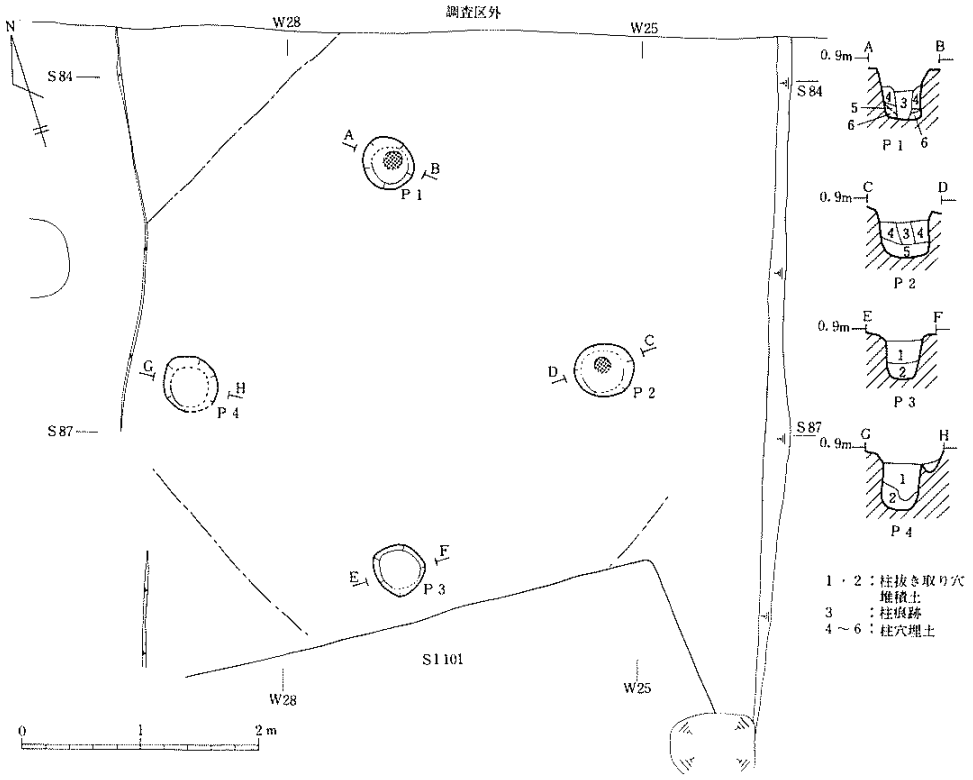
1．黒褐色(10YR3/2)砂質土 住居内堆積土
2．黒　色(10YR1/2)砂質土 掘り方埋土

柱穴
①：柱抜き取り穴
②：柱痕跡
③～⑥：柱穴埋土

第5図　SI101住居跡

［柱穴・ピット］住居の対角線上の 4 箇所で主柱穴を確認している。このうちのP1 からは、側面の一ヶ所にほぞが切られている径 18 cmの柱材が発見された。3 個の柱穴では柱がいずれも抜き取られていた。柱穴の大きさは径 30～52 cm、深さは 38～49 cm残っていた。なお、北東側のP2 はほぼ同位置にあるP1 と切り合いが認められ、柱根が残っていたP2 が新しい。他にP1 と関係するピットが見つかっていないことから、北東側の柱穴のみ建て替えられた可能性が考えられる。

［掘り方底面の痕跡］掘り方埋土は住居の壁際に沿って 70～140 cmほどの幅で認められたが、この底面から、大きさが 10～20 cmほどの、平面形が半円形ないしは頂部に丸みを持つ三角形状を呈する痕跡が多数検出された。これらは住居を作るための素掘りを行った際に生じた道具の痕跡と考えられる。任意に選び出した痕跡 10 個についてみてみると、縦の断面はいずれも短辺が直線的で、長辺が僅かに弧を描く三角形に近い形をしている。また横の断面形も深さが 3～10 cmほどの底面が「U」字状を呈するというように（第 5 図）、平面形や大きさ、深さはまちまちであるが、基本的な痕跡の形状と断面形には規則性が認められる。そしてこのような特徴を生じる道具としては、U字状の刃先を持つ鋤が推定される。



第 6 図　S I102住居跡

またこれらの痕跡は形状の類似性から一定の方向性と連続性が認められ、東辺で１つ、西辺で３つ、南辺で１つ、北辺で２つの計７群に分けることが可能である。これらは竪穴住居を作る上での基本的な作業となる素掘りの仕方を反映しているものと考えられ、素掘りのあり方を復元し得る資料である。

［出土遺物］掘り方埋土から小破片であるが古墳時代のものとみられる非ロクロ調整の土師器が少量と土玉１点が出土している。

ＳＩ102（第６図）

調査区北西部で検出した住居跡で、掘り方の埋土と主柱穴を確認している。

［重複］ＳＩ101 住居跡と重複し、これより古い。

［平面形・規模］掘り方埋土の残存範囲から推定すると、南北・東西とも 4.8㎜以上と推定される。

［柱穴］4 箇所で主柱穴を確認している。いずれも径 40～50 ㎝の円形で、深さは 35～45 ㎝残っていた。いずれも柱が抜き取られている。

［出土遺物］非ロクロ調整の土師器の甕が少量と P1 から土玉が１点出土している。

ＳＩ103（第７・８図）

調査区南西側部で検出した住居跡で、ＳＤ115 河川跡の北側約 3㎜に位置する。

［重複］ＳＤ106 方形周溝墓・ＳＤ119 溝跡と重複し、いずれよりも古い。

［平面形・規模］南・北辺が 5.3～5.5㎜、東・西辺が約 5.2㎜ほどの方形を呈する。住居の方向は東辺でみると、真北に対して約 31°東に偏している。

［堆積土］堆積土は８層からなり、1～7 層は自然堆積による住居内堆積土である。床面からやや浮いた状況で炭化材が少量見つかっている。8 層はカマド崩落土と考えられ、9 層は煙道の堆積土である。

［壁］20～30 ㎝ほど残っており、急角度で立ち上がる。

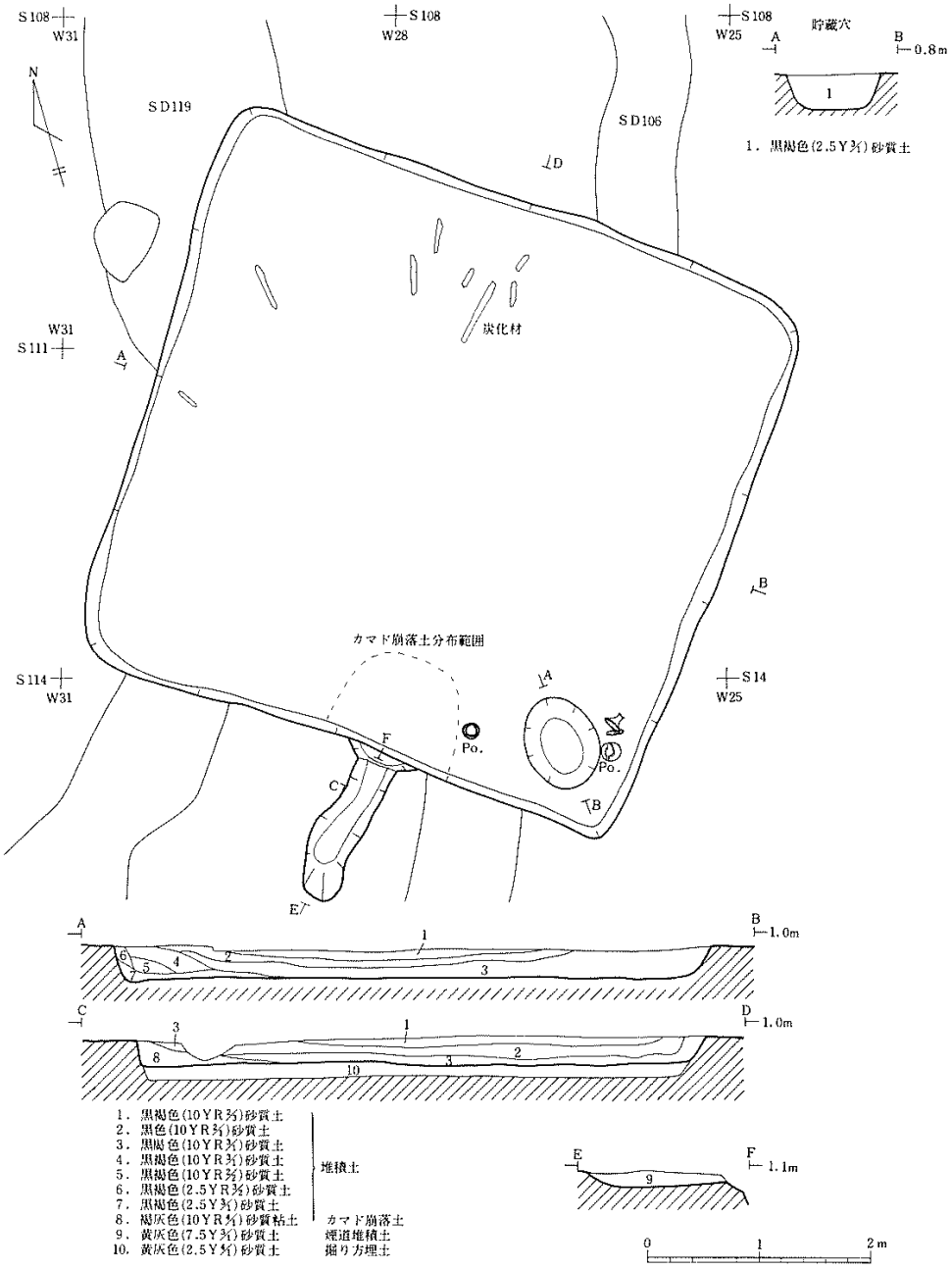
［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］認められない。

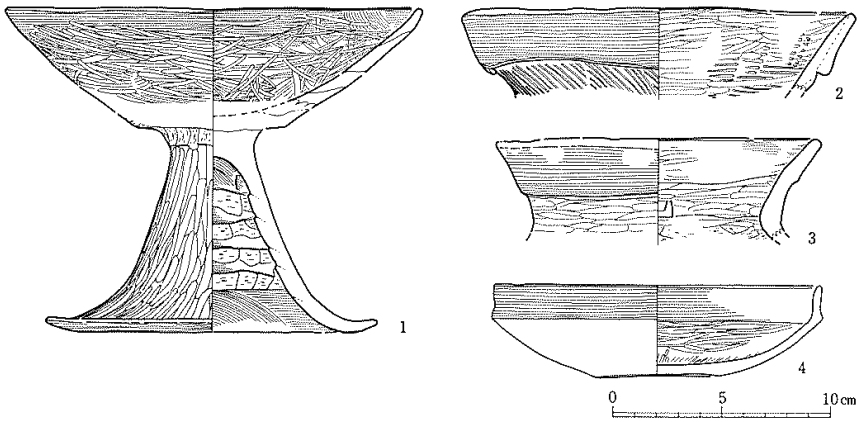
［カマド］南辺のほぼ中央で、堆積土中に粘土が集中する部分が認められたが、明確にカマドとして捉えられる施設は検出できなかった。しかし、南辺のほぼ中央外側で、堆積土掘り下げ後、煙道と思われる遺構を検出したことから、カマドが存在したと思われる。煙道は幅 30～40 ㎝、深さは 10～20 ㎝で、長さは約 1.4㎜ある。

［貯蔵穴］南東隅で検出している。長径 84 ㎝、短径 64 ㎝の楕円形を呈し、深さは 32 ㎝である。堆積土は１層で自然堆積である。

［出土遺物］床面の貯蔵穴の周辺から古墳時代の非ロクロ調整の土師器の甕・高坏が、ま



第７図　ＳＩ103住居跡



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	脚径	体径	底径	器高				
1	土師器 高坏	床面	[坏] ヨコナデ→ケズリ→ミガキ [脚] ヘラナデ→ヨコナデ→ミガキ	[坏] ヨコナデ→ミガキ [脚] ヘラナデ→ヨコナデ	19.2	3.8	(6.8)	15.3	(15.0)	A,C	3/4	Po.14Po.2	39-3
2	土師器 壺	3層	[口] ヨコナデ→カキメ	[口] ハケメ→ミガキ	18.2	–	–	–	(4.2)	A,B,C,F	1/1	磨滅面	39-4
3	土師器 壺	床面	[口] ヨコナデ→ミガキ	[口] ヨコナデ→ミガキ→ケズリ→ミガキ	15.0	11.4	–	–	(4.9)	A,B,C,F	1/1	Po.1	39-1
4	土師器 坏	3層	[口] ヨコナデ [体～底] 不明	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	15.1	–	15.2	5.4	4.3	B,C	2/3		39-2

第８図　SI103出土遺物

た堆積土の第３層から非ロクロ調整の土師器の坏などが出土している。

ＳＩ104（第９図）

調査区の北西部で検出した住居跡である。

［重複］ＳＩ101住居跡と重複し、これよりも古い。

［平面形・規模］東側の多くの部分を失っているが、一辺3.5m ほどの方形と考えられる。住居の方向は西辺でみると、真北に対して約19°東へ偏している。

［壁］2～3 cm残っている。

［床面］掘り方埋土を床面としている。

［出土遺物］遺物は床面から土玉が１点と堆積層から非ロクロ調整の土師器の甕が少量出土している。

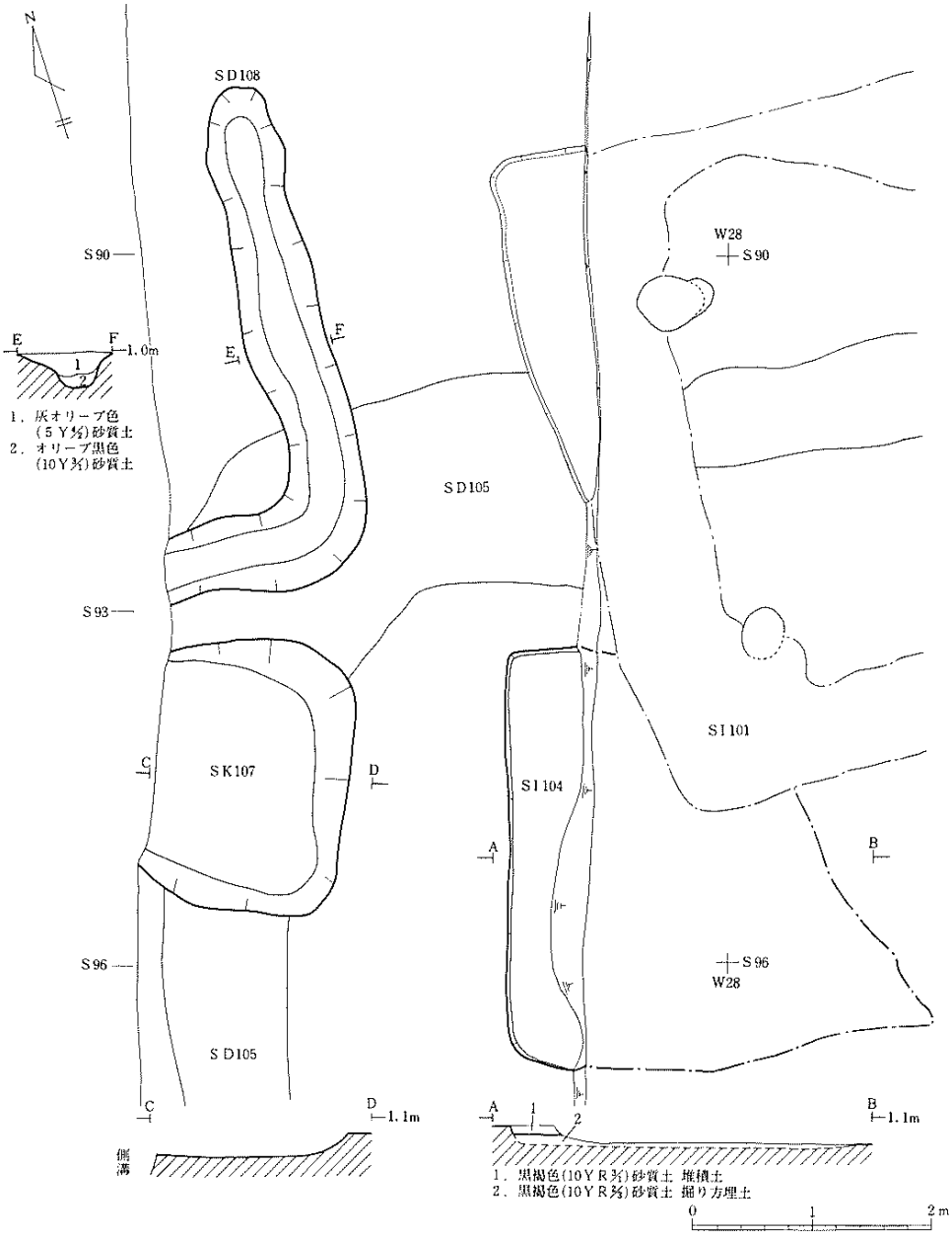
ＳＩ109（第10図）

調査区北西部で掘り方埋土と主柱穴だけを検出した住居跡である。

［重複］ＳＩ110住居跡と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］掘り方埋土の残存範囲から推定すると、北辺約4.5m、東辺4.3m ほどの方形と推定される。住居の方向は東辺でみると真北に対して約５°東へ偏している。

［柱穴］住居の対角線上の４箇所で主柱穴を確認している。いずれも径40～50 cmほどの円形で、深さは35～45 cm残っていた。P3 以外の柱穴には柱の抜き取り穴が見られた。P3



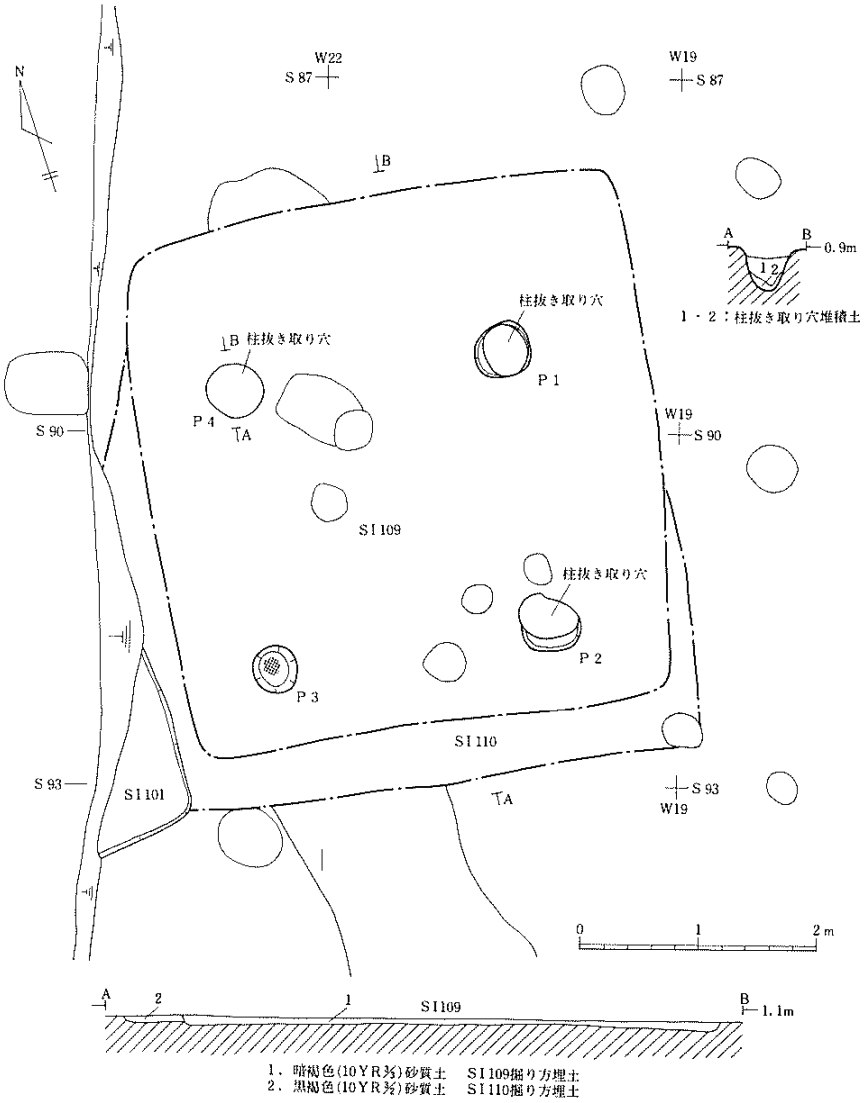
第９図　SI104住居跡・SK107土壙・SD108溝

の柱痕跡は径15㎝ほどの円形である。

［出土遺物］古墳時代の非ロクロ調整の土師器の小破片が極少量出土している。

ＳＩ110（第10図）

調査区北西部で掘り方埋土を検出した住居跡である。



第10図　SI 109・110住居跡

［重複］ＳＩ101・109 住居跡と重複し、いずれよりも古い。

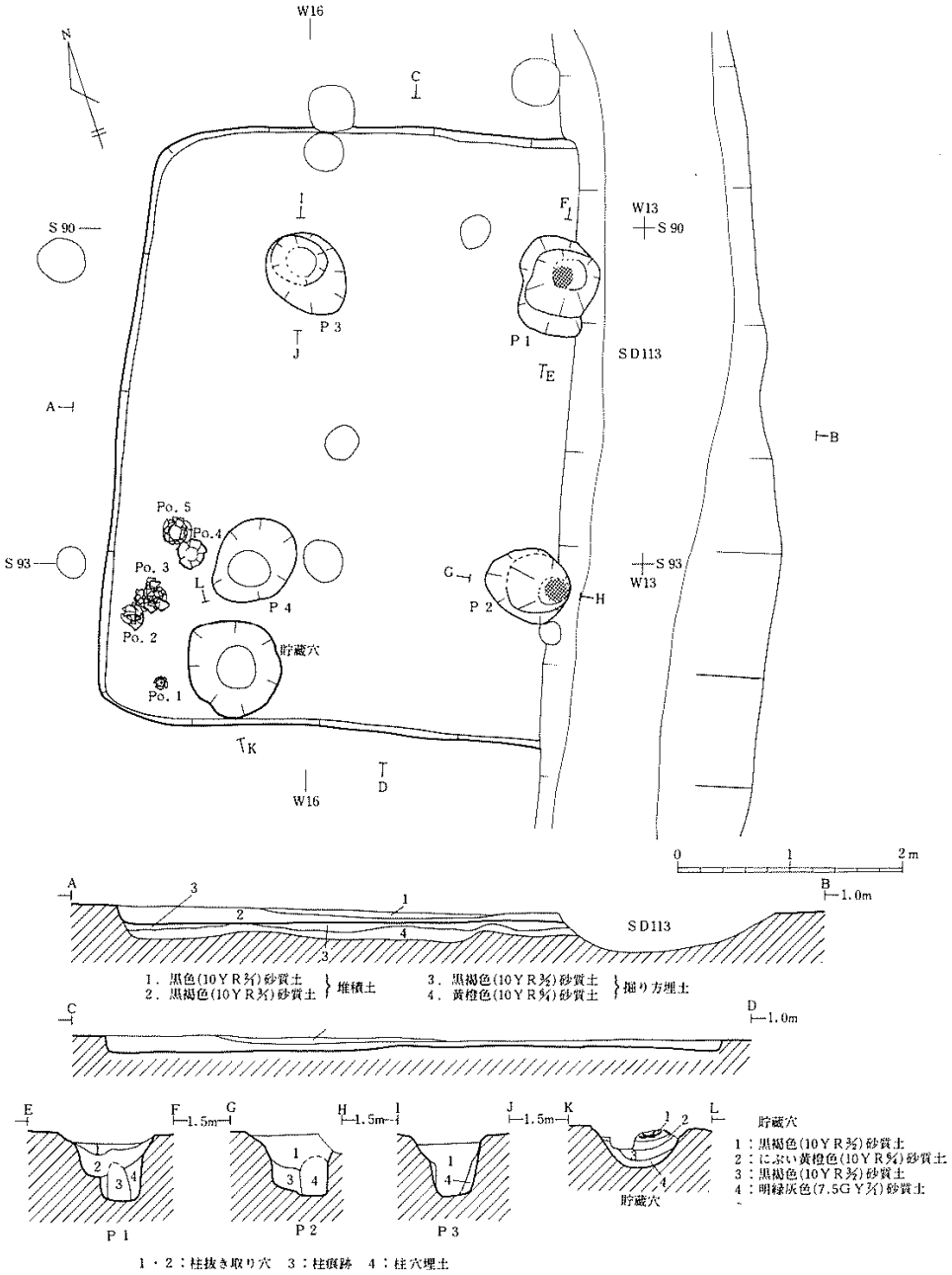
［平面形・規模］北半部をＳＩ109 に壊されているが、掘り方埋土の残存範囲からみると、南北・東西ともは5.0m 前後の方形と推定される。

［柱穴］柱穴は認められない。

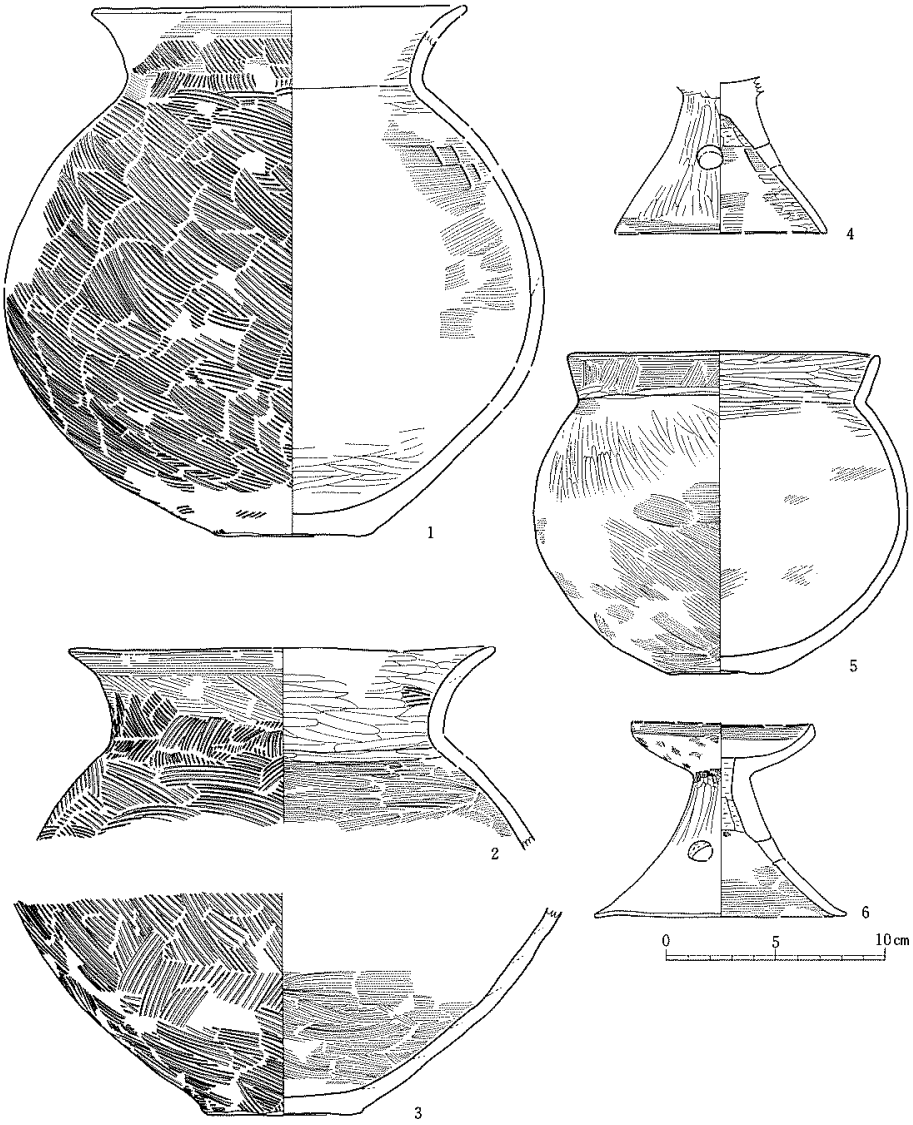
［出土遺物］非ロクロ調整の土師器の甕の底部破片が掘り方埋土より１点出土している。

ＳＩ112（第 11・12 図）

調査区北西部で検出した住居跡で、前述のＳＩ109・110 住居跡の東側に位置する。



第11図　SI 112住居跡



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ→ハケ [体] ハケ	[口] ハケ→ミガキ [体] ヘラナデ→ミガキ	−	13.5	24.7	7.4	(24.2)	A.C	1/2	Po.1+Po.2+Fo.5	39-10
2	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ハケ	[口] ハケ→ミガキ(ナデ) [体] ナデ	(9.6	14.6	−	−	(9.8)	A.B.C	4/5	[口] Po.5	39-5
3	土師器 甕	床面	[体] ハケ	[体] ナデ	−	−	−	7.3	(10.2)	A.B.C	1/1	[体〜底] Po.4	39-6
4	土師器 高杯	床面	[脚] ミガキ→ヨコナデ	[脚] ナデ→ケズリ→ヘラナデ→ハケ→ミガキ	−	3.3	−	9.7	(7.2)	A.C	1/1		39-9
5	土師器 鉢	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ミガキ [底] ナデ	[口] ミガキ [体] ナデ	14.3	13.1	17.0	4.5	14.8	A.C	4/5	Po.3+埋積土	39-7
6	土師器 器台	床面	[杯] ヨコナデ→ケズリ→ナデ [脚] ナデ	[杯] ヨコナデ→ケズリ [脚] ヘラケズリ→ナデ→ヨコナデ	8.2	2.6	8.4	11.5	9.0	A.B.C	1/1	Po.1	39-8

第12図　SI112出土遺物

［重複］ＳＤ113・121 溝と重複し、ＳＤ113 より古く、ＳＤ121 より新しい。

［平面形・規模］東西 4.0m 以上、西辺約 5.4m ほどの方形を呈すると思われる。住居の方向は西辺でみると真北に対して約 24°東に偏している。

［堆積土］堆積土は 2 層でいずれも自然堆積である。

［壁］10～20cm ほど残っている。

［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

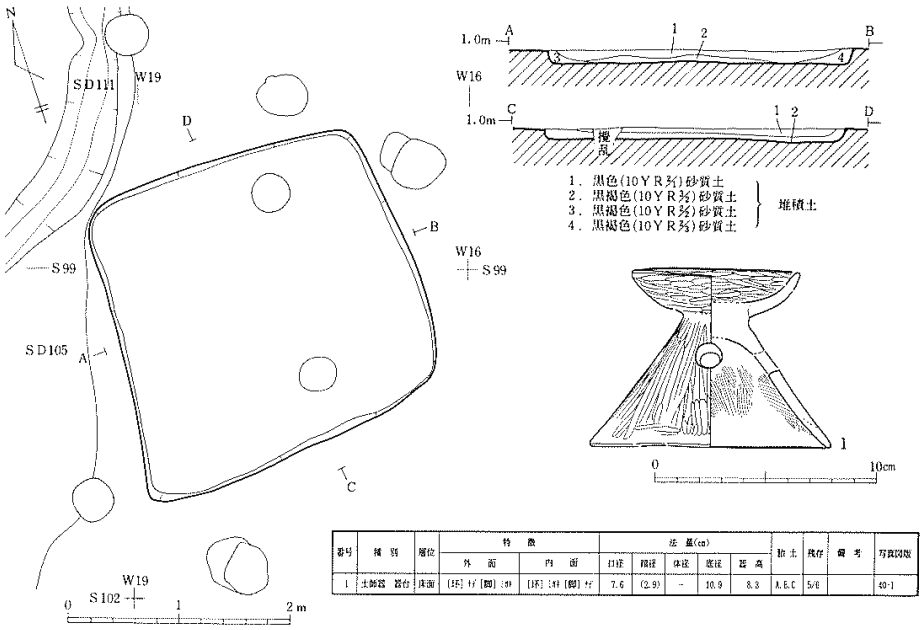
［柱穴］住居の対角線上の 4 箇所で主柱穴を確認している。このうち東辺沿いの 2 個の柱穴は東半部をＳＤ113 に壊されている。P3・P4 では柱が抜き取られており、深さは 56～58 cm残っていた。P1・2 では柱が切り取られており、切取り穴の下から径 20 cm程の柱痕跡が確認できた。なお、平面図は柱抜取り穴掘り下げ後の状況を図示した。

［貯蔵穴］南西隅で検出している。径 90～80cm ほどの不整円形をなし、深さは約 40 cmである。堆積土は 4 層に分けられ、いずれも砂質土からなる自然堆積である。

［出土遺物］南西隅の床面から非ロクロ調整の土師器の甕・鉢・高坏か器台・器台が出土している。堆積土からは少量の非ロクロ調整の土師器の他に土玉が 2 点出土している。

ＳＩ114（第 13 図）

調査区北西部で検出した住居跡で、ＳＤ105 方形周溝墓、ＳＤ111 円形周溝の東側に近接している。



器号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 頸径	法量(cm) 体径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器	器台	床面	[ヨコ] ナデ [脚] ミガキ	[ヨコ] ミガキ [脚] ナデ	7.6	(2.9)	－	10.9	8.3	A.E.C	5/6		40-1

第13図　ＳＩ114住居跡・出土遺物

［重複］ＳＢ136 建物跡、ＳＤ121 溝と重複し、ＳＤ121 より新しくＳＢ136 よりも古い。

［平面形・規模］一辺が 2.5～2.8m ほどのやや不整な方形をなす。住居の方向は東西辺がほぼ真北を向く。

［堆積土］堆積土は 4 層でいずれも自然堆積である。

［壁］10 cm前後残っており、比較的急角度で立ち上がる。

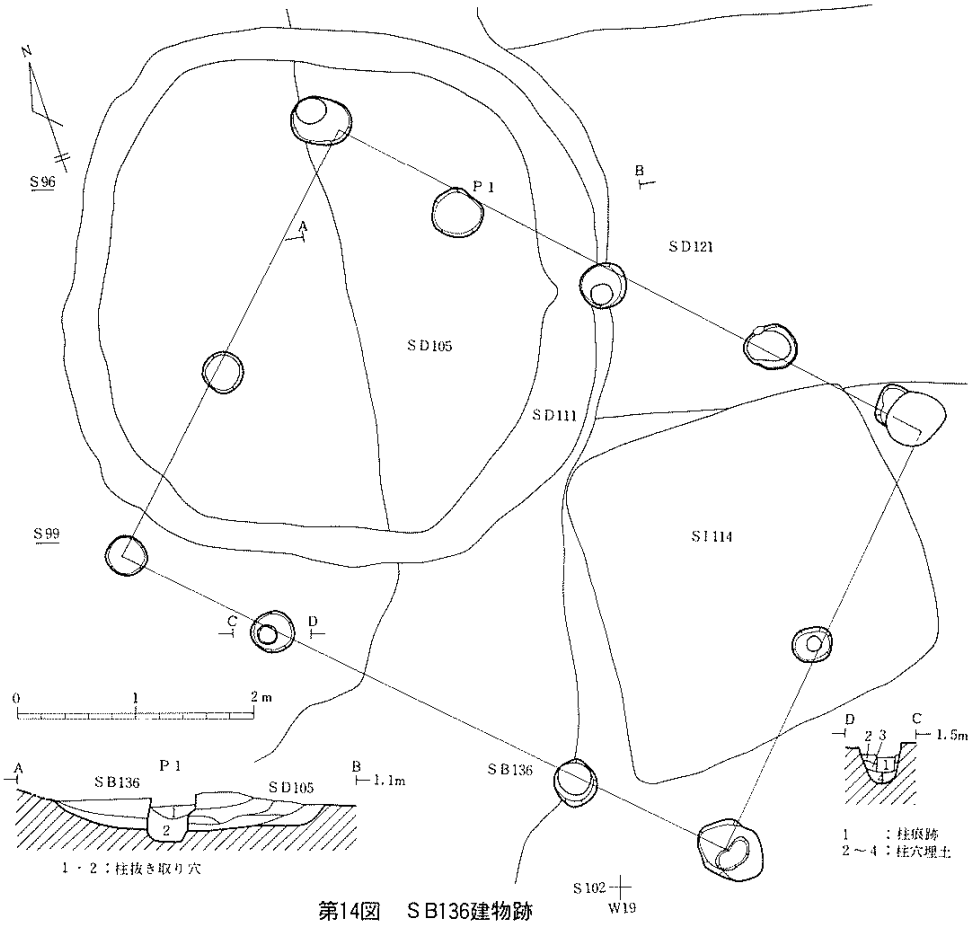
［床面］地山面を床面としておりほぼ平坦である。柱穴・貯蔵穴は認められない。

［出土遺物］床面から、土師器の器台が 1 点の他、甕が少量出土している。

②、掘立柱建物跡

ＳＢ136（第 14 図）

調査区北西部で検出した東西 4 間、南北 2 間の東西棟建物跡である。ＳＩ114 住居跡、ＳＤ105 方形周溝跡、ＳＤ111 円形周溝、121 溝と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は南側柱列の中央の柱穴を除く 11 箇所で検出している。



第14図　ＳＢ136建物跡

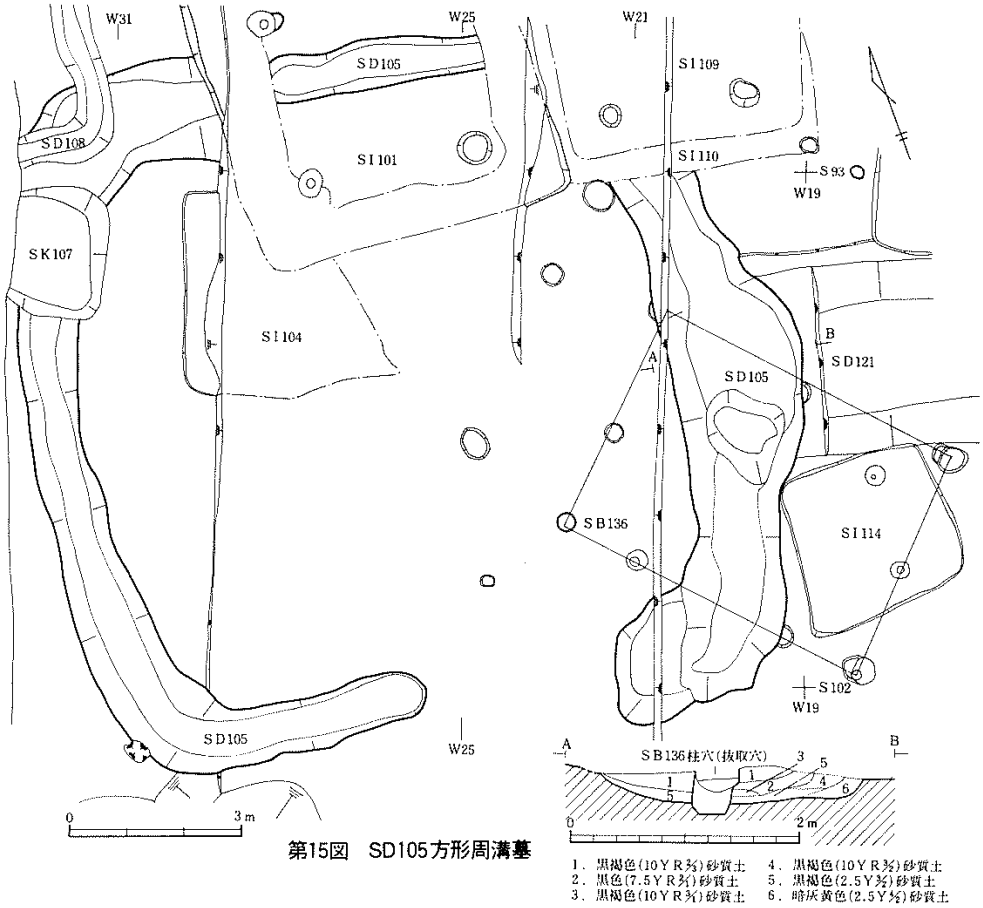
柱穴は、径34～42㎝の円形を呈するもの、長径約50㎝、短径約40㎝の楕円形または不整形のものがあり、形状・大きさにバラツキがある。壁はほぼ垂直に掘られており、深さは残りのよいもので約40㎝である。柱痕跡が認められるものと柱が抜き取られているものがあり、柱痕跡は径13～20㎝ほどの円形である。埋土はにぶい黄橙色砂質土の小粒を含む黒褐色土である。

柱間寸法は、柱痕跡が認められない柱穴では柱位置を中央に想定すると、桁行が北側柱列で東から約1.3m・約1.5m・約1.4m・約1.4m、総長が約5.6mである。梁行は東妻で南より1.98m・2.22m、総長が4.20mである。建物の方向は東妻でみると、真北に対して約40°東へ偏している。

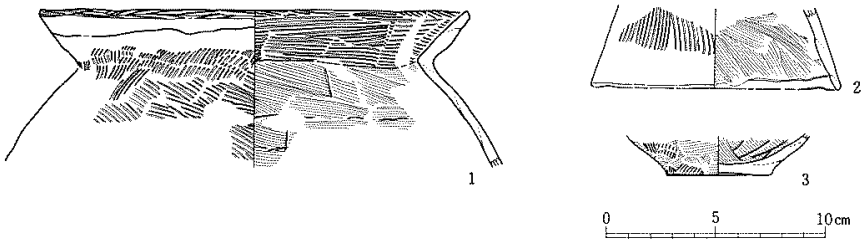
遺物は時期を特定できない土師器の小破片が極少量出土している。

③、方形周溝墓

ＳＤ105（第15・16図）



第15図　SD105方形周溝墓



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	堆積	[口] 横調整 [体] ハケ	[口] ハケ [体] ヘラナデ	(19.6)	(16.2)	−	−	(6.2)	A.B.C	1/4		
2	土師器 甕	堆積	[台] ナデ・ナデ→ハケ	[台] ナデ	−	−	−	(11.4)	(3.7)	A.B.C	1/4		
3	土師器 壺	堆積	[体] ナデ→ハケ [底] ナデ	[体] ヘラナデ	−	−	−	4.8	(1.9)	A.B.C	1/3		

第16図　SD105出土遺物

調査区の北西部で検出した方形周溝墓である。後世の削平のため周溝に囲まれた内側には盛土や土壙などの遺構は確認できなかった。

［重複］ＳＩ101・109・110 住居跡、ＳD111 円形周溝、ＳD108・121 溝跡、ＳK107 土壙と重複し、ＳD121 より新しく、ＳＩ101・ＳＩ109・ＳＩ110、ＳD108・ＳD111、ＳK107 よりも古い。

［平面形・規模］東側の北端部をＳＩ109 をＳＩ110 に切られているため不明であるが、周溝部を含めた全体の規模は南北約 12m、東西約 11.5m の隅丸方形をなす。周溝で囲まれた内側部分は南北約 9.6m、東西約 10.2m である。周溝は南側中央で途切れている。

周溝の幅は、東側周溝が約 1.2m～2.3m、西側周溝約 0.8～1.3m、南側周溝約 0.8～2.1m、北側周溝約 0.6～1.7m である。周溝の側壁はゆるやかに立ち上がり、深さは 11～32 cm残っていた。方向は西辺でみると真北に対して約 7 ° 東に偏している。

［堆積土］堆積土は 6 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

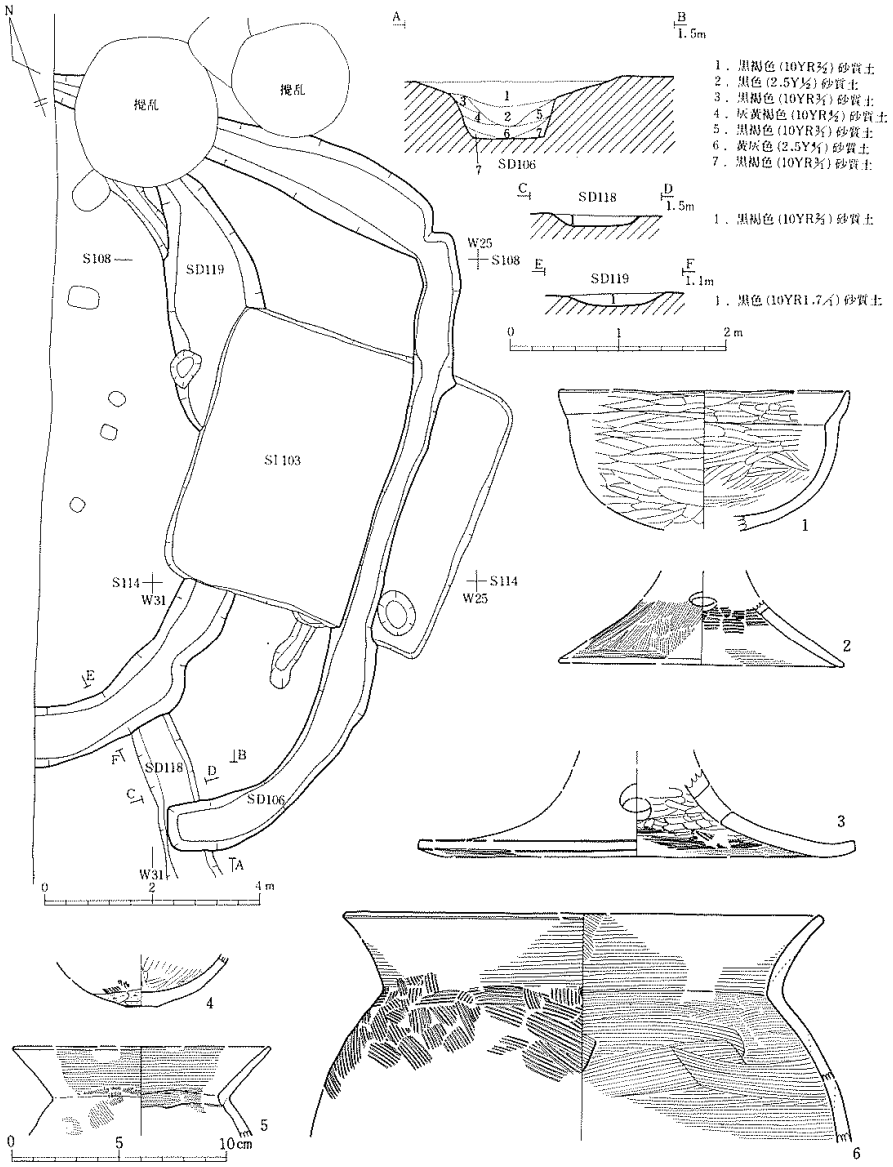
［出土遺物］堆積土から非ロクロ調整の土師器の甕・壺と台付甕の台部と考えられるものや鉢の底部があり、壺の中には丹塗りのものが 1 点みられる。

ＳD106（第 17 図）

調査区の南西部で検出した方形周溝墓である。前述のＳD105 方形周溝墓のすぐ南側に位置している。後世の削平のため周溝に囲まれた内側からは盛土や土壙などの遺構は確認できなかった。

［重複］ＳＩ103 住居跡、ＳD118 溝と重複し、いずれよりも古い。

［平面形・規模］西半部は調査区外のため不明であるが、周溝部を含めた全体の規模は南北約 13.5m、東西約 9.4m 以上の隅丸方形をなすと思われる。周溝で囲まれた内側部分は南



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 鉢	堆積	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(13.5)	－	(12.6)	－	(6.5)	A,B,C	1/6		41-5
2	土師器 高杯	堆積	〔脚〕ヨコナデ・ナデ	〔脚〕ハケメ・ヨコナデ	－	－	－	(13.5)	(3.1)	A,B,C	1/6		
3	土師器 高杯	1～2	〔脚〕ヨコナデ	〔脚〕ヘラミガキ・ハケメ→ミガキ・ヨコナデ	－	－	－	(20.4)	(4.2)	A,B,C,F	1/5	3～5層	41-6
4	土師器 鉢？	堆積	〔体～底〕ハケメ・ヘラケズリ・ナデ	〔体〕ミガキ	－	－	－	1.4	(2.5)	A,C	1/5		
5	土師器 鉢	堆積	〔口～体〕ナデ	〔体〕ミガキ	(12.0)	(8.2)	－	－	(4.3)	A,B,C	1/5		
6	土師器 甕	1～2	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラナデ	(21.4)	(18.6)	－	－	(10.0)	A,C	1/6	3～5層	

第17図　ＳＤ106方形周溝墓・出土遺物，ＳＤ118・119溝

11.6m、東西約7.6m以上で、南東隅付近で周溝は途切れている。

周溝の幅は、東側周溝が約72～86㎝、南側周溝約80～95㎝、北側周溝は約50～143㎝である。周溝の側壁はゆるやかに立ち上がり、深さは10～53㎝残っていた。方向は東辺でみると真北に対して約34°東に偏している。

［堆積土］堆積土は7層に分けられ、いずれも砂質土の自然堆積である。

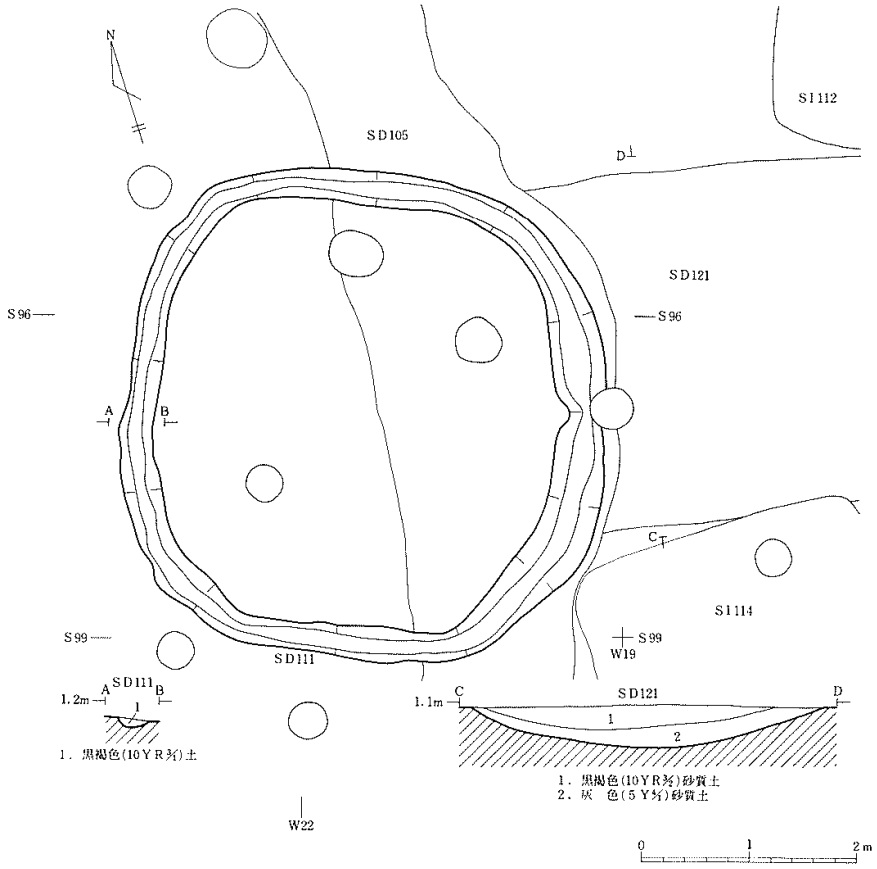
［出土遺物］堆積土から非ロクロ調整の土師器の甕・高坏・鉢・壺が出土している。

④、円形周溝

ＳＤ111（第18図）

調査区の西半部中央やや北寄りで検出した円形周溝である。

［重複］ＳＤ105方形周溝墓・ＳＢ136建物跡と重複し、ＳＤ105より新しく、ＳＢ136より古い。



第18図　ＳＤ111円形周溝・ＳＤ121溝（一部）

［平面形・規模］溝の内側は径が3.8～3.9m ほどの円形をなす。溝の幅は25～53 cmで、深さは5～10 cm残っていた。

［堆積土］堆積土は1層で自然堆積である。

［出土遺物］時期を特定できない土師器の小破片が極少量出土している。

ＳＤ116（第19図）

調査区の西半部北壁際で検出した円形周溝で、北端部は調査区外に続く。

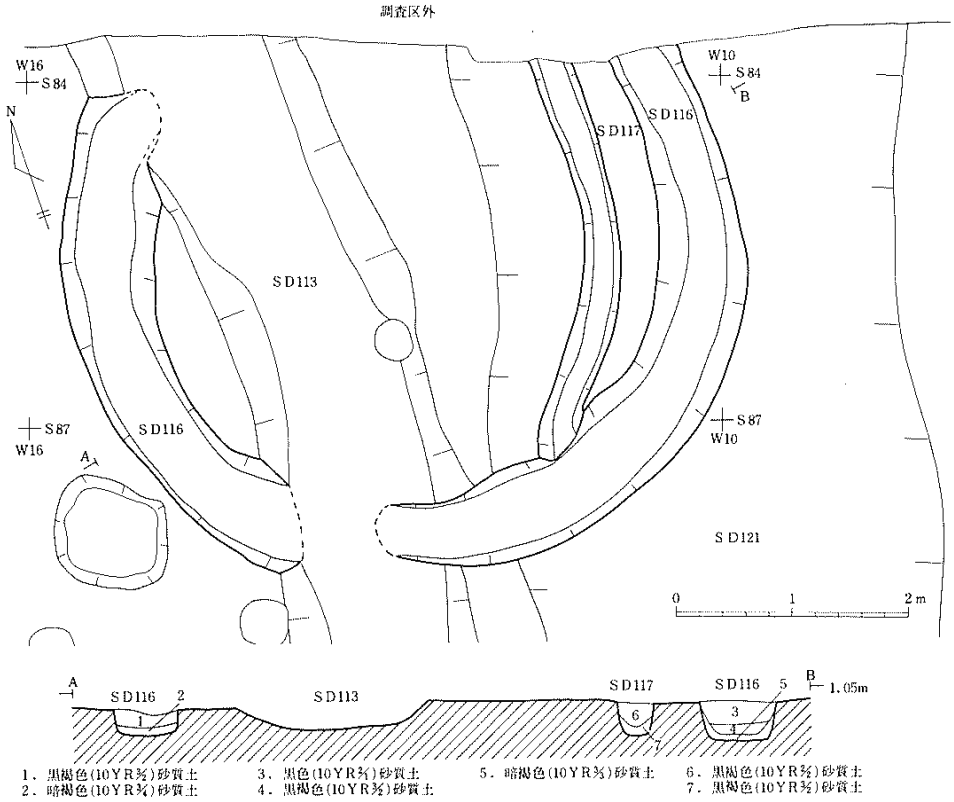
［重複］ＳＤ113・117・121溝と重複し、ＳＤ113より古く、ＳＤ117・ＳＤ121より新しい。

［平面形・規模］北側の一部は不明であるが、溝の内側は径が約4.4m の円形をなす。溝の幅は60～80 cmで、深さは17～37 cm残っていた。

［堆積土］堆積土は2～3層に細分され、いずれも自然堆積である。

［出土遺物］非ロクロ調整の土師器の甕が極少量出土している。

ＳＤ117（第19図）



第19図　SD116・117円形周溝

調査区西半部の北壁際で長さ約3.5m検出した円形周溝である。

［重複］ＳＤ116円形周溝・121溝と重複し、ＳＤ116より古く、ＳＤ121より新しい。

［平面形・規模］ＳＤ116によって大半を壊されているため不明な部分が多いが、ＳＤ116と同様にほぼ円形をなすものとみられる。溝の幅は28～36cmで、深さは26～35cm残っていた。

［堆積土］堆積土は2層で、いずれも自然堆積である。

［出土遺物］時期を特定できない土師器の小破片が少量と土玉が1点出土している。

⑤、土壙

ＳＫ107（第9図）

調査区北西部の西壁際で検出した土壙で、西半部は調査区外である。ＳＤ105 方形周溝墓と重複し、これより新しい。南北約2.3m、東西約1.6m以上の多少歪んだ方形とみられ、深さは約20cm残っていた。遺物は非ロクロ調整の土師器が少量と土玉が1点出土している。

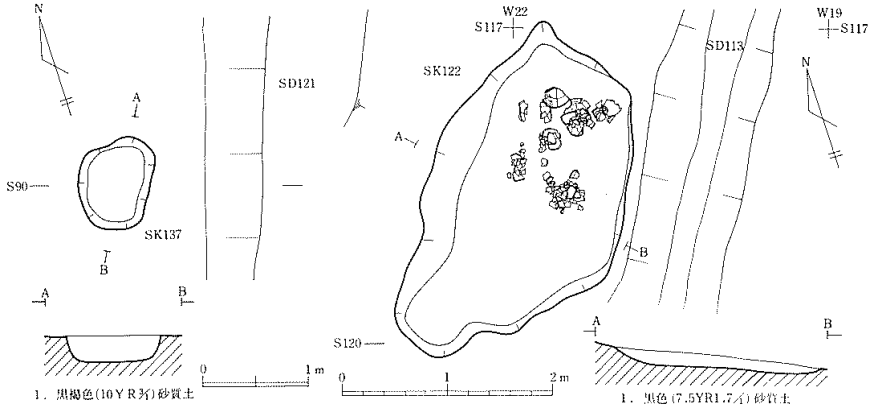
ＳＫ122（第20～22図）

調査区南西部のＳＤ115河川跡北西側緩斜面上で検出した土壙である。長軸約3.2m、短軸約1.9mの不整形をなし、深さは4～12cm残っていた。堆積土は1層で自然堆積である。遺物は底面から非ロクロ調整の土師器の台付甕・甕・甑・高坏か器台の脚部・壺がまとまって出土している。

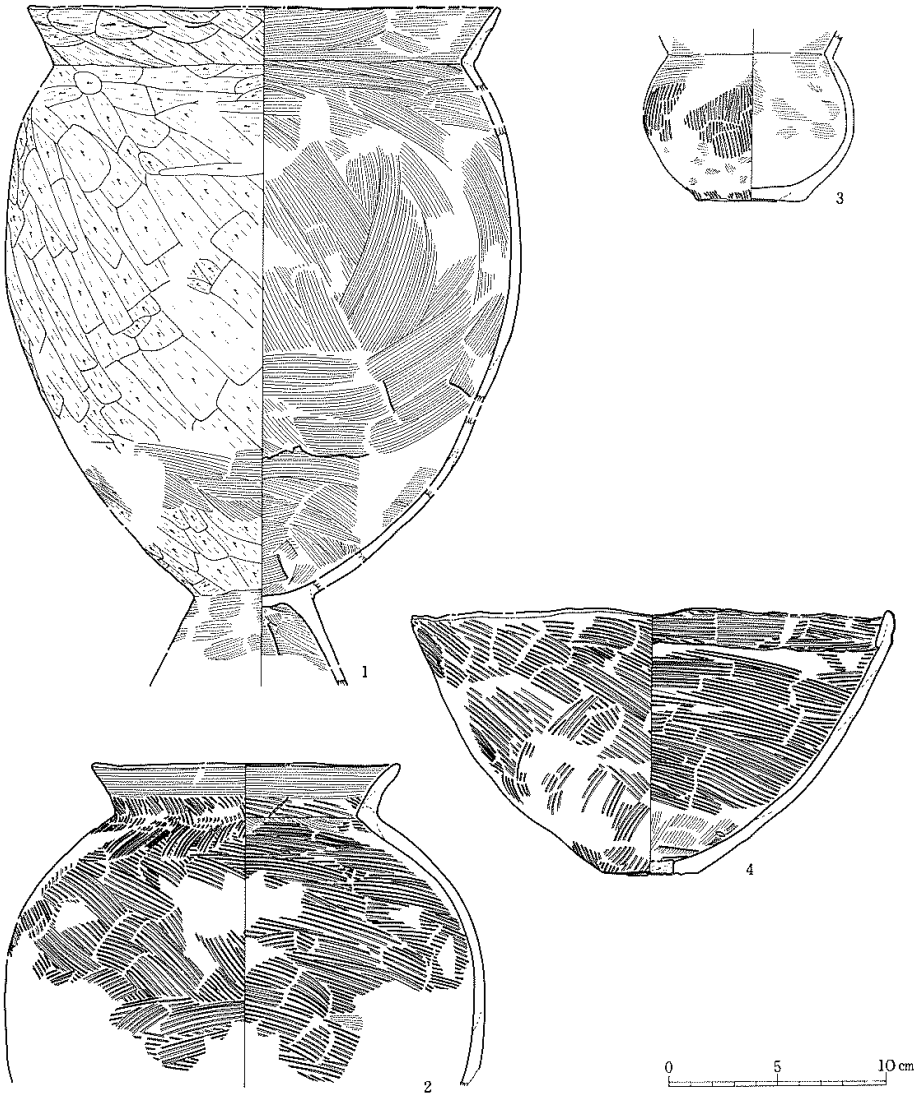
ＳＫ137（第20・23図）

調査区中央部北半で検出した土壙である。ＳＤ121溝底面で検出したが、本来はＳＤ121堆積土上面から掘られた可能性が高いとみられる。

長辺約0.9m、短辺約0.7mの歪んだ隅丸方形をなし、深さは21～25cm残っていた。堆積土は1層で自然堆積である。

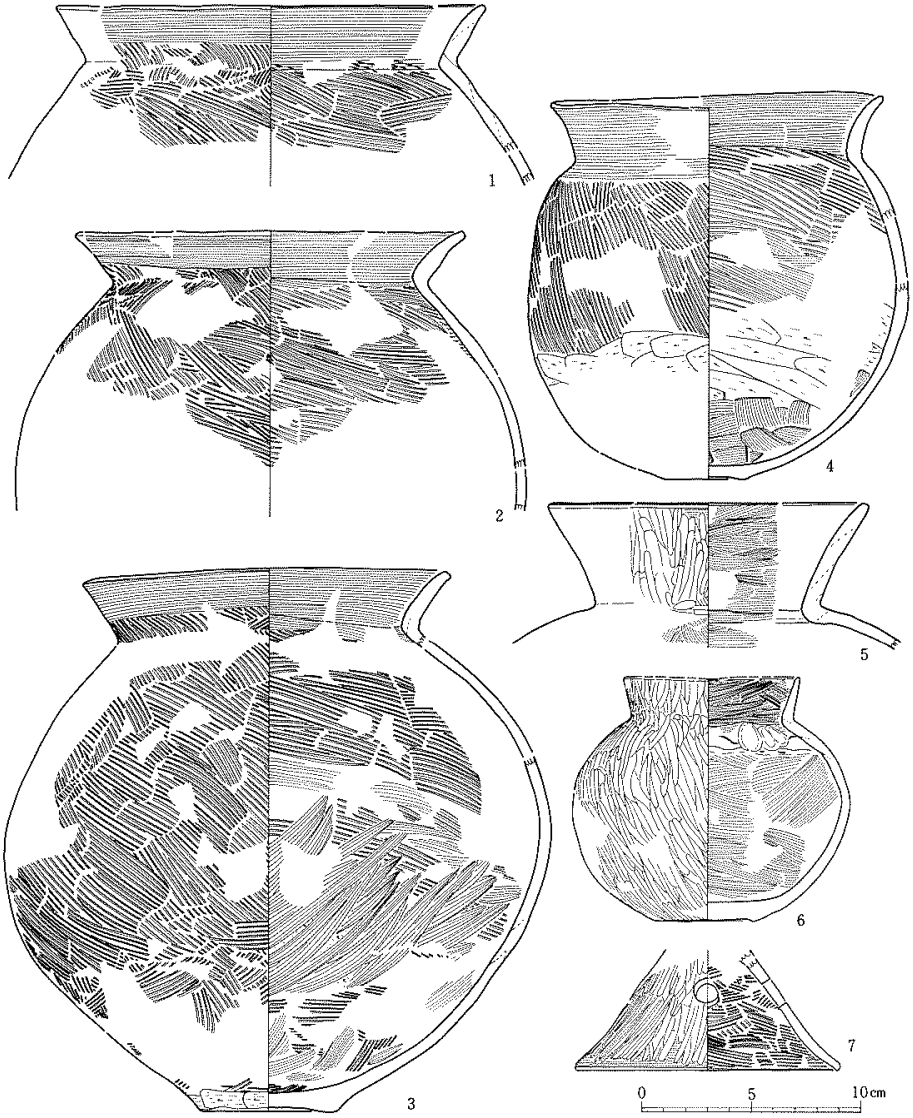


第20図　SK122・137土壙



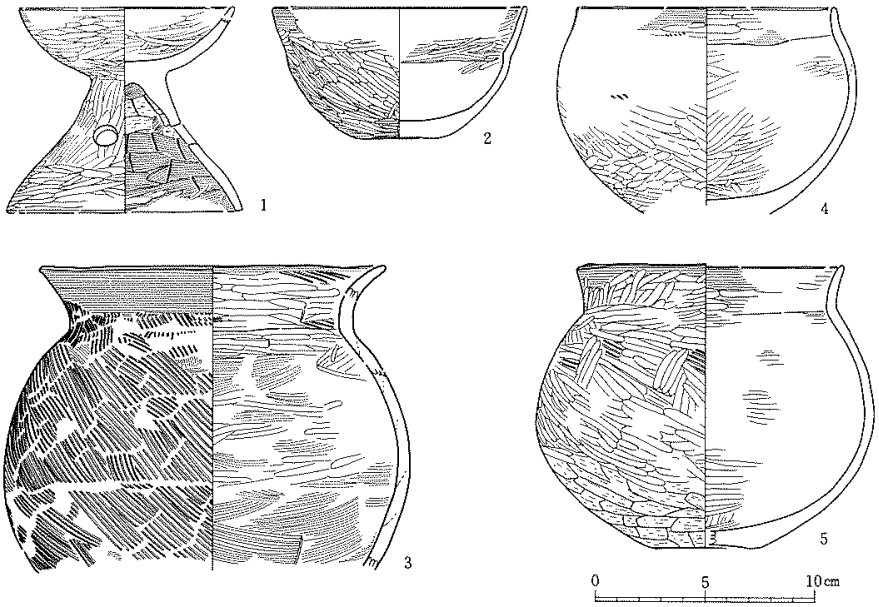
番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器台付甕	底面	[口] ナデ [体] ヘラケズリ→ナデ	[口～体] ナデ	21.8	19.4	23.8	5.5	(30.7)	A.B.C.F	3/5		40-5
2	土師器 壺	底面	[口] ヨコナデ→ハケメ [体] ハケメ	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ナデ→ハケメ	(14.2)	(12.0)	(22.2)	–	(14.9)	A.B.C	1/4	Po.5+SD115	
3	土師器 鉢	底面	[口] ヨコナデ [体] ハケメ→ナデ	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ナデ	–	(7.6)	(9.7)	(5.0)	(8.0)	A.B.C	2/3	Po.1+SD115-5b層	40-4
4	土師器 底	底面	[口～体] ハケメ [底] ナデ	[口～体] ハケメ→ヘラナデ [孔] ヘラケズリ	(22.2)	–	–	4.2	12.4	A.B.C	3/5	Po.6 孔径2.1cm	40-8

第21図　SK122出土遺物（1）



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 頸径	法量(cm) 体径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	底面	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ハケメ	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ハケメ	(19.6)	(17.0)	－	－	(8.3)	A,B,C	1/7	Po.6+Po.5西側	
2	土師器 甕	底面	[口] ヨコナデ [体] ハケメ	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ハケメ	(17.8)	(14.4)	(23.4)	－	(12.8)	A,C,B	1/5	Po.5 西側	
3	土師器 甕	底面	[口] ヨコナデ [体] ハケメ→ケズリ [底] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ハケメ→ハケメ→ナデ	16.9	13.8	(25.1)	5.4	25.1	A,B,C	2/3	Po.5 西側	40-2
4	土師器 甕	底面	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ハケメ→ケズリ [底] ケズリ	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ハケメ→ケズリ→ケズリ→ハケメ	15.1	13.0	17.3	3.6	17.8	A,B,C	4/5	Po.1	40-7
5	土師器 壺	1層	[口] ヨコナデ→ハケメ→ミガキ [体] ナデ	[口] ハケメ→ナデ [体] ナデ	(14.6)	(10.2)	－	－	(6.7)	A,C	1/6	Po.2	
6	土師器 壺	底面	[口] ミガキ [体] ミガキ [底] ナデ→ミガキ	[口] ミガキ [体] ナデ	(8.0)	7.4	(12.7)	4.5	11.2	A,B,C	2/5	Po.7	40-3
7	土師器 器台	底面	[脚] ミガキ→ヨコナデ→ミガキ	[脚] ハケメ	－	－	－	(12.1)	(4.9)	A,C	1/5	Po.3	40-8

第22図　SK122出土遺物（2）



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 器台	－	[脚] ヨコナデ→ミガキ [脚] ミガキ	[脚] ミガキ [脚] ナデ→ケズリ→ヘラナデ→ヘラミガキ	9.8	3.5	－	10.8	9.4	A,C	4/5		41-3
2	土師器 鉢	－	[口～体] ヨコナデ→ミガキ [底] ミガキ	[口～体] ミガキ	(11.6)	－	(10.0)	3.3	6.1	C	4/9		
3	土師器 甕	－	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ヘラナイ→ミガキ→ハケメ	[口] ヨコナデ→ハケメ→ミガキ [体] ナデ→ミガキ	(15.8)	(13.0)	(18.6)	－	10.6	A,C	1/4		41-2
4	土師器 鉢	－	[口～体] ヨコナデ→ミガキ→ハケメ→ミガキ	[口～体] ヨコナデ→ミガキ→ナズリ→ミガキ	(11.8)	－	13.6	－	(9.5)	A,C	5/6		41-4
5	土師器 鉢	－	[口] ヨコナデ→ミガキ [体] ハケメ→ミガキ [底] ナズリ→ナデ	[口] ナデ→ミガキ [体] ヘラナデ(ケズリ?)→ミガキ	12.9	11.8	15.4	4.8	13.1	A,C	4/5		41-1

第23図　SK137出土遺物

遺物は底面からやや浮いた状態で非ロクロ調整の土師器の甕・鉢・器台がまとまって出土している。

⑥、溝跡

ＳＤ108（第９図）

調査区北西隅で検出したＬ字状の溝である。南北方向の溝が西側へ屈折し、調査区外へ続く。ＳＤ105 方形周溝墓と重複しこれより新しい。

南北溝部分は長さが約 4.3m で、東西溝部分は約 1.2m 検出している。溝は南北・東西部分ともほぼ同規模で、幅が約 1.0～1.4m、深さが北側ほど浅くなっているが、4～25cm 残っていた。溝の方向は南北溝部分でみるとほぼ真北を向いている。

遺物は出土していない。

ＳＤ113（第４・11・24 図）

調査区中央やや西側を北東から南西へと縦断する溝跡で、約 38m 検出している。北側はさらに調査区外へ続くが、南側はＳＤ115 河川跡へ注ぎ込む。ＳＤ116･117 円形周溝、ＳＩ

112 住居跡、ＳＤ121 溝と重複し、いずれよりも新しい。

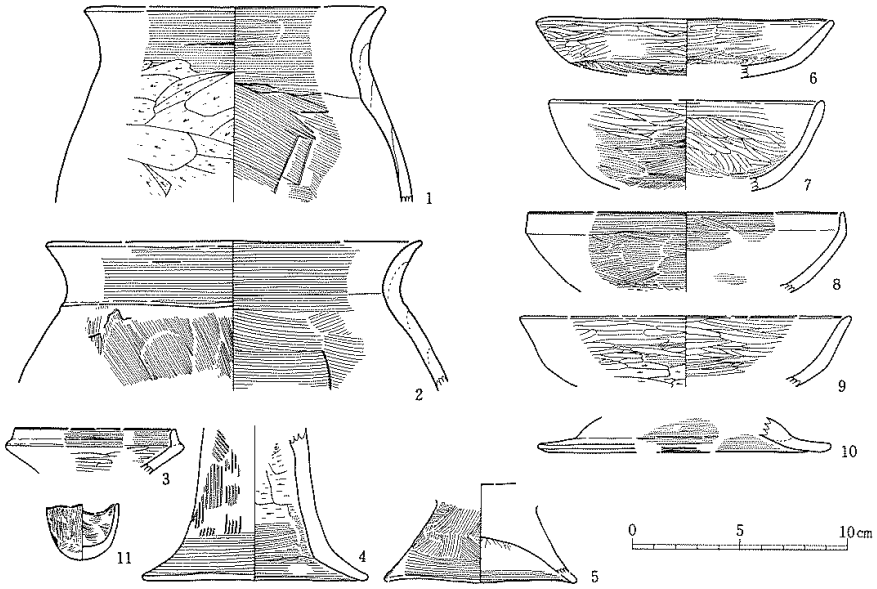
幅約 0.9～2.0m で、深さは 14～37 cm残っていた。

遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器の甕・高坏・坏が出土しており、ミニチュア土器も１点出土している。

ＳＤ118（第 17 図）

調査区南西端部で長さ約 4.1m 検出した南北溝である。ＳＤ106 方形周溝墓、ＳＤ119 溝と重複し、ＳＤ106 より新しく、ＳＤ119 より古い。

幅 0.8～1.1m、深さは 6～10 cmほど残っていた。堆積土は１層で自然堆積である。方向は



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	堆積	[口] ヨコナデ [体] ケズリ	[口] ヨコナデ	(14.0)	(12.5)	－	－	(9.2)	A.C.E.D	1/7		
2	土師器 甕	堆積	[体] ヘラナデ→ナデ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	(17.5)	(15.6)	－	－	(7.0)	A.B.C.E	1/6		
3	土師器 器台	－	[口] ヨコナデ [体] 工具	[口] ヨコナデ [体] 工具	(7.5)	－	(8.3)	－	(2.1)	A.C	1/8		
4	土師器 高坏	堆積	[脚] ハケ→ヨコナデ	[脚] ケズリ→ヘラナデ→ヨコナデ	－	－	－	(10.5)	(7.1)	A.B.E	1/3		
5	土師器 高坏	堆積	[脚] ヘラナデ→ケズリ	[杯] 工具 [脚] 工具	－	(4.6)	－	(4.6)	(4.6)	A.E.C	2/3		
6	土師器 坏	堆積	[口～体] 工具	[口～体] 工具	(13.8)	－	－	(10.6)	(2.8)	F.A	1/3		
7	土師器 坏	堆積	[口～体] ナデ→工具	[口～体] 工具	(12.8)	－	－	－	(4.2)	B.F.A	1/3		
8	土師器 坏	－	[口～体] ヨコナデ→ナデ→ケズリ	[口～体] ヨコナデ→ナデ	(14.7)	－	(17.0)	－	(3.7)	A	1/7		
9	土師器 坏	堆積	[口～体] ナデ→工具→ナデ→ケズリ	[口～体] 工具	(15.4)	－	(13.2)	－	(3.3)	C.B.A	1/6		
10	土師器 高坏	－	[脚] ナデ→ヨコナデ	[脚] ヨコナデ	－	－	－	(14.9)	(1.7)	A.B.C	1/10		
11	土師器 ミニチュア	堆積	[口～体] ナデ	[口～体] ナデ	3.4	－	－	－	2.6	B.C	1/1		

第24図　SD113出土遺物

ほぼ真北を向いている。

時期を特定できない土師器の破片が少量出土している。

ＳＤ119（第17図）

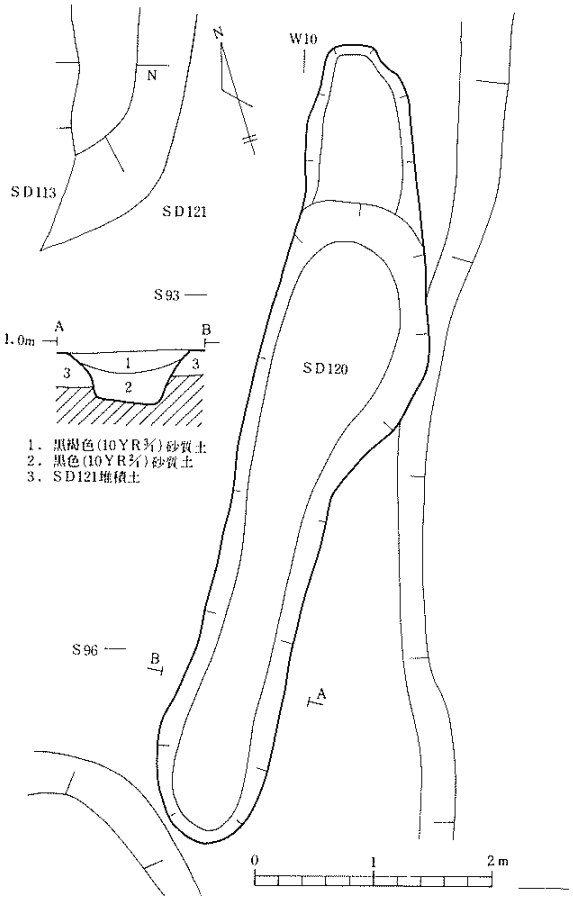
調査区の西端部中央やや南側で長さ約12m検出した溝で、西半部は調査区外である。全体形は不明であるが、隅丸方形あるいは円形を呈するものとみられる。ＳＩ103住居跡、ＳＤ118 溝と重複し、いずれよりも新しい。

幅は0.8～1.8mで、深さは7～16cm残っていた。堆積土は1層で自然堆積である。

非ロクロ調査の土師器の甕・壺が少量出土している。

ＳＤ120（第25～27図）

調査区北西部中央よりのＳＤ121 堆積土上面で検出した長さが約6.9mの溝である。幅0.8～1.4m、深さは20～30cm残っていた。方向は真北に対して東に約33°偏している。遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器の甕・壺・高坏・器台の他、砥石1点が出土している。



第25図　ＳＤ120溝

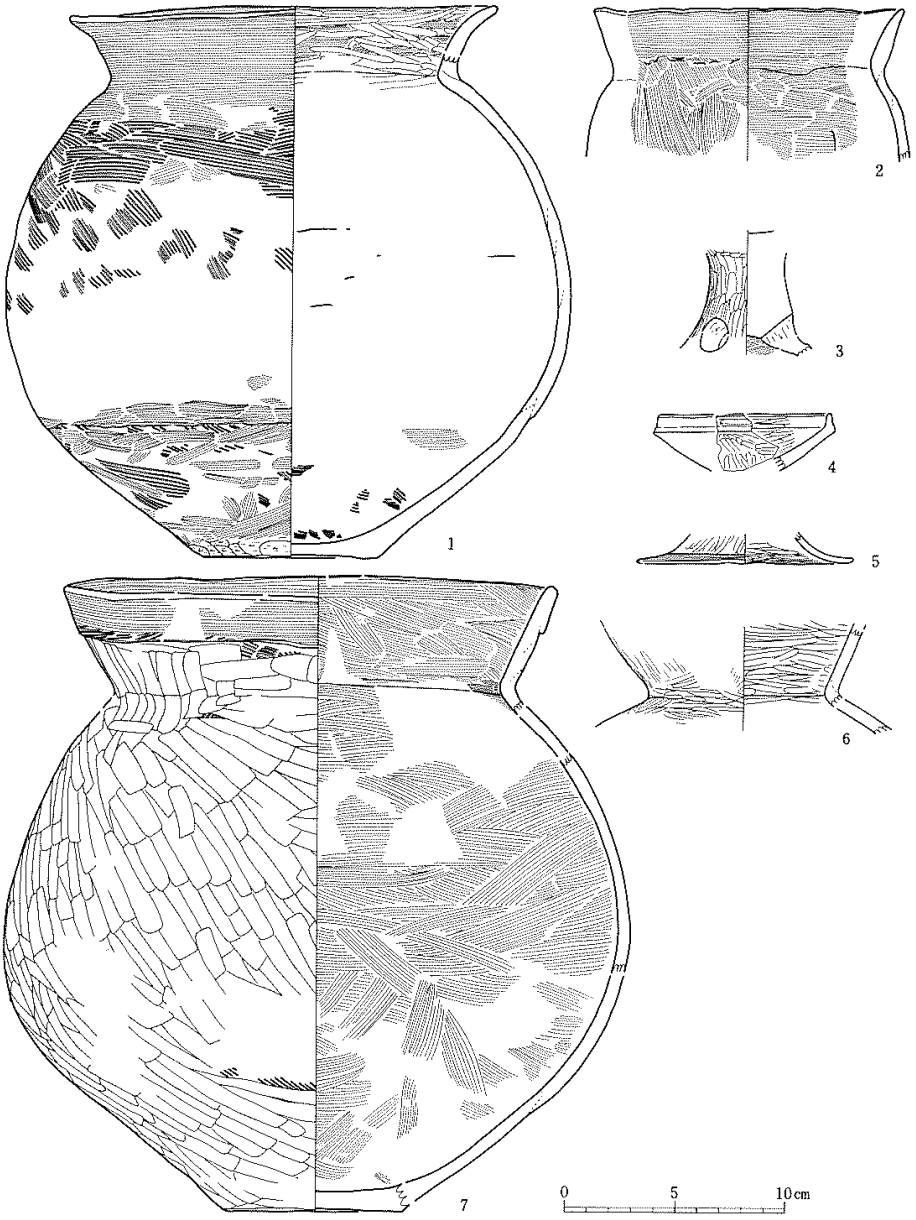
ＳＤ121（第4・18図）

調査区中央やや西側で検出したＴ字状の溝である。北東から南西へ調査区を縦断する南北方向の溝は長さ約28mで、北側は調査区外へ続くが、南側はＳＤ115 河川跡へ注ぎ込んでいる。東西方向の溝は、調査区の中央やや北寄りで南北方向の溝と合流しており、約6m西側へ続いて終わっている。

ＳＩ112・114 住居跡、ＳＢ136 建物跡、ＳＤ105 方形周溝墓、ＳＤ111・ＳＤ116・ＳＤ117 円形周溝、ＳＤ120 溝、ＳＫ137 土壙、水田跡Ⅳと重複し、いずれよりも古い。

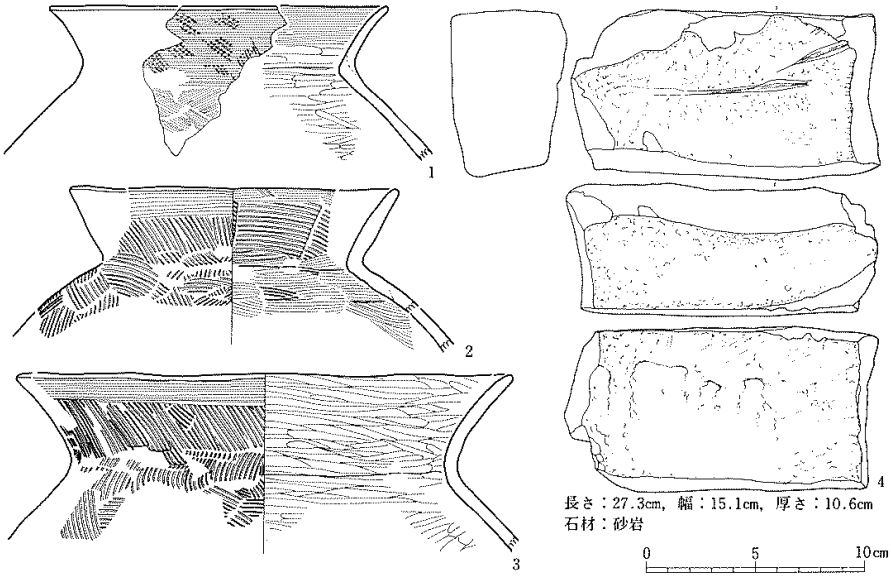
幅約1.6～4.0mで、深さは10～30cmほど残っていた。堆積土は2層でいずれも自然堆積である。

遺物は出土していない。



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	堆積	[口] ヨコナデ [体] ハケメ→ヨコナデ→ケズリ [底] ナデ	[口] ヨコナデ→工具 [体] ナデ	19.3	15.6	25.6	7.8	25.2	A.B.C	4/5		41-7
2	土師器 甕	堆積	[口] ヨコナデ→ハケメ [体] ハケメ	[口] ヨコナデ→ハケメ [体] ハケメ→ナデ	(14.0)	(10.2)	—	—	(7.5)	B.C.F.A	1/5		
3	土師器 高坏	〃	[脚] 工具	[脚] 工具 [円孔] ケズリ [底] ナデ	—	3.4			(5.8)	A.B.C	1/11		
4	土師器 器台	堆積	[口] ヨコナデ→工具 [体] 工具	[口] 工具 [体] 工具	(7.8)	—	(3.1)	—	(2.6)	A.B.C	1/12		
5	土師器 器台	堆積	[脚] ハケメ→工具→ヨコナデ	[脚] ハケメ→工具	—	—	—	(9.8)	(1.4)	A.C.B.F	1/6		
6	土師器 壺	堆積	[口] 工具	[口] 工具	—	(8.7)			(5.2)	B.C	4/5		
7	土師器 甕	堆積	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ハケメ→ヨコナデ [底] ナデ	[口] ハケメ→ナデ [体] ナデ	22.4	18.1	28.4	8.0	29.0	A.B.C	6/7		41-8

第26図　SD120出土遺物（1）



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 頸径	法量(cm) 体径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	堆積	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ハケメ→ヘラケズリ	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	(15.6)	(12.6)	－	－	(7.1)	A.B.C	1/11		
2	土師器 甕	堆積	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ→ヘラケズリ [体] ナデ	(14.0)	(12.2)	－	－	(7.0)	A.B.C.E	1/8		
3	土師器 甕	堆積	[口] ヨコナデ→ハケメ [体] ハケメ	[口] ハケメ→ミガキ(ナデ) [体] ハケメ→ミガキ(ナデ)	(22.8)	(17.8)	－	－	(8.2)	A.C.G	1/5		

第27図　SD120出土遺物（2）

（2）、B区

B区で検出した遺構には、竪穴住居跡12軒・掘立柱建物跡5棟・円形周溝2基・水田跡2面・河川跡の他、多数の土壙・溝・ピットがある。

①、竪穴住居跡

ＳＩ19（第28・29図）

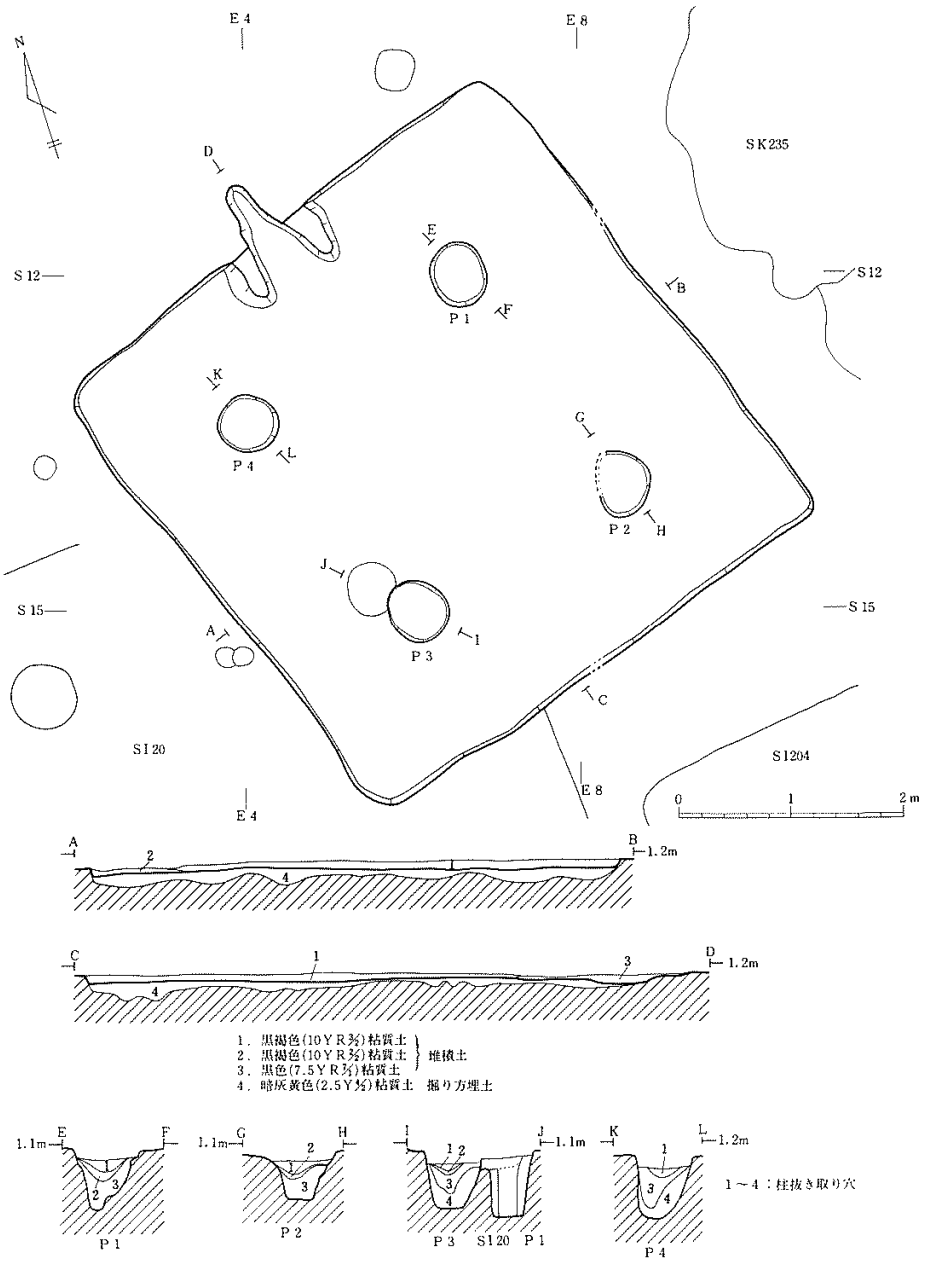
調査区北半部中央付近で検出した住居跡で、ＳＤ302河川跡の西側4～5m の所に位置している。後世の削平のため住居跡の堆積土はほとんど残っておらず、床面とカマドの一部を確認できただけである。

［重複］ＳＩ20住居跡と重複し、これより新しい。

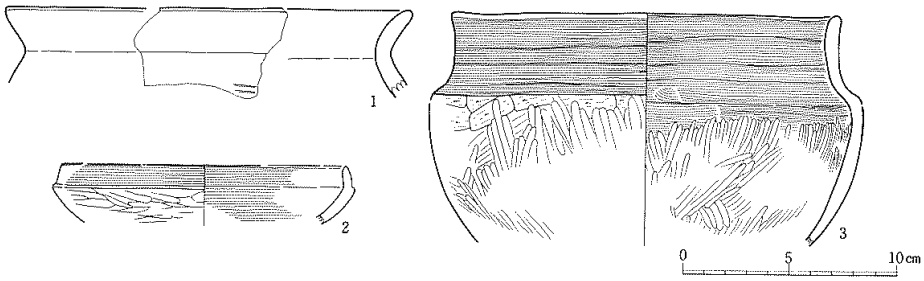
［平面形・規模］各辺が4.7～4.9m ほどの方形を呈する。住居の方向は西辺でみると真北に対して約19°西に偏している。

［堆積土］堆積土は3層で、いずれ自然堆積である。1・2層は住居内堆積土、3層はカマド内堆積土である。

［壁］残りの良いところで7cmほどで、急角度で立ち上がる。



第28図　SI 19住居跡



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	2層	[口] ヨコナデ	[口] 不明	(19.2)	(17.2)	–	–	(4.8)	A,B,C,F	1/10		
2	土師器 坏	2層	[口～体] ヨコナデ→ミガキ	[口～体] ヨコナデ	(13.5)	–	–	–	(2.9)	A,F,B	1/5		
3	土師器 鉢	–	[口] ヨコナデ [体] ケズリ→ミガキ	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ミガキ	(18.4)	(18.2)	(20.4)	–	(11.0)	A,B,C,F	1/4	C:煤り方埋土	

第29図　SI19出土遺物

［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］住居の対角線上に位置する四隅寄りの床面で主柱穴を確認している。いずれも柱が抜き取られている。柱穴は長径54～59㎝、短径在9～52㎝ほどの楕円形を呈するとみられ、深さは52～66㎝である。

［カマド］北壁の中央に付設されており、本体は両側壁が2～9㎝の高さで残存する。燃焼部と煙道部が残存しており、燃焼部は幅50㎝、奥行70㎝ほどで、奥壁で燃焼部底面より7㎝ほど立ち上がる。底面の中央部分がややくぼんでおり、側壁は粘土によって構築されている。煙道部は長さ55㎝、幅が22～34㎝、深さは2㎝ほど残っていた。

［出土遺物］掘り方埋土と堆積土から非ロクロ調整の土師器の鉢・甕・坏が出土している。

ＳＩ20（第30・31図）

前述のＳＩ19と同様に調査区北半部中央付近で検出した住居跡で、床面まで完全に削平されている。

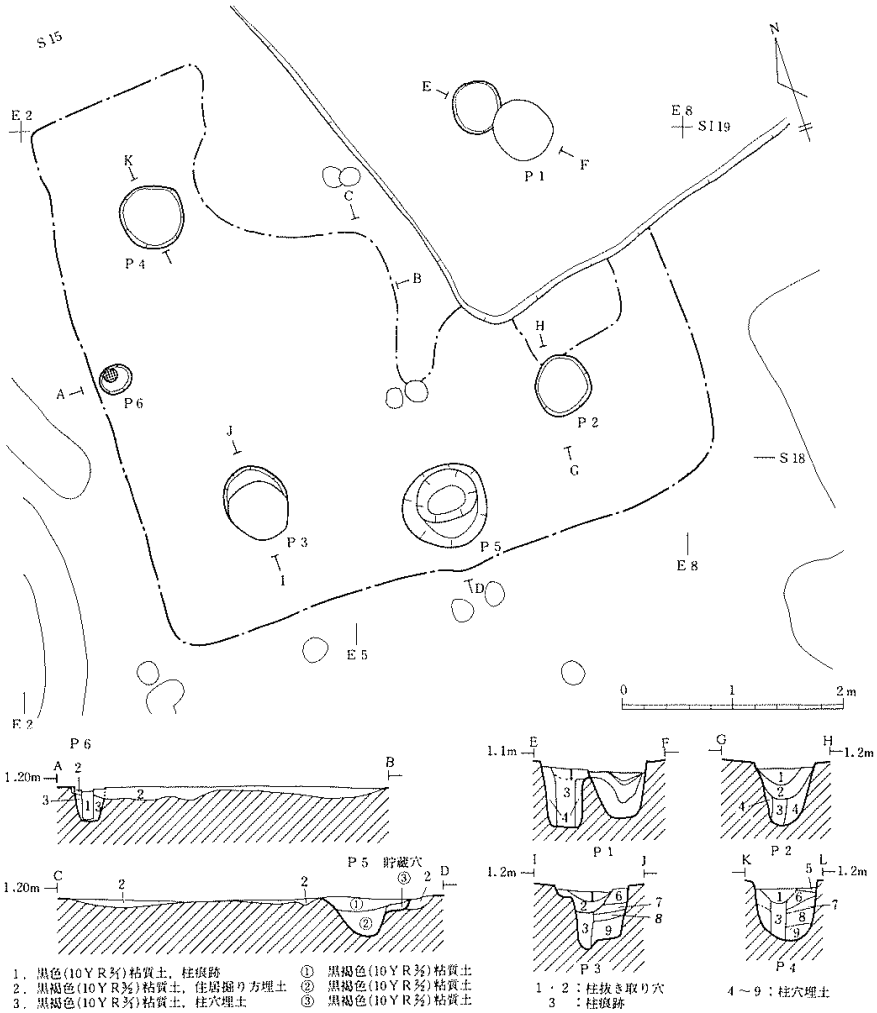
［重複］ＳＩ19住居跡と重複し、これより古い。

［平面形・規模］南辺が5.2m、西辺が4.9mのほぼ方形を呈する。住居の方向は西辺でみるとほぼ真北を向いている。

［床面］掘り方埋土を床面としていたと考えられる。

［柱穴］住居の対角線上に位置する四隅寄りの床面で主柱穴を確認している。いずれも柱は抜取られている。柱穴は径43～58㎝の円形ないしは不整円形をなすとみられ、深さは60～68㎝残っていた。

［貯蔵穴］南辺の中央付近で検出している（P5）。径80㎝ほどの不整円形を呈するもので、深さは33～35㎝ほど残っている。堆積土は3層でいずれも自然堆積である。



第30図　SI 20住居跡

番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 坏	床面	[口～底] ヨコナデ	[口～体] 不明	13.4	－	－	丸底	5.5	A, B, C, F	3/5		42-1
2	土師器 高坏	地表	[坏] ミガキ [脚] ミガキ	[坏] ミガキ [脚] ケズリ	－	3.9	(7.1)	－	(6.3)	A, C, F, B, E	3/5	Fa, 4	

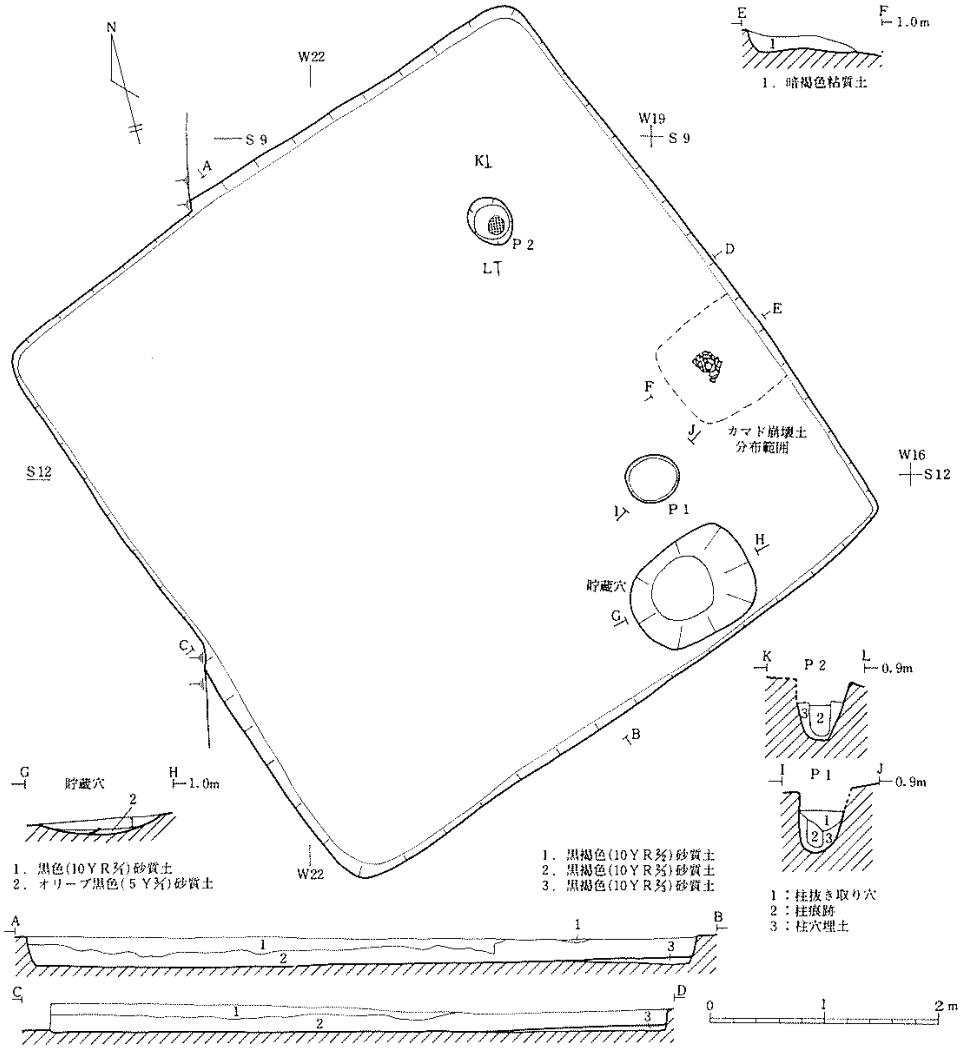
第31図　SI 20出土遺物

［その他の施設］西辺の中央付近で、掘り方埋土の下から柱穴を検出している（P6）。住居の掘り方埋土上面では柱痕跡のみが確認できた。柱穴は径25～30㎝のほぼ円形を呈し、深さは31㎝である。柱痕跡は径10㎝ほどの円形である。

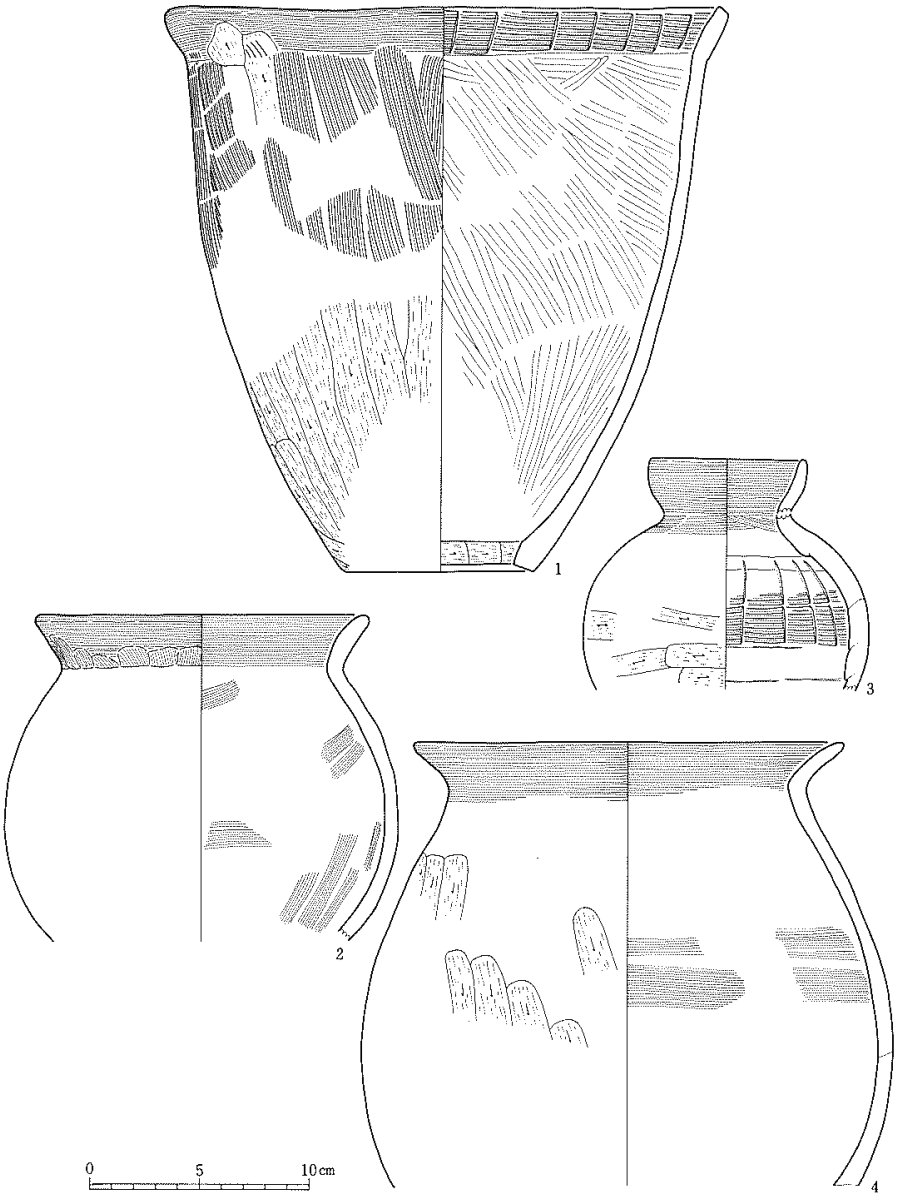
［出土遺物］掘り方埋土とP4 から非ロクロ調整の土師器の坏と高坏の破片が出土している。

ＳＩ21（第32～35図）

調査区北西部西壁際で東半部を検出した住居跡である。1990年の確認調査時に調査したものであるが、今回は確認調査時に湧水のために掘り下げることができなかった主柱穴を

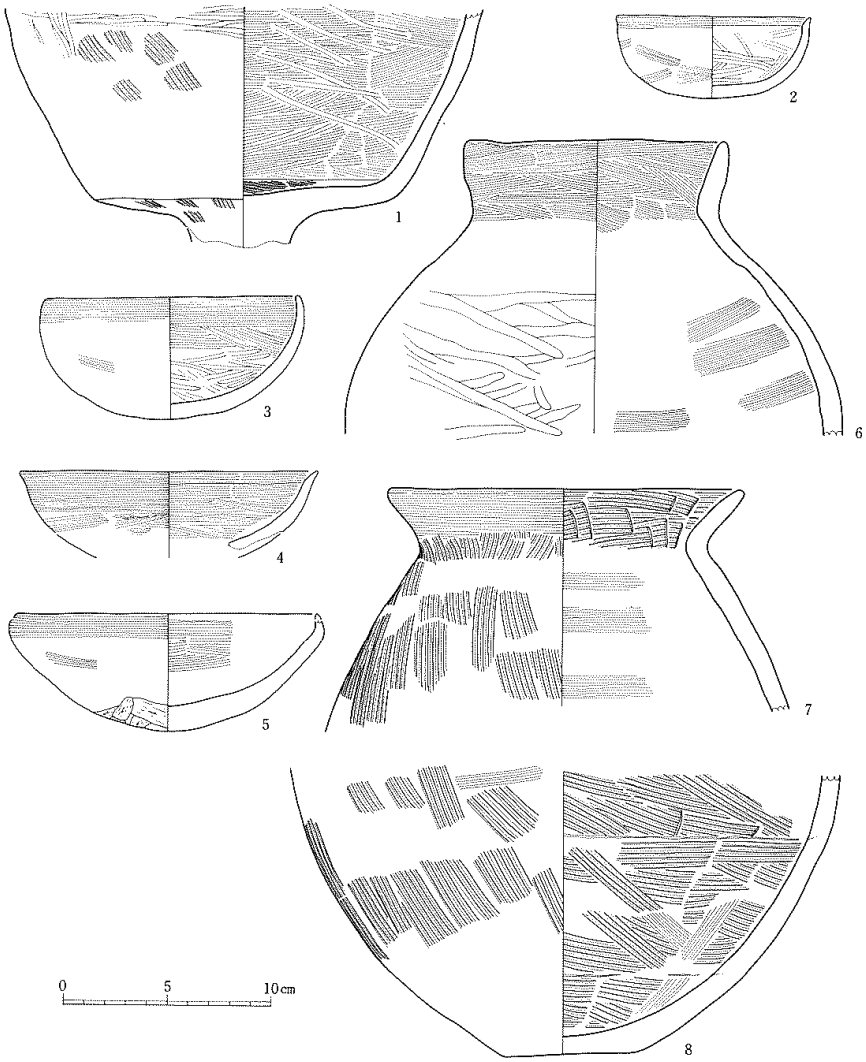


第32図　ＳＩ21住居跡



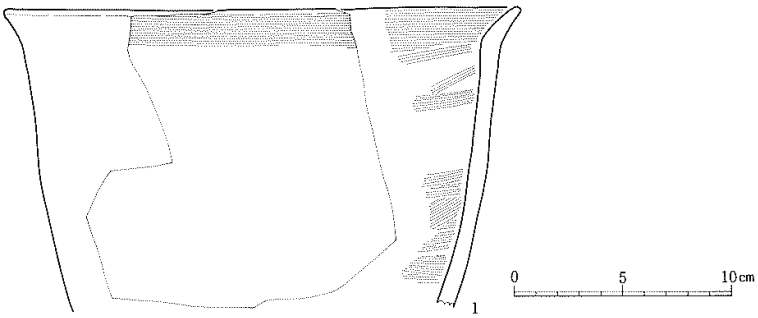
番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	貯	[口] ヨコナデ [体] ハケメ→ヨコ	[口] ハケ [体] ヘラ	25.8	24.0	－	9.0	26.1	A.B.C	4/5		
2	土師器 甕	2層	[口] ヨコナデ→ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	(15.3)	(12.9)	(18.0)	－	(15.0)	A.B.C.D	1/6		
3	土師器 壺	ホリ下	[口] ヨコナデ [体] ヘラケ	[口] ヨコナデ [体] ハケ	7.2	(5.6)	(12.9)	－	(10.8)	A.B.C	1/6	外面に円盛り(一部)	
4	土師器 甕	2層	[口] ヨコナデ [体] ヘラケ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	19.8	16.5	24.6	－	(20.1)	A.B.C	1/12		

第33図　SI21出土遺物（1）



番号	種 SI	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 高坏	貯	[体] ハケ→ミガキ [脚] ハケ	[体] ハケ→ナデ→ミガキ	(23.4)	–	–	–	(12.0)	A.B.C.D	1/5		
2	土師器 坏	2層	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	(9.5)	–	–	丸底	4.2	A.B.C	1/4		
3	土師器 坏	貯	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ミガキ	(12.3)	–	12.8	丸底	6.0	A.B.C	1/5		
4	土師器 坏	貯	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	(14.4)	–	–	–	(4.2)	A.B.C	1/4		
5	土師器 坏	貯	[口] ヨコナデ [体] ナデ [底] ミガキ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	(14.4)	–	15.3	丸底	(5.8)	A.B.C	1/3		
6	土師器 甕	貯	[口] ナデ [体] ミガキ	[口] ナデ [体] ナデ	13.0	12.0	(24.0)	–	(14.1)	A.B.C	1/7		
7	土師器 甕	貯	[口] ヨコナデ [体] ハケ	[口] ハケ [体] ナデ	16.8	14.1	(22.5)	–	(10.5)	A.B.C	2/5		
8	土師器 甕	2層	[体] ナデ→ハケ	[体] ナデ→ハケ	–	–	(27.0)	6.5	(13.8)	A.B.C.D	1/7		

第34図　SI21出土遺物 (2)



番号	種別	部位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	貯	[口] ヨコナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	(24.3)	(22.5)	–	–	(21.0)	A.B.C.D	1/14		

第35図　SI21出土遺物（3）

調査した。

［平面形・規模］東・南辺とも約5.8mのほぼ正方形を呈すると考えられる。住居の方向は東辺でみると真北に対して約22°西に偏している。

［堆積土］2層に分けられ、いずれも自然堆積である。

［壁］20～25cm残っており、急角度で立ち上がる。

［床面］平坦で、地山の7層を床面としている。

［柱穴］住居跡の対角線上の中央南東寄りと北東寄りの2箇所で、径30～40cmの円形を基調とした主柱穴を検出している。深さは54～56cmで、柱痕跡は円形でP1が径約14cm、P2が径約19cmである。

［カマド］東辺中央南寄りにおいて確認している。暗褐色の粘土を用いて構築したものと思われるが、全体が崩壊しているため規模・構造とも不明である。

［貯蔵穴］南辺中央東寄りで検出している。隅丸方形で、断面は浅い皿状を呈する。

［出土遺物］床面、カマド、貯蔵穴、堆積土などから非ロクロ調整の土師器の甕・甑・高坏・壺・坏が出土している。

ＳＩ22（第36・37図）

調査区北西部の西壁際で検出した住居跡で、前述のＳＩ21住居跡の南側に位置する。

［平面形・規模］西辺5.4m、北辺4.9mほどの長方形を呈する。住居の方向は西辺でみると真北に対して約6°東に偏している。

［堆積土］堆積土は4層で、いずれも自然堆積である。1・2層が住居中央の床面を、3・4層が壁際の床面を覆っていた。

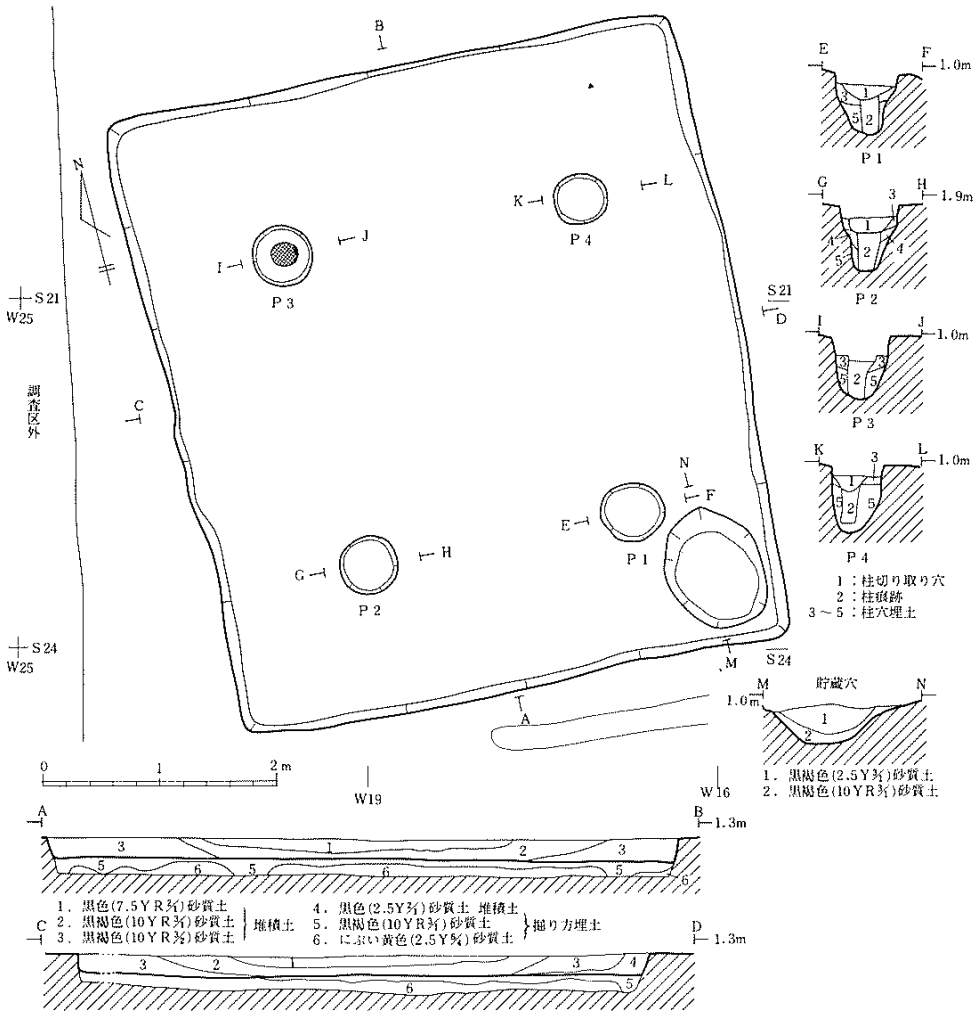
［壁］壁は16～22cmほど残っており、急角度で立ち上がる。

［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

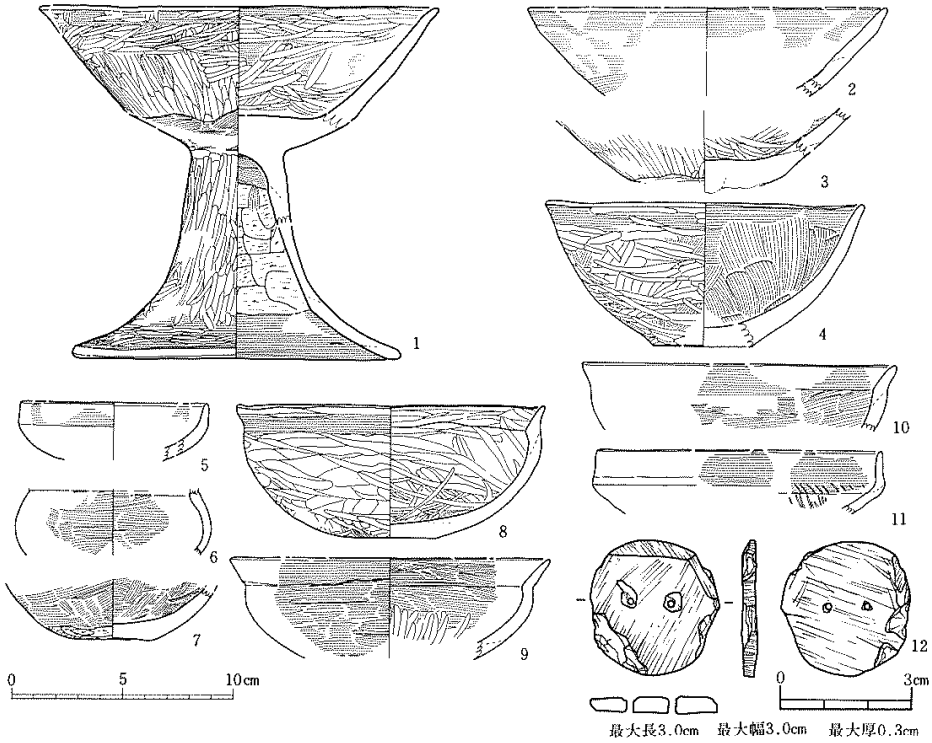
［柱穴］住居の対角線上に位置する四隅寄りの床面で主柱穴を確認した。P3 以外の柱穴は柱が切り取られ、切り取り穴の下で柱痕跡を検出している。柱穴は上部を切り取り穴によって壊されているため大きさは不明だが、深さは床面から 56～60 ㎝である。柱痕跡は径 13～21㎝ の円形である。

［貯蔵穴］南東隅の床面で検出している。長径 105 ㎝、短径 83 ㎝ほどの楕円形をなし、深さは 30 ㎝である。堆積土は 2 層からなり、いずれも自然堆積である。

［出土遺物］床面と堆積土からそれぞれ非ロクロ調整の土師器の高坏・坏などの他、石製模造品が 1 点出土している。



第36図　S I22住居跡



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 高坏	床面	[坏] ヨコナデ→ミガキ [脚] パケ→ミガキ→ヨコナデ→ミガキ	[坏] ヨコナデ→ナデ→ミガキ [脚] ナデ→ケズリ→ヨコナデ	(18.0)	4.2	(10.4)	(14.8)	16.0	A.C.B.F	1/2	Po.4	42-6
2	土師器 高坏	1層	[坏] ヨコナデ→ナデ	[坏] ヨコナデ(ナデ)	(16.2)	−	−	−	(4.0)	A.B.F.C	1/4		
3	土師器 高坏	3層	[坏] ミガキ	[坏] ミガキ	−	−	7.0	−	3.8	A.C.F.B.E	4/5		
4	土師器 坏	床面	[口～体] ヨコナデ→ナデ→ミガキ [底] ナデ	[口～体] ヨコナデ→ヘラナデ	(14.4)	−	−	(4.2)	6.5	B.C.F.A	1/4	Po.1	42-5
5	土師器 器台	1層	[坏] ヨコナデ	[坏] ヨコナデ	(8.5)	−	−	−	(2.0)	A.B.C	1/5		
6	土師器 壺	2層	[体] パケメ→ナデ	[体] ナデ	−	(7.6)	(8.8)	−	(3.0)	C.B	1/6		
7	土師器 坏?	床面	[体] ナデ→ケズリ [底] ナデ	[体] ナデ	−	−	−	3.8	(2.8)	A.B.C.F	1/1	Po.2	
8	土師器 坏	床面	[口～体] ヨコナデ→ナデ→ミガキ [底] ナデ→ミガキ	[口～体] ミガキ→ナデ	13.9	−	13.3	4.2	6.0	A.B.C	2/3	Po.1	
9	土師器 坏	1層	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ナデ	(14.4)	−	(13.0)	−	(4.5)	A.B.C	1/8		
10	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	(14.2)	−	(13.3)	−	(3.0)	A.B.C	1/11		
11	土師器 坏	1層	[口] ヨコナデ [体] 不明	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	(12.8)	−	(13.2)	−	(3.0)	B.C.F	1/12		

第37図　ＳＩ22出土遺物

ＳＩ23（第３・38図）

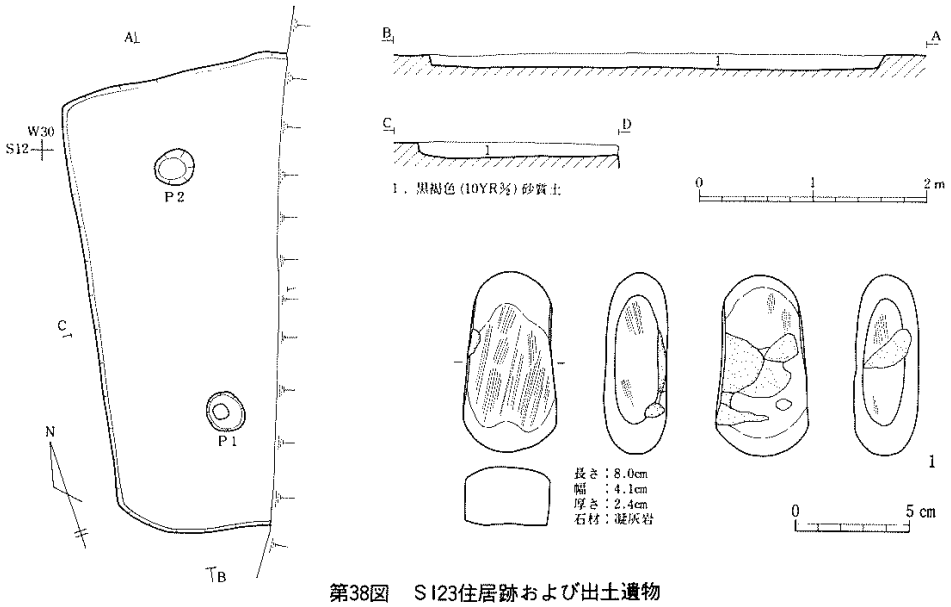
1990年の確認調査時に検出し事前調査を行った住居跡で、既述したＳＩ21住居跡のほぼ西側に位置している（第３図のＢ区参照）。

［平面形・規模］東半部が失われているが方形をなすとみられ、西辺が約 4m、東西が 2m 以上である。住居の方向は西辺でみると真北に対して５°東に偏している。

［堆積土］堆積土は１層で、自然堆積とみられる。

［壁］約10㎝残っており、急角度で立ち上がる。

［床面］平坦であり、地山の砂層を床面としている。



第38図　ＳＩ23住居跡および出土遺物

［柱穴］住居跡の対角線上の中央北西寄りと南東寄りの２箇所で主柱穴を検出している。径約30㎝の円形で、深さは約13～14㎝である。このうちＰ1では径15㎝の円形の柱痕跡が確認されている。

［出土遺物］床面や堆積土から非ロクロ調整の土師器が少量出土している。この他床面から砥石が１点出土している。

ＳＩ201（第39～42図）

調査区北半部中央付近で検出した住居跡である。

［重複］ＳＤ203円形周溝、ＳＤ213溝と重複し、ＳＤ213より新しくＳＤ203より古い。

［平面形・規模］一辺約3.5ｍのほぼ正方形を呈する。方向は西辺でみると真北に対して約11°東に偏している。

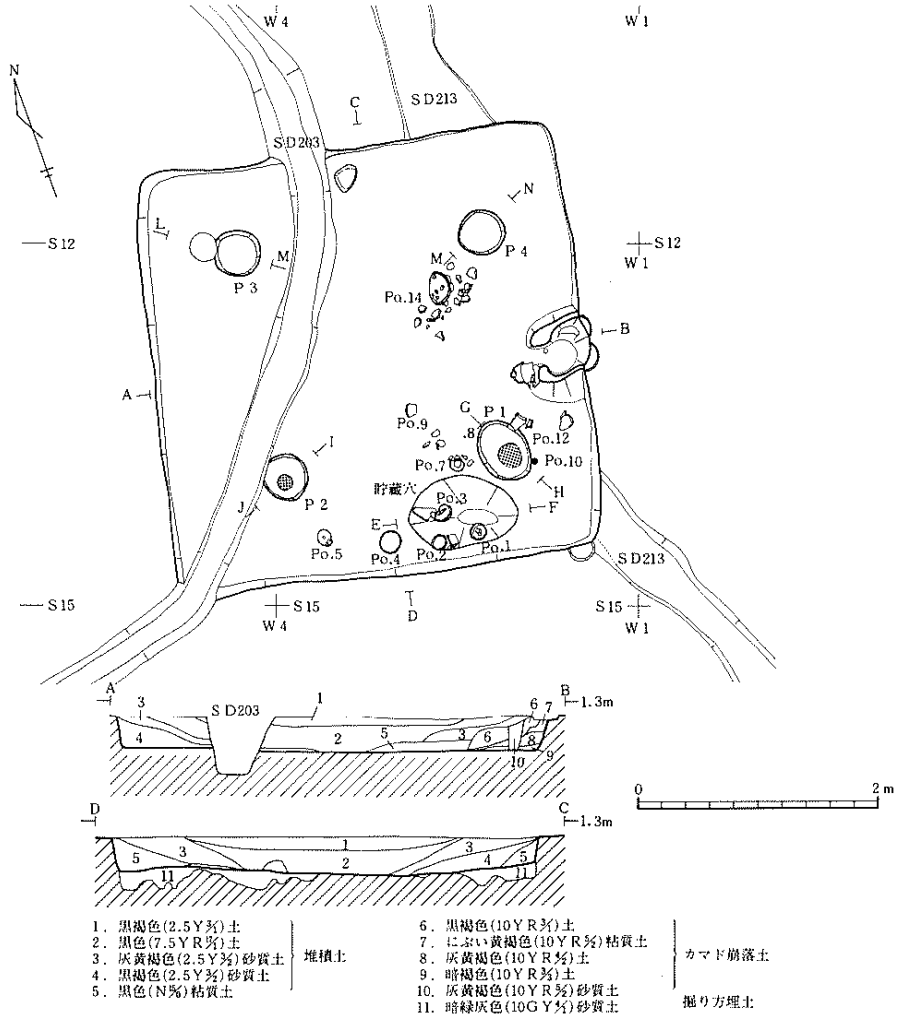
［堆積土］堆積土は10層に分けられる。第1～4層は自然堆積層である。第5層は炭化物層、第6層はカマド崩落土で、第7～10層はカマド内堆積土である。

［壁］20～28㎝ほど残っており、急角度で立ち上がる。

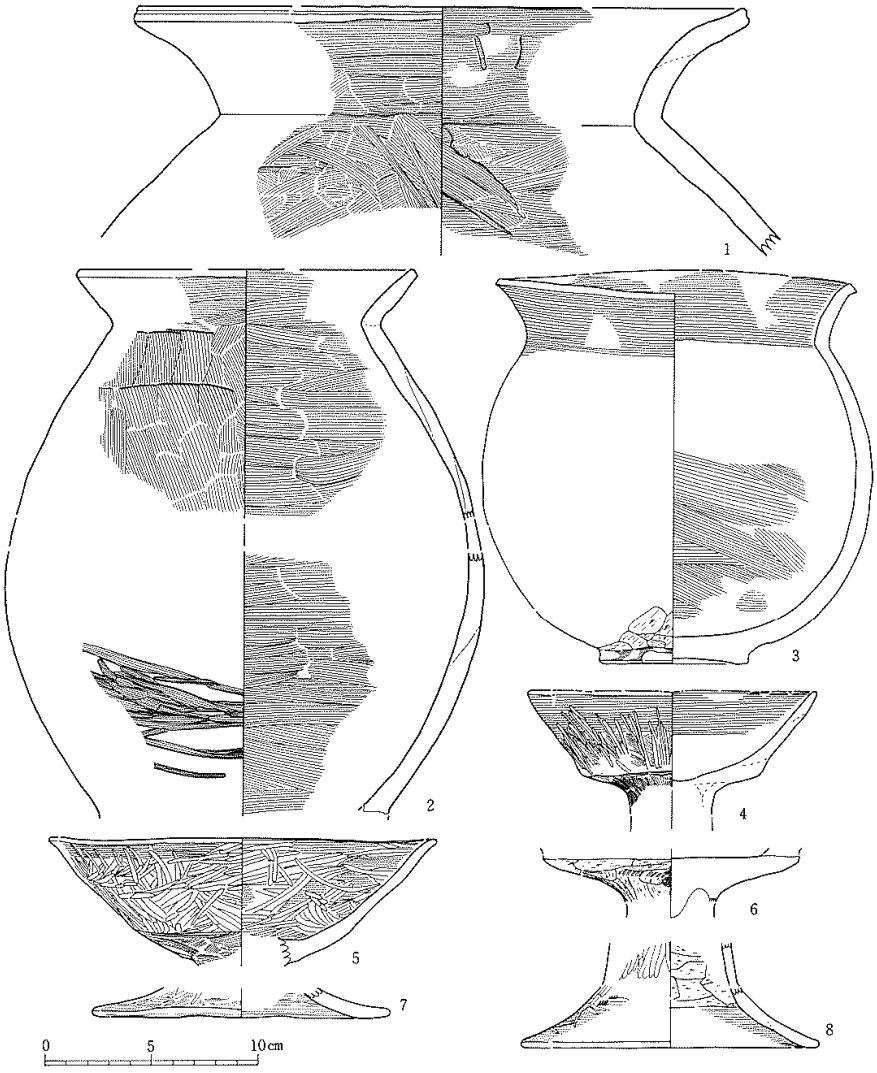
［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］住居の対角線上に位置する4箇所で主柱穴を検出している。径33～52㎝ほどの円形および楕円形で、深さは40～46㎝である。柱痕跡はＰ1で径20㎝、Ｐ2で径10㎝である。

［カマド］東辺中央で燃焼部のみ検出した。燃焼部の大きさは幅29㎝、奥行41㎝で、中央部および側壁に焼け面が認められた。両側壁は粘土によって構築されている。

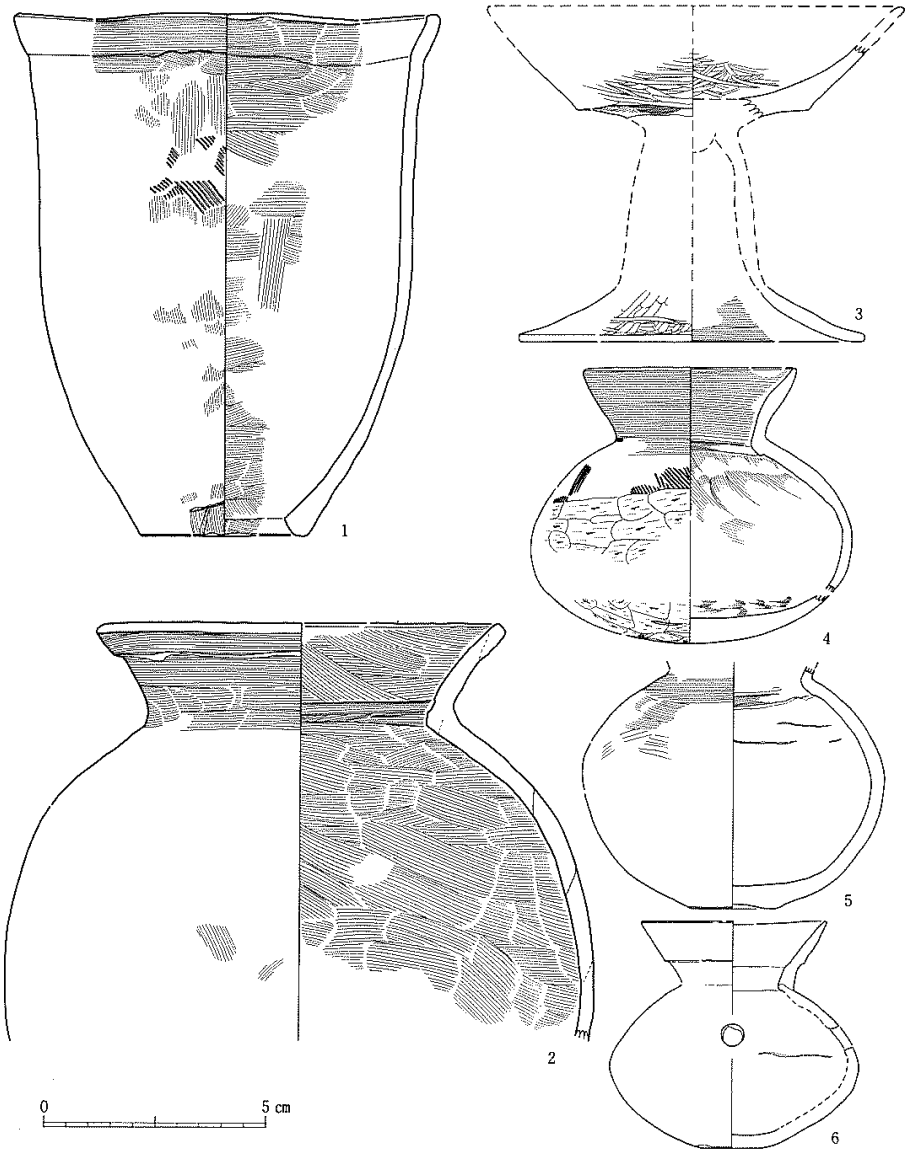


第39図　SI201住居跡



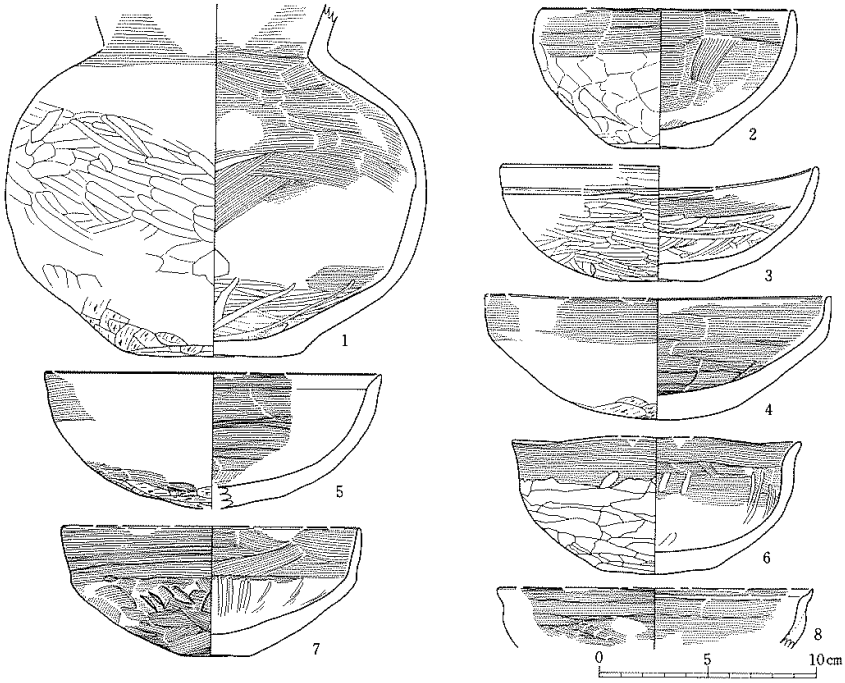
器号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ・ナデ [体] ナデ	[口] ヘラナデ・ヨコナデ [体] ナデ	(28.7)	(20.6)	–	–	(11.7)	A.B.C	1/12	Po.12	
2	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ・ヘラケズリ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	(16.0)	(12.5)	(22.4)	–	12.5	A.B.C.F	1/4	Po.2+Po.12+A-3層	
3	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ・ケズリ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	16.9	14.1	18.2	7.0	18.5	A.B.C	4/5	Po.7+Po.8+Po.9	43-3
4	土師器 高杯	1層	[杯] ヨコナデ→ミガキ・ナデ→ミガキ [脚] ナデ	[杯] ヨコナデ・ミガキ	(13.6)	(3.8)	–	(8.2)	(5.8)	A.B.C	1/5		
5	土師器 高杯	1層	[杯] ヨコナデ・ミガキ・ナデ	[杯] ナデ→ミガキ	(18.2)	–	–	(10.2)	(6.0)	A.B.C.F	1/4		
6	土師器 高杯	2層	[脚] ケズリ・ケズリ→ハケメ [底] ナデ		–	–	–	(12.0)	(2.3)	A.C.B	1/7		
7	土師器 高杯	1層	[脚] ミガキ・ナデ・ヨコナデ	[脚] ヨコナデ	–	–	–	(14.0)	(1.4)	A.C	1/5		
8	土師器 高杯	1層	[脚] ハケメ→ミガキ・ヨコナデ	[脚] ケズリ・ヨコナデ	–	–	–	(14.0)	(4.9)	A.B.C	1/9		

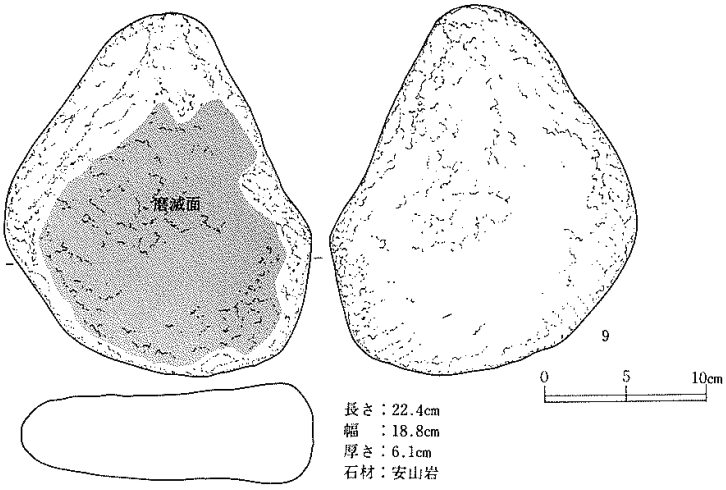
第40図　SI 201出土遺物（1）



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ハケ→ナデ	[口～体] ナデ	(19.2)	(16.7)	(16.8)	(7.5)	23.7	A.B.C	1/5	Po.3+Po.14+Po.16+A-2層	43-7
2	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ナデ	18.4	13.8	26.6	～	(19.0)	A.B.C.F	4/5	Po.14+B-2層	43-6
3	土師器 高杯	床面	[杯] ナデ→ミガキ [脚] ミガキ	[杯] ミガキ [脚] ヘラケズリ→ヨコナデ	～	～	～	(10.5)	(3.3)	A.B.C.F	1/8	Po.14	
4	土師器 壺	床面	[口] ヨコナデ [体～底] ハケ→ナデ→ヘラケズリ→ミガキ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	9.6	6.8	(14.5)	丸底	(12.5)	A.C.F	3/5	Po.14(2)	42-7
5	土師器 壺	床面	[体] ナデ→ミガキ→ヘラケズリ→ナデ	[体] ミガキ→ナデ	～	(6.4)	13.6	3.8	(10.7)	A.B.C	4/5	Po.14+Po.3+A-2層	43-4
6	土師器 鉢	床面	[口～底] ミガキ→ナデ	[口～体] ミガキ→ナデ	(8.4)	5.1	15.2	2.8	10.3	A.B.C	4/5	Po.5	43-5

第41図　SI201出土遺物 (2)





番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頂径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 壺	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ・ケズリ→ミガキ	[口] ヨコナデ [体] ナデ・ミガキ	－	(10.3)	19.5	8.4	(16.4)	A.C	2/5	D-1層+SI12層	43-8
2	土師器 坏	床面	[口～体] ヨコナデ・ナデ [底] ナデ	[口～体] ナデ	(11.7)	－	－	4.9	6.5	A.C	3/5	Po.2(1)	42-8
3	土師器 坏	床面	[口～体] ミガキ [底] ナデ(ケズリ)	[口～体] ミガキ→ヨコナデ	14.6	－	－	4.2	4.3	A.C.F	3/5	Po.3(3)	42-11
4	土師器 坏	床面	[口～底] ヨコナデ・ナデ・ケズリ	[口～体] ヨコナデ・ヘラナデ	(16.0)	－	－	丸底	5.8	A.C.F.B	4/5	Po.4	42-9
5	土師器 坏	床面	[口～底] ヨコナデ・ケズリ	[口～体] ナデ	(15.6)	－	－	丸底	(6.3)	A.C.F.	1/8	Po.2(2)	
6	土師器 坏	床面	[口～底] ヨコナデ・ミガキ	[口～体] ヨコナデ・ナデ→ミガキ	(13.4)	－	－	丸底	6.4	緻密	1/4	Po.10	43-2
7	土師器 坏	覆土	[口～体] ヨコナデ・ナデ	[口～体] ヨコナデ・ナデ	(14.6)	－	－	－	(2.8)	A.C	1/5	1層	
8	土師器 坏	床面	[口～体] ヨコナデ・ヘラナデ [底] ナデ	[口～体] ヨコナデ・ナデ→ミガキ	(13.9)	－	－	(2.9)	6.0	A.C.F. 緻密	2/3	Po.1	42-10

第42図　SI201出土遺物（3）

［貯蔵穴］南辺年央東寄りの床面で検出している。東西 89 ㎝、南北 60 ㎝ほどの楕円形をなし、深さは 23㎝ である。堆積土は 5 層に分けられ、1・2 層から遺物が出土している。

［出土遺物］床面、カマド、貯蔵穴、堆積土などから、非ロクロ調整の土師器の甕・甑・高坏・壺・坏が出土しており、この中には須恵器のハソウを模倣したものもある。この他、床面から安山岩製で一面が磨滅している偏平な礫が 1 点出土している。

ＳＩ202（第 43・44 図）

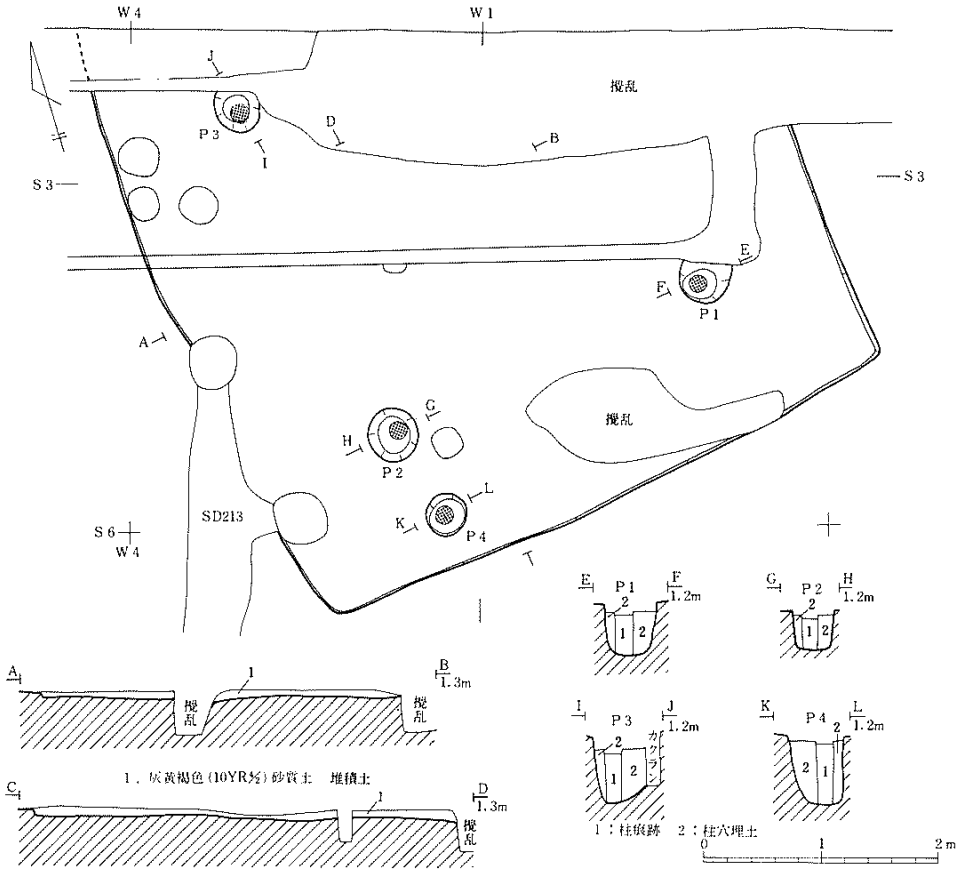
調査区北端部のほぼ中央で検出した住居跡で、北半部は調査区外である。

［重複］ＳＢ241 建物跡、ＳＤ213 溝と重複しており、いずれよりも古い。

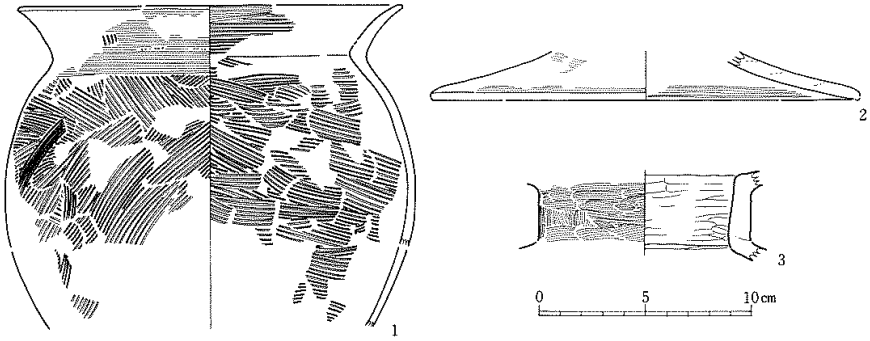
［平面形・規模］南辺約 5.2m、西辺 4.9m 以上で、方形を呈すると考えられる。住居の方向は西辺でみると真北に対して約 6 ° 西に偏している。

［堆積土］堆積土は 1 層で、自然堆積である。

［壁］2〜6 ㎝ほど残っており、急角度で立ち上がる。



第43図　Ｓ1202住居跡



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 壺	1層	[口] ﾅﾃｲｰｰﾖｺﾅﾃﾞ [体] ﾅﾃｲ	[口] ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃｲ [体] ﾅﾃｲ	(18.2)	(14.8)	(19.4)	－	(15.3)	A.B	1/4	床直 Po.1	44-1
2	土師器 高坏	1層	[脚] 不明	[脚] ﾖｺﾅﾃﾞ	－	－	－	(20.2)	(2.3)	A.E.C	1/7	床直	
3	土師器 壺	1層	[頸] ﾅﾃﾞ	[頸] ﾖｺﾅﾃﾞ	－	(10.0)	－	－	(4.2)	A.B.C.F	1/4	床直	

第44図　ＳＩ202出土遺物

［床面］7 層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］住居の対角線上の 3 箇所で主柱穴を検出している。このうち P1 と P3 は撹乱によって一部を壊されているが、平面形は径 44～47 ㎝のほぼ円形を呈し、深さは 45～60 ㎝である。柱痕跡は径 13～16 ㎝である。

［その他の施設］P2 の南側で P4 を検出した。埋土が他のピットと似ていることから住居に伴うものと考えられるが、性格は不明である。径 36 ㎝の円形で、深さは 31～33 ㎝である。柱痕跡は径 15 ㎝の円形である。

［出土遺物］床面と堆積土から非ロクロ調整の土師器が出土している。床面からは甕・高坏が、また堆積土からは二重口縁壺の頸部破片や中型の壺の胴部破片などが出土している。

ＳＩ204（第 45 図）

調査区北東部で検出した住居跡である。ＳＤ302 河川跡の約 2㎞ 西側に位置し、ＳＩ19・ＳＩ20 住居跡の南西に近接する。掘り方埋土の広がりを確認できただけである。

［重複］ＳＫ233・247 土壙、ＳＤ206 溝と重複し、いずれよりも古い。

［平面形・規模］北辺が 5.1㎞、東辺が 4.9㎞ の方形を呈する。住居の方向は東辺でみると真北に対して約 10°西に偏している。

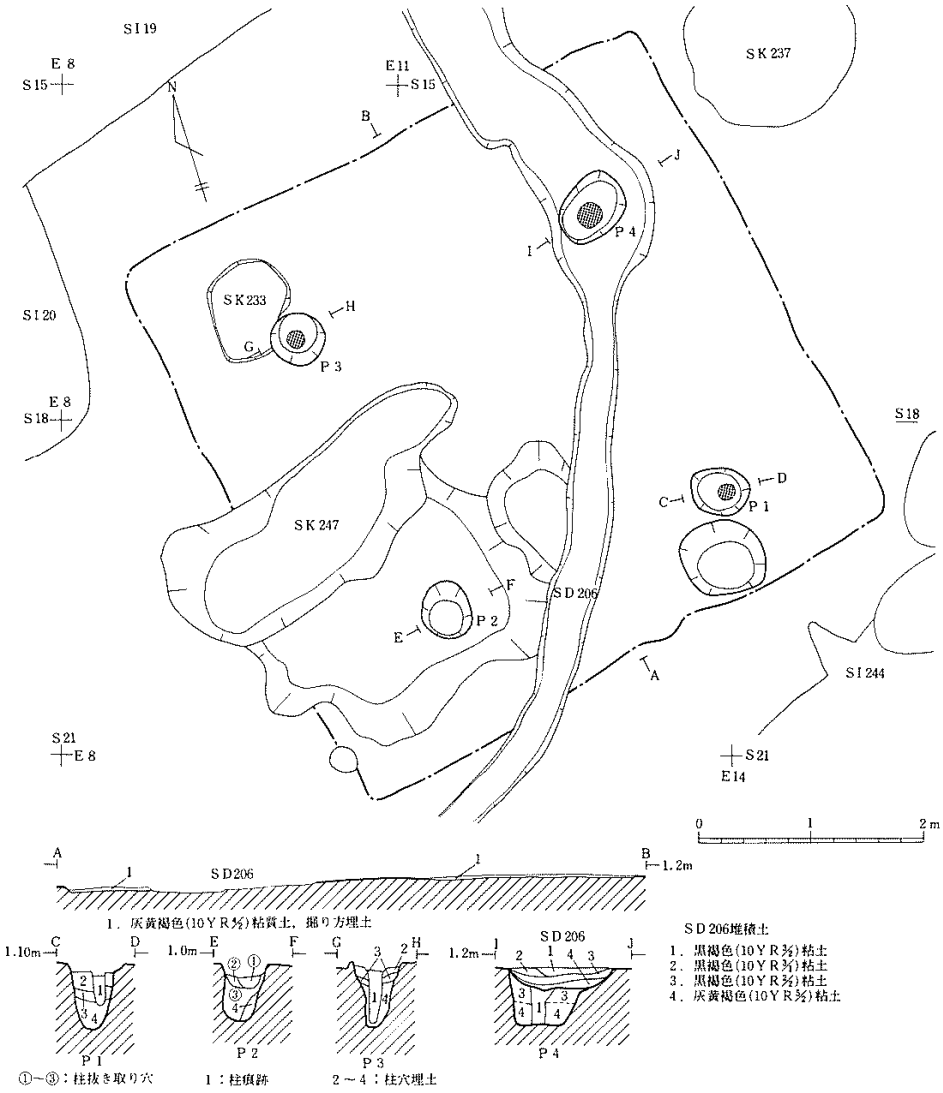
［床面］掘り方埋土を床面としていたものと思われる。

［柱穴］住居の対角線上に位置する 4 箇所で主柱穴を検出している。P1～P3 は長径 52～65 ㎝、短径 42～50㎝ の楕円形を呈し、P4 は径 45～49 ㎝の円形を呈する。深さは、ＳＫ247 よって上部を壊されている P3 を除いて、52～60 ㎝残っていた。柱痕跡は径 14～16

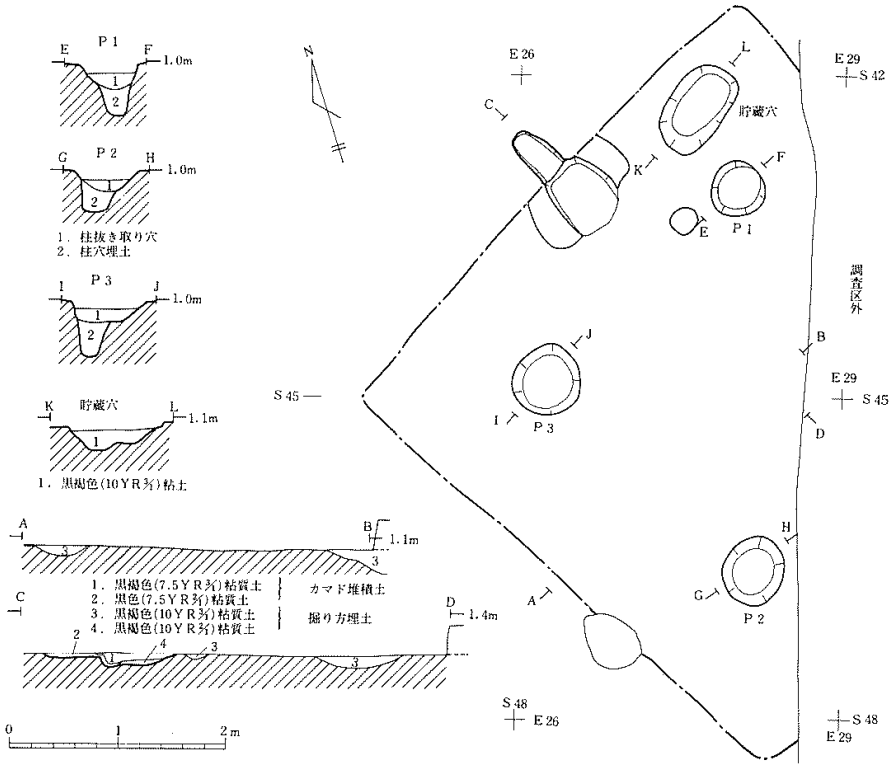
cmほどである。

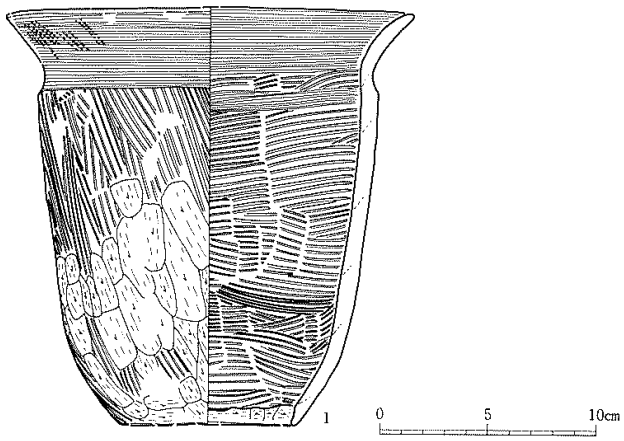
［貯蔵穴］南辺の東半部で検出した。長径72cm、短径68cmの楕円形で、深さは10～13cm残っていた。堆積土は自然堆積である。

［出土遺物］時期を特定できない土師器の小破片が少量出土している。



第45図　SI204住居跡





番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頂径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	【口】ハケメ→ヨコナデ【体】ハケメ→ハケメ→ヘラケズリ	【口】ハケメ→ヨコナデ【体】ハケメ→ヘラケズリ	(18.8)	(15.1)	(15.6)	(8.1)	19.3	A.B.C.F	1/3	孔径(7.7cm)	44-2

第46図　S I229住居跡

ＳＩ229（第46図）

調査区東壁中央やや南寄りの壁際で検出した住居跡で、東半部は調査区外である。掘り方の埋土を確認できただけである。

［平面形・規模］北辺・西辺とも約5.1㎡の正方形を呈するものと思われる。方向は西辺でみると真北に対して約30°西に偏している。

［堆積土］カマド内堆積土のみ2層確認しており、いずれも自然堆積である。

［床面］掘り方埋土を床面としている。

［柱穴］住居の対角線上に位置する3箇所で主柱穴を検出している。いずれの柱穴でも柱が抜き取られている。抜取り穴は径51～62㎝ほどの円形および不整円形である。柱穴の深さは38～52㎝残っていた。

［カマド］北辺の中央で検出している。本体は両側壁が僅かに残存していたのみであるが、燃焼部は幅47㎝、奥行63㎝ほどである。底面の中央部分はややくぼんでおり、奥壁は燃焼部底面より10㎝ほど立ち上がって煙道に続いている。側壁は粘土によって構築されている。煙道部は一旦掘り上げた後、地山の粘土を貼っているものと思われ、その範囲は長さ51㎝、幅14～22㎝であった。

［貯蔵穴］北東隅で検出している。長径88㎝、短径53㎝ほどの楕円形をなし、深さは14～23㎝である。堆積土は1層で自然堆積である。

［出土遺物］床面から、非ロクロ調整の土師器の甑が1点出土している。

ＳＩ230（第47図）

調査区東端部中央で検出した住居跡で、ＳＤ302河川跡の西側約2㎡に位置している。掘り方の埋土を確認できただけである。

［重複］ＳＤ208溝跡と重複し、これより古い。

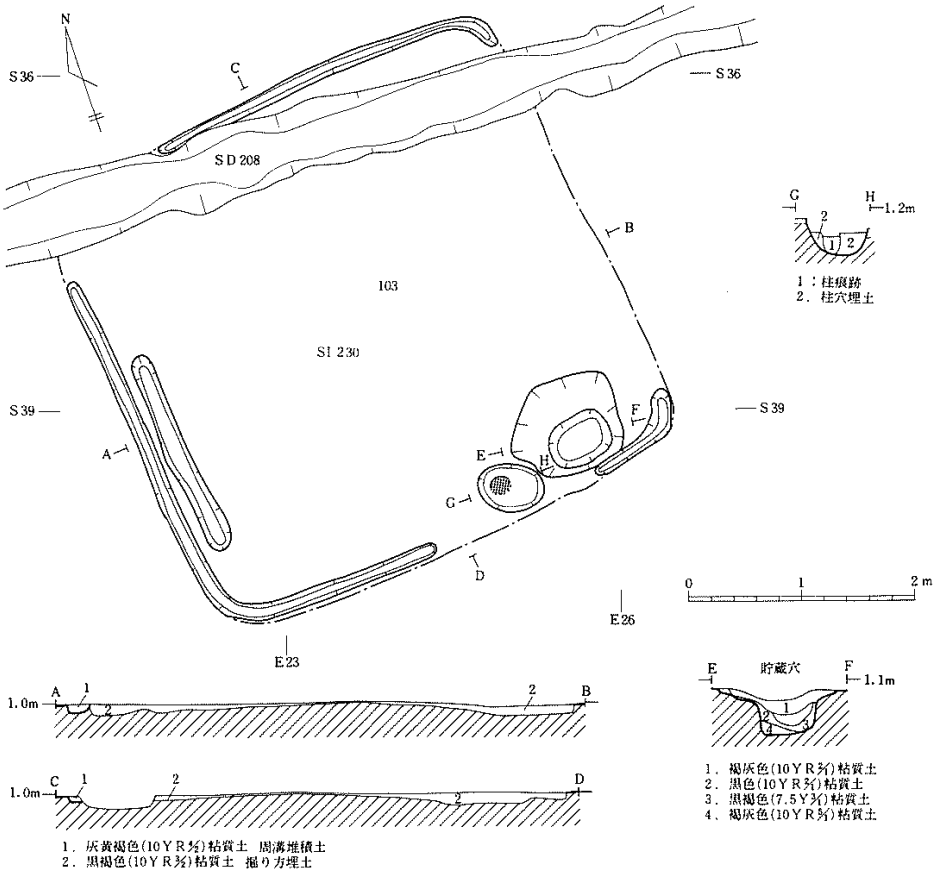
［平面形・規模］南辺が約4.5㎡、東辺が約4.2㎡の方形を呈する。住居の方向はほぼ真北方向を向いている。

［床面］掘り方埋土を床面としている。

［柱穴］主柱穴は認められない。なお南辺の中央やや東寄りで、長径59㎝、短径41㎝、深さが24㎝ほどの柱穴を1個検出しているが、性格は不明である。

［周溝］北辺・西辺北半部～南辺中央部・南東隅で周溝が確認できた。幅は11～16㎝、深さは6～9㎝残っていた。なお、西辺中央部分には、壁際の周溝に平行するような幅18～23㎝、深さ5～14㎝の溝を約1.9㎡検出している。

［貯蔵穴］住居の南東隅で検出している。長径1.1㎡、短径0.9㎡の不整方形をなす。二段に掘られており、二段目の平面形は東西56㎝、南北43㎝ほどの隅丸長方形をなし、深さは



第47図　ＳＩ230住居跡

約40㎝である。堆積土は4層からなり、いずれも自然堆積である。

［出土遺物］時期を特定できるような遺物は出土していない。

ＳＩ231（第48・49図）

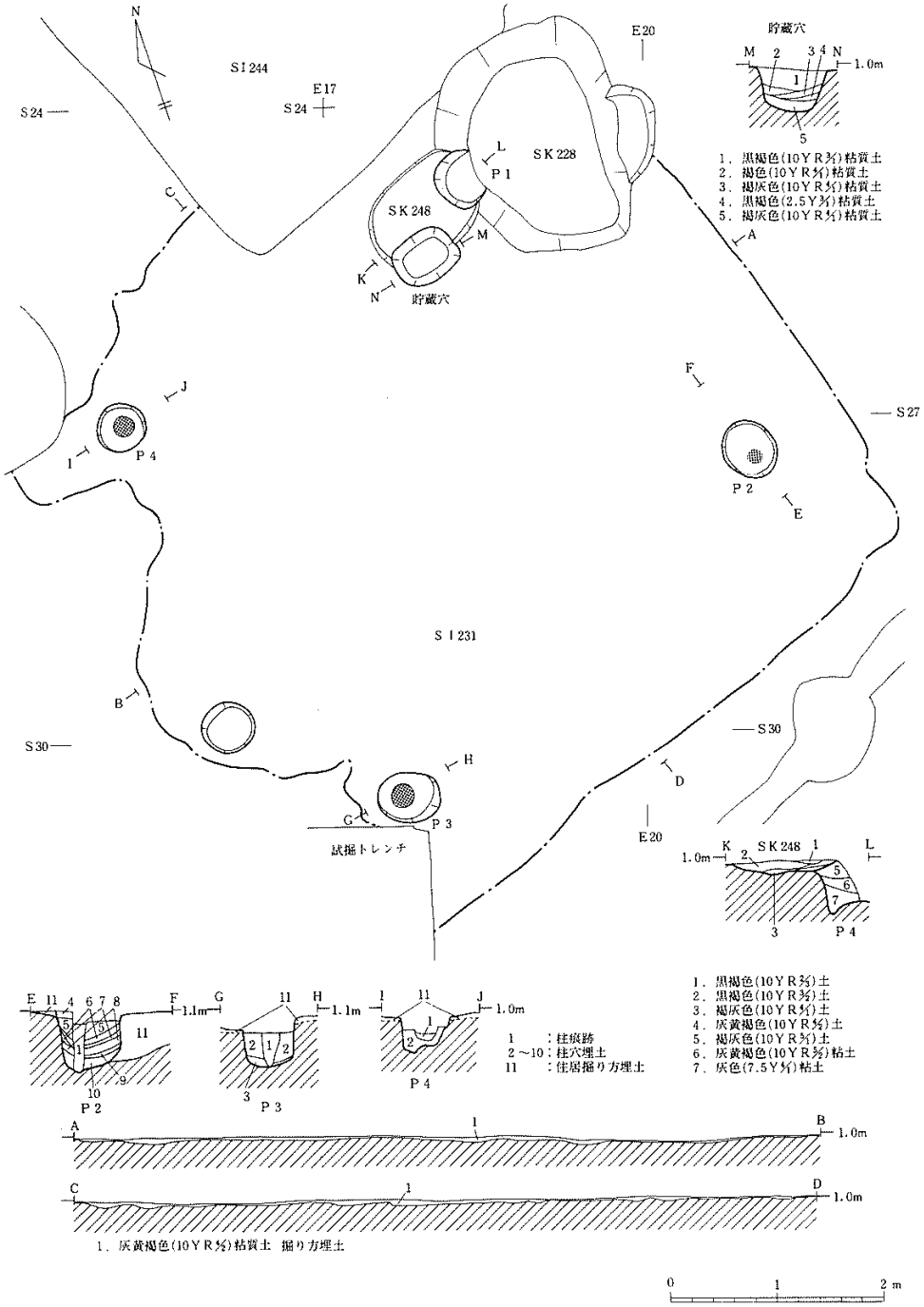
調査区中央部東半で検出した住居跡である。ＳＩ230住居跡の北側で、ＳＤ302河川跡の西側約2～3㎜のところに位置する。掘り方埋土の広がりを検出できただけである。

［重複］ＳＩ244住居跡、ＳＫ228・248土壙と重複し、いずれよりも古い。

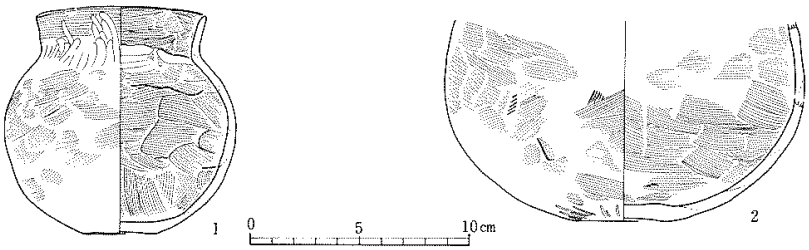
［平面形・規模］掘り方埋土の残存範囲から一辺が7㎜ほどの方形を呈するものと思われる。住居の方向は東辺でみると真北に対して約16°西に偏している。

［床面］掘り方埋土を床面としていたと考えられる。掘り方埋土は部分的に深いところがあり、特にP2付近は厚さが約50㎝である。

［柱穴］住居の対角線上の4箇所で検出している。P1の平面形は円形ないしは不整円形



第48図　SI 231住居跡



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 壺		[口] ヨコナデ→ミガキ [体] ケズリ→ミガキ	[口] ケズリ→ミガキ [体] ヘラナデ	7.6	7.2	10.6	3.2	10.4	A.B.C.G	1/2		
2	土師器 壺		[体] ケズリ→ヘラナデ	[体] ナデ	－	－	(16.5)	4.8	(9.3)	A.B.C.E	1/5		

第49図　SI231出土遺物

を呈するものと思われ、深さは約50㎝残っていた。P2～P4は径49～59㎝の円形ないしは楕円形を呈し、深さは34～58㎝残っていた。柱痕跡はP2・P3・P4で検出しており、径15～19㎝の円形である。

［貯蔵穴］住居の北東部、P1の西側で検出している。長辺60㎝、短辺48㎝の隅丸方形で、深さは42㎝である。堆積土は5層に分けられ、いずれも自然堆積である。

［出土遺物］貯蔵穴から非ロクロ調整の土師器の壺が出土している。

ＳＩ244（第50図）

調査区の北東部で検出した住居跡である。ＳＤ302河川跡の1～2m西側でＳＩ204住居跡の南側に位置する。東半部は床面まで削平されている。

［重複］ＳＩ231住居跡、ＳＫ228・249・272土壙と重複し、ＳＩ231より新しく、ＳＫ228・249・272より古い。

［平面形・規模］西辺は約4.7m、北辺は3.9m以上で、方形を呈するものと思われる。方向は西辺でみると真北に対して約24°西に偏している。

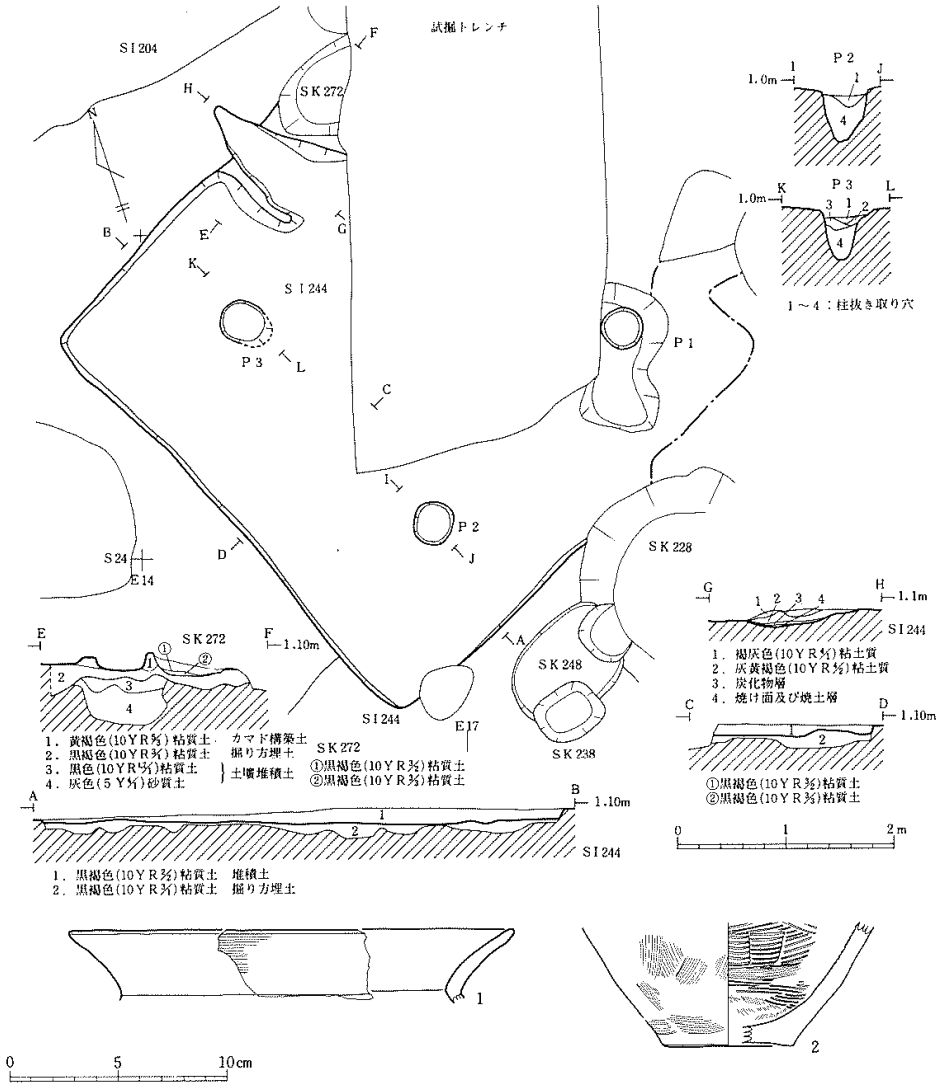
［堆積土］直接床面を覆う堆積土を1層確認しており、自然堆積である。

［壁］2～14㎝ほど残っており、急角度で立ち上がる。

［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］住居の対角線上に位置する3箇所で主柱穴を検出している。径36～40㎝の円形および不整円形で、深さは39～58㎝残っていた。柱痕跡はP2で確認しており、径12㎝の円形である。

［カマド］北辺で中央部付近で検出している。本体は両側壁が6～13㎝残存していたのみである。燃焼部と煙道部の一部が残存し、燃焼部は幅約50㎝、奥行約80㎝で、底面の中央部分がわずかにくぼんでおり、奥壁は燃焼部底面より7㎝ほど立ち上がる。側壁は粘土によって構築されている。燃焼部中央底面には焼け面が認められた。煙道部は長さ22㎝、幅



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	1層	[口] ﾖｺﾅﾃﾞ	[口] 不明	(20.5)	(15.6)	－	－	(3.4)	B.C	1/10	床直	
2	土師器 甕	2層	[体] ﾅﾃﾞ [底] ﾅﾃﾞ	[体] ﾅﾃﾞｰﾍﾗﾅｼ	－	－	－	6.1	(5.8)	B.C	2/5	カマド	

第50図　SI244住居跡・出土遺物、SK272土壙

11～24 cm、深さは2～4 cm残っていた。また、燃焼部には土製の棒状の支脚が残っていた。

［その他の遺構］掘り方埋土を下げている時に、カマドの下から土壙を検出した。長径81 cm、短径34 cmで、深さは掘り方底面から46 cmであった。

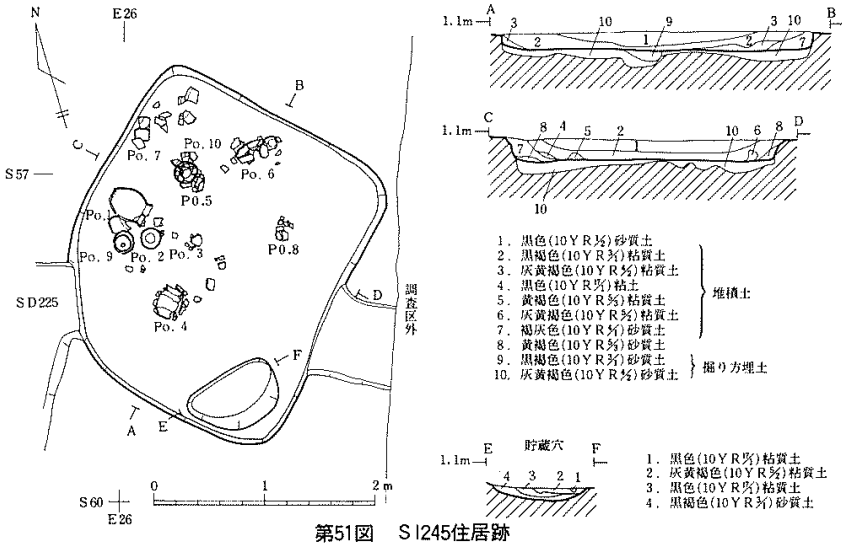
［出土遺物］床面から非ロクロ調整の土師器の甕の口縁部破片が、またカマド内堆積土 2層から土師器の甕の底部破片が出止している。

ＳＩ245（第51～54図）

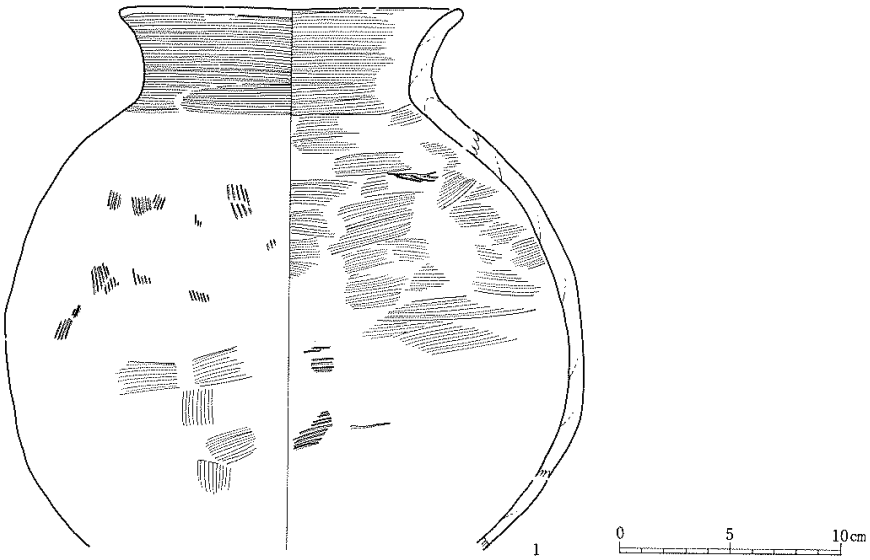
調査区南東部の東壁際で検出した住居跡である。

［重複］ＳＤ225溝と重複し、これより古い。

［平面形・規模］東辺が約2.8m、北辺2.4mの南西隅が弧を描く、不整な隅丸方形を呈す

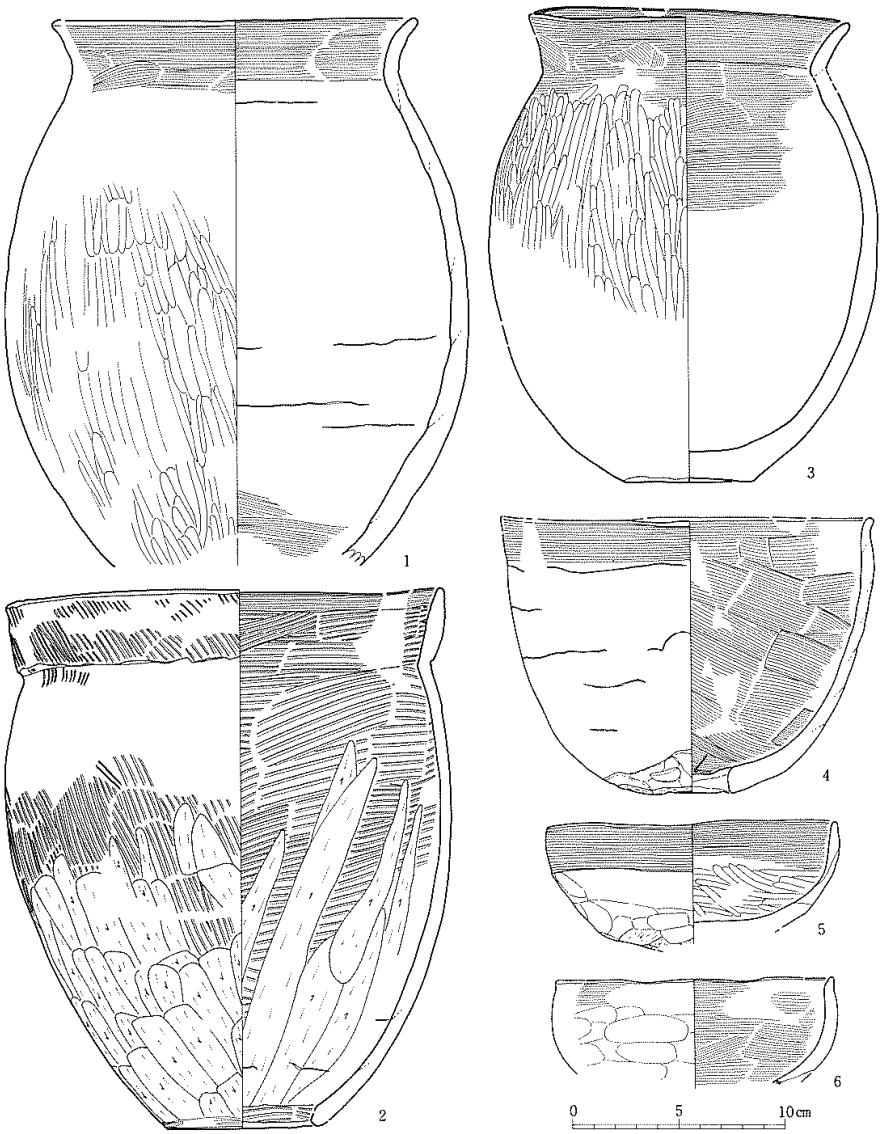


第51図　ＳＩ245住居跡



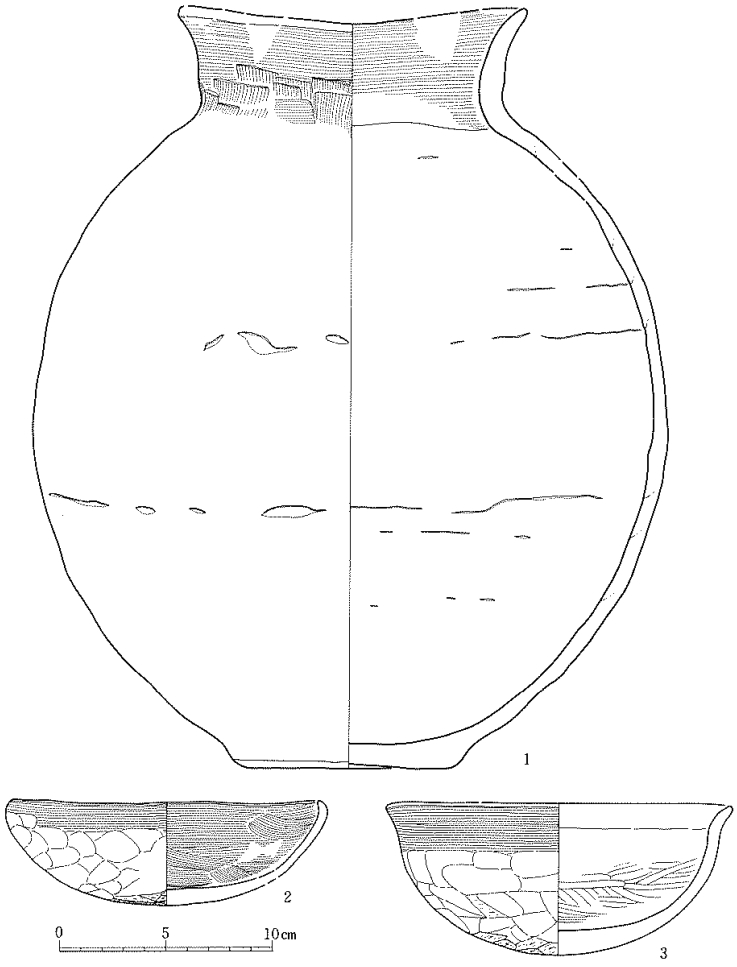
番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ハケメ→ヘラナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ハケメ	(15.5)	(12.9)	26.0	-	(24.4)	A,F	1/2	Po.6・D-7層	

第52図　ＳＩ245出土遺物（1）



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	8層	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	[口] ヨコナデ→ヘラナデ [体] ヘラナデ	(17.3)	(15.4)	(21.8)	－	(25.8)	A.B.C	1/4		
2	土師器 甕	床面	[口] ハケ [体] ハケ→ハケ→ヘラ→ナデ	[口] ヨコナデ [体] ハケ→ハケ→ナデ(ナリ)	20.6	(19.2)	20.9	7.3	25.6	A.B.C.F	4/5	孔径6.4cm Po.14Po.7ﾏﾙ-2層	44-3
3	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ミガキ [底] ヘラケ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	15.1	(13.3)	16.2	8.1	22.5	A.B.C	4/5	Po.3+Po.6+Po.10+8+SK18-1～7	44-5
4	土師器 甕	2層	[口] ヨコナデ [体～底] ナデ→ヘラケ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	17.9	－	－	3.9	13.1	A.B.C	4/5	床面+Po.2+1～7層	44-4
5	土師器 坏	2層	[口] ヨコナデ [体] ヘズリ→ナデ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ→ミガキ	13.7	－	－	－	(6.0)	A.C.F	1/1	Po.9	43-1
6	土師器 坏	8貯	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	(13.1)	－	(13.5)	－	(5.3)	A.B.C.F	1/6	B-1～7層	

第53図　SI 245出土遺物 (2)



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ・ヨコナデ→ヘラケズリ [体～底] 不明	[口] ヨコナデ [体] 不明	(16.4)	14.2	30.0	10.8	26.3	A.C.B	1/2	Po.1+C-7層	44-6
2	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体～底] ヘラケズリ→ナデ→ケズリ	[口～体] ヨコナデ・ハケメ	14.8	－	－	丸底	5.0	A.B.C	4/5	Po.5+1+B-1～7+C-2+D-2	45-1
3	土師器 坏	2層	[口] ヨコナデ [体～底] ヘラケズリ→ナデ→ケズリ	[口] 不明 [体] ミガキ	18.4	－	－	丸底	7.2	A.B.C	1/1	Po.3	45-2

第54図　SI 245出土遺物（3）

る。方向は西辺でみると真北に対して約47°東に偏している。

［堆積土］ B層に分けられ、いずれも自然堆積である。

［壁］ 15～30㎝残っており、比較的急角度で立ち上がる。

［床面］ 掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］ 主柱穴は認められない。

［貯蔵穴］南西隅で検出している。長径 85 ㎝、短径 54 ㎝ほどの不整楕円形で、深さ 9～22 ㎝である。堆積土は 4 層からなり、いずれも自然堆積である。

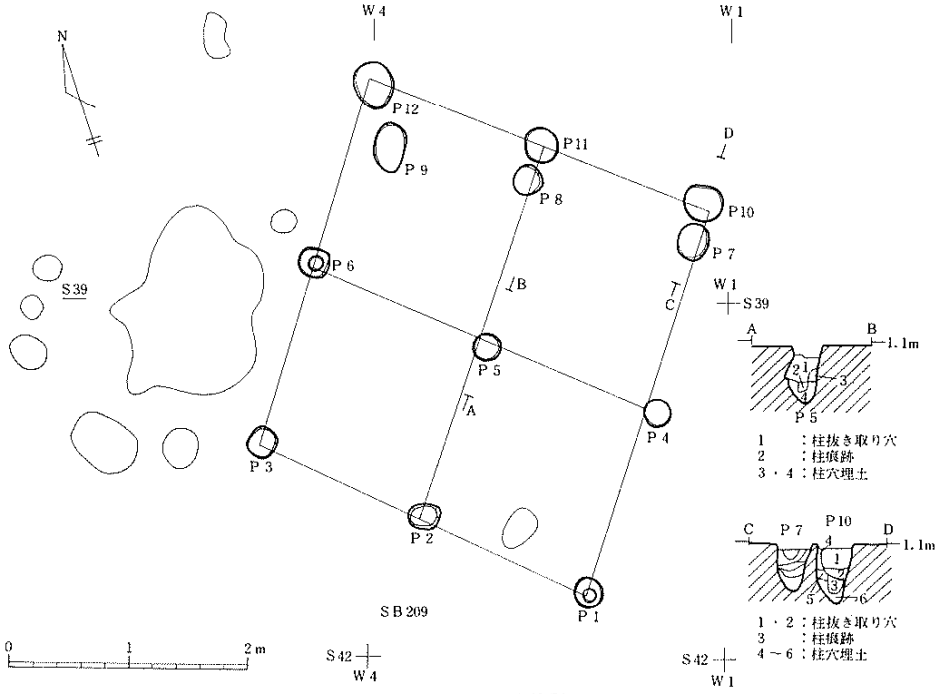
［出土遺物］床面から非ロクロ調整の土師器の甕・甑・坏がまとまって出土している。

②、掘立柱建物跡

ＳＢ209（第 55 図）

調査区中央部やや西寄りで検出した南北 2 間、東西 2 間の南北棟総柱建物跡である。柱穴は 9 箇所すべてを検出しており、径 23～40 ㎝ほどの円形または楕円形を呈する。深さは 30～50 ㎝残っており、埋土はオリーブ褐色砂質土を主体としている。柱は抜き取られているものもあるが、柱痕跡が認められるものでは径 10～16 ㎝ほどの円形である。

柱間寸法は、柱痕跡が不明な柱穴では柱位置を中央に想定すると、桁行きが西側柱列で南より約 1.5㎜・約 1.6㎜ で、総長約 3.1㎜、梁行きは北妻で西より約 1.5㎜・約 1.4㎜ で、総長約 2.9㎜ となり、バラツキがみられる。建物跡の方向は、西側柱列でみると真北に対して約 35 ° 東へ偏している。時期を特定できる遺物は出土していない。



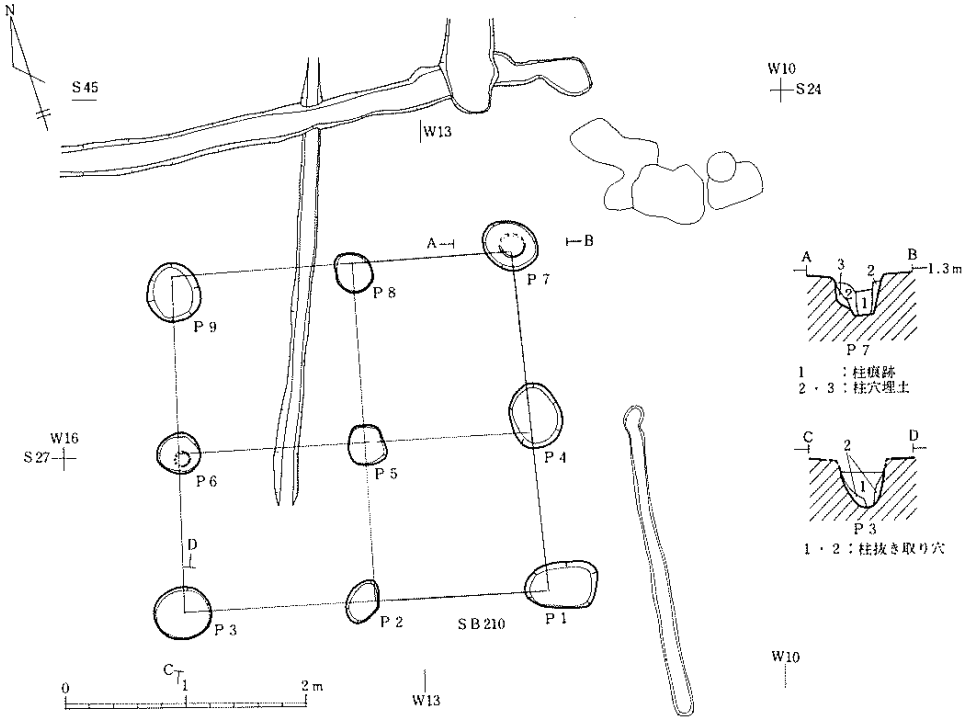
第55図　ＳＢ209建物跡

ＳＢ210（第 56 図）

調査区の北西部で検出した東西 2 間、南北 2 間の総柱建物跡である。柱穴は 9 箇所すべてを検出しており、径 25～48 ㎝ほどの円形または楕円形、長径 60 ㎝、短径 38 ㎝長楕円

形を呈する。深さは21～42㎝残っている。柱痕跡が認められるものと柱が抜き取られているものがあり、柱痕跡は径10～18㎝ほどの円形である。柱穴の埋土はにぶい黄褐色砂質土を主体としている。

柱間寸法は、柱痕跡が不明な柱穴では柱位置を中央に想定すると、西側柱列で北より約1.4m・約1.3m、総長約2.7m、北側柱列で西より約1.5m・約1.3m、総長約2.8mとなる。一方東側柱列の総長が約2.9m、南側柱列の総長が3.1mであるから、建物跡の平面形は多少歪んでいる。建物跡の方向は、西側柱列でみると真北に対して約18°東へ偏している。古墳時代とみられる非ロクロ調整の土師器の坏・甕の小破片が少量出土している。



第56図　ＳＢ210建物跡

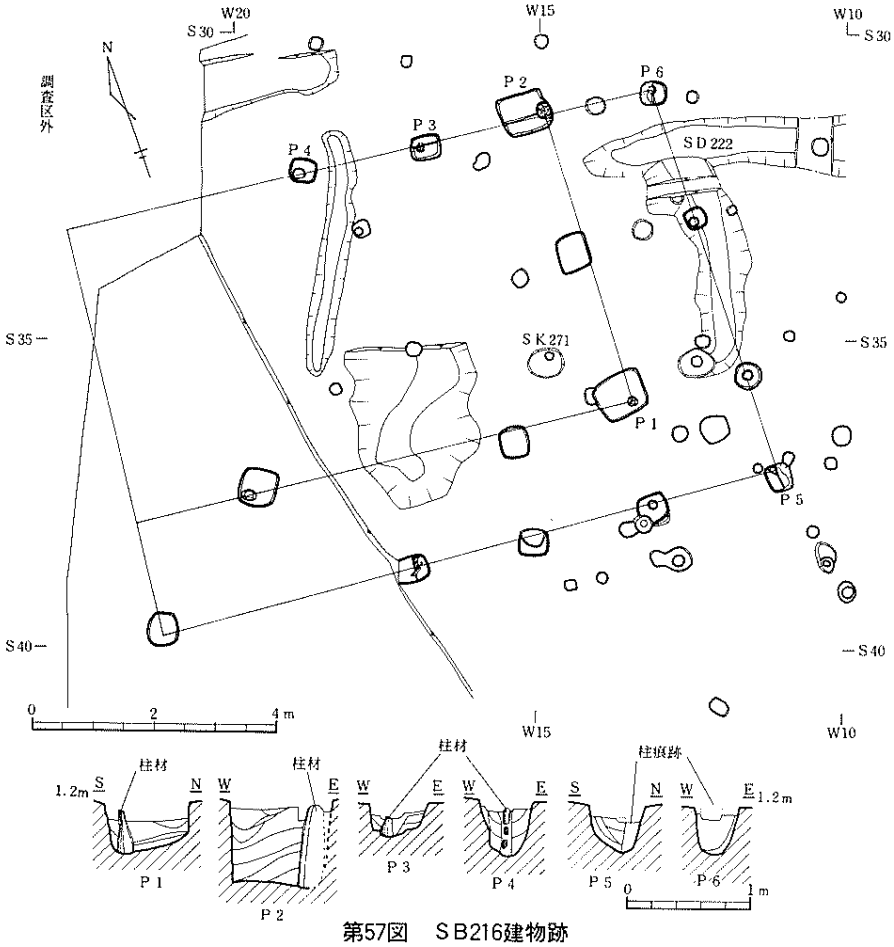
ＳＢ216（第57図）

調査区西端部中央で検出した東西5間、南北3間の南と東に廂を持つ東西棟建物跡である。今回の調査では西妻で南側柱列の柱穴を検出しただけであるが、1990年度の確認調査で身舎の西妻の柱穴3個を検出していることから本建物跡は東西が5間であることが判明している（1991：真山）。

柱穴は身舎で7箇所、廂で8箇所検出している。この中の身舎の5箇所で柱材が残存しており、その他5箇所の柱穴で柱痕跡を確認している。

柱穴は、大きさ、形状に多少バラツキが認められる。身舎では東妻南北両端の柱穴が一辺 0.7～0.8m 程の方形で最も大きく、それ以外は 0.4～0.5m 前後の方形、廂が一辺 0.5m 前後の方形・円形となっている。壁はほぼ垂直に掘られており、深さは最も良好な身舎の南東隅の柱穴で約 80 cm残っていたが、それ以外は 20～30 cm程で残存状況は良くない。埋土は、身舎・廂とも黄褐色砂質土小ブロック・小粒・細粒を含む黒褐色砂質土が主体である。柱は遺存していた柱核や柱痕跡からみると径 15～20cm ほどの丸太材とみられる。

柱間寸法は、身舎の桁行が南入側柱列では東より 2.05m・4.41m（2 間分）・不明、東から 3 間分の長さは 6.45m である。また北側柱列では東より 2.11m・2.04m・不明（2 間分）、東側 2 間分の長さは 4.14m である。以上から柱間寸法は 2.1m 前後とみられ、桁行総長が約 8.4m と推定される。梁行は東妻で総長 4.98m、柱間寸法は南より 2.62m・2.36m である。廂は南の出が東端で 1.56m、東端から西へ 1 間目で 1.69m である。東廂の出は南端で 2.08



第57図　ＳＢ216建物跡

m、北端で1.77mと、北で西へ偏している。方向は身舎の東妻でみると真北に対して約1°東へ偏している。

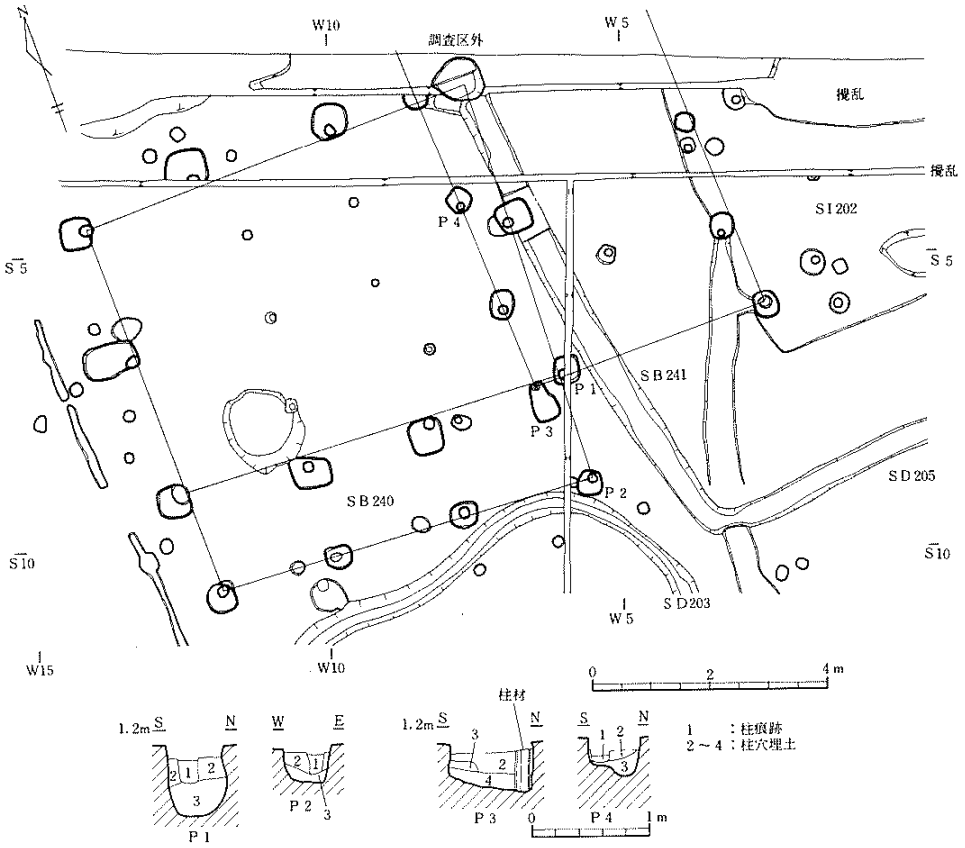
遺物は柱穴埋土から土師器の坏・甕の小破片が少量出土しているが、時期を特定できるものではない。

ＳＢ240（第58図）

調査区北端部中央で検出した東西3間、南北3間の南廂付の東西柱建物跡である。ＳＤ205溝と重複し、これより新しい。またＳＢ241建物跡とも重複しているが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。

柱穴は14箇所すべてで検出している。この中の身舎の1箇所で柱抜き取り穴を、それ以外の13箇所で柱痕跡を確認している。方向は南入側柱列でみると、真北に対して約1°東へ偏している。

柱穴は、身舎が一辺0.6～0.9m程の方形、一辺0.6m前後の正方形、廂が一辺0.5m前後



第58図　SB240・241建物跡

の不整方形となり、廂のものは身舎に比べて大きさが一回り小さい。またそれぞれ大きさ、形状に多少バラツキがある。壁はほぼ垂直に掘られており、深さは30～40㎝残っているだけで残存状況はあまり良くない。埋土は、身舎・廂とも黒褐色土や灰黄褐色砂質土小ブロック・小粒・細粒を含む黒色砂質土である。柱痕跡は径15～20㎝の円形である。

柱間寸法は、桁行が南入側柱列で東より2.46m・2.20m・2.29mで総長6.91m、南側柱列で東より2.28m・2.32m・2.02m、総長6.62mとなる。梁行は東妻で南より2.74m・約2.5mで総長約5.3m、廂の出は東端で1.82m、西端で1.75mと多少東で南に偏している。

遺物は柱穴埋土から時期の特定出来ない土師器の甕･坏の小破片が少量とP2から土錘1点が出土している。

ＳB241（第58図）

調査区北端部中央で検出した南北3間以上、東西1間の南北棟建物跡である。ＳＩ202住居跡、ＳB240建物跡、ＳＩ205と重複し、ＳＩ202よりも新しいが、ＳB240・ＳD205とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。

建物跡北半は調査区外で不明であるが、柱穴を7箇所で検出している。この中の南西隅では柱材が遺存しており、またそれ以外の4箇所で柱痕跡を確認している。方向は南妻でみると、ほぼ真北方向である。

柱穴は長辺0.7m、短辺0.5m前ほどの不整方形、径0.3～0.5mほどの円形・不整円形であり、形状・大きさにバラツキがある。壁はほぼ垂直に掘られており、深さは約30㎝残っているだけで残存状況はあまり良くない。埋土は黄褐色砂質土小ブロック・小粒・細粒を含む黒色砂質土である。また、西側柱列南端の柱穴では、埋立に灰白色火山灰の小粒やブロックが認められた。柱は遺存した柱材や柱痕跡からみると径15～20㎝ほどの丸太材とみられる。

柱間寸法は桁行が西側柱列で南より1.41m・1.81m・2.12mで、総長が5.34m以上、東側柱列で南より1.38m・1.98m・不明となり、桁行の柱間寸法は北側ほど長くなる傾向がみられる。梁行は南妻で総長4.45mである。

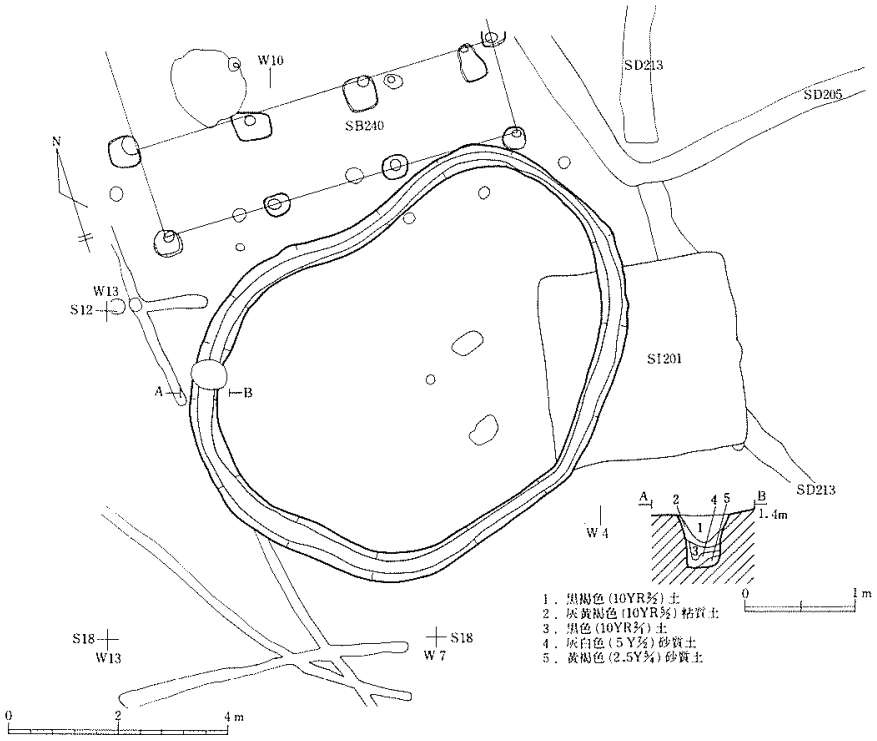
遺物は、いずれも破片資料であるが、土師器の甕・坏、須恵器の甕、須恵系土器坏が柱穴より少量出土している。

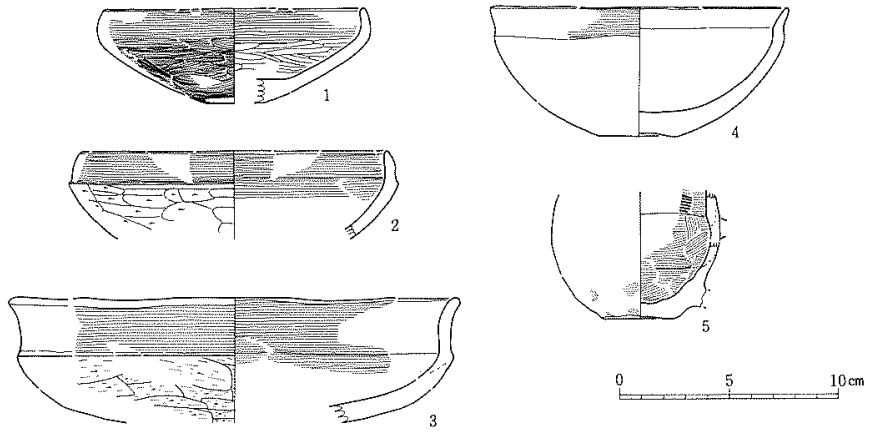
③、円形周溝

ＳD203（第59図）

調査区北西部で検出した円形周溝で、ＳＩ202住居跡の北側に位置する。

［重複］ＳＩ201住居跡と重複し、これより新しい。またＳB240建物跡とは近接していることから、時期差が考えられる。





番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 坏	4層	[口] ヨコナデ [体～底] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	(12.0)	–	(12.4)	(2.6)	4.3	A.B.C	1/5		44-1
2	土師器 坏	5～6	[口] ヨコナデ [体] ケズリ	[口～体] ヨコナデ	(13.9)	–	(15.0)	–	(4.0)	A.B.C.F	1/5	5層	
3	土師器 坏	5～6	[口] ヨコナデ [体] ケズリ	[口] ヨコナデ [体] 不明	(20.6)	–	(19.5)	–	(5.7)	A.B.C	1/8		
4	土師器 坏	5～6	[口] ヨコナデ [体～底] ナデ	[口～体] 不明	(13.6)	–	(13.2)	3.3	5.9	A.C	1/2		
5	土師器	3～5	[体] ハケメ→ナデ [底] ナデ	[体] ハケメ→ナデ	–	–	(7.7)	3.4	(6.0)	A.B.C.F	1/2		

第59図　ＳＤ203円形周溝・出土遺物

［平面形・規模］北側が多少南へくぼむ東西にやや長い不整円形を呈する。規模は東西約8.6m、南北約7.0mで、周溝の幅は24～64cm、深さは33～55cm残っていた。断面は縦長の逆台形を呈する。

［堆積土］5層に細分される。第1層は均質な黒褐色の自然堆積であるが、第2層から第5層までは堆積土の状況から人為的に埋めた可能性が考えられた。そのため第1層を除去した段階で、柱などの痕跡の有無の確認を行ったが、材を立て並べた様な痕跡を確実に捉えることはできなかった。

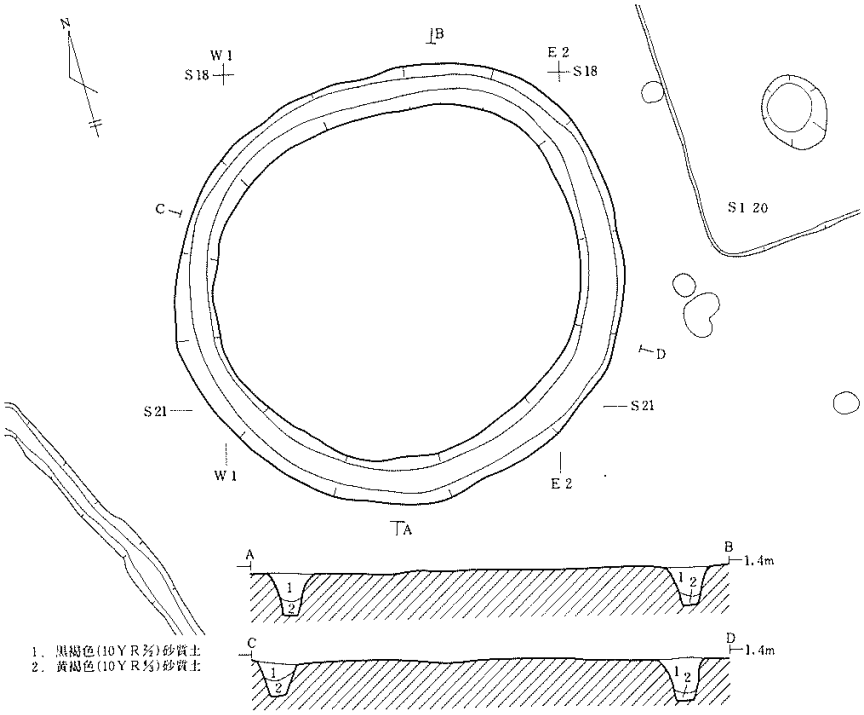
［出土遺物］堆積層の3～5層から非ロクロ調整の土師器の坏や須恵器のコップ型土器を模倣したと思われる土師器が出土している。なお、これらの遺物の大部分は、本来は本遺構が壊しているＳＩ201住居跡に伴うものである可能性が高いと考えられる。

ＳＤ211（第60図）

調査区区北半部のほぼ中央で検出した円形周溝である。

［平面形・規模］周溝を含めた全体は径約4.0mの円形をなす。周溝の幅は約40cmで、深さは30～40cm残っていた。断面は縦長の逆台形を呈する。

［堆積土］堆積土は2層で、第1層は自然堆積であるが第2層は人為的に埋め戻された可



第60図　ＳＤ211円形周溝

能性も考えられる。

［出土遺物］堆積土から非ロクロ調整の土師器が出土しているが、時期を特定できるものは出土していない。

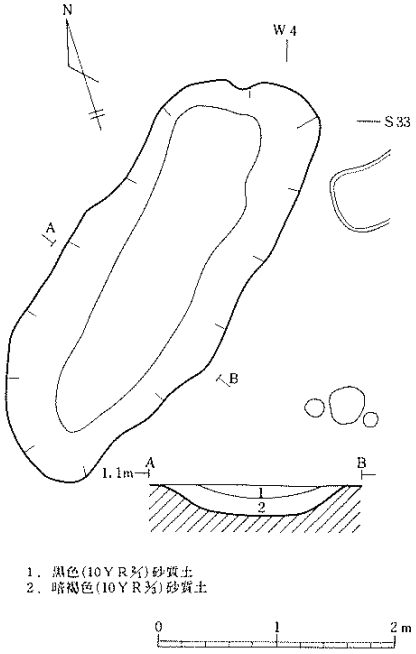
④、土壙

ＳＫ212（第61図）

調査区中央部付近で検出した土壙で、ＳＢ209建物跡の北側に位置している。長径3.9m、短径1.5m ほどの歪んだ長楕円形をなし、深さは 10～30 ほど残っていた。堆積土は2層でいずれも自然堆積である。遺物は時期を特定できるものは出土していない。

ＳＫ217（第62図）

調査区中央部付近で検出した土壙で、前述のＳＫ212 土壙の北西に近接している。長径1.5m、短径 0.8m の不整な楕円形を呈し、深さは 20～30cm 残っていた。堆積土は4層でいずれも自然堆積である。遺物は堆積土中からロクロ調整の土師器の甕が出土している。



第61図　ＳＫ212土壙

ＳＫ218（第63・64図）

調査区中央部付近で検出した土壙で、前述のＳＫ217 土壙の東に位置している。長径1.1m、短径0.6m の歪んだ長楕円形をなし、深さは12～25 cm残っていた。堆積土は6層で、いずれも自然堆積である。遺物は堆積土の第1層から非ロクロ調整の土師器の坏の破片が出土している。

ＳＫ228（第63・64図）

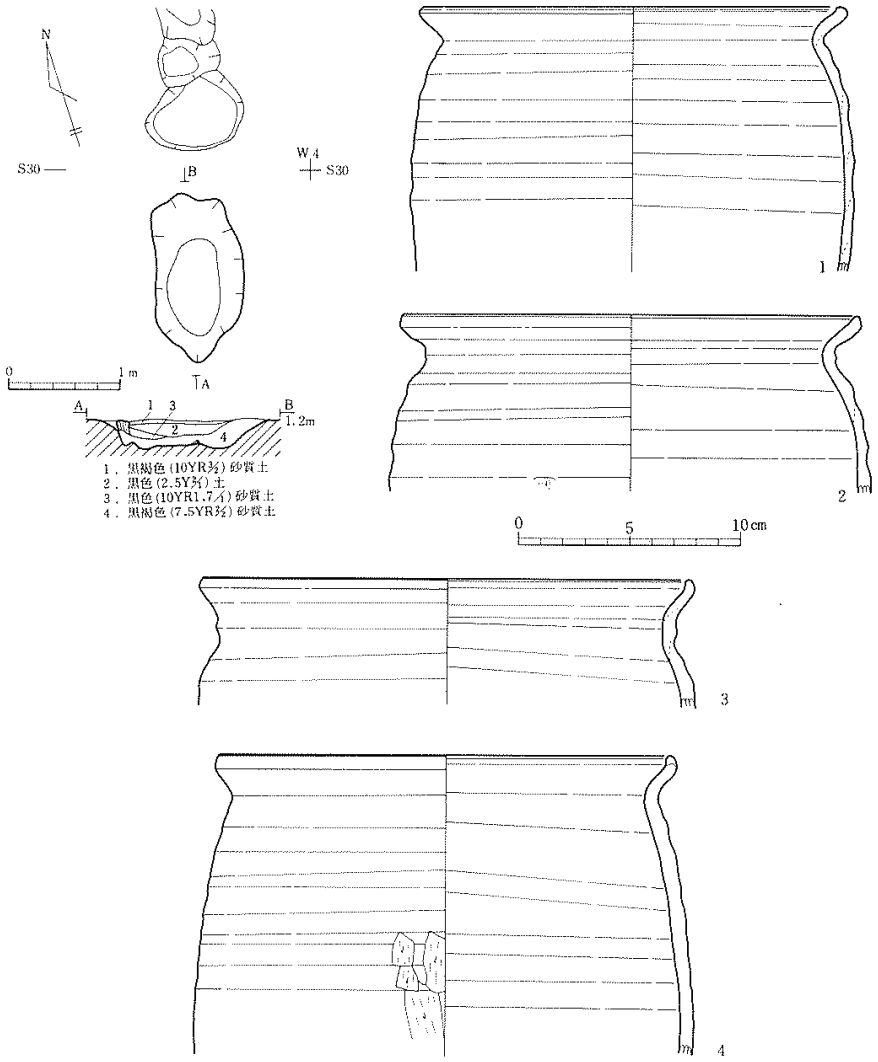
調査区北東部で検出した土壙で、ＳＤ302 河川跡から約1.3m 西側に位置している。長辺2.2m、短辺1.8m ほどの歪んだ方形を呈し、深さは 40～50 cm残っていた。ＳＩ231・244 住居跡、ＳＫ248 土壙と重複し、いずれよりも新しい。堆積土は 6 層でいずれも自然堆積である。遺物は堆積土中から須恵系土器が出土しており、中には墨書土器もある。また、径2～3 cm・長さ数 10 cmの樹皮の枝と思われるものが土器と共に出土している。

ＳＫ239（第63・64図）

調査区東半部中央で検出した土壙である。西半分を失っているが、南北約1.4m、東西1.1m 以上の不整形を呈し、二段に掘り込まれている。深さは浅いところで 4～11 cm、深いとこ

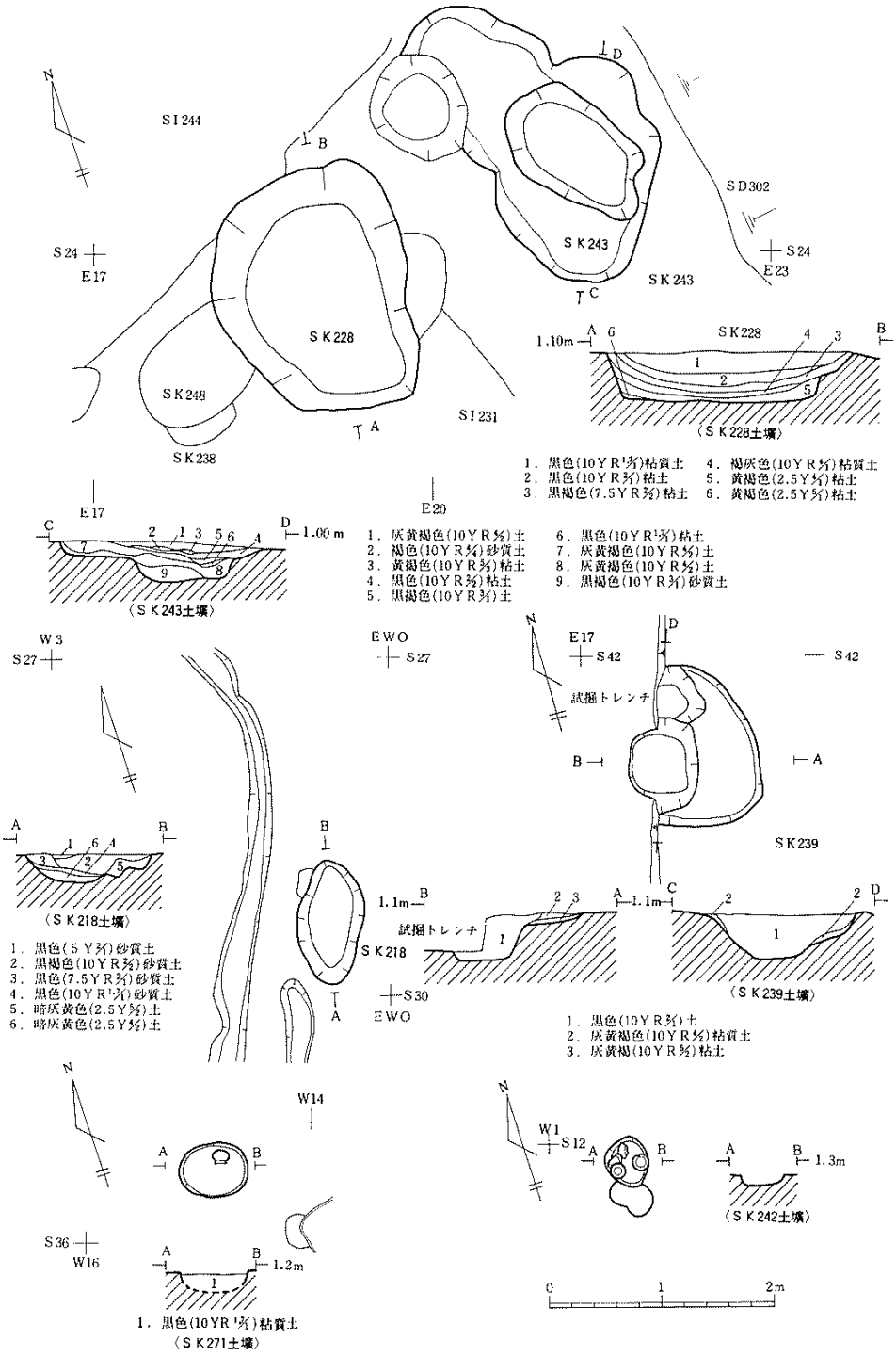
ろで30～40㎝残っていた。堆積土は3層でいずれも自然堆積である。遺物は底面と堆積土から非ロクロ調整の土師器の甕・鉢が出土している。

ＳＫ242（第63・64図）

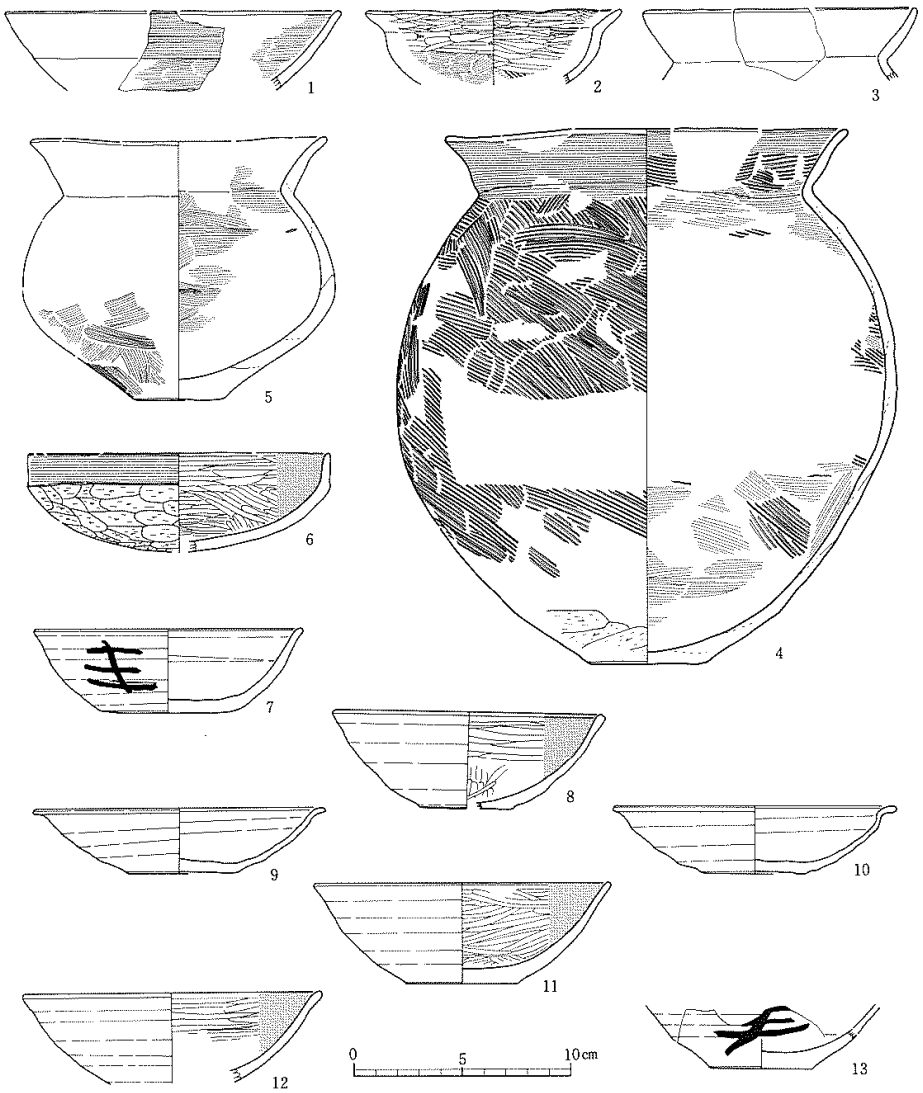


巻号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	胴径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	1層	[口～体] ｃｆｃｋｆ	[口～体] ｃｆｃｋｆ	(22.0)	(20.4)	(22.4)	－	(5.6)	A.B.C.F	2/9		
2	土師器 甕	底面	[口～体] ｃｆｃｋｆ	[口～体] ｃｆｃｋｆ	(20.6)	(18.4)	(21.8)	－	(8.0)	A.B.F	1/7		
3	土師器 甕	1層	[口～体] ｃｆｃｋｆ	[口～体] ｃｆｃｋｆ	(19.3)	(17.3)	(20.0)	－	(12.0)	A	2/9		
4	土師器 甕	1層	[口～体] ｃｆｃｋｆ+ｘｍ	[口～体] ｃｆｃｋｆ	(20.8)	(19.2)	(22.6)	－	(13.6)	A	2/9		

第62図　ＳＫ217土壙・出土遺物



第63図　SK218・228・239・242・243・271土壙



番号	種別	出土遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	残存	分類	備考	写真図版
1	土師器 坏	SK218・1層	[口～体] ヨコナデ→ナデ	[口～体] ナデ	(15.5)	–	(3.7)	A.B.C.F	一部			
2	土師器 鉢	SK239・堆積土	[口] ハケ→ミガキ [体] ナデ	[口] ハケ→ミガキ	(11.8)	–	3.4	B.C	一部			
3	土師器 甕	SK239・堆積土	[口] 不明	[口] 不明	(12.6)	–	(3.4)	A.B.C	一部			
4	土師器 甕	SK239・床面	[口] ハケ→ヨコナデ [体] ハケ→タタキ	[口] ハケ→ハケ→ナデ [体] ハケ→ナデ	18.6	5.2	24.7	A.B.C	2/3			
5	土師器 壺	SK271・1層	[口] 不明 [体] ナデ	[口] ナデ [体] ナデ	(13.7)	4.1	12.2	A.B.C.F	1/3			
6	土師器 坏	SK272・1層	[口～底] ヨコナデ→ケズリ	[口～体] ミガキ 黒色処理	(14.0)	–	(4.6)	A.B.C	3/4			
7	須恵系土器坏	SK228・5層	ロクロナデ [底] 回転糸切無調整	ロクロナデ (ロクロ目が不明瞭)	12.4	6.2	3.9	B.E.F	完形	Ⅱa	墨書「王」	
8	土師器 坏	SK228・2層	ロクロナデ [底] 回転糸切無調整	粗ミガキ 黒色処理	(12.6)	(4.3)	4.5	B.C.F	一部	AⅡa		
9	須恵系土器坏	SK242・堆積土	ロクロナデ [底] 回転糸切無調整	ロクロナデ (ロクロ目が不明瞭)	13.0	4.8	3.2	A	4/5	AⅡa		
10	須恵系土器坏	SK242・堆積土	ロクロナデ [底] 回転糸切無調整	ロクロナデ (ロクロ目が不明瞭)	13.4	5.0	3.2	A	4/5	Ⅱc		
11	土師器 坏	SK242・堆積土	ロクロナデ [底] 回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	13.7	5.2	4.7	A.C	3/5	Ⅱc		
12	土師器 坏	SK243・1層	ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	13.8	–	–	A	1/3	AⅡa		
13	須恵系土器坏	SK243・1層	ロクロナデ [底] 回転糸切無調整	ロクロナデ	–	2.6	–	A.C	1/3		墨書「口」	

第64図　SK228・239・242・243・271・272土壙出土遺物

調査区北半部中央で検出した土壙で、ＳＩ201 住居跡の東側に位置している。径約 40 ㎝の不整円形をなし、深はさ約 10 ㎝残っていた。堆積土は 1 層で自然堆積である。遺物は底面からロクロ調整の土師器の坏 2 点と須恵系土器 2 点が正位で出土している。

ＳK243 土壙（第 63・64 図）

調査区北東部で検出した土壙である。ＳK228 土壙の東側でＳD302 河川跡の落ち際に位置している。長軸約 2.9㎜、短軸約 1.7㎜ の歪んだ瓢箪形をなし、底面は二段になっており深さは深いところで約 40㎝ 残っていた。堆積土は 9 層に分けられ、第 1 層から第 7 層までが自然堆積で、第 8・9 層は黄褐色粘土の大・小ブロックを多く含むことから、人為的な堆積土の可能性もある。

遺物は内黒のロクロ調整の土師器と須恵系土器が出土しており、第 4 層からは漆の皮膜が出土している。

ＳK271（第 63・64 図）

調査区西端部中央で検出した小土壙で、ＳB216 身舎南東隅の柱穴の北西に近接している。長径約 60 ㎝、短径約 50㎝ の楕円形をなす。深さは 15 ㎝以上で、堆積土は 1 層だけ確認しており自然堆積である。遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器の鉢が 1 点出土している。

ＳK272（第 50・64 図）

調査区北東部で検出した土壙で、ＳＩ244 住居跡のカマドすぐ東側に位置する。東半分が失われているが、東西が 1.0㎜ 以上、南北が 0.7㎜ 以上の楕円形をなすとみられる。深さは約 30 ㎝残っていた。堆積土は 2 層でいずれも自然堆積である。

遺物は堆積土の第 1 層から非ロクロ調整で内黒の土師器の坏が 1 点出土している。

⑤、溝跡

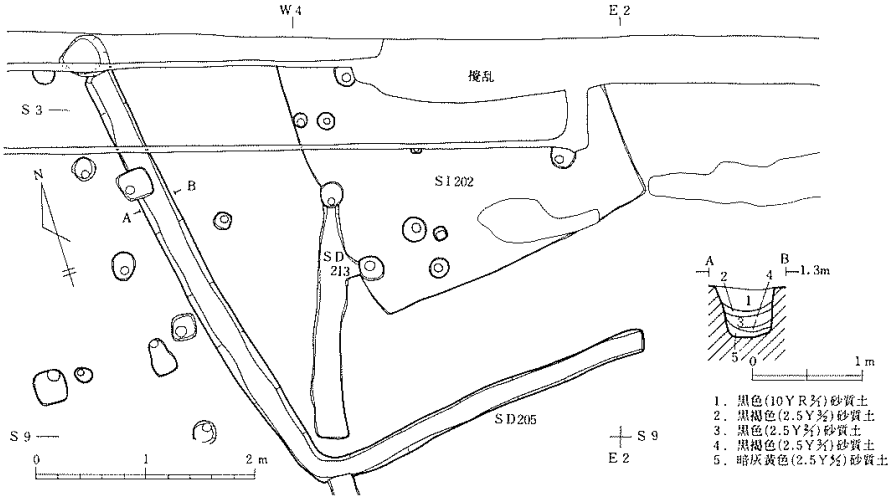
ＳD205（第 65 図）

調査区北端部中央付近で検出したＬ字状の溝で、ＳＩ202 住居跡の西・南を取り囲むように巡る。ＳB240・241 建物跡、ＳD213 溝と重複しこれより古い。

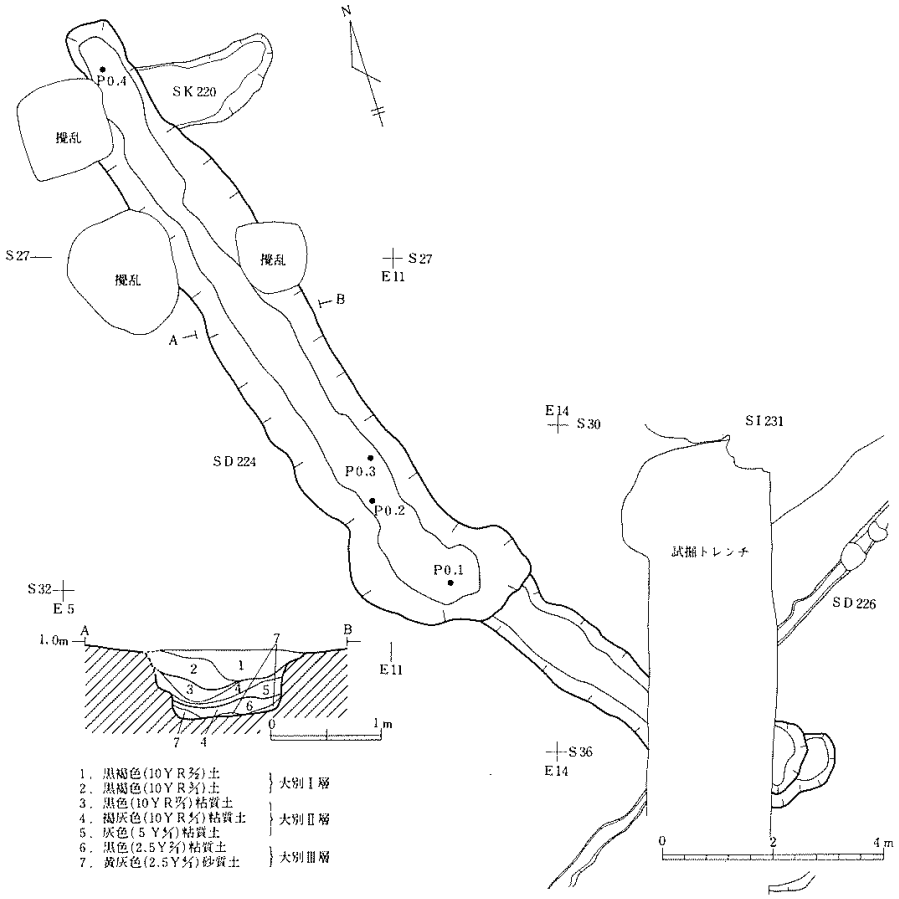
南北溝部分は約 8.6㎜ 検出しているが、北側はさらに調査区外へ続く。東西溝部分は東端部が削平のため途切れているが約 6.4㎜ 検出している。

幅は南北・東西とも約 40～60 ㎝で、底面は屈折部で一旦浅くなるがほぼ平坦である。深さは 6～40 ㎝残っていた。堆積土は 5 層でいずれも自然堆積である。方向は南北溝部分でみると真北に対して約 5°西へ偏している。

遺物は、堆積土中から非ロクロ調整の土師器が少量出土しているが、時期を特定できるものではない。



第65図　ＳＤ205溝

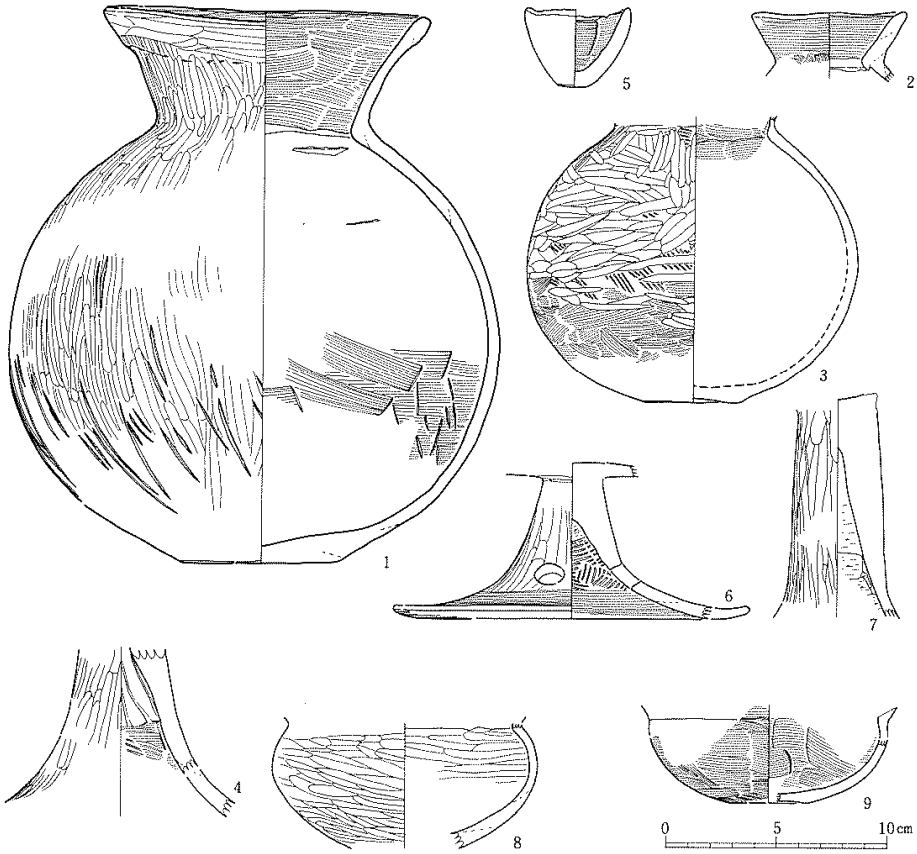


第66図　ＳＤ224溝

ＳＤ224（第66～68図）

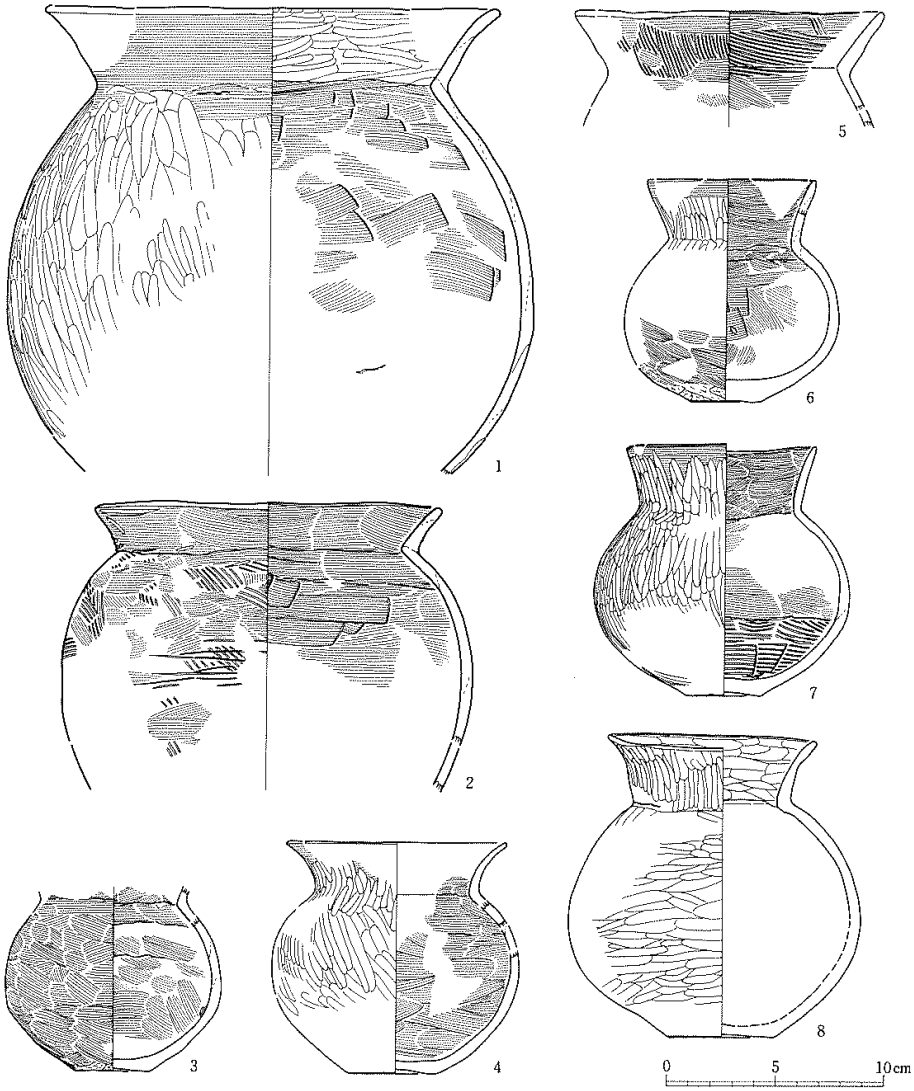
調査区東半部の中央やや北寄りで検出した溝で、ＳＤ302河川跡の西側約13mに位置する。ＳＤ220溝と重複しこれよりも古い。

調査区内で全体形を確認している。長さ約19.8m、幅は0.9～2.1mで、深さは北側部分の約13mまでが33～77cmと一段深くなっており、それ以南は4～15cmである。方向は真北に対して約24°西へ偏している。堆積土は7層からなり、いずれも自然堆積土である。



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	胴径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 壺	1層	[口] ナデ(ミガキ) [体] ミガキ [底] ナデ	[口] ナデ [体] ヘラナデ	14.8	9.6	22.2	(7.2)	25.3	A.B.D.E	7/10	2個	46-8
2	土師器 壺	1層	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	(7.0)	(4.9)	－	－	(3.1)	A.E.F	1/4		
3	土師器 壺	床面	[体] ハケ→ナデ→ミガキ→ハケ→ナデ [底] ナデ	[体] ナデ	－	7.2	15.0	4.5	(13.1)	A.B.C.E.F	1/1		46-3
4	土師器 高杯	1層	[脚] ハケ→ミガキ	[脚] ヘラナデ→ハケ	－	4.0	－	－	(3.0)	A.B.F	2/3		
5	土師器 坏	1層	[口～体] ナデ [底] ナデ	[口～体] ヨコナデ	4.7	－	－	1.3	3.6	A.B.E	1/1		
6	土師器 高杯	床面	[脚] ナデ→ヨコナデ	[脚] ナデ→ハケ→ヨコナデ	－	2.7	－	(18.2)	(7.1)	A.B.C.E	1/3	Po.1	46-4
7	土師器 高杯	1層	[脚] ミガキ	[脚] ナデ	－	3.5	－	4.6	(10.2)	A.B.C	1/1		46-5
8	土師器 鉢	1層	[体] ミガキ	[体] ミガキ	－	(10.6)	(12.0)	－	(5.6)	A.B.C.E.F	1/3		
9	土師器 鉢	1層	[体] ハケ→ナデ→ナデ [底] ナデ	[体] ナデ	－	(10.8)	(10.9)	(3.4)	(4.5)	A.B.C	1/5		

第67図　SD224出土遺物（1）



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ミガキ [体] ヘラナデ	(21.0)	(16.2)	(24.4)	–	(21.7)	A.B.C.E	1/5	Po.4	45-12
2	土師器 甕	床面	[口] ハケメ→ヨコナデ+ナデ [体] ハケメ→ナデ	[口] ヨコナデ+ナデ [体] ヨコナデ+ナデ	(16.0)	(13.8)	(19.0)	–	(13.4)	A.B.C.D	1/4	Po.3	
3	土師器 壺	床面	[体] ヨコナデ+ナデ+ヘラケズリ [底] ヘラケズリ	[体] ヘラケズリ+ナデ	–	(6.8)	(10.0)	3.5	(8.6)	A.B.C.E.G	5/8		46-2
4	土師器 壺	2層	[口] ヨコナデ [体] ミガキ [底] ナデ	[口] ナデ [体] ナデ	(10.2)	7.6	11.4	4.0	10.7	A.B.C.E.F.G	7/12		45-11
5	土師器 甕	2層	[口] ヨコナデ→ハケメ [体] ナデ	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ハケメ→ナデ	(14.2)	(11.1)	–	–	(4.6)	A.B.C	1/6		
6	土師器 壺	2層	[口] ヨコナデ→ミガキ [体] ミガキ+ナデ→ヘラケズリ	[口] ナデ [体] ヘラナデ	(7.8)	6.1	(9.5)	3.2	10.3	A.B.C	3/5		46-1
7	土師器 壺	床面	[口] ヨコナデ [体] ミガキ [底] ナデ	[口] ナデ [体] ナデ→ハケメ	9.2	7.5	11.7	3.4	11.7	A.B.C.E.F	1/1	Po.2	46-6
8	土師器 壺	2層	[口] ミガキ [体] ヘラナデ+ハケメ→ミガキ [底] ナデ	[口] ナデ [体] ヘラナデ	9.6	7.2	13.5	4.8	14.1	A.B.C.F	1/1		46-7

第68図　SD224出土遺物（2）

遺物は1・2層中・3層上面と底面から非ロクロ調整の土師器が出土している。1・2層・3 層上面出土のものには、甕・鉢・高坏・壺が、また底面出土のもには甕・高坏・壺がある。

⑥、水田跡（第69・70図）

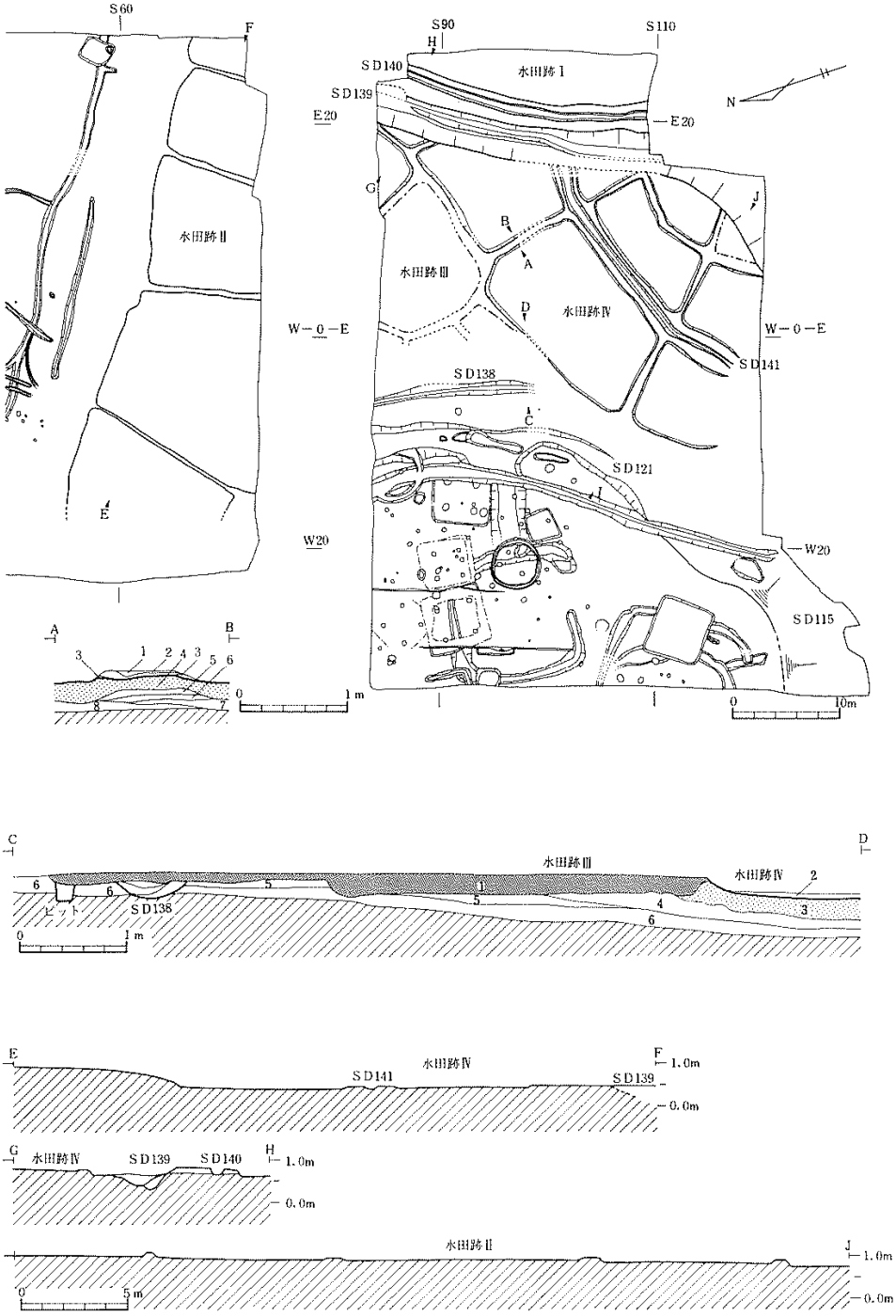
A区東半部からB区南端部にかけて4時期の水田跡（I～IV）を検出した。水田はA・B区の西側の微高地から、A区の南端部を東西に延びる河川跡へとゆるやかに続く低地に作られている。

A区では、道路建設直前の旧水田耕作土（第1層）を除去後、調査区東側の2a層上面で水田跡Iの擬似畦畔とSD139・SD140溝を検出した。調査区北側中央部では耕作土に10 世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰をブロック状に含む水田跡IIIの擬似畦畔を検出し、この水田は南東部には広がらないことを確認したが、西側への広がりを捉えることはできなかった。調査区南東部では、3 層除去後に灰白色火山灰に覆われた水田跡IVの畦畔とSD141溝を検出した。

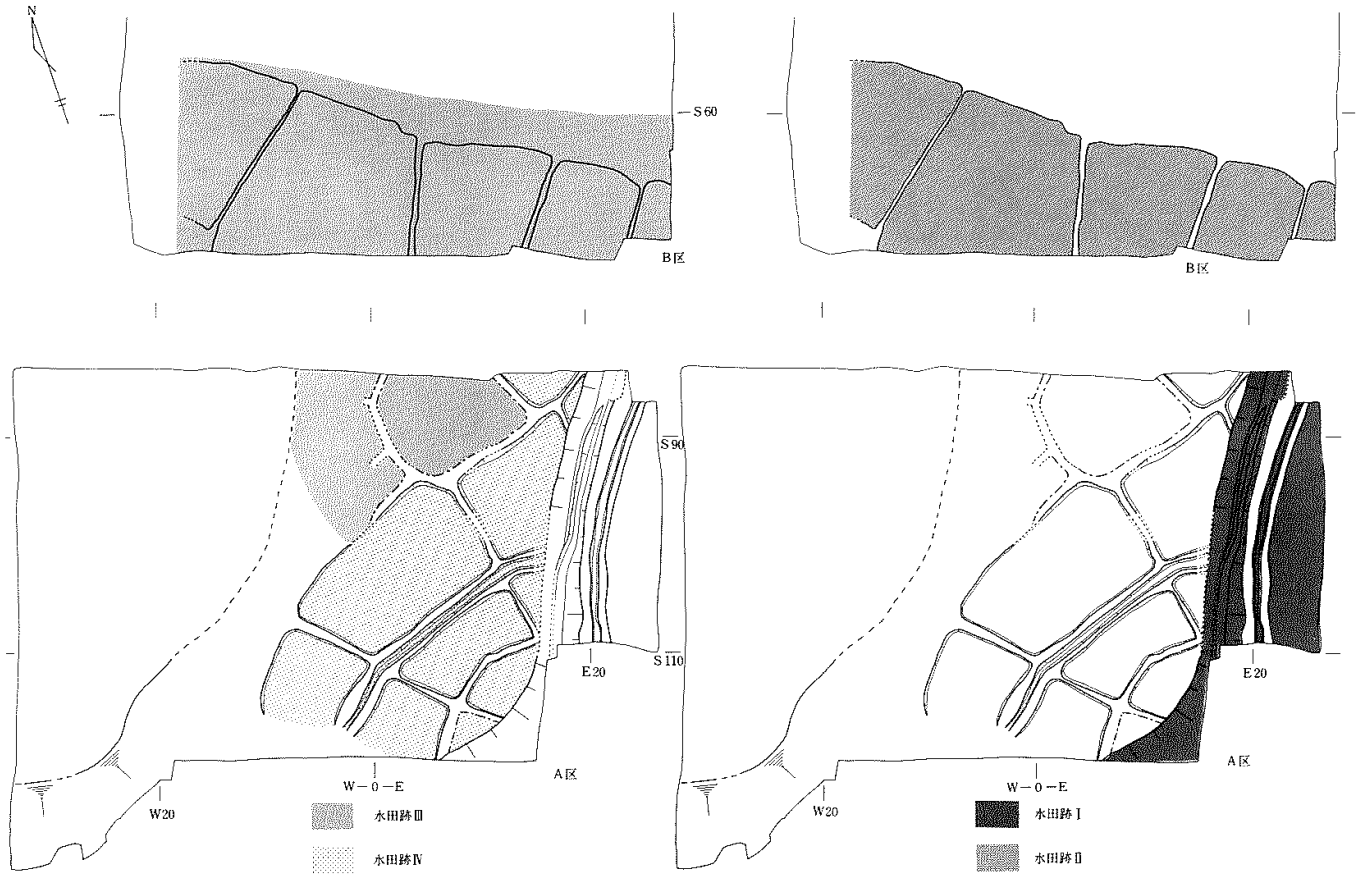
B区では、3 層を耕作土とする水田跡IIの擬似畦畔を検出し、また、水田跡IIの下にA区の水田跡IIIに対応すると思われる灰白色火山灰をブロック状に含む水田の耕作土があることを確認した。断面観察によって、この水田跡の擬似畦畔が水田跡IIの擬似畦畔とほぼ同じ位置にあることを部分的に確認したが、時間的な制約により全面にわたる擬似畦畔の把握は行っていない。

次に重複関係であるが、A区では水田跡IIIがSD121溝とSD138溝と重複し、いずれも水田の方が新しい。さらに、水田跡IVがSD139と重複し、SD139が水田跡IVより新しい。遺物は、耕作土中から古墳時代から平安時代にかけての土器片が出土している。なお、旧水田面の標高はA区の西側が1.1m前後、東側が1.0m前後、B区の西側が1.2m前後、東側が1.1m前後であった。以下、各時期毎に説明していく。

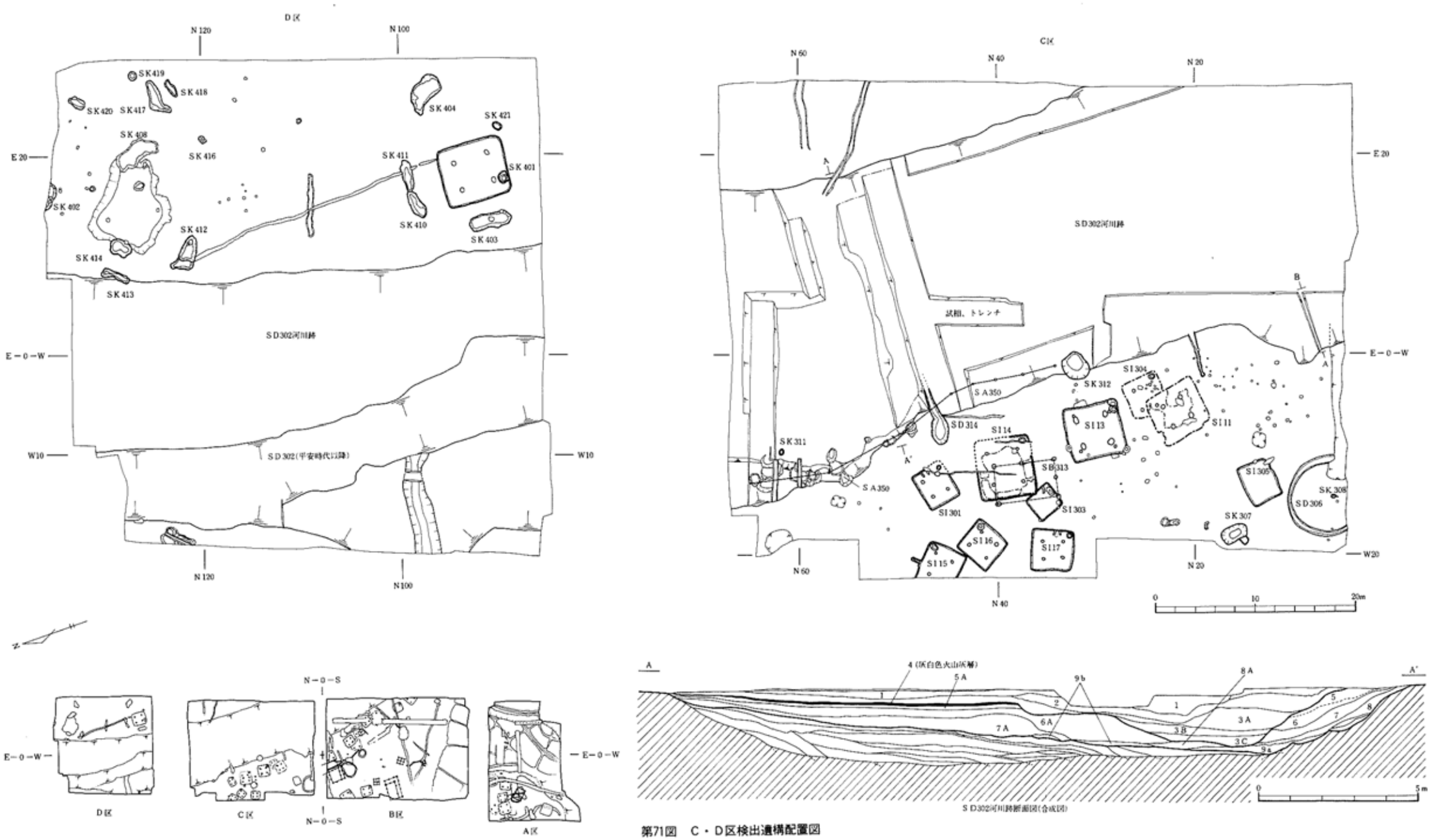
［水田跡I］2a層上面で平行する2本の擬似畦畔とSD139・SD140溝を検出した。検出面の標高は0.8m前後である。2a層はA区の南東部に広く認められ、水田はSD139の東西に作られていたものと考えられるが、水田に伴う遺構を確認できたのは東端部のみであった。擬似畦畔は真北から20～30°東に偏しており、やや湾曲しながら東北東に伸びてゆく。西側の擬似畦畔の幅は上幅で80～168cm、東側の擬似畦畔が60～86cmであった。西側の擬似畦畔の方がよりしっかりしたものであることがわかる。水田はさらに調査区の東側に広がっているため、水田1枚の面積・形状は不明である。SD139は擬似畦畔の西側を平行して伸びており、南端部で西よりに曲がる。また、SD140は2本の擬似畦畔に挟まれた溝で、いずれも水田への給排水のためのものと考えられる。SD139は幅が3.0～3.4m、深さ



第69図　A・B区水田平面図・断面図・エレベーション



第70図　A・B区水田模式図



第71図　C・D区検出遺構配置図

は 60 ㎝前後であった。ＳＤ140 は幅が 51～92 ㎝、深さが 4～17 ㎝であった。

［水田跡Ⅱ］Ｂ区の南端部のＡ区とＢ区の間に挟まれた低地にあり、3 層を剥いだ際に、ほぼ東西に並ぶ 5 枚の水田跡を検出した。Ａ区とＢ区の間に挟まれた低地にある。3 層を耕作土としており、下面には凹凸が認められた。擬似畦畔は真北から 20～50°東に偏しており、おおよそ北東に伸びる。擬似畦畔の上幅は 20～70 ㎝ほどで、西側で検出した擬似畦畔が他に比べて細い。水田 1 枚の面積・形状は南半部が未調査のために不明であるが、確認できる部分の状況を見てみると、北辺の長さは 8～12㎜、東辺の長さは約 16㎜である。各水田の耕作土下面の標高は、西側の水田から順にみていくと、1.0㎜、0.9㎜、0.9㎜、0.8㎜、0.8㎜となり、西から東へと低くなっていることがわかる（第 69 図）。

［水田跡Ⅲ］Ａ区の北側中央部で、耕作土に灰白色火山灰をブロック状に含む水田の擬似畦畔を検出した。確認面の標高は 0.9㎜前後である。東側は水田跡Ⅰにより壊されており、また、南東部の低くなっている部分には広がらないことを確認した。なお、調査時の認識不足のため、西側への広がりを捉えることができず、擬似畦畔の記録は平面と一部断面で確認したに留まった。擬似畦畔の幅は 60～100 ㎝ほどで、水田 1 枚の面積と形状については不明だが、方形ないしは台形を呈するものと思われる。Ｂ区南端部の水田跡Ⅱの下で確認した水田跡も、耕作土に灰白色火山灰をブロック状に含むこと、検出した標高もほぼ同じことからこの時期のものと考えられる。

［水田跡Ⅳ］Ａ区の南東部で、灰白色火山灰に覆われた水田跡 10 枚とＳＤ141 溝を検出した。5 層を耕作土ととしており、下面にはあまり顕著ではないが乱れが認められた。畦畔は、上幅が 20～150 ㎝、下幅が 50～180㎝と値に幅がある。畦畔の高さは水田面から 2～17 ㎝であった。水田の平面形は、全体の状況を把握できるものが 2 枚あり、それらはいずれも方形を基調とし、1 つは長辺が 14～17㎜、短辺が 9～11㎜、面積は 150～160 ㎡で、もう 1 つは長辺が 9～13㎜、短辺が 5～6㎜、面積が 50～60 ㎡であった。水田は傾斜に対して平行に 3～4 列細長く並んでおり、それらの水田が形成する細長い列の間に給排水のものと思われるＳＤ141 が伸びている。ＳＤ141 は幅 36～120㎝、深さは 7～14 ㎝であった。各水田面の標高は、水田 1 が 0.8㎜前後、水田 2 が 0.7㎜前後、水田 3 が 0.6㎜前後、水田 4 が 0.5㎜前後、水田 5 が 0.4 前後、水田 6 が 0.4㎜前後、水田 7 が 0.5㎜前後、水田 8 が 0.5㎜前後、水田 9 が 0.5㎜前後、水田 10 が 0.5㎜前後であった。東西のエレベーションを見てもわかるように、ＳＤ141 を挟んで 2 列に並ぶ水田が低く、また、さらに南側のものが最も低いことがわかる。

（3）、Ｃ区

Ｃ区で検出した遺構には竪穴住居跡 10 軒・掘立柱建物跡 1 棟・柱列 1 条・円形周溝 1 基・河川跡の他、多数の土壙・溝・ピットがある。

①、竪穴住居跡

ＳＩ11（第72・74図）

調査区南西部で検出した住居跡で、調査区の中央部から東半部にかけて南北に流れるＳＤ302河川跡の西側約5㎜に位置する。掘り方埋土の範囲を確認できただけである。

［重複］ＳＩ304住居跡と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］南辺が約5.0㎜、東辺が約5.5㎜の方形を呈する。住居跡の方向は東辺でみると真北に対して約12°西に偏している。

［床面］掘り方埋土を床面としていたと考えられる。

［柱穴］住居の対角線上に位置する4箇所で主柱穴を検出している。いずれも柱が抜き取られており、柱穴はほとんどが柱抜き取り穴によって大きく壊されている。柱抜き取り穴は径35～70㎝の不整円形・方形と様々で、深さは約50㎝残っていた。

［出土遺物］掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器の甕が1点出土している。

ＳＩ13Ａ・Ｂ（第73・75図）

調査区中央部やや南西よりで検出した住居跡で、前述のＳＩ11住居跡の北側に位置する。同じ床面を利用し、柱の位置のみを変えて一度建て替えられている（A➡ B）。

［重複］ＳK315・319土壙と重複し、いずれよりも古い。

［平面形・規模］南辺が約5.3㎜、東辺が約5.7㎜の方形を呈する。住居跡の方向は、西辺でみると真北に対して約6°東へ偏している。

［堆積土］3層に細分され、いずれも自然堆積である。

［壁］10～20㎝残っており、比較的急角度で立ち上がる。

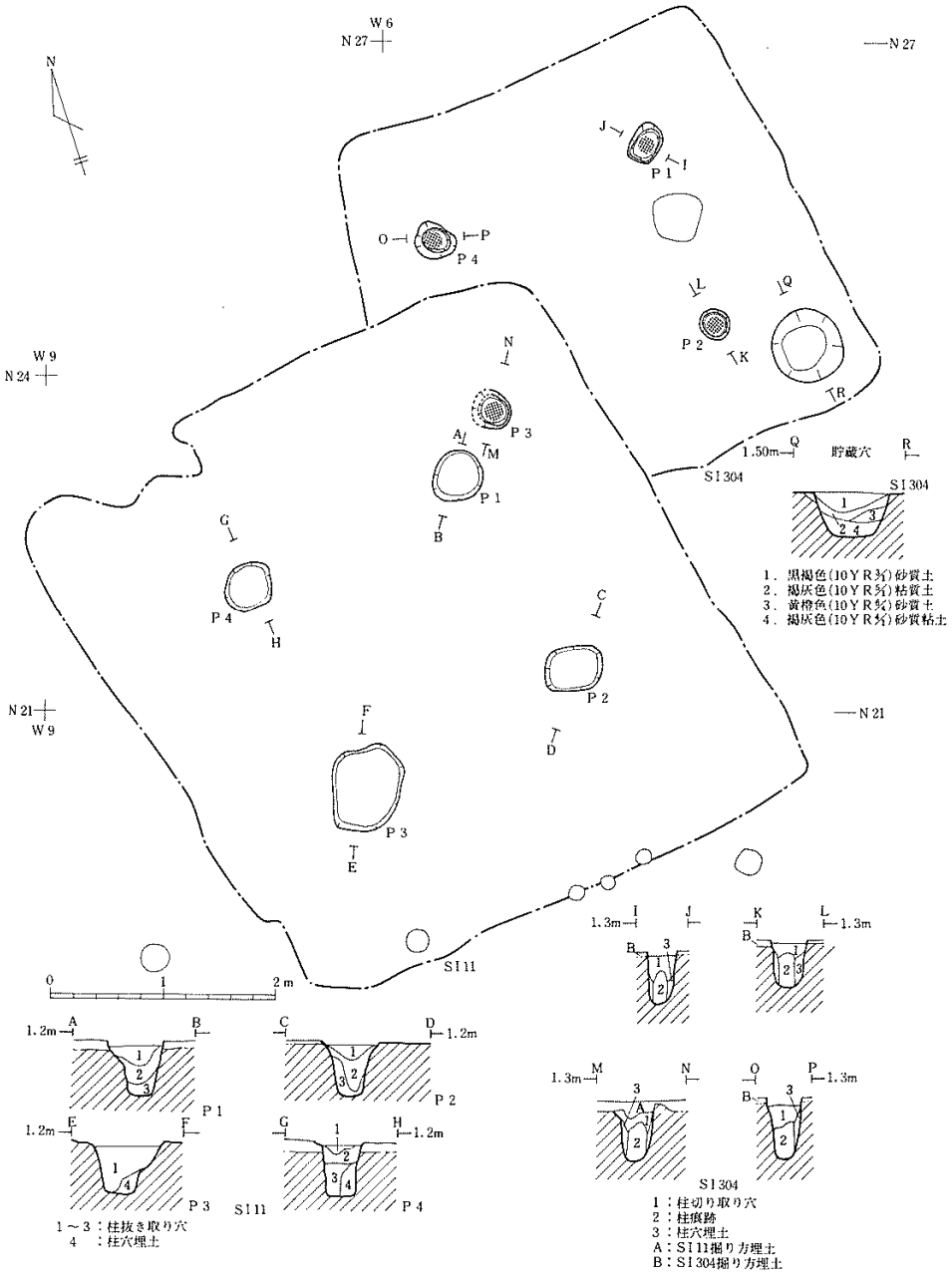
［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］住居の対角線上に位置する4箇所でＡ・Ｂの主柱穴をそれぞれ検出している。内側の大きい主柱穴に伴う貯蔵穴が、外側の小さい主柱穴に壊されていることから、前者が古く後者が新しいと考えられる。古い柱穴に伴う住層をＳＩ13Ａ住居跡、柱穴をP1～4、新しい柱穴を伴うものをＳＩ13Ｂ住居跡、柱穴をP1'～4'とする。

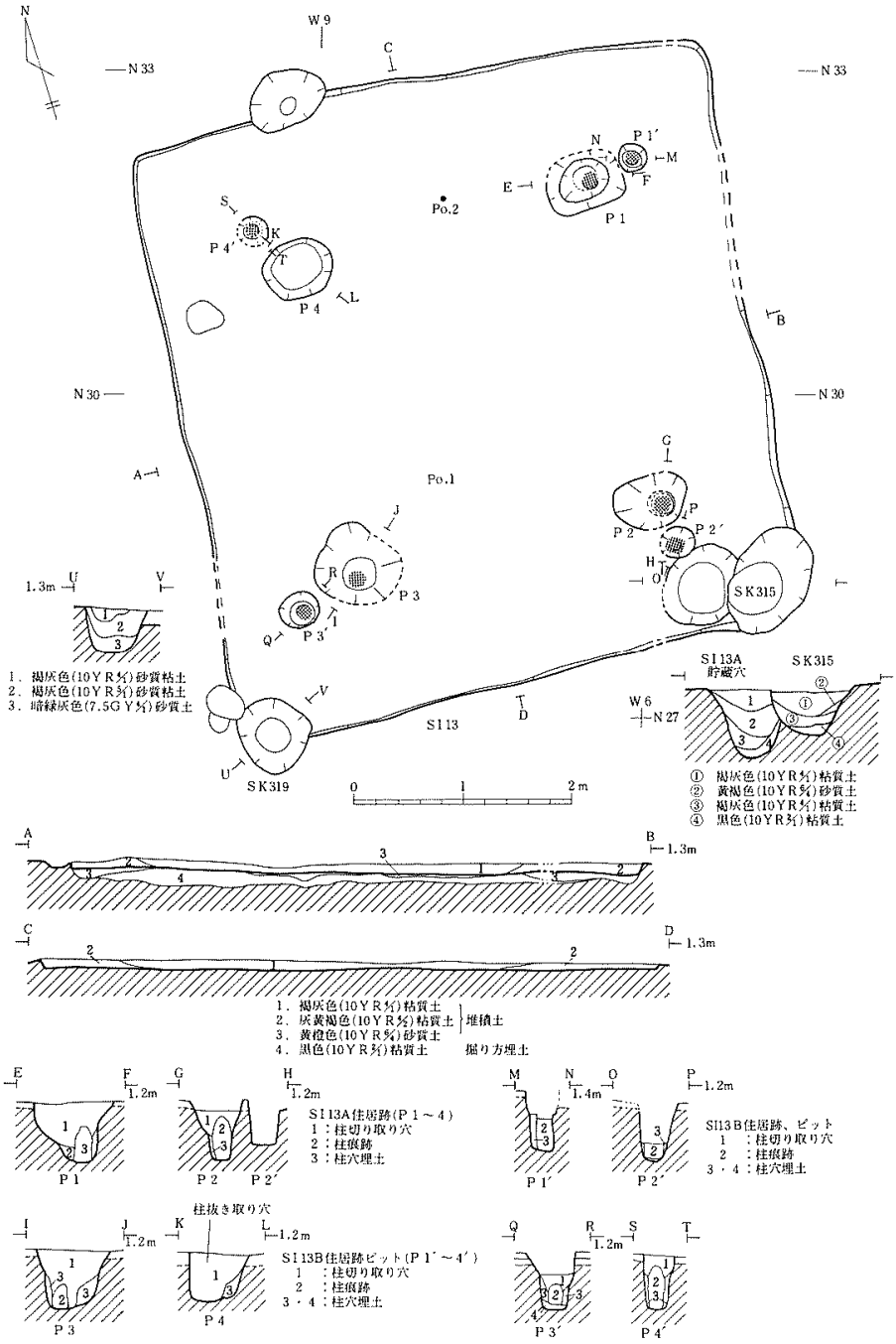
P1～4のうちP1～3では、柱が切り取られており、P4では柱が完全に抜き取られている。柱の抜き取りあるいは切り取り穴は長軸約70～80㎝、短軸50～60㎝の不整形で、深さは40～60㎝ほどである。柱痕跡は径14～18㎝ほどの円形である。

P1'～4'のうち、P3'・4'では柱が切り取りられている。P1'・2'も柱痕跡を確認したのが大分掘り下げてからであったことから、同様に柱が切り取られていた可能性がある。柱の切取り穴は径26～34㎝の円形で、深さは50～56㎝、柱痕跡は14～18㎝の円形である。

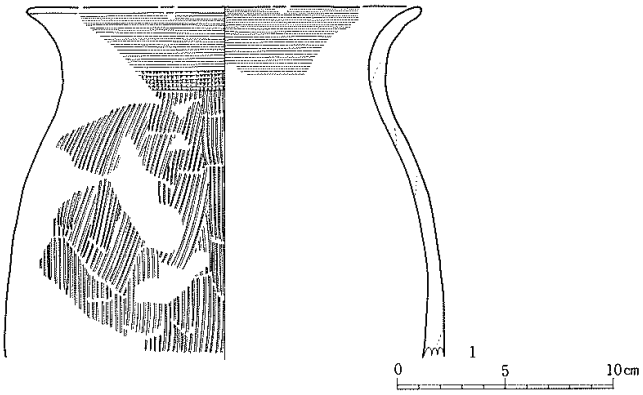
［貯蔵穴］ＳＩ13Ａに伴う貯蔵穴を住居の南東隅で検出している。ＳK315 土壙に南東部を



第72図　SI 11・304住居跡

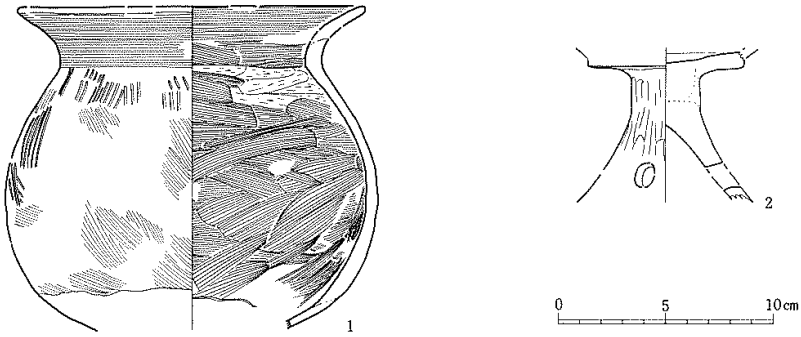


第73図　SI 13A･B住居跡



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	[口] ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾊﾅﾋﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ [体] ﾊﾅﾋﾞ	[口] ﾖｺﾅﾃﾞ [体] 不明	(18.5)	(15.1)	(20.4)	－	(18.8)	A.B.C	1/5	Po.1	

第74図　SI11出土遺物



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	[口] ﾊﾅﾋﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ [体] ﾊﾅﾋﾞ→ﾅﾃﾞ	[口] ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ(ﾅｽﾞﾘ) [体] ﾅﾃﾞ(ｹｽﾞﾘ)	(16.2)	(12.2)	(17.3)	－	(15.2)	A.C.B	1/4	Po.2	47-1
2	土師器 高坏	1層	[脚] ﾅﾃﾞ	[坏] ﾐｶｷ [体] ﾅﾃﾞ	－	(3.2)	(7.3)	－	(7.2)	A.B.C	2/3		

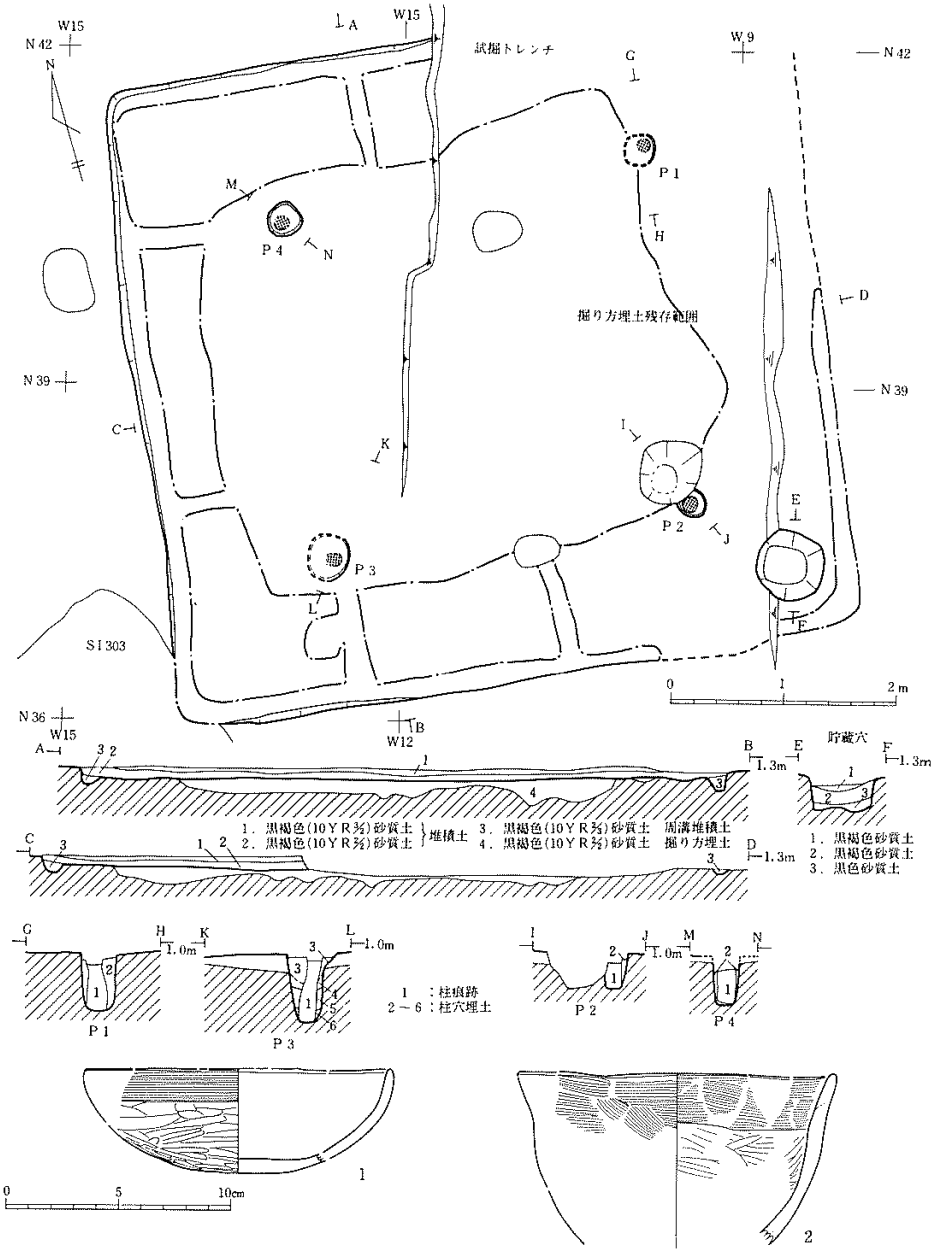
第75図　SI13A出土遺物

壊されているが、長径85㎝、短径約65㎝の楕円形をなし、深さは40～50㎝である。堆積土は4層に分けられ、いずれも自然堆積である。

［出土遺物］ＳＩ13Ａの床面・堆積土・主柱穴から非ロクロ調整の土師器の甕・高坏・複合口縁の壺の口頸部破片が出土している。

ＳＩ14（第76図）

調査区中央部やや西寄りで検出した住居跡である。前述のＳＩ13 住居跡の北に位置し、ＳＩ11・ＳＩ13とＳD302河川跡の西岸に沿うように南北に並んでいる。西半部は床面が残っていたが、東半部は掘り方埋土の一部を確認しただけである。



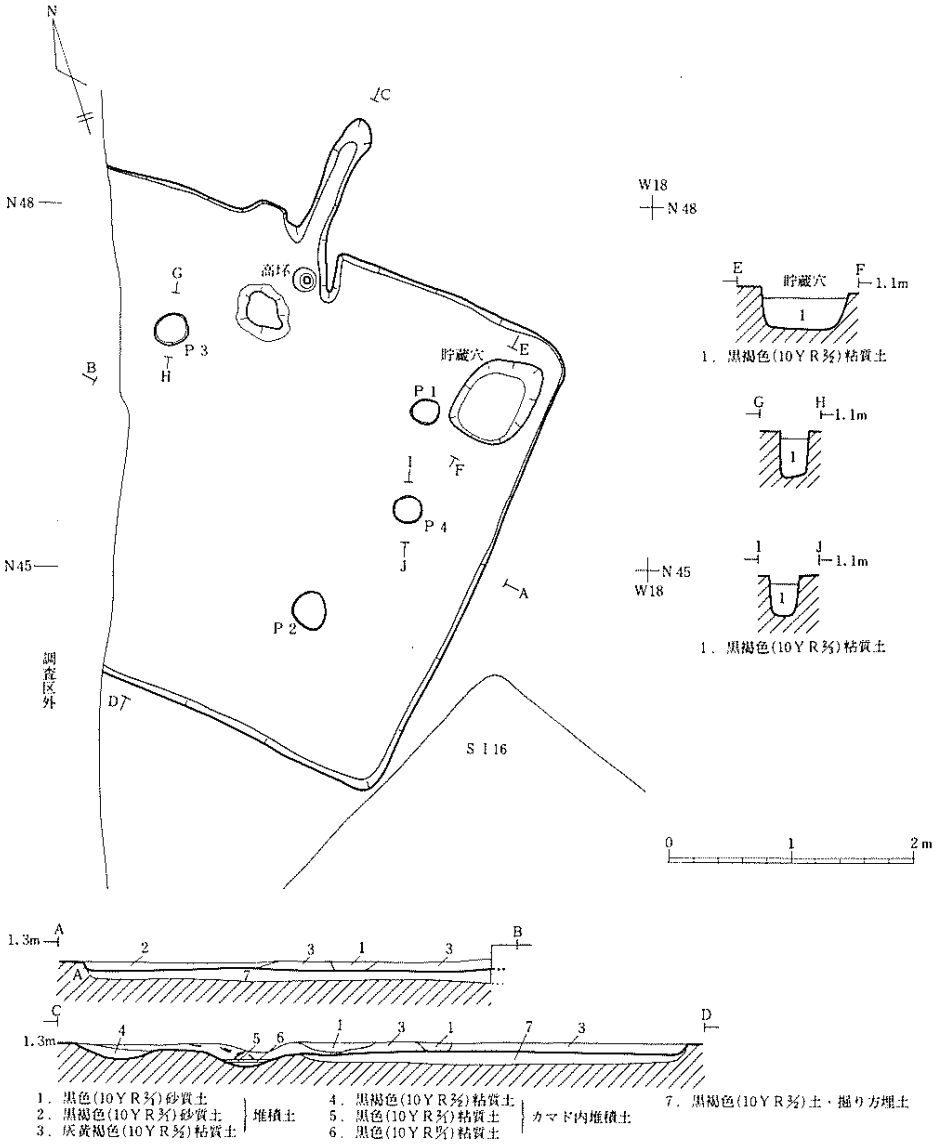
番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体～底] ヘラ	[口～体] 不明	13.7	－	－	丸底	4.7	A.C.B	5/12	貯穴	47-3
2	土師器 坏	1層	[口] ヘラ [体] 不明	[口] ヨコナデ ヘラ [体] ヘラ	14.2	－	12.8	－	(7.7)	A.B.C	2/3	Po.5	47-4

第76図　SI14住居跡・出土遺物

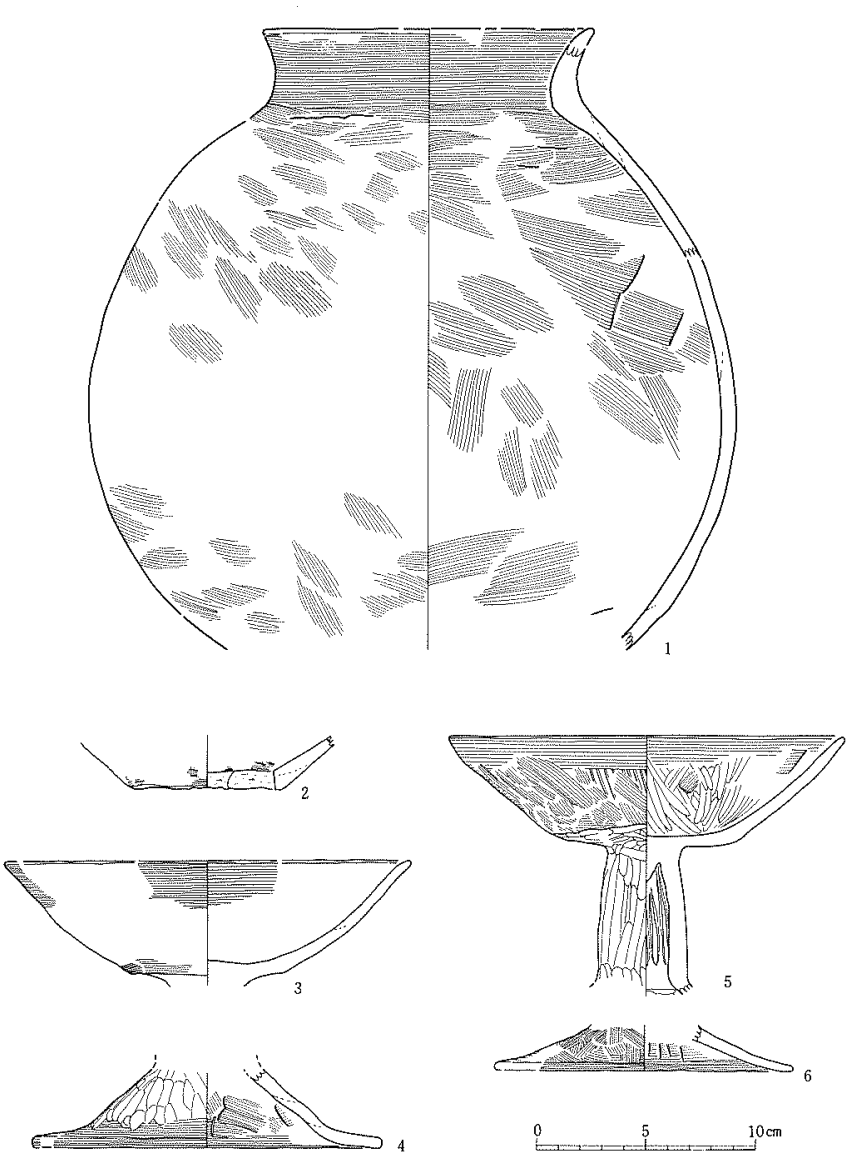
［重複］ＳＩ303 住居跡と重複し、これより新しい。
［平面形・規模］南辺が約 6.2m、西辺が約 5.8m の方形を呈する。住居跡の方向は西辺でみると真北に対して約 10°東へ偏している。
［堆積土］2 層みられ、いずれも自然堆積である。
［壁］4～10 cm残っており、比較的急角度で立ち上がる。
［床面］中央部は掘り方埋土を、壁周辺は地山を床面としており、ほぼ平坦である。
掘り方は壁際を周溝状に、また中央部をほぼ方形に深く掘り込んでいる。そして壁際の周溝状の部分と中央部は、確認できたもので 5 条の溝状の掘り込みによって連結されている。
［柱穴］住居跡の対角線上の 4 箇所で主柱穴を検出している。大きさは径 24～40 cmほどの円形で、深さは 30～60 cmほどある。すべての柱穴で柱痕跡が確認され、径 12～16 cmの円形である。
［貯蔵穴］住居の南東隅で検出している。径約 60 cmの不整形をなし、深さは 24～30 cm残っている。堆積土は 3 層でいずれも自然堆積である。
［出土遺物］貯蔵穴の底面と堆積土から非ロクロ調整の土師器の坏などが出土している。
ＳＩ15（第 77～79 図）
調査区北西部の西壁際に位置し、1990 年度に床面まで調査した住居跡である。住居西側は調査区外である。
［平面形・規模］東辺が約 4.0m、北辺が 4.1m 以上で、方形を呈すると考えられる。住居跡の方向は東辺でみると真北に対して約 43°東へ偏している。
［堆積土］3 層に分けられ、いずれも自然堆積である。
［壁］10 cmほど残っており、比較的急角度で立ち上がる。
［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。
［柱穴］住居の対角線上に位置する 4 箇所で主柱穴を検出している。大きさは径 20～30 cmの円形で、深さは 31～46cm ある。柱痕跡は確認できなかった。また、P1 と P2 のほぼ中央やや壁寄りのところで径 24 cmの円形のピットを検出した。深さは床面から約 30cm である。
［カマド］北辺のほぼ中央で検出した。燃焼部と煙道を確認したが、カマドの西側壁は検出できなかった。燃焼部の規模は幅が 40cm 程と推定でき、奥行は約 60 cmである。側壁は粘土によって構築されている。中央部には焼け面が認められ、その中央から薄い炭化物層の上で伏せた状態の高坏が出土しており、支脚として使われたと考えられる。また、カマドの南西側に高さ 8～10 cm程の土手状の高まりを検出した。煙道部は、長さ約 1.0m、幅 20～25cm、深さは 4～12cm 残っており、黒褐色の粘土質土が堆積している。

［貯蔵穴］住居の北東隅で検出している。長辺70㎝、短辺60㎝の隅丸方形をなし、深さは20～30㎝である。

［出土遺物］カマド内、床面、貯蔵穴、堆積土から非ロクロ調整の土師器の高坏・坏・甕・甑が出土している。

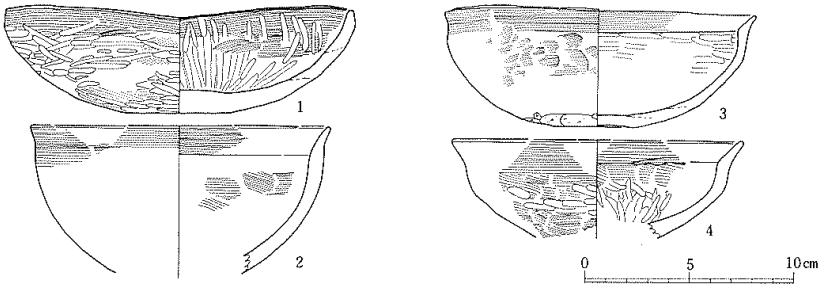


第77図　S I 15住居跡



番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ナデ [体] ナデ→ヘラケズリ	15.0	13.7	29.6	–	(29.4)	A,B,C	1/2	Pa.5	47-6
2	土師器 甑	床面	[体] ナデ	[体] ナデ [孔] ヤスリ	–	–	–	(6.8)	(2.6)	B,C,A	1/5	孔径(6.2cm) Pa.4	
3	土師器 高坏	–	[坏] ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	[坏] ヨコナデ→ヘラミガキ	18.6	–	7.0	–	5.8	A,C	1/6	ネヂ-Pa16-Pa.21	
4	土師器 高坏	–	[脚] ヘラミガキ→ヨコナデ	[脚] ヘラケズリ→ヨコナデ	–	–	–	(16.0)	3.6	A	1/3	Pa.25-ネヂ-Pa.15	47-9
5	土師器 高坏	–	[坏] ヨコナデ→ハケメ→ヘラミガキ [脚] ミガキ	[坏] ヨコナデ→ヘラミガキ→ミガキ [脚] ヘラケズリ	18.1	3.5	8.0	–	12.0	A,C	1/1	ネヂ支脚 -Pa.17	47-5
6	土師器 高坏	–	[脚] ヘラケズリ→ヨコナデ	[脚] ヘラケズリ→ヨコナデ	–	–	–	13.6	2.1	A,C	1/1	Pa.17	

第78図　SI15出土遺物（1）



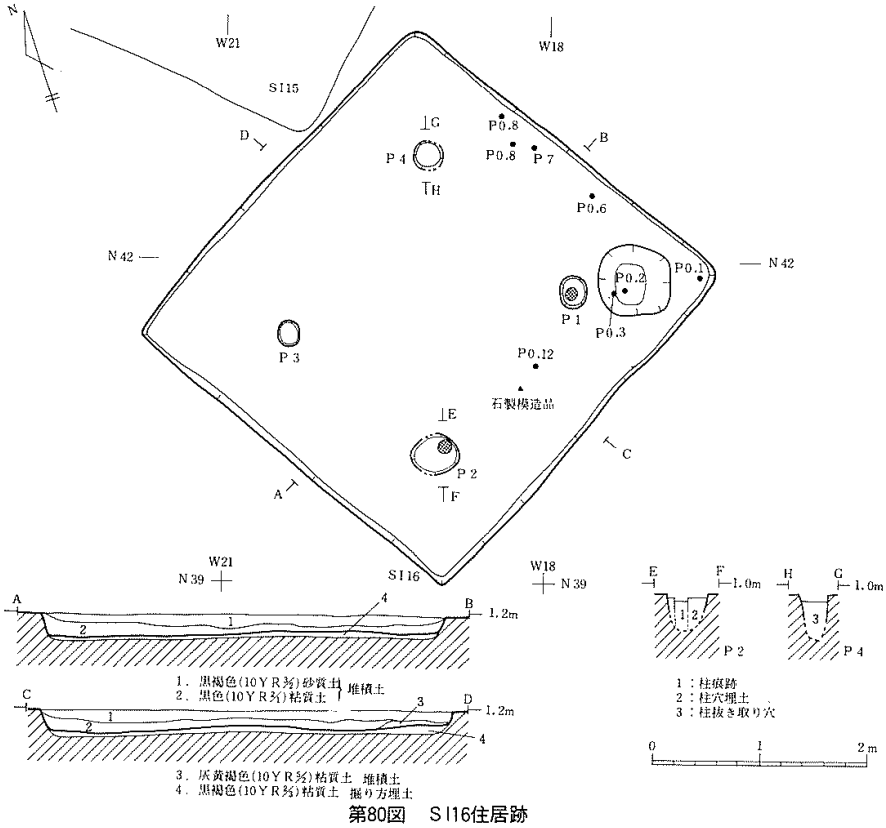
番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	底径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ→ミガキ	[口～体] ヨコナデ→ヘラミガキ	16.8	－	－	5.2	4.6	A	4/5	鉄P-Po.3	47-8
2	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体] 不明	[口] ヨコナデ [体] ナデ	14.4	－	－	－	7.1	A	9/5	Po.5	
3	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ→ヘラケズリ [底] ヘラケズリ	[口] ヨコナデ [体] ヘラミガキ	15.0	－	－	3.7	5.7	A.B.C	5/6	鉄P-Po.1・2	47-7
4	土師器 坏	3層	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ→ヘラミガキ	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ヘラミガキ	14.0	－	－	－	4.7	A	1/5	Po.1	

第79図　SI15出土遺物（2）

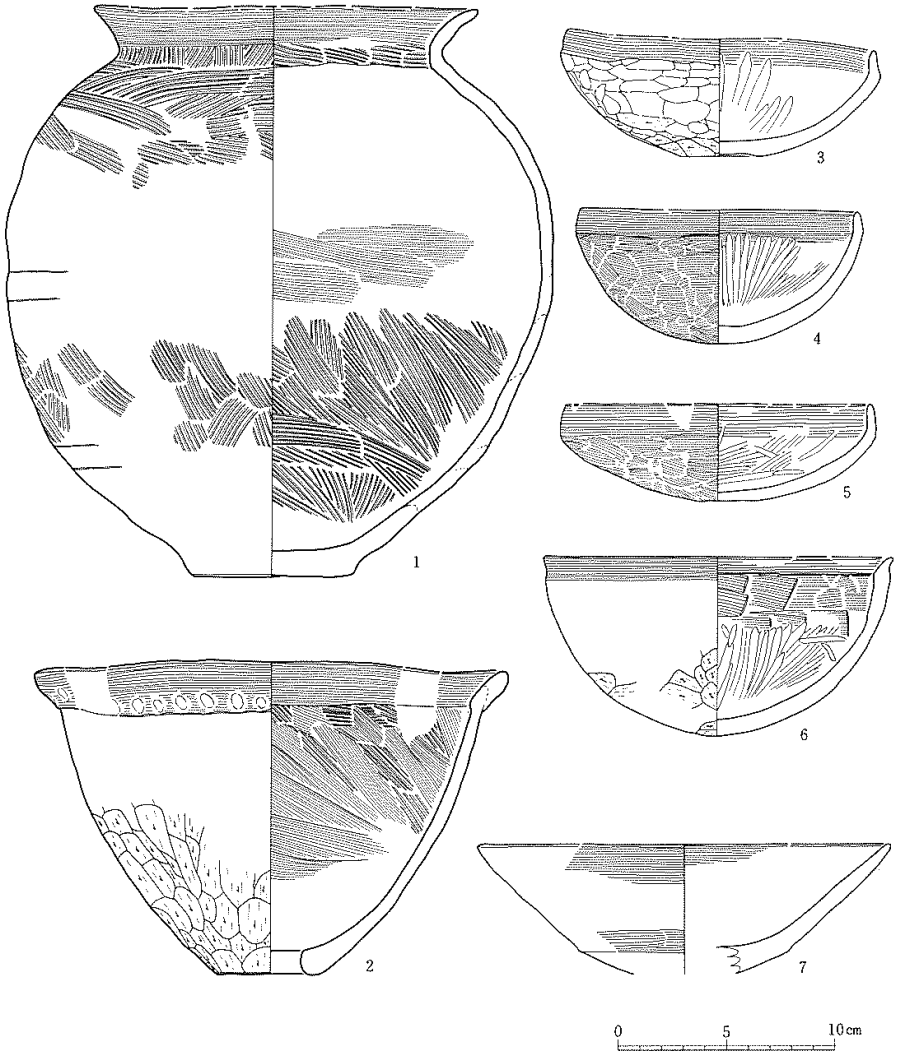
ＳＩ16（第80～82図）

調査区中央部の西壁際で検出した住居跡で、前述のＳＩ15住居跡の南に近接する。

［重複］重複は見られないが、ＳＩ15住居跡と近接することから同時に存在したとは考え

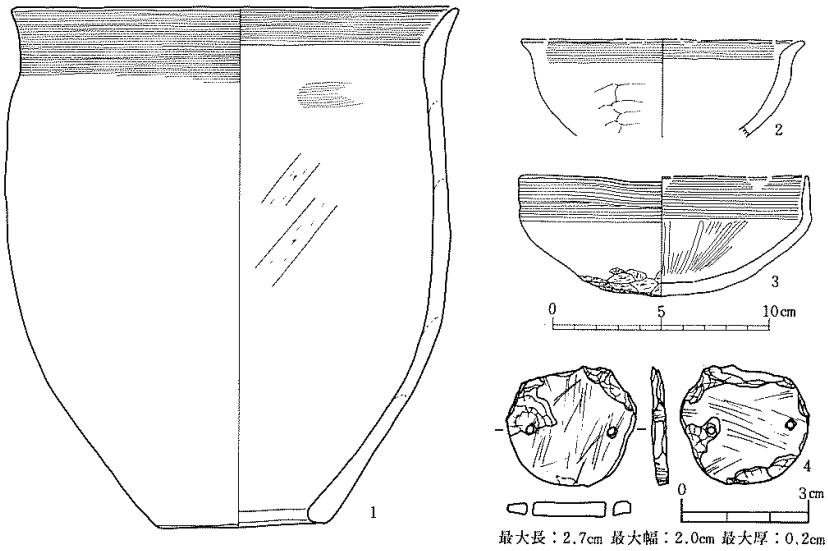


第80図　SI16住居跡



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ハケ	[口] ハケ→ヨコナデ [体] ナデ→ハケ	17.7	14.8	25.1	7.5	26.5	A	4/5	Fig.8	49-1
2	土師器 甑	床面	[口] ヨコナデ [体] ヘラケズリ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ→ハケ	21.8	–	–	4.8	14.5	A	3/5	Fig.1	49-1
3	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体] ヘラケズリ→ヨコナデ→ヘラケズリ [底] ヘラケズリ	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	24.3	–	–	3.7	5.9	緻密	1/1	Fig.2	49-3
4	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体～底] ハケ→ヨコナデ	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	12.8	–	–	丸底	6.3	A	1/1	Fig.3	49-2
5	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体～底] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ヘラミガキ	14.0	–	–	丸底	4.5	A	6/7		49-4
6	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体～底] ヘラミガキ	[口] ヨコナデ [体] ヘラミガキ→ヘラミガキ	16.0	–	–	丸底	8.4	A	1/2	Fig.12	49-7
7	土師器 高坏	床面	[坏] ヨコナデ→ナデ	[坏] ヨコナデ	19.0	–	–	–	6.0	緻密	1/4	Fig.6	

第81図　SI16出土遺物（1）



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ+ヘラケズリ	20.7	－	20.5	8.0	24.2	A	9/10	Pa.9	48-5
2	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体] 不明	[口] ヨコナデ [体] 不明	13.0	－	－	－	4.6	良密	1/5	Pa.3	
3	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体～底] ヘラケズリ	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	13.3	－	－	丸底	5.7	B.C	6/7	Pa.7	48-6

第82図　SI16出土遺物（2）

られない。

［平面形・規模］北辺が約 3.9m、西辺が約 3.7m の方形を呈する。住居跡の方向は西辺でみると、真北に対して約 61°東へ偏している。

［堆積土］3 層に細分され、いずれも自然堆積である。

［壁］10～20 cm残っており、比較的急角度で立ち上がる。

［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］住居の対角線上に位置する 4 箇所で主柱穴を検出している。径 40～20 cm前後のほぼ円形をなし、深さは床面から 30～50 cmである。P1・2 では径 12～13 cmほどの柱痕跡を確認しているが、P3・4 では柱痕跡を確認できなかった。

［貯蔵穴］住居の東隅で検出している。径 65 cmほどの不整円形をなし、深さが 20cm ほどである。

［出土遺物］床面と貯蔵穴から非ロクロ調整の土師器の甕・甑・高坏・坏、石製模造品が比較的まとまって出土している。この他床面からは長さ 10～20 cm、幅 5 cm前後、厚さ 5～10 cmほどの棒状の礫が 4 点出土している。また堆積土からは非ロクロ調整の土師器坏などが出土している。

ＳＩ17（第83・84図）

調査区中央部の西壁際で検出した住居跡で、ＳＩ16住居跡の南側に位置する。

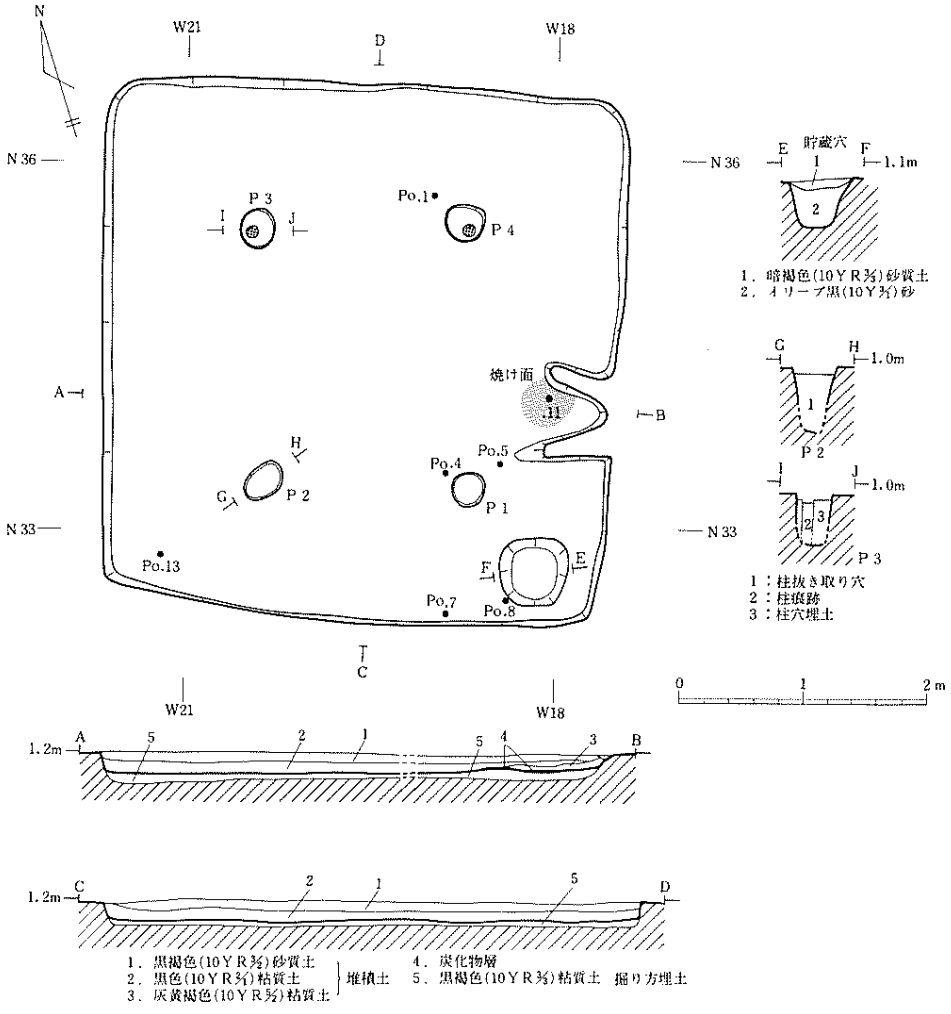
［平面形・規模］北辺が約4.3m、西辺が約4.2mの方形を呈する。住居跡の方向は西辺でみると、真北に対して約18°東へ偏している。

［堆積土］住居内に2層、カマド内に1層みられ、いずれも自然堆積である。

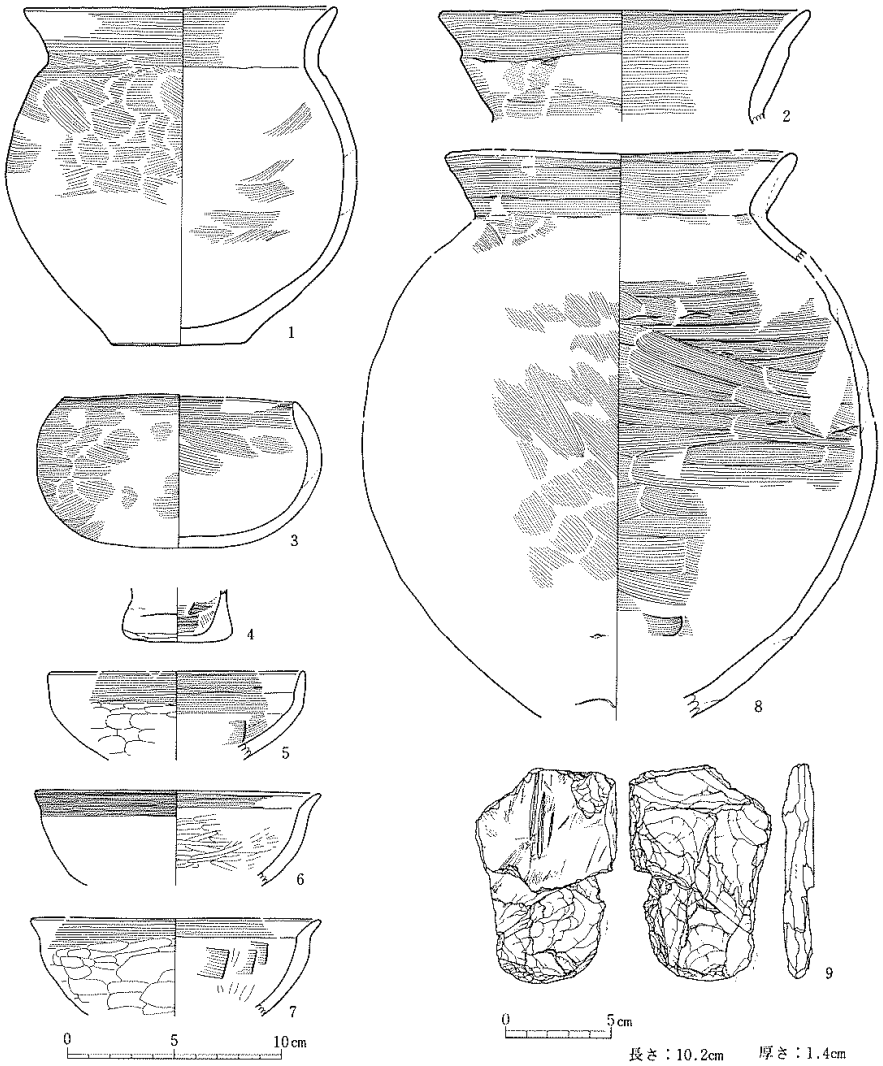
［壁］10～15cm残っており、比較的急角度で立ち上がる。

［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］住居の対角線上に位置する4箇所で主柱穴を検出している。径26～36cmのほぼ円形をなし、深さは床面から50～60cmである。P3・4では径10cmほどの柱痕跡を確認して



第83図　ＳＩ17住居跡



長さ：10.2cm　厚さ：1.4cm
幅　：5.8cm　石材：泥岩

番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	14.5	12.6	16.4	6.1	16.0	B.C	9/10	Po.8	48-9
2	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ→ナデ	[口] ヨコナデ	17.3	12.6	–	–	5.4	C	1/1	Po.6	49-2
3	土師器 坏	床面	[口～底] ヨコナデ→ヘラナデ	[口～体] ヨコナデ→ナデ	10.3	–	13.3	丸底	7.3	C	6/7	Po.2	48-8
4	土師器 ミニチュア	床面	[体～底] ナデ→ヘラケズリ	[体] ナデ	–	–	5.2	5.0	2.6	B.C	3/4	Po.13	
5	土師器 坏	床面	[口?] ヨコナデ [体] ヘラミガキ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	12.0	–	–	–	4.2	C	1/6		
6	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体] 不明	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	13.4	12.5	–	–	4.5	C	1/3	Po.5	
7	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体] ヘラケズリ→ヘラミガキ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ→ヘラミガキ	13.6	12.6	–	–	4.7	緻密	1/5	Po.1	
8	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ナデ	(16.4)	(13.7)	(24.0)	–	(26.6)	C.E.D.E	1/3	Po.5+Po.4+Po.7+Po.11+ヘラケズリ	

第84図　SI17出土遺物

いるが、P1・2では柱が抜き取られているため柱痕跡を確認できなかった。

［カマド］東辺の中央やや南寄りで検出している。燃焼部のみが残存しており、幅40㎝、奥行50㎝ほどで、側壁は粘土を積み上げて構築している。底面中央部には焼け面が認められ、その上には炭化物層が薄く堆積していた。

［貯蔵穴］住居の南東隅で検出しており、長径56㎝、短径53㎝の不整楕円形をなし、深さは40㎝ほどである。堆積土は2層でいずれも自然堆積である。

［出土遺物］カマド内、床面、堆積土から非ロクロ調整の土師器の甕・壺・坏や砥石が出土しており、その他にミニチュア土器が床面から正位で出土している。また堆積層からは非ロクロ調整の土師器の他に土玉が1点出土している。

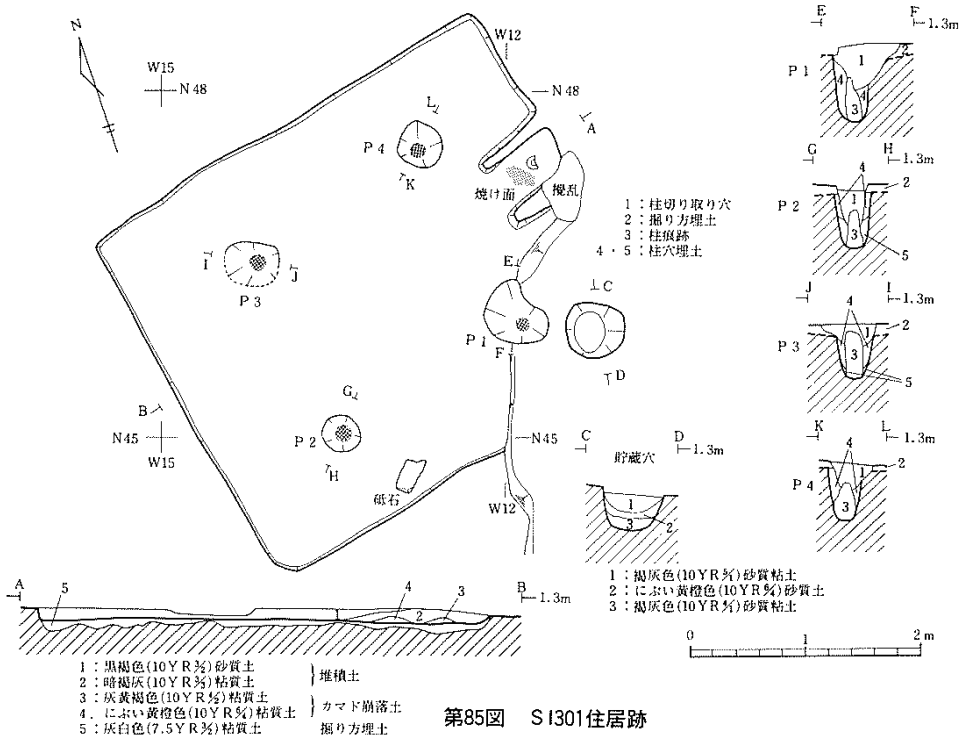
ＳＩ301（第85・86図）

調査区北西部で検出した住居跡で北東隅を失っている。ＳＩ14住居跡の北に位置している。

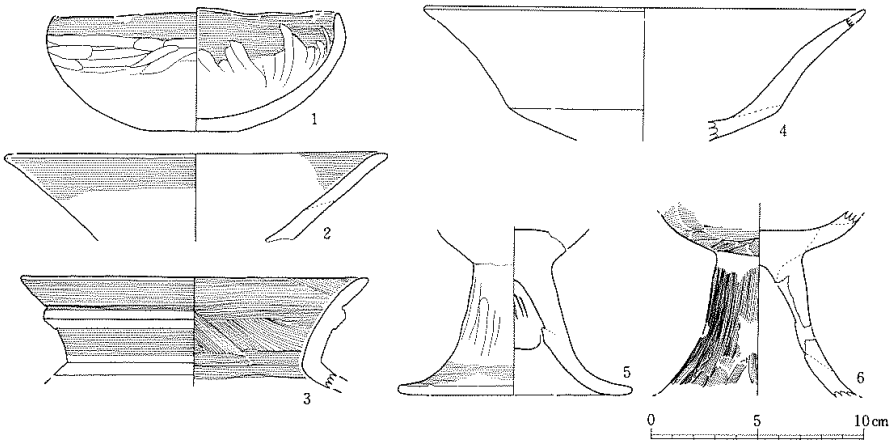
［平面形・規模］北辺が約3.9m、西辺が約3.5mの長方形を呈する。住居跡の方向は、北辺でみると、真東に対して約14°北へ偏している。

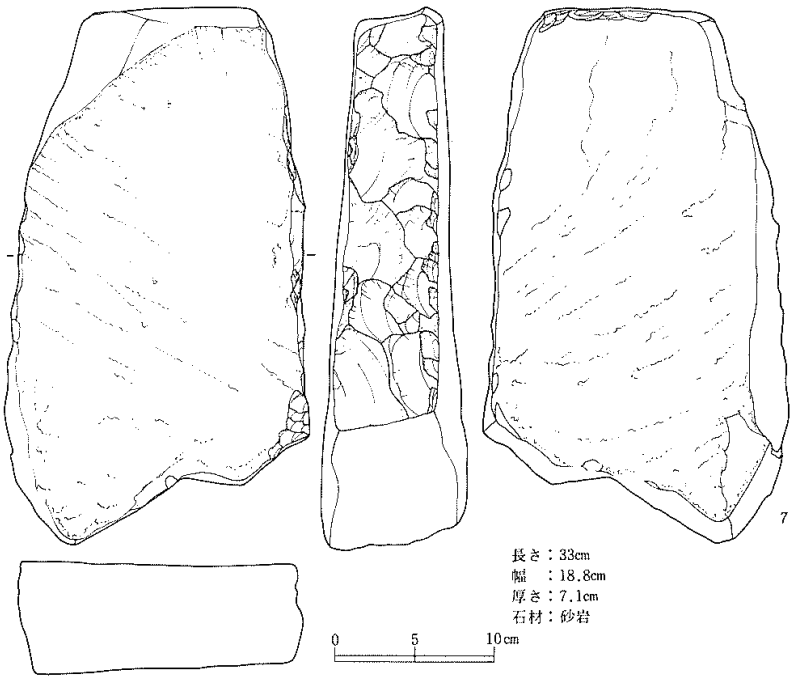
［堆積土］住居・カマド内あわせて4層みられ、いずれも自然堆積である。

［壁］10㎝ほど残っており、比較的急角度で立ち上がる。



第85図　ＳＩ301住居跡





番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 坏	床面	[口] ヨコナデ [体] ミガキ(ナデ) [底] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	13.2	－	－	4.0	5.8	A.C.B	1/2	ヨコナデ Pa.9	49-5
2	土師器 高坏	床面	[坏] ヨコナデ	[坏] ヨコナデ	(18.0)	－	－	－	(4.2)	A.B.C	2/11	ヨコナデ Pa.5 Pa.7	
3	土師器 壺	床面	[口] ヨコナデ	[口] ヨコナデ+ナデ	(8.4)	－	－	－	5.2	A.C	1/4	ヨコナデ Pa.6	49-6
4	土師器 高坏	床面	[坏] 不明	[坏] 不明	(20.8)	－	(12.7)	－	(5.7)	A.B.C	1/8	A-1層	
5	土師器 高坏	床面	[坏] ナデ [脚] ミガキ+ヨコナデ	[脚] ヨコナデ	－	3.6	－	11.0	(8.1)	A.C	2/3	ヨコナデ Pa.8	49-4
6	土師器 高坏	床面	[坏] ナデ [脚] ナデ	[坏] ミガキ+ナデ [脚] ナデ	－	4.0	－	－	(9.6)	A.C.B	9/10	ヨコナデ Pa.10	49-3

第86図　SI 301出土遺物

［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］住居の対角線上の4箇所の掘り方埋土下で主柱穴を検出している。柱穴は径27～31 cmの円形をなし、深さは49～68 cmである。床面では柱の抜き取り穴あるいは切り取り穴を確認できただけである。切り取り穴では径12～18 cmほどの柱痕跡を確認している。

［カマド］東辺の中央北寄りで検出した。燃焼部のみが残存しており、幅40 cm、奥行68 cmで、側壁は粘土によって構築されている。底面中央部には焼け面が認められ、周りからは高坏の脚部などが出立した。なお、カマド崩壊土の下のカマド底面直上の炭化物層から炭化米が出土している。

［貯蔵穴］住居の東隅で検出しており、径50 cmほどの不整円形をなし、深さは38 cmほどである。堆積土は3層からなりいずれも自然堆積である。

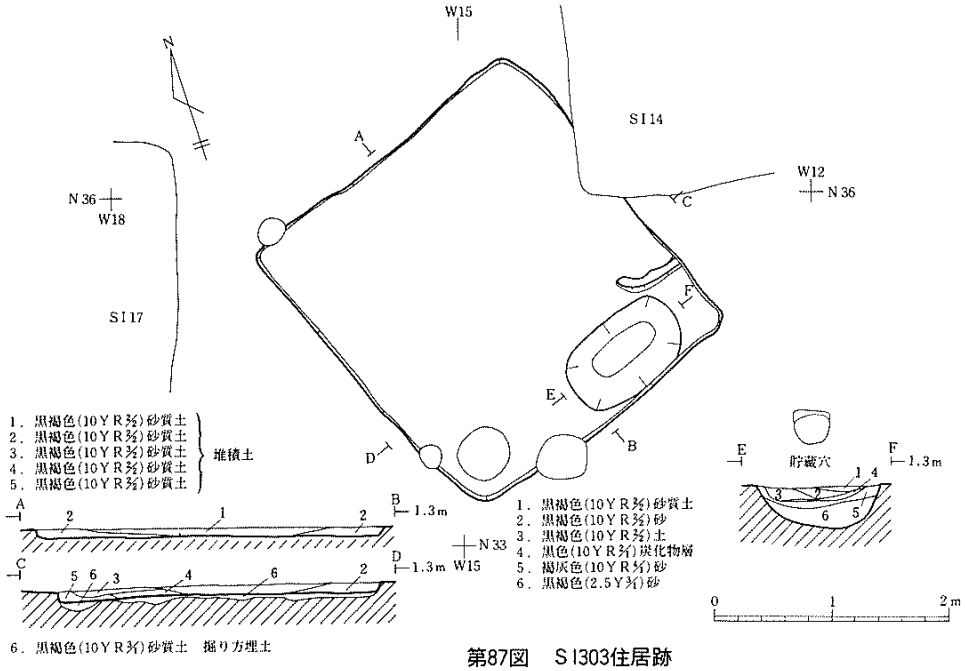
［出土遺物］カマド内、床面、堆積土から非ロクロ調整の土師器の坏・高坏・壺が出土している。また南辺西半部の壁際の床面からは大型の砥石が出土している。

ＳＩ303（第87図）

調査区中央部西半で検出した住居跡で、ＳＩ17住居跡の東に位置する。

［重複］ＳＩ14住居跡、ＳＢ313建物跡と重複し、いずれよりも古い。

［平面形・規模］北辺が約3.0m、西辺が約2.8mの方形を呈する。住居跡の方向は西辺でみると真北に対して約21°西へ偏している。



第87図　ＳＩ303住居跡

［堆積土］住居・カマド内あわせて５層みられ、いずれも自然堆積である。

［壁］10 ㎝ほど残っており、急角度で立ち上がる。

［床面］掘り方埋土を床面としている。

［柱穴］検出されなかった。

［貯蔵穴］南東部の壁際で検出している。長径約 1.0㎞、短径約 0.7㎞ の長楕円形をなし、深さは 30～40㎝ である。堆積土は６層で、いずれも自然堆積である。

［その他の施設］東辺の南側で土手状に延びる高まりを検出している。長さ約 50 ㎝、上幅 10 ㎝・下幅 20 ㎝で、高さは５～８ ㎝である。

［出土遺物］床面直上から非ロクロ調整の土師器の甕の胴部破片が出土している。

ＳＩ304（第 72・88 図）

調査区南西側部で検出した住居跡で、ＳＤ302 河川跡から約 2㎞ 西側に位置している。掘り方埋土の範囲を確認できただけである。

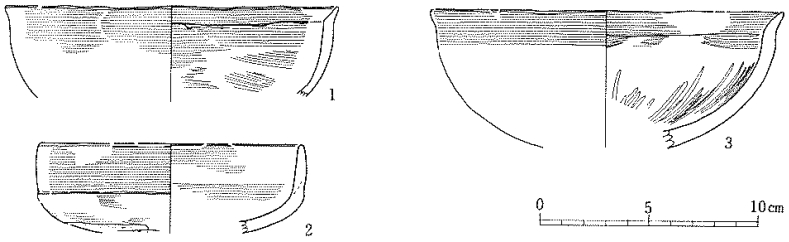
［重複］ＳＩ11 住居跡と重複し、これよりも古い。

［平面形・規模］北辺が約 3.9㎞、東辺が約 3.8㎞ の方形を呈する。住居跡の方向は東辺でみると真北に対して約４°西へ偏している。

［床面］掘り方埋土を床面としていたと考えられる。

［柱穴］住居の対角線上の４箇所で主柱穴を検出している。いずれも柱が切り取られている。柱の切り取り穴の大きさは径 30～40 ㎝である。柱穴は上部が切り取り穴によって壊されており、平面形・規模は据えられないが、深さは 42～55 ㎝ほどである。柱痕跡は切り取り穴の下で検出しており、径 10 ㎝ほどの円形である。なお、平面図では柱抜き取り穴掘り上げ後の状況を図示した。

［貯蔵穴］南東隅で検出している。径 65 ㎝ほどの円形で、深さは約 40 ㎝である。堆積土は



番号	種別	器位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 坏	貯P	[口～体] ヨコナデ	[口～体] ヨコナデ	(15.4)	－	(15.0)	－	(4.4)	A.B.C.F	1/4	堆積土1層	
2	土師器 坏	貯P	[口] ヨコナデ [体] ナデ・ケズリ	[口] ヨコナデ [体] ナデ(ミガキ)	(12.2)	－	(12.3)	－	(4.1)	A.C.B	1/6	堆積土1層	
3	土師器 坏	貯P	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ミガキ	(16.3)	－	(15.6)	－	(6.3)	A.B.C.F	1/4	堆積土1層	

第88図　SI 304出土遺物

4層でいずれも砂質土を主体とした自然堆積である。

［出土遺物］貯蔵穴の堆積土第1層から非ロクロ調整の土師器の坏が3点出土している。このうちの1点は須恵器坏蓋を忠実に模倣したものである。

ＳＩ305（第89図）

調査区南西隅付近で検出した住居跡である。

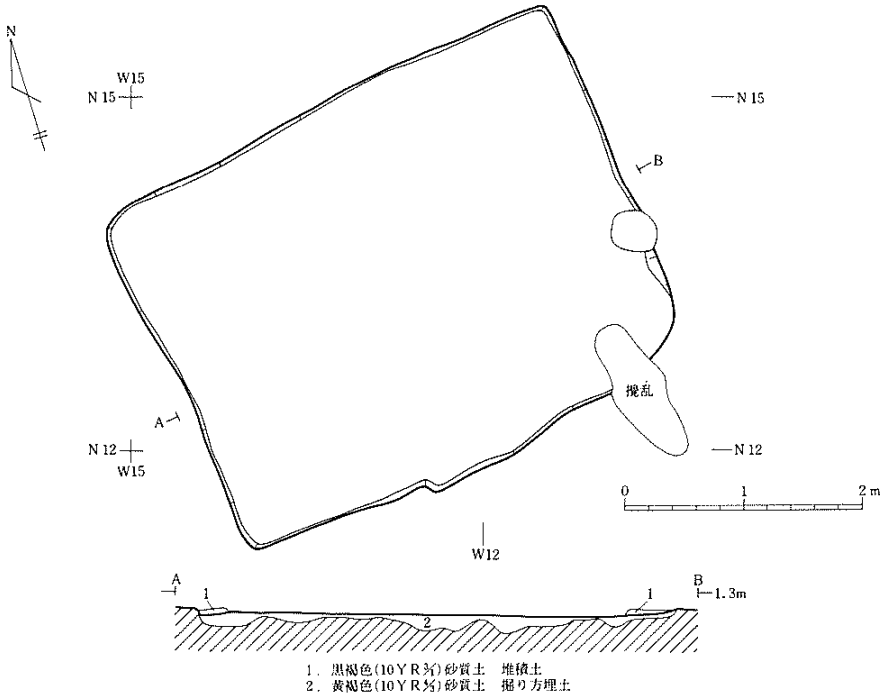
［平面形・規模］北辺が約4.2m、西辺が約3.3mの長方形を呈する。住居跡の方向は、西辺でみると真北に対して約6°西へ偏している。

［堆積土］1層だけみられ、自然堆積である。

［壁］5cmほど残っており、急角度で立ち上がる。

［床面］掘り方埋土を床面としている。

［柱穴・貯蔵穴］検出されなかった。



第89図　S I305住居跡

［出土遺物］遺物は出土していない。

②、掘立柱建物跡

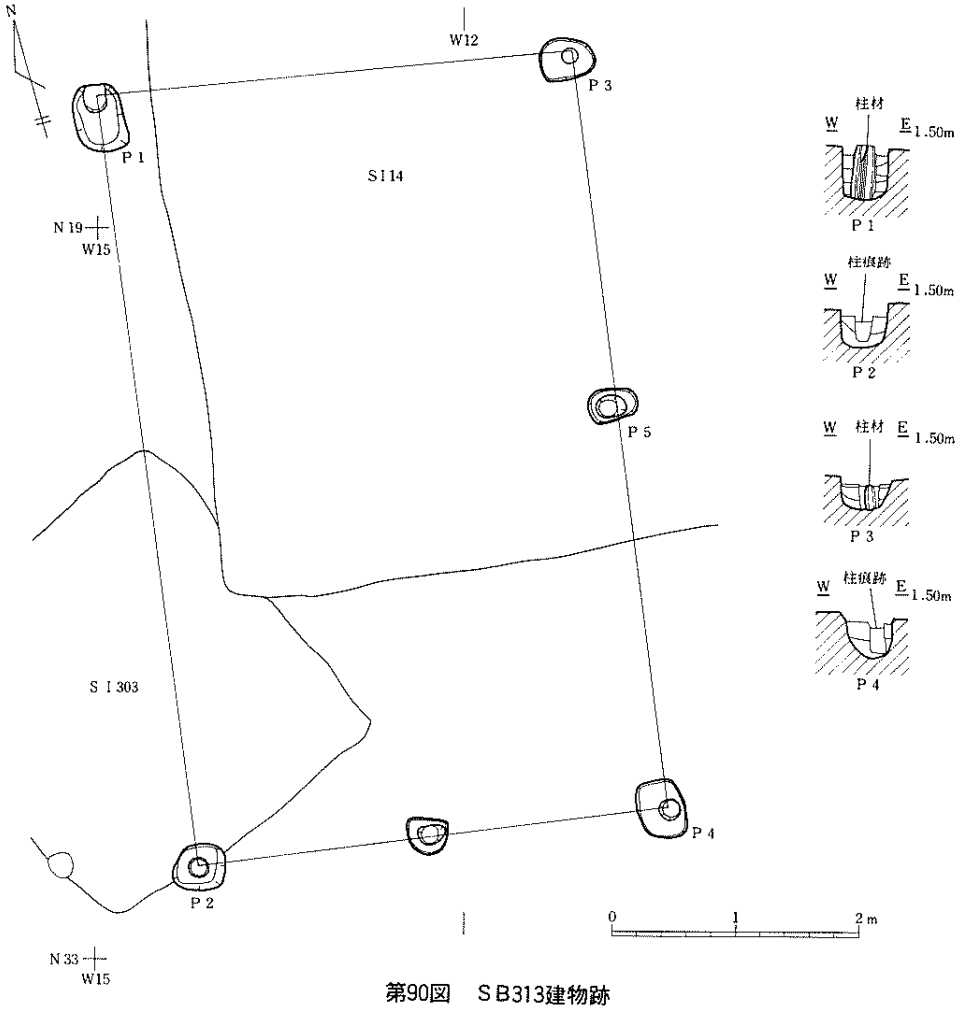
ＳB313（第90図）

調査区西半部中央付近で検出した南北2間、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＩ14・

303 住層跡と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は 6 箇所で検出している。この中の北西隅の柱穴で柱材が遺存しており、それ以外の 5 箇所では柱痕跡を確認している。

柱穴は、短辺 0.4m、長辺 0.6m ほどの方形、一辺 0.5m 前後の歪んだ正方形、径 0.5m ほどの円形と、形状・大きさにかなりバラツキがある。壁はほぼ垂直に掘られており、深さは東西両側柱列北端のものでは 40 cm前後残っていたが、棟通り下のものは約 20 cmしか残っておらず、残存状況はあまり良くない。埋土は、黒色土や黄褐色砂質土小フロック・小粒・細粒を含む黒褐色砂質土である。また、北西隅の柱穴では、埋土に灰白色火山灰小ブロックが認められた。柱は遺存した柱材や柱痕跡からみると径 15～25 cmの丸太材である。

柱間寸法は桁行が東側柱列で南より 3.29m・2.93m、総長が 6.22m、梁行は南妻で東より 1.98m・2.00m、総長が 3.98m である。また西側柱列では総長が 6.38m、北妻では総長が 3.89



第90図　ＳＢ313建物跡

m となり本建物跡平面形が多少歪んでいる。建物の方向は西側柱列でみると、真北に対して東へ約 10 ° 偏している。

遺物は出土していない。

③、柱列

ＳＡ350（第 71 図）

ＳＤ302 河川跡の西岸の落ち際で検出した南北に続く柱列である。この柱列は、いわゆる一本柱列のように一直線には並んでいないが、河川に沿うように設けられた何らかの施設と考えられる。柱穴は 9 箇所で 10 個確認している。このうちの 5 箇所では、状況は悪いが材が遺存しており、径約 15 ㎝前後の丸太材である。

柱穴は径 20 ㎝前後の円形で、深さは残存状況が悪く約 10 ㎝しか残っていなかった。柱列の間隔は、南からみると 2.70m・2.87m・2.26m・2.42m・8.97m・5.53m・2.83m・5.20m である。

遺物は出土していない。

④、円形周溝

ＳＤ306（第 91 図）

調査区南西隅で検出した円形周溝で、ＳＩ305 住居跡の南西に近接する。

［平面形・規模］南側の一部は調査区外であるが、ほぼ円形を呈するとみられる。周溝を含む全体は径約 8.0m、内部は径約 6.8m である。周溝の幅は 30〜75 ㎝で、深さは 30〜40 ㎝残っていた。断面は多少歪んだ逆台形をなす。

［堆積土］5 層に分けられる。第 1 層は自然堆積土とみられるが、第 2〜5 層は人為的堆積土の可能性が考えられた。第 1 層の除去後に柱などの材痕跡が存在するかどうかの確認を行ったが、明確な痕跡は認められなかった。

［出土遺物］少量の土師器の破片が出土しているが、時期は特定できない。

⑤、土壙

ＳＫ308（第 91 図）

調査区南西隅のＳＤ306 円形周溝の内側ほぼ中央で検出した小土壙である。長径約 50 ㎝、短径約 40 ㎝の楕円形をなし、深さは約 10 ㎝残っていた。堆積土は 1 層で、自然堆積と考えられる。

遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器の壺の胴部破片が出土している。

ＳＫ311（第 93 図）

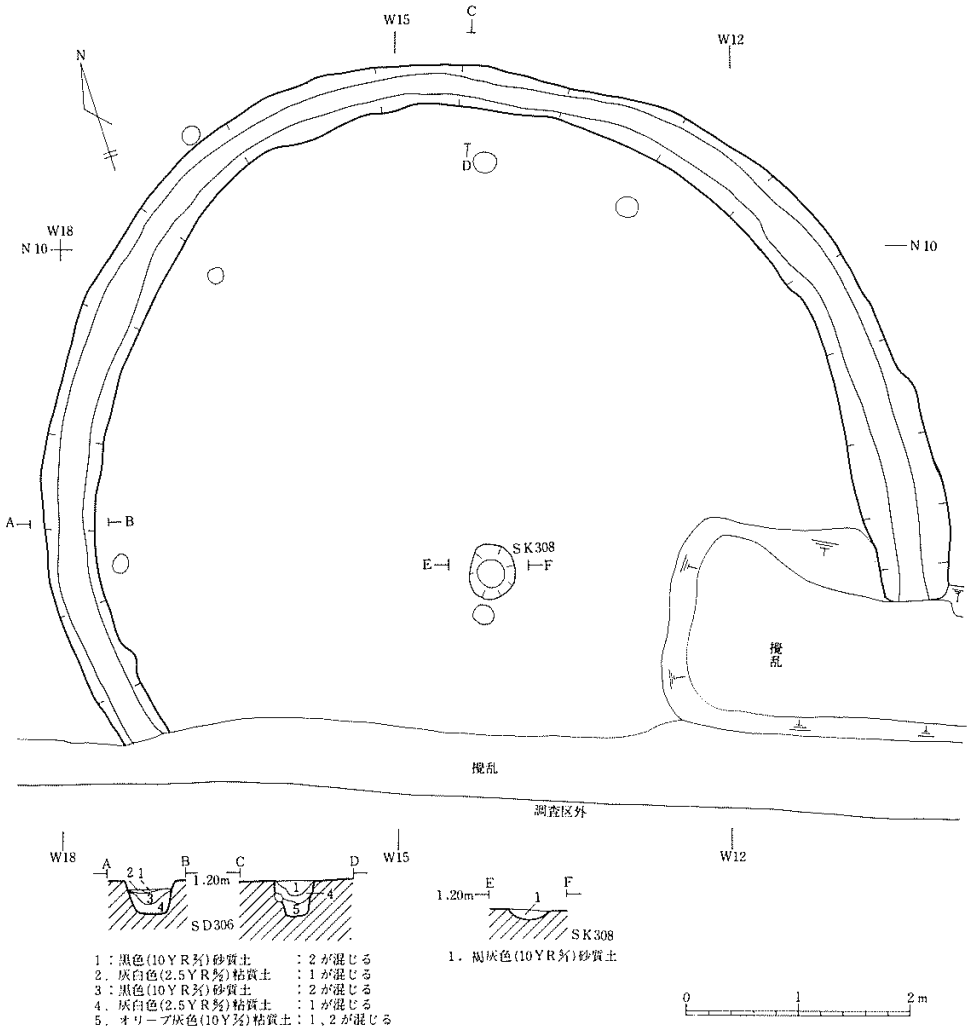
調査区北西隅付近のＳＤ302 河川跡西側緩斜面落ち際で検出した小土壙である。検出面はＳＤ302 の第 7 層上面で、長径約 50 ㎝、短径約 36 ㎝の楕円形をなす。深さは 5〜10 ㎝ほど残っていた。断面は浅い皿状をなし、堆積土はＳＤ302 河川跡の堆積土第 6 層と同じで、自然堆積である。遺物は底面から横だおしになった状況で非ロクロ調整の土師器の坏が出土して

いる。この他ウリ科の植物の種子もまとまって出土している。

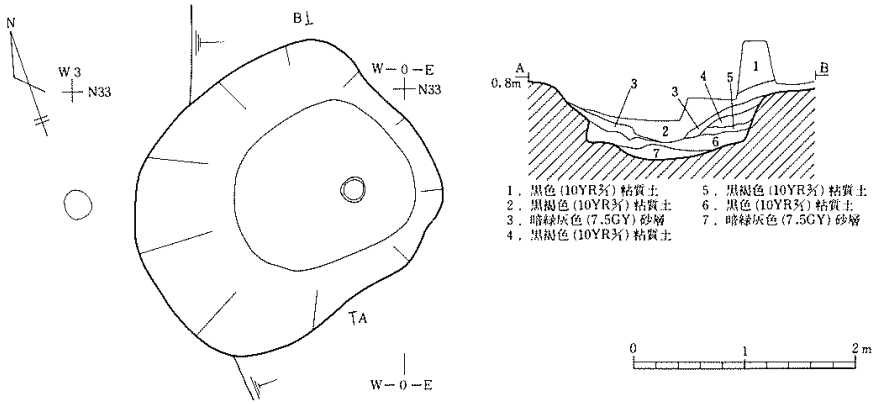
ＳＫ312（第92図）

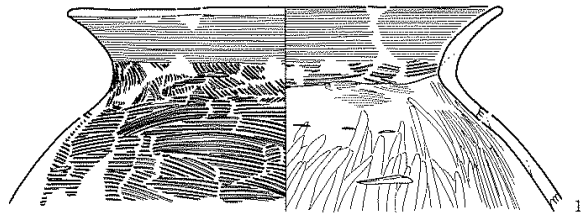
調査区中央部西寄りのＳＤ302 河川跡西側緩斜面落ち際で検出した土壙である。東西約2.8m、南北約2.3mの不整円形をなし、深さは西側の平坦面から約1.2mである。堆積土は7層で、いずれも粘質土からなる自然堆積である。遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器の甕が出土している。

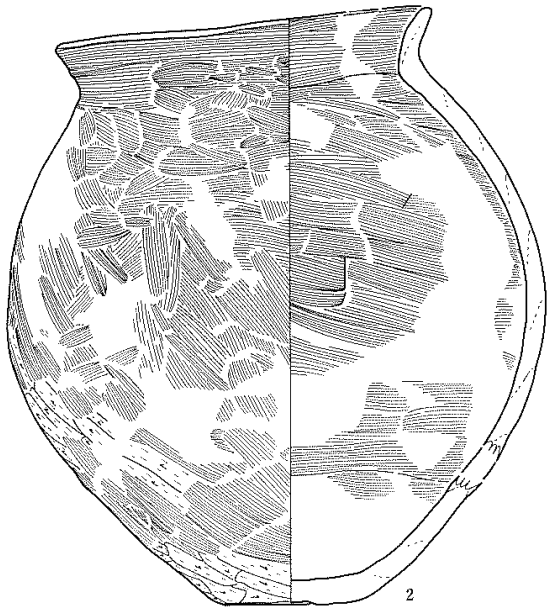
ＳＫ315（第93図）



第91図　ＳＤ306円形周溝・ＳＫ308土壙







0　5　10cm

番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 頸径	法量(cm) 体径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	2層	[口] ヨコナデ [体] ハケメ	[口] ヨコナデ・ハケメ [体] ケズリ→ミガキ	(19.7)	(15.5)	－	－	(9.4)	A.B.C	1/4		49-8
2	土師器 甕	2層	[口] ヨコナデ [体] ケズリ・ナデ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	17.1	15.4	24.3	6.1	27.2	A.B.C	4/5		49-9

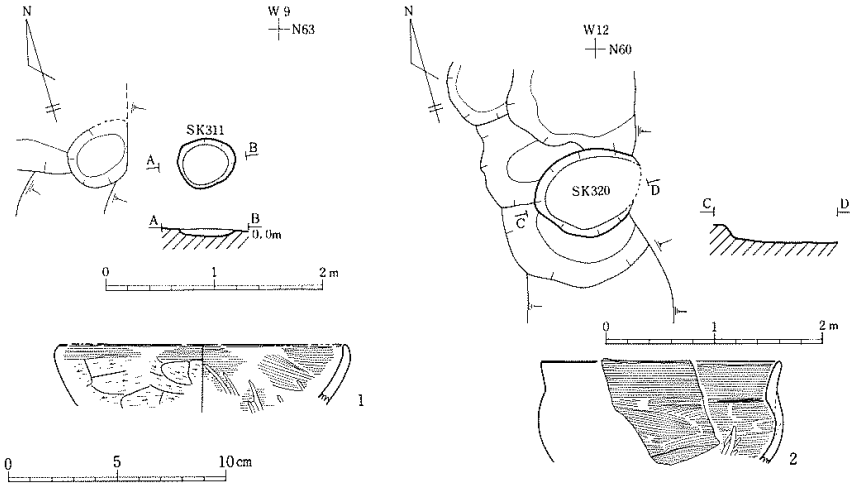
第92図　SK312土壙・出土遺物

調査区中央部の北西寄りで検出した小土壙である。ＳＩ13住居跡と重複し、これより新しい。長径約1.1m、短径約0.7mの楕円形をなし、深さは約50cm残っていた。断面は歪んだU字状をなし、堆積土は4層に分けられ、いずれも自然堆積である。

遺物は非ロクロ調整の土師器の坏が出土している。

ＳK320（第93図）

調査区北西部のＳD302河川跡西側緩斜面落ち際で検出した土壙である。長径約1.0m以上、短径約0.8mの楕円形をなし、深さは約20cm残っていた。堆積土はＳD302河川跡の堆積土6層ときわめて類似し、自然堆積である。



番号	種別	遺構	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	底径	体径	頸径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 坏	K315	[口]ヨコナデ [体]ケズリ	[口～体]ナデ・ナデ～ミガキ	(13.2)	－	(13.6)	－	(3.2)	A.C.F	1/6	SK315	
2	土師器 坏	K320	[口]ヨコナデ [体]ナデ	[口]ヨコナデ [体]ナデ・ミガキ	(11.2)	(10.7)	(11.3)	－	(4.7)	A.F	1/10	SK320	

第93図　SK311・320土壙、SK315・320出土遺物

遺物は、堆積土中から非ロクロ調整の土師器の坏が出土している。

⑥、溝

ＳD314（第71図）

調査区北西部で検出した長さ約6mの東西溝で、西側から東側のＳD302河川跡へ注ぎ込んでいる。西半部は東西約2.6m、南北約1.7mほどの楕円形をなしているが、それより東側は幅が0.45～0.85mほどである。深さは一定しておらず、7～27cmほど残っていた。断面は浅い皿状をなし、堆積土は褐灰色粘質土からなる自然堆積土である。

遺物はいずれも小破片であるが非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が小量出土している。非ロクロ調整のものには甕が、またロクロ調整のものには内黒の坏・高坏のほか甕な

どがみられる。

（4）、D区

D区で検出した遺構には、竪穴住居跡１軒・河川跡の他土壙・溝・ピットがある。

①、竪穴住居跡

ＳＩ401（第 94～97 図）

調査区南東部で検出した住居跡で、ＳD302 河川跡の東側に位置している。火事によって廃絶したいわゆる焼失住居である。

［平面形・規模］北辺が約 6.0m、東辺が約 6.7m ほどの長方形を呈する。住居の方向はほぼ真北を向いている。

［堆積土］堆積土は 3 層からなり、自然堆積土である。

［壁］6～10 cm残っており、比較的急角度で立ち上がる。

［床面］掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。なお床面上には炭化材が多数認められた。

［柱穴］住層の対角線上の 4 箇所で主柱穴を確認している。P1・4 が径約 40 cmの円形、P2 が長径 56 cm、短径 38 cmの楕円形をなし、深さは 36～48cm であった。P1･2･4 からは径 12～15 cmの柱痕跡が確認できた。また P3 では柱が抜き取られていた。

［貯蔵穴］南西隅で検出している。二段に掘り込まれており、上段の大きさは東西 1.2m、南北 1.1m ほどの不整形、下段は東西・南北とも 70cm ほどの不整形をなす。深さは約 40 cmである。堆積土は 9 層に分けられ、いずれも自然堆積である。

［出土遺物］床面を中心に、貯蔵穴・堆積土から非ロクロ調整の土師器の甕・鉢・高坏・壺が出土している。

②、土壙

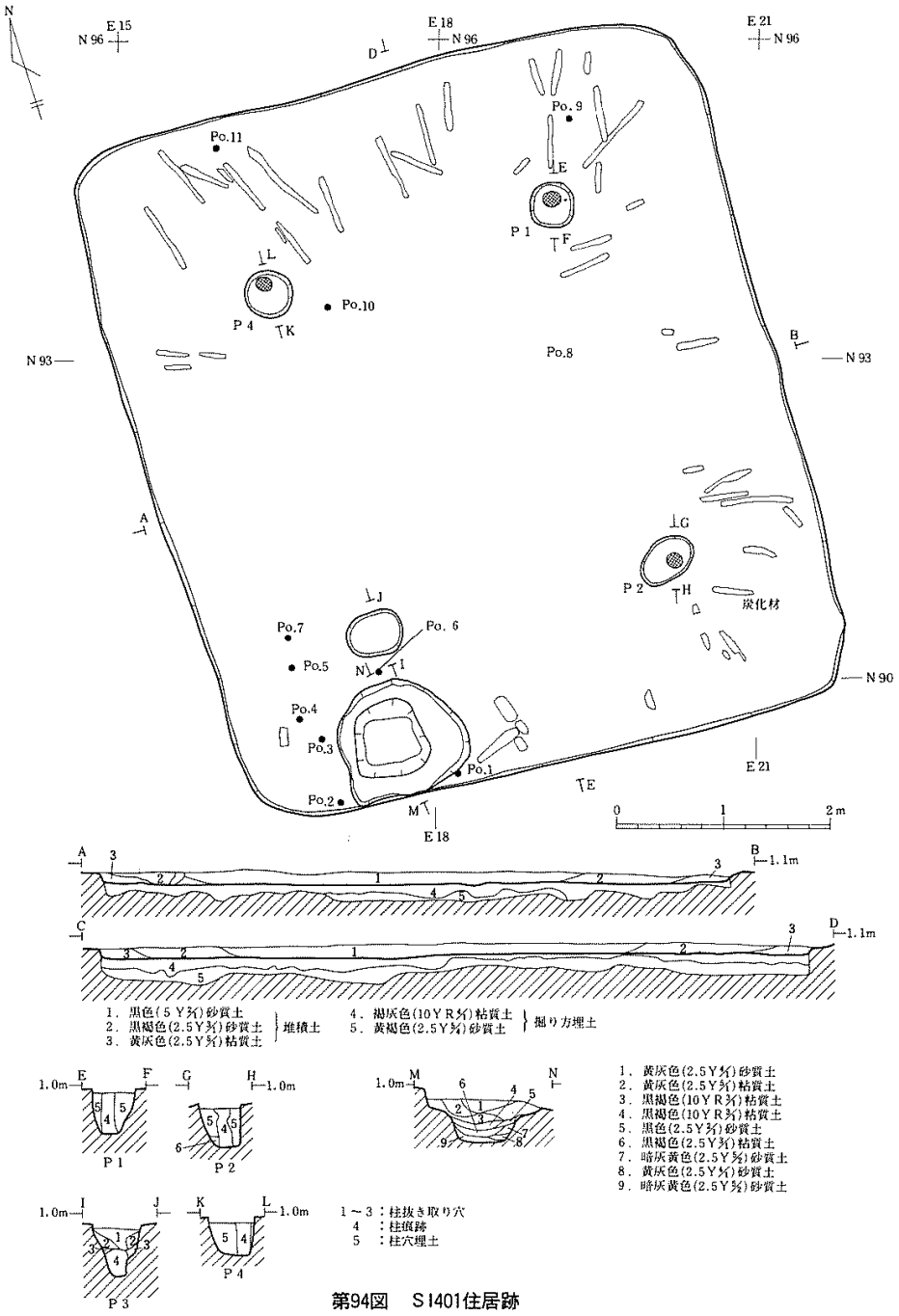
ＳK402（第 98 図）

調査区北壁際の東寄りで検出した土壙で、北半部は調査区外である。東西約 2.7m 以上、南北 0.7m 以上で、深さは 20～35 cmほど残っていた。堆積土は 2 層に分けられ、いずれも自然堆積である。

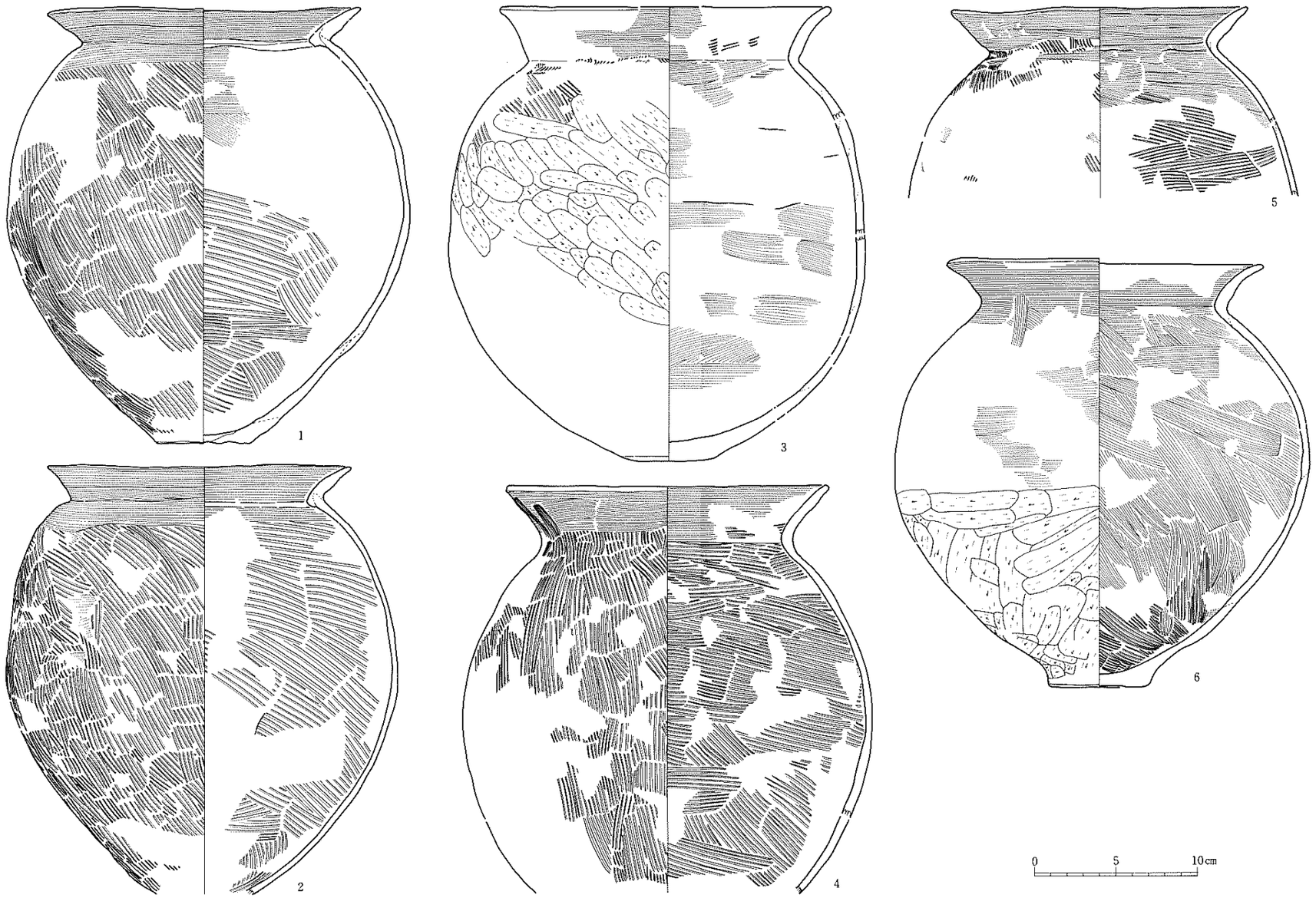
遺物は堆積土中から土師器破片が出土しているが、時期は不明である。

ＳK403（第 98 図）

ＳＩ401 住居跡の西側約 2m に位置し、これとほぼ平行する南北に細長い土壙である。南北約 4.3m、東低 1.3～1.5m ほどの不整な長楕円形をなし、深さは 30～50 cm残っていた。堆積土は 5 層に分けられ、いずれも自然堆積と考えられる。なお第 4・5 層上面からはピットが掘り込まれていたが、堆積土は第 3 層と極めて似ていることから、本土壙と一連に埋

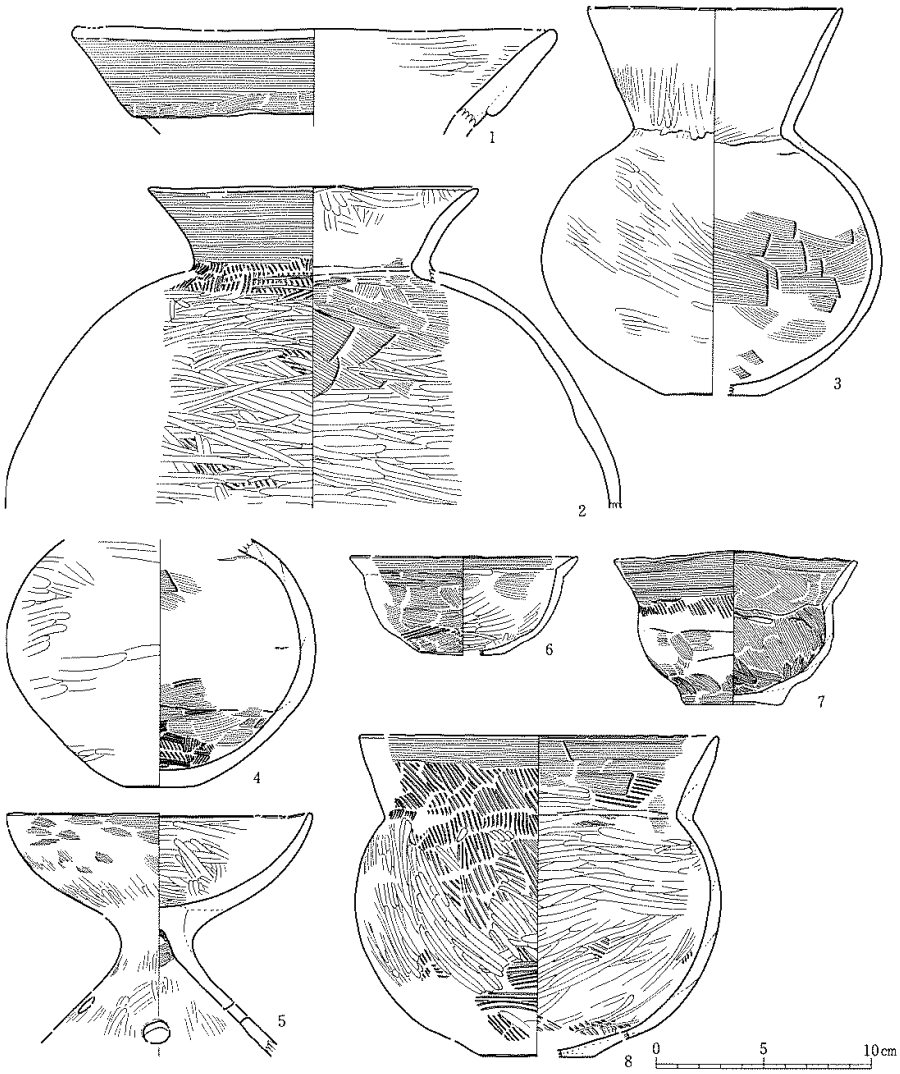


第94図　S I401住居跡



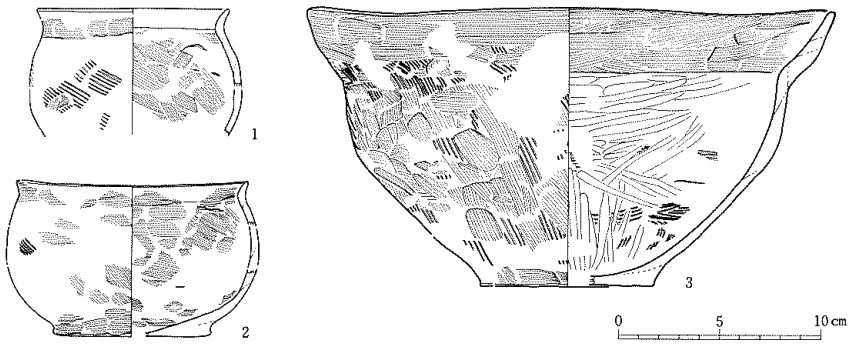
番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	底径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体～底] ハケ	[口] ヨコナデ [体] ハケ→ハケ→ヘラナデ	19.2	15.2	24.7	5.8	26.8	A.B.C	4/5	Po.51堆積土	51-4
2	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ハケ	[口] ヨコナデ [体] ハケ	18.5	15.4	23.9	–	(26.4)	A.C	2/3	Po.10	51-1
3	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ハケ→一部ミガキ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	(22.4)	(16.7)	25.6	4.8	(28.0)	A.C.E.	2/3	Po.5	
4	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ→ハケ [体] ハケ	[口] ヨコナデ→ハケ [体] ハケ	(19.8)	(15.5)	(25.2)	–	(25.1)	A.C.E	1/3	Po.11	51-3
5	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ナデ→ハケ	[口] ヨコナデ→ヘラナデ [体] ヘラナデ→ハケ→ヘラナデ	18.1	(14.0)	(23.7)	–	(11.6)	A.E.C	2/5	Po.6	50-6
6	土師器 甕	床面	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ→ケズリ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	19.4	15.2	25.5	6.3	26.5	A.C.F	4/5	Po.21Po.41埋甘12類	50-8

第95図　S I401出土遺物（1）



器号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 現径	法量(cm) 体径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	床面	[口] 3/4ナデ→ナデ	[口] ミガキ	(22.5)	(14.2)	−	−	(4.6)	A.C.B	2/7	Fig.5Fig.11	
2	土師器 甕	床面	[口] ハケ→ヨコナデ [体] ハケ→ハケ→ミガキ	[口] ナデ→ミガキ [体] ヘラナデ→ミガキ→ハケ→ハケ→ミガキ	15.2	10.9	(28.9)	−	(15.0)	A.C.B	1/2	野P堆積土6層上面Fig.2	S1-6
3	土師器 甕	床面	[口] ミガキ [体] ミガキ	[口] ミガキ [体] ヘラナデ	(11.8)	7.4	(15.8)	(4.6)	15.0	A.B.F	1/2	Fig.9	S0-3
4	土師器 甕	床面	[体] ミガキ→ケズリ	[体] ヘラナデ→ハケ→ナデ	−	−	14.4	3.0	(11.7)	A.C.B	1/1	Fig.7P堆積土	S0-4
5	土師器 高杯	床面	[杯] ミガキ [脚] ミガキ	[杯] ミガキ [脚] 絞り痕→ナデ→ミガキ	14.2	3.5	−	−	(11.6)	A.C.B	4/5	Fig.3	S1-2
6	土師器 鉢	床面	[口] ヨコナデ [体] ヘラケズリ→ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ミガキ	(10.6)	(8.2)		(4.0)	(4.7)	A.B.C	1/2	Fig.11	S0-5
7	土師器 鉢	床面	[口] ヨコナデ [体] ハケ→ナデ→ヘラナデ	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ナデ→ヘラナデ	(11.3)	9.0	9.1	4.2	7.2	A.B	3/4	野P	S0-1
8	土師器 鉢	床面	[口] ヨコナデ→ハケ [体] ハケ→ミガキ	[口] ヨコナデ→ヘラミガキ→ハケ→ハケ→ヘラミガキ [体] ナデ→ミガキ	(17.8)	(14.2)	(18.1)	(4.0)	(15.0)	A.C.B	1/4	Fig.6	S0-8

第96図　SI 401出土遺物（2）



番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 鉢	床面	[口] ヨコナデ [体] ハケメ・ナデ・ヘラナデ	[口] ヨコナデ・ナデ [体] ナデ・ヘラナデ	(8.5)	9.0	10.4	−	(6.4)	A.C.B	1/2	Po.1	50-2
2	土師器 鉢	床面	[口] ナデ [体] ナデ・ハケメ	[口] ナデ [体] ナデ・ヘラナデ	(11.4)	(11.2)	12.5	(7.8)	7.8	A.C.B	1/2	Po.1	50-7
3	土師器 鉢	床面	[口] ヨコナデ・ナデ [体] ハケメ・ヘラナデ [底] ヘラナデ	[口] ヨコナデ・ヘラナデ [体] ハケメ→[底]	(26.0)	(22.0)	(21.7)	(8.6)	13.8	A.C.B	1/4	Po.9	51-5

第97図　SI401出土遺物（3）

没したものと考えられる。遺物は出土していない。

ＳＫ404（第98・99図）

ＳＩ401住居跡の東側約4mに位置する土壙で、北西部をＳＫ409土壙によって壊されている。南北約3.5m、東西約2.0mの不整方形をなし、深さは約30cm残っていた。堆積土は5層に分けられ、いずれも自然堆積と考えられる。

遺物は堆積土第1層から非ロクロ調整の土師器の壺が出土している。

ＳＫ409（第98・99図）

前述のＳＫ404土壙と重複し、これよりも新しい土壙である。南北2.0m以上、東西1.2m以上の不整形をなし、深さは20〜35cm残っていた。堆積土は4層で、いずれも自然堆積である。

遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器の鉢・壺が出土している。

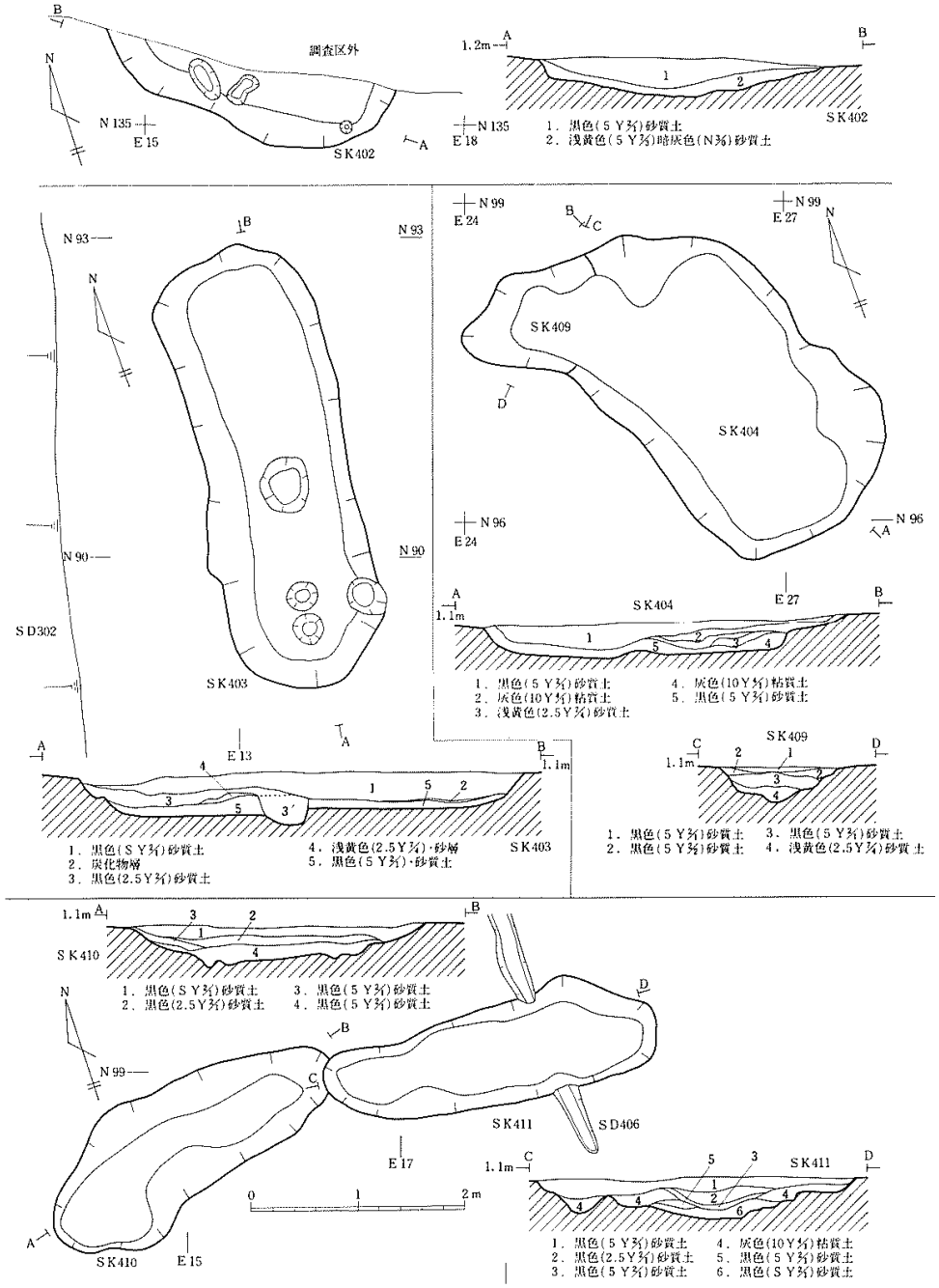
ＳＫ410（第98・101図）

ＳＩ401住居跡の北側3〜4mに位置する土壙である。ＳＫ411土壙と重複し、これよりも古い。東西約3.1m、南北0.9〜1.3mの歪んだ長楕円形をなし、深さは25〜36cm残っていた。堆積土は4層に分けられ、いずれも自然堆積と考えられる。

遺物は堆積土第4層から非ロクロ調整の土師器の台付甕・壺が出土している。

ＳＫ411（第98図）

前述のＳＫ410土壙と同様に、ＳＩ401住居跡の北側3〜4mに位置する土壙である。ＳＤ406溝、ＳＫ410土壙と重複し、ＳＤ406よりも古く、ＳＫ410よりも新しい。東西約3.2m、南北0.8〜1.0mほどの歪んだ長楕円形をなし、深さは14〜38cm残っていた。堆積土は6層に分けられ、いずれも自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。



第98図　SK402、403、404、409、410、411土壙

ＳＫ412（第 100・101 図）

調査区北半部中央で検出した土壙で、ＳＤ302 河川跡の東側 2m に位置する。ＳＤ406 溝と重複し、これよりも古い。東西 3.6～3.8m、南北 1.6～2.1m の歪んだ三角形をなし、深さは 10～25 cm残っていた。底面にはピット状の掘り込みが認められたが、切り合いは確認できなかった。堆積土は 2 層で、いずれも自然堆積である。遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器の甕が出土している。

ＳＫ413（第 100 図）

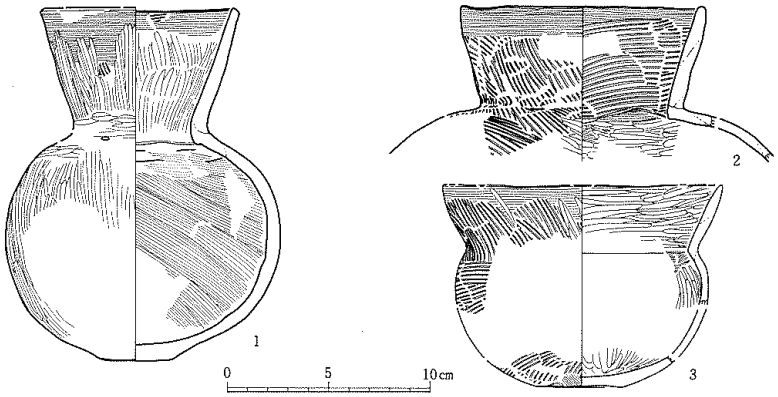
前述のＳＫ412 土壙の北側、ＳＤ302 河川跡東側の落ち際で出土した土壙である。東西 0.5～0.9m、南北約2.9mの中央部がくびれる長楕円形をなし、深さは15～20cm残っていた。堆積土は 2 層で、いずれも自然堆積である。時期を特定できるような資料は出土していない。

ＳＫ414（第 100・101 図）

調査区北端部中央で検出した土壙で、ＳＤ302 河川跡の東側 3～4m に位置する。ＳＫ415 土壙と重複し、これより新しい。東西 1.4～1.6m、南北約 2.3m の不整方形をなし、深さは 10～20 cm残っていた。堆積土は 1 層で、自然堆積である。堆積土中から非ロクロ調整の土師器の複合口縁の壺が出土している。

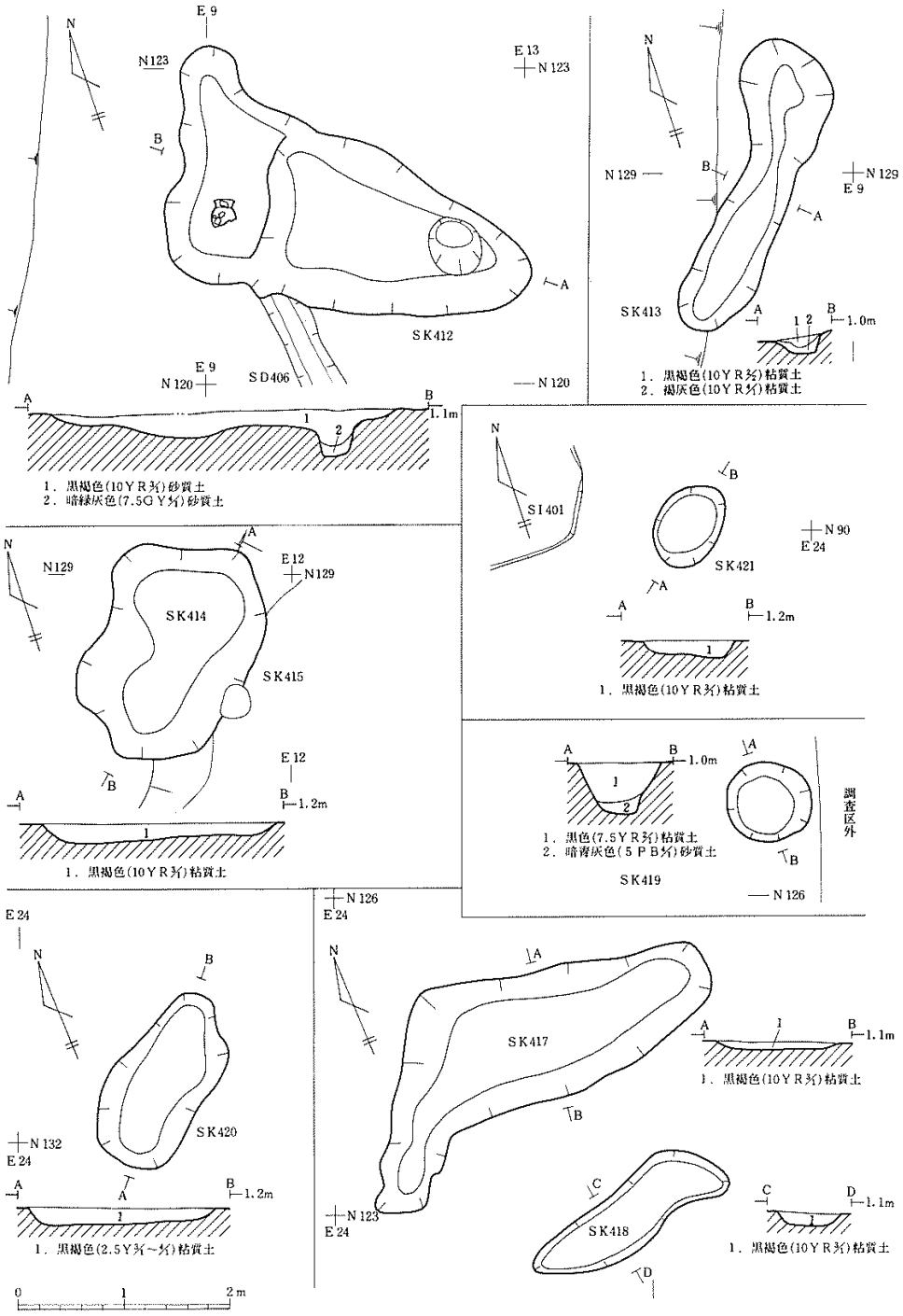
ＳＫ417（第 100 図）

調査区北西隅で検出した土壙である。東西約 3.9m、南北約 1.4m の東西に細長い不整形をなし、深さは約 10 cm残っていた。堆積土は 1 層で、自然堆積である。時期を特定できるような資料は出土していない。



番号	種別	遺構	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 壺	SK404	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ミガキ	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ケズリ	9.8	6.5	13.5	3.8	12.5	A.B.C	4/5	SK404 1層	52-1
2	土師器 壺	SK409	[口] ヨコナデ→ハケメ	[口] ヨコナデ→ケズリ→ミガキ	12.0	10.0	－	－	(7.6)	A.C.B	1/4	SK409 1～3層	52-2
3	土師器 鉢	SK409	[口] ヨコナデ→ハケメ [体] ハケメ [底] ケズリ	[口] ミガキ→ケズリ [体] ミガキ	(13.8)	(11.4)	(12.5)	3.9	(10.0)	A.B.C	1/2	SK409 1～3層	

第99図　SK404・409出土遺物



第100図　SK 412、413、414、417、418、419、420、421土壙

ＳＫ418（第100図）

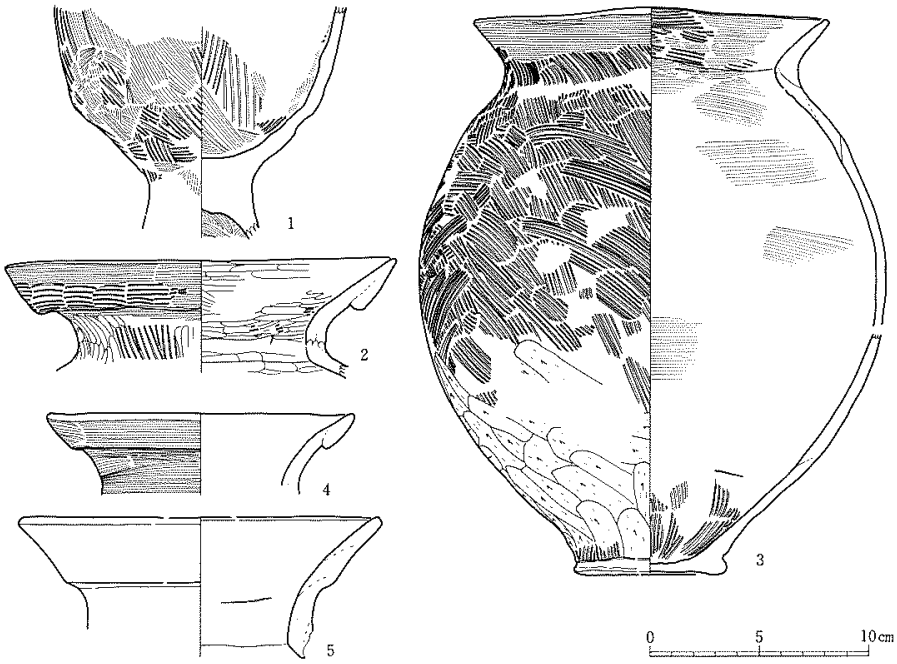
前述のＳＫ417の南側に位置する土壙である。東西約2.0m、南北0.5～0.6mの東西に細長い不整形をなし、深さは10～14cm残っていた。堆積土は1層で、自然堆積である。時期を特定できるような資料は出土していない。

ＳＫ419（第100図）

前述のＳＫ417土壙の北東側で検出した土壙である。径約80cmの円形をなし、深さは46～48cm残っていた。堆積土は2層からなり、いずれも自然堆積である。時期を特定できるような資料は出土していない。

ＳＫ420（第100図）

調査区北東部で検出した土壙である。長径約1.8m、短径約0.8mの歪んだ長楕円形で、深さは10～20cm残っていた。堆積土は黒褐色の粘質土からなる自然堆積土である。時期を特定できるような資料は出土していない。



番号	種別	遺構	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 頸径	法量(cm) 体径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器台付甕	SK410	[体] ハケメ→ナデ [台] ナデ	[体] ハケメ→ナデ [脚] ナデ	－	4.6	(12.3)	10.8	(10.7)	A.C	4/5	SK410 4層	52-3
2	土師器 壺	SK410	[口] ヨコナデ→ハケメ→ナデ→ハケメ→ミガキ	[口] ハケメ→ミガキ	17.9	11.2	－	－	(5.2)	A.B.C	1/1	SK410 4層	52-9
3	土師器 甕	SK412	[口] ヨコナデ→ハケメ [体] ハケメ→ヨコナデ [底] ナデ	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ヘラナデ	(16.2)	(13.4)	(21.3)	7.0	26.0	B.A.C	2/3	SK412 堆積土	52-4
4	土師器 壺	SK414	[口] 不明	[口] ヘラナデ	(16.6)	(10.3)	－	－	(6.4)	A.B.C	1/6	SK414 堆積土	
5	土師器 壺	SK414	[口] ヨコナデ	[口] 不明	(14.0)	(3.0)	－	－	(3.6)	A.B.C	1/3	SK414 堆積土	

第101図　SK410・412・414出土遺物

ＳＫ421（第 100 図）

調査区南東部で検出した土壙で、ＳＩ401 住居跡南東隅の南に近接する。長径約 80 ㎝、短径約 60 ㎝の楕円形をなし、深さは 14～18 ㎝残っていた。堆積土は 1 層で自然堆積である。時期を特定できるような資料は出土していない。

③、河川跡

Ａ区の南端部で東西方向に続くＳＤ115 河川跡と、Ｄ区からＢ区にかけて南北方向に続くＳＤ302 河川跡を検出しており、ＳＤ302 はＤ区で東西方向の河川と合流している。また、ＳＤ302 とＳＤ115 はＡ区の東側の調査区外で合流していると考えられる。

ＳＤ115 河川跡（第 4・103・104 図）

Ａ区南端部で検出した東西方向の河川跡で、さらに調査区の東西両側に続いており、Ａ区の東側の調査区外で、前述したＳＤ302 と合流すると考えられる。検出したのは河川の北半部だけであるため規模は不明である。

堆積層は、ＳＤ302 と同様に古墳時代以前のもの、古墳時代から 10 世紀前葉頃の灰白色火山灰以前の平安時代にかけてのもの、灰白色火山灰以後のものに大別して捉えられる。古墳時代以前の河川は、深さが湧水のため捉えられず不明である。堆積層は厚さ 1～2 ㎝のスクモ層を含む青灰色砂層である。遺物は出土していない。

古墳時代から灰白色火山灰以前の平安時代にかけての河川は、深さ約 1.5㎜で、堆積層は黒～黒褐色粘土とスクモの互層である。遺物は古墳時代前期とみられる土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・須恵系土器の他に鎌の柄などの木製品、牛の頭骨や大腿骨などの動物遺存体や種子が出土している。

ＳＤ302 河川跡（第 71・102・105～128 図）

Ｂ区の北東隅からＣ区の中央部、そしてＤ区の西半部にかけて検出した南北方向の河川跡で、南北両側ともさらに調査区外へ続いている。Ｃ・Ｄ区では、東・西両岸を検出しているが、Ｂ区では西岸を部分的に確認できただけである。また、Ｄ区の南半部では、西側から延びてくる河川と合流している。堆積層は層の特徴及び遺物の出土状況からみると、概ね 3 時期（古い方からＡ➡Ｂ➡Ｃとする）に分けて捉えることができる（第 71 図のＳＤ302 断面図）。方向は時代によって多少変わるが、およそ南北方向である。なお、第 71 図のＳＤ302 の断面図と第 102 図の層位はそれぞれ対応している。

最も古いＡは、古墳時代の遺物を含む堆積層の下に堆積している弥生時代から流れていたと考えられる河川跡である。黒褐色粘土と厚さ 1～2 ㎝程の茶褐色スクモ層を含む黒味を帯びた青灰色砂層である。幅は 25㎜以上で、深さは湧水のため底面を確認できず、2.5㎜以上である。この中で黒褐色粘土層からは、弥生土器の甕の胴部下半資料（第 121－212）

1 点の他、多量の自然木が出土している。

Ｂは、古墳時代から 10 世紀前葉頃以前の平安時代にかけての河川である。幅は約 25m、深さ約 2m で、河川の底面は現在の標準海水面よりも低い。堆積層は古いものからみると、厚さ 1～2 cm程の茶褐色スクモ層を含む青灰色砂層（第 71 図の 9ａ層）。黒色～黒褐色粘土（5～8 層）、黄褐色粘土（5A・6A・7A・8A層）である。このＢの堆積層の直上には、10 世紀前葉頃に降下したと考えられている灰白色火山灰層（第 4 層）が見られる。

Ｃは、10 世紀前葉頃以降の河川で、幅は深い部分が 5～7m と古墳時代に比べるとかなり狭くなり、流路は西寄りになる。深さは約 1.7m である。堆積層は、暗黄褐色粘土（3 層）、多少スクモ化した黒色土・黒褐色土（2 層）、褐灰色粘土（1 層）で、3Ｂ層には多量の灰白色火山灰ブロックが見られる。

遺物は、各時代の堆積層から出土している。Ａからは、いずれも破片資料であるが、弥生土器の甕や高坏脚部の破片が出土している。

Ｂでは 5～10 層から多量の土器の他、木製品（第 125～128 図）、石製模造品（第 122・123 図）などが出土している。土器は古墳時代前期の塩釜式から中期の南小泉式を中心とした土師器が中心である。河川跡全体から万遍なく出土するのではなく、Ｃ区の南・北両端部付近の西側斜面から集中して出土している。

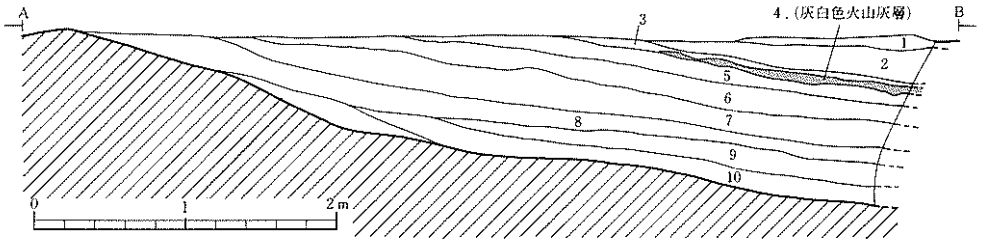
第 10 層からは非ロクロ調整の土師器の坏・壺・台付甕・大型の甕・小型の甕などが出土している（第 105・106 図）。坏はケズリ調整の丸底の底部から直線的に緩やかに立ち上がり、口縁部が直立するもの（105－6）で、胴部外面はナデ調整が施されている。壺は器高が 8 cmほどの小型のもの（105－3）で、胴部上半部が強く張り出している。胴部外面は丁寧なミガキ調整が施されおり、底部は平底である。台付甕は胴部が球形をなし外面にハケメ調整、内面にナデ調整が施されたもの（105－1）である。大型の甕（105－2・106－9）は両者とも胴部の最大径が中央部よりやや上半部にある胴部が球形に近いもので、胴部外面はナデ調整、内面はヘラナデ調整である。小型の甕（105－8）は平底で胴部が球形に近く、口縁部が直線的に外傾するものである。胴部外面はナデ調整の後、概ねミガキ調整が施されている。

第 9 層からは比較的多量の土師器が出土している。いずれも非ロクロ調整のもので、この中には高坏、坏、鉢、壺、大型の甕、小型の甕などがある（第 105・106 図）。高坏は全体形を窺えるものはないが、坏部と脚部がそれぞれ出土している。坏部は頸部でくびれ長い口縁部が直線的にやや外傾するもので、内外面ともミガキ調整が施されている（106－12）。脚部は円窓の見られるものはなく、円錐状になるもの（106－1）、中空で柱状をなし、裾部が屈折して広がるものがある。外面の調整はいずれもナデ調整である。坏はいずれも破

片資料であるが比較的多く出土している。緩やかに立ち上がり口縁部が外反し内面に稜線が認められるもの、胴部から口縁部まで屈曲することなく緩やかに立ち上がるものなどがみられる。図示したものは混入の可能性もあるが、丸底で内湾しながら緩やかに口縁部まで立ち上がるもので、外面の口縁部と胴部の境には稜線がある（106－7）。鉢は、平底で底部からほぼ直線的に口縁部までに立ち上がる小型もの（105－4・106－16）と、上げ底気味の平底で、胴部が半球状をなし口縁部が長く直線約に外反するもの（105－5）とがある。5 は口縁部の内外面とも横ナデ調整の後ミガキ調整が、胴部は外面がハケメ調整、内面がヘラナデ調整の後にそれぞれミガキ調整が施されている。壺は口縁部資料だけで全体形を窺知れるものはない。単純口縁で比較的短い口頸部が直立気味に立ち上がるもの（106－17）、単純口縁の大型の壺とみられ、口頸部が比較的長く外反するもの（106－14）、複合口縁で口縁部の段が不明瞭な頸部が外反するもの（106－15）がある。大型の甕には胴部がやや縦に長い楕円体で外面ナデ調整のもの（106－18）、ほぼ球形の胴部で外面ケズリ調整のもの（106－10）がある。小型の甕は平底で外傾する短い直線的な口縁部のもの（106－13）である。この他、図示していないが脚部が中空で柱状の高坏や小型の坏類が一定量出土している。

第 8 層からは少量であるが非ロクロ調整の土師器の高坏・大型の甕が出土している（第 107 図）。高坏は底部と胴部が稜によって区別され、底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる。脚部は柱部が中空で裾部との境が明瞭なもの（20）で、裾部はやや外反気味である。大型の甕は胴部の最大径が下半部にある楕円体をなすもので、胴部外面はナデ調整の後でミガキ調整が施されるもの（19）とナデ調整のもの（24）がある。

第 7 層からは非ロクロ調整の土師器の高坏・坏・壺・大型の甕などが出土している（第 107～110 図）。高坏は坏部の資料には特徴を把握できるものがないが、脚部資料には円孔の有るものとないものがあり、円孔の有るものは円錐状をなす（107－23）。円窓のないものは中空で柱状をなし、裾部まで屈折することなく緩やかに続くものである（107－22、108－28）。坏は出土量が急増している。形態にもかなりヴァラエティーがみられる。胴部から口



第102図　SD302河川跡断面図（C区南端部）

縁部までに屈曲がみられず内湾気味に緩やかに立ち上がる底部が丸底気味のもの（109－36）と平底のもの（109－34、110－46）、胴部が内湾し、頸部で屈折して口縁部が外反するもの（108－30・31、109－35・38～41、110－47・50）で、口縁部が短く内面に稜線がみられるもの（107－30・31、109－40・41、110－47）、口縁部がやや長く屈曲の弱いもの（109－38・39）、頸部のくびれが強く口径より胴部の最大径が大きく、口縁部が直立気味にやや外傾するもの（109－35、110－50）、浅い丸底で口縁部が直立するもの（110－48・49）、平底で内湾して立ち上がる胴部から屈曲して口縁部が直立するもの（109－37）などがある。壺には全体形を窺えるものは少ないが、単純口縁で口頸部がほぼ直立する短いもの（107－21）、長く直線的な口頸部が外傾し、胴部が強く張り出す平底のもの（108－29）がある。大型の甕は胴部がほぼ球形をなし、胴部外面はハケメ調整の後にナデ調整、さらにミガキ調整が部分的に、また内面はハケメ調整が施されているもの（107－19）、縦に長い胴部で最大径が中央やや下部にある平底のもの（108－25）で、内外面ともナデ調整が施されている。胴部の高さが幅よりやや長く、最大径が中央より下半部にあるもの（109－33、110－45）で、45 は外面がハケメ調整の後にケズリ調整が、内面はナデ調整が施されている。33 は外面がナデ調整、内面はケズリ調整が施されている。口径が胴部中央にある最大径より大きく縦に長いもの（109－27）で、外面はナデ調整の後にケズリ調整が、内面はナデ調整が施されている。胴部上半部に最大径がある短い外傾する口縁部のもの（108－26）で、胴部の内外面ともハケメ調整が施されている。

第 6 層からは非ロクロ調整の土師器の坏・甕・高坏などが出土している（第 112・113）。坏には平底で胴部から口縁部まで緩やかに立ち上がるもの（112－68）、平底で胴部が内湾し口縁部が内傾するもの（113－86）、丸底気味で内湾しながら口縁部まで緩やかに立ち上がるもの（112－72）、浅い丸底で口縁部が外反して直立するもの（112－63）、丸底で内湾気味に緩やかに立ち上がり、口縁部が直立するもので口縁部がやや長いもの（112－71）と短いもの（112－69・70）がある。これらの中の 69・70 には、内外面の全面に漆が塗られている。甕には胴部下半部に最大径がある縦に長いもので、外面はナデ調整、内面はヘラナデ調整が施されている（112－62）。

第 5 層からは少量であるが、奈良時代～平安時代の土師器の坏・甕が出土している。

石製模造品は、破片資料も含めて約 20 点出土している。いずれも滑石製で、勾玉形・剣形・鏡形のものがみられる。

木製品は第 9 層上面と第 6A 層から出土しており、この中の第 9 層上面から出土したものには輪鐙が 1 点みられる。輪鐙は輪部が一部欠損しているが、全体の形を把握できる資料である。木製の輪鐙は、類例が国内では滋賀県神宮寺遺跡で 1 点出土している以外知ら

れていない貴重なものである。また、本遺跡のように一般の集落跡から輪鐙が出土したことは、一般に普及した馬具のあり方を知る上でも貴重な発見と考えられる。この他第９層からは、組合せ式の鍬と両端部に抉りを持つ板状の木製品が出土している。この組合せ式の鍬はいわゆる「ナスビ形」といわれるもので、柄と身の境に両側からからそれぞれ２ヵ所にえぐり込みを入れて突起を作り出している。また着柄部分の先端部には段が作り出されている。第 6A層から出土した組合せ式の鍬は、柄の断面が蒲鉾型をなす太いもので、身の部分は側縁に突起をもっていない。刃先にはU字形の鉄製の刃を装着するための作り出しがみられる。

Ｃでは第 3Ｂ層から土器と木製品・土製品の土玉・土錘の他、鹿の骨・角などの動物遺存体や種子・貝殻なども出土している。土器には土師器、須恵器、須恵系土器があり、この中では土師器が最も多い。土師器はすべてロクロ調整のもので、ほとんどが坏である。坏では完形のものが比較的多くみられ、単独あるいは数個まとまって出土している。この中には墨書されたものも見られる。木製品にはほぼ完形である鋤の未製品、破損品であるがロクロ挽きの椀、下駄の他、上半部が欠損しているが横槌とみられるもの、完形の鎌（？）の柄、曲物の底板・側板の他、用途不明のものがある。

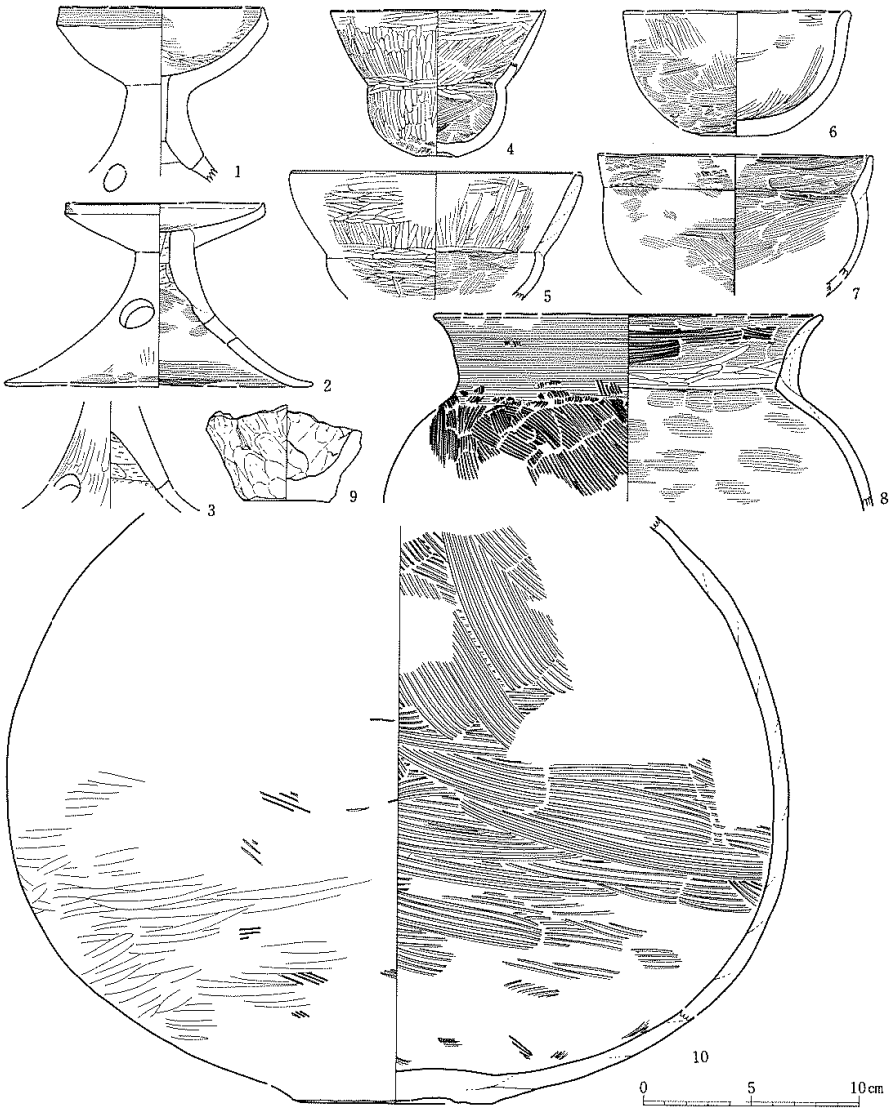
動物遺体としては、シカ、ウマ、ウシなどの動物の他に鳥類の骨も少量出土している。この中ではシカが最も多く出土しており、また鹿角も５点出土している。

その他、層位が不明なものとしては、石製模造品、剥片石器、磨製石斧の破片、砥石などがある。

遺構外から出土した遺物（第 123・124 図）

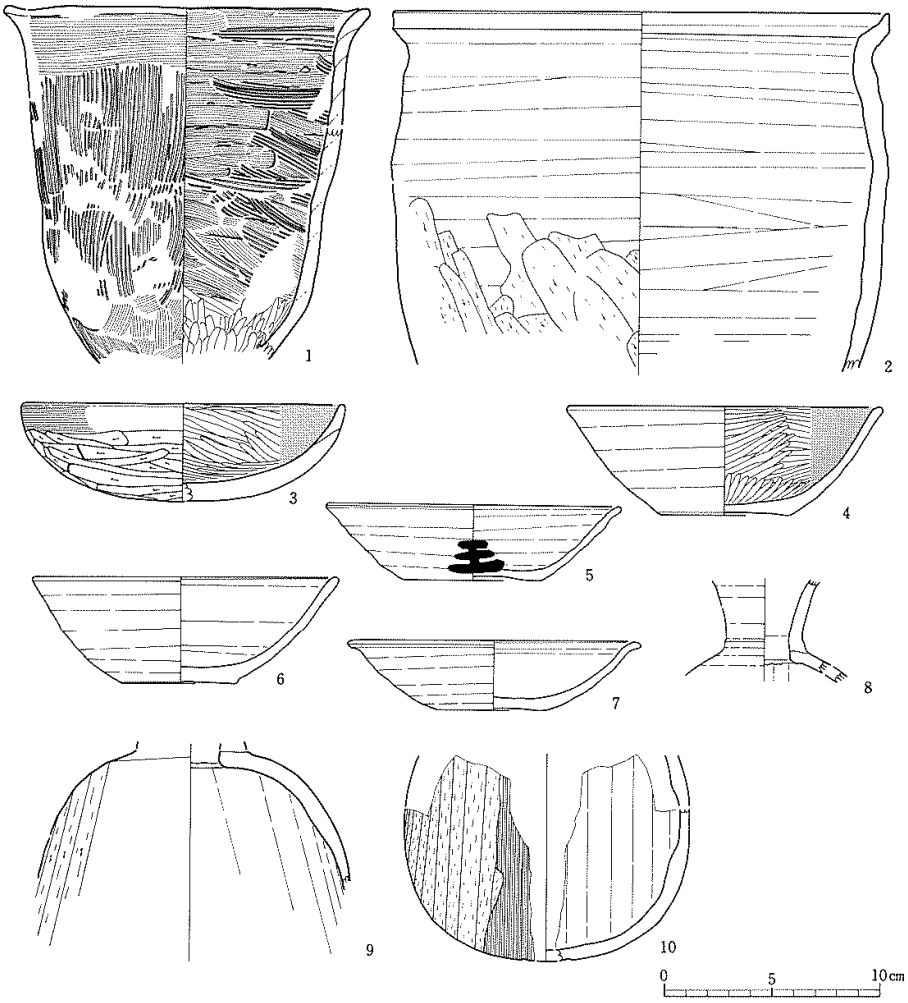
表土からは、古墳時代から平安時代にかけての土師器や須恵器および須恵系土器をはじめ近世以降の陶磁器や石器、瓦、石製模造品、土玉などが出土している。石器には弥生時代のいわゆる太型蛤刃と呼ばれている磨製石斧や剥片のほか砥石がある。瓦は少量出土しており、種類には軒丸瓦・平瓦・丸瓦がある。この中の軒丸瓦は瓦当文様が重弁蓮花文である。

Ａ区からは、土師器や須恵器の他に土玉、剥片石器などが出土している。また、Ｂ区からは古墳時代の土師器、軒丸瓦・平瓦、石製模造品など、Ｃ区からは弥生土器および古墳時代と平安時代の土師器の他に石器（剥片）・砥石・磨製石斧が、Ｄ区からは古墳時代の土師器がそれぞれ出土している。



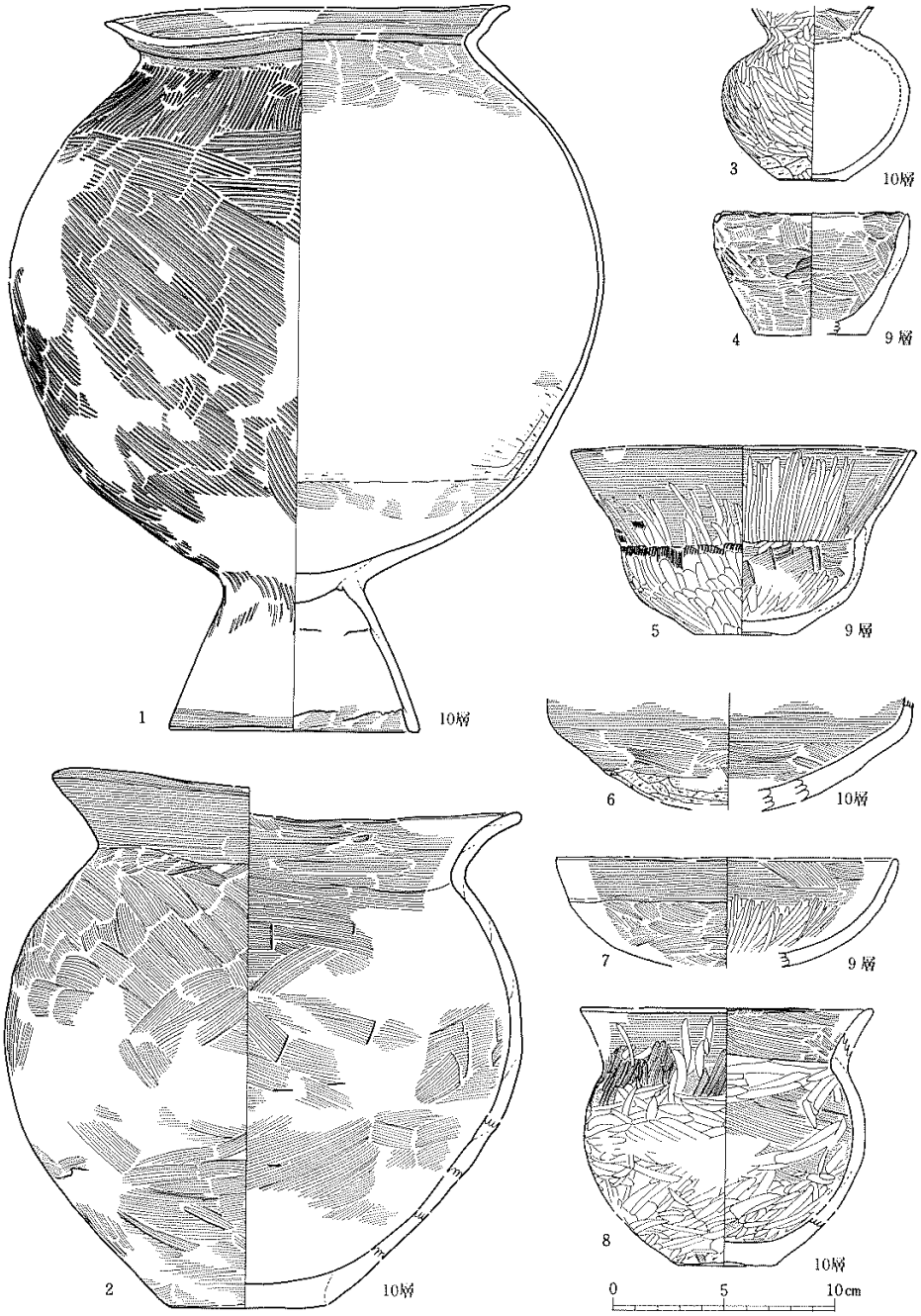
番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
1	土師器 器台	5b	[坏] ヨコナデ→ナデ [脚] 不明	[坏] ヨコナデ→ミガキ [脚] 不明	9.5	2.9	9.9	−	(8.2)	A.B.C.D.F.E	4/5		52−8
2	土師器 器台	5b	[坏] ヨコナデ [脚] ハケメ→ミガキ→ヨコナデ	[坏] ミガキ [脚] ケズリ→ナデ→ヨコナデ	(9.1)	2.7	(8.8)	14.4	8.6	A.B.C.E	4/5		
3	土師器 高坏	5b	[脚] ミガキ	[脚] ナデ?	−	2.6	−	−	(5.6)	A.B.C	1/1		
4	土師器 鉢	5b	[口〜体] ミガキ→ナデ	[口〜体] ミガキ→ナデ→ミガキ	(10.6)	−	(10.2)	2.0	5.9	A	1/6		52−5
5	土師器 鉢	5b	[口] ミガキ [体] ミガキ	[口] ミガキ [体] ナデ	(13.6)	−	(10.1)	−	(6.1)	A.C.B.E	1/6		
6	土師器 鉢	5b	[口] ミガキ [体] ミガキ→ナデ [底] ナデ→ミガキ	[口] ミガキ [体] ミガキ→ナデ	(10.0)	−	6.5	2.0	6.9	A.B.C.E.F	2/3		
7	土師器 鉢	5b	[口] ナデ [体] ナデ	[口] ナデ	(12.8)	−	(12.3)	−	(6.6)	A.B.C.E	4/5		52−7
8	土師器 甕	5b	[口] ハケメ→ヨコナデ [体] ハケメ	[口] ハケメ→ナデ→ミガキ [体] ナデ	(18.2)	(15.8)	(21.8)	−	(9.1)	A.C.B.D.E.F	1/5		
9	土師器 ミニチュア	5b	[口〜体] ナデ	[口〜体] ナデ	7.2	−	−	4.0	4.5	A	1/1		52−6
10	土師器 甕	5b	[体] ハケメ→ミガキ	[体] ハケメ→ハケメ→ナデ→ミガキ	−	−	(30.4)	(9.6)	(27.5)	A.B.C.F.E	2/5		53−1

第103図　SD115出土遺物（1）

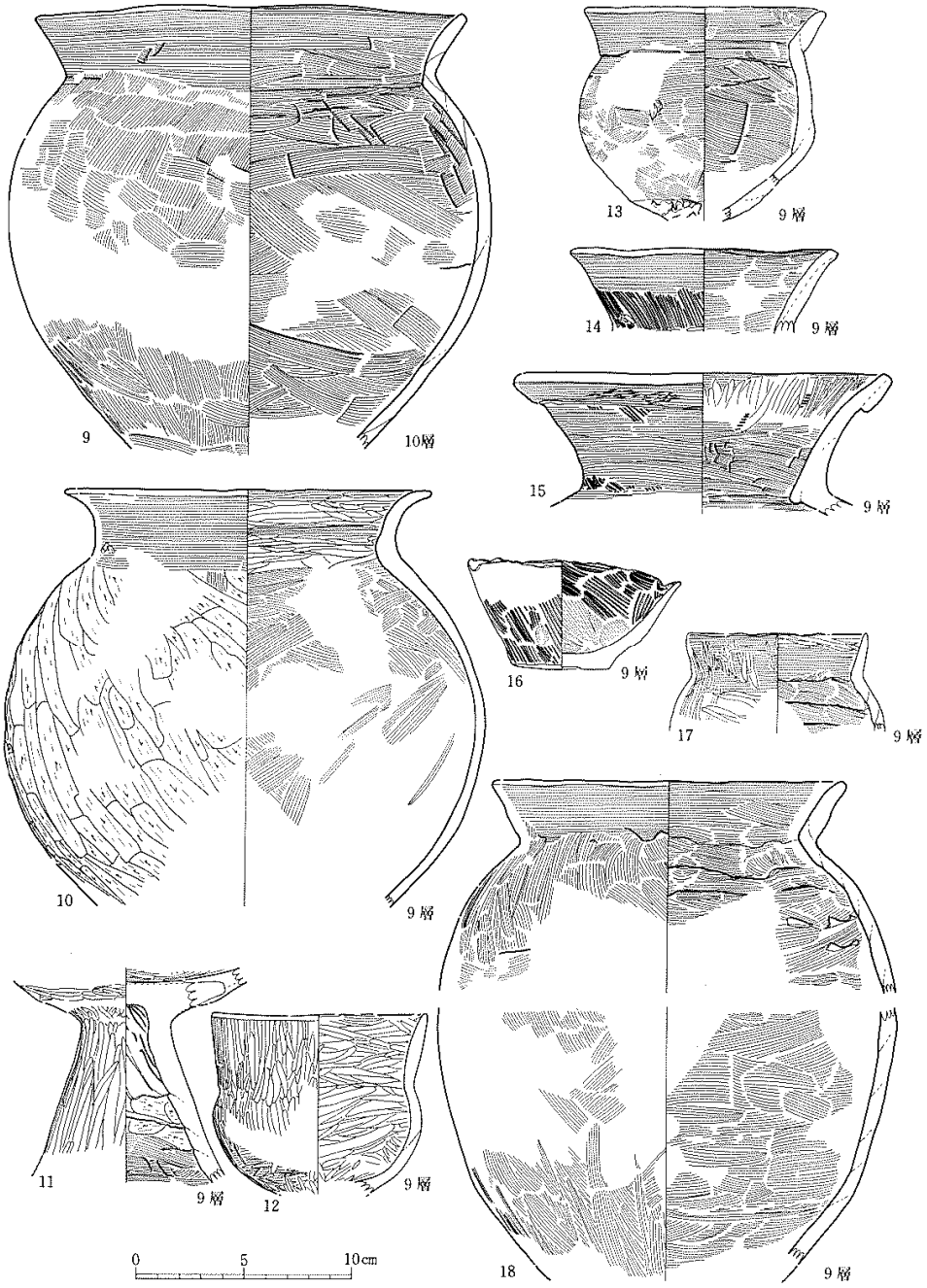


番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器 甕	5b	[口] ヨコナデ [体] ハケメ・ナデ	[口] ハケメ→ナデ [体] ナデ・ハケメ・ミガキ	(17.0)	(14.7)	14.5	–	(16.6)	A.B.C	1/4		53-5
2	土師器 甕	砂層	[口～体] ヨコナデ・ヘラケ	[口～体] ヨコナデ	23.0	21.5	23.0	–	(16.9)	A.B.C	3/5		
3	土師器 坏	5b	[口] ヨコナデ [体] ナデ(ケズリ)	[口～体] ミガキ 黒色処理	(15.0)	–	–	丸底	4.5	A.B.C	1/3		53-2
4	土師器 坏	4層	ヨコナデ [底] 回転糸切無調整	ヨコナデ	14.2	–	–	5.2	5.0	A	2/3		52-10
5	須恵器 坏	5層	ヨコナデ [底] ヘラ切無調整	ヨコナデ	13.5	–	–	6.3	3.6	B.A	1/1	墨書(王)	53-4
6	土師器 坏	4層	ヨコナデ [底] 回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	14.6	–	–	6.3	5.1	A.C	1/1		53-6
7	土師器 坏	3層	ヨコナデ [底] 回転糸切無調整	ヨコナデ	13.6	–	–	5.0	3.2	A	1/1		53-3
8	須恵器 壺	5b	[頸] ヨコナデ	[頸] ナデ	–	3.6	–	–	(5.0)	A.B	1/3		
9	須恵器 横瓶	5C	[体] ヤスリ	[体] ヨコナデ	–	5.2	–	–	(9.9)	A	1/3		
10	須恵器 横瓶	5b	[体～底] ヨコケズリ・ヨコナデ	[体] ヨコナデ	–	–	(13.2)	–	(9.5)	A	1/4		

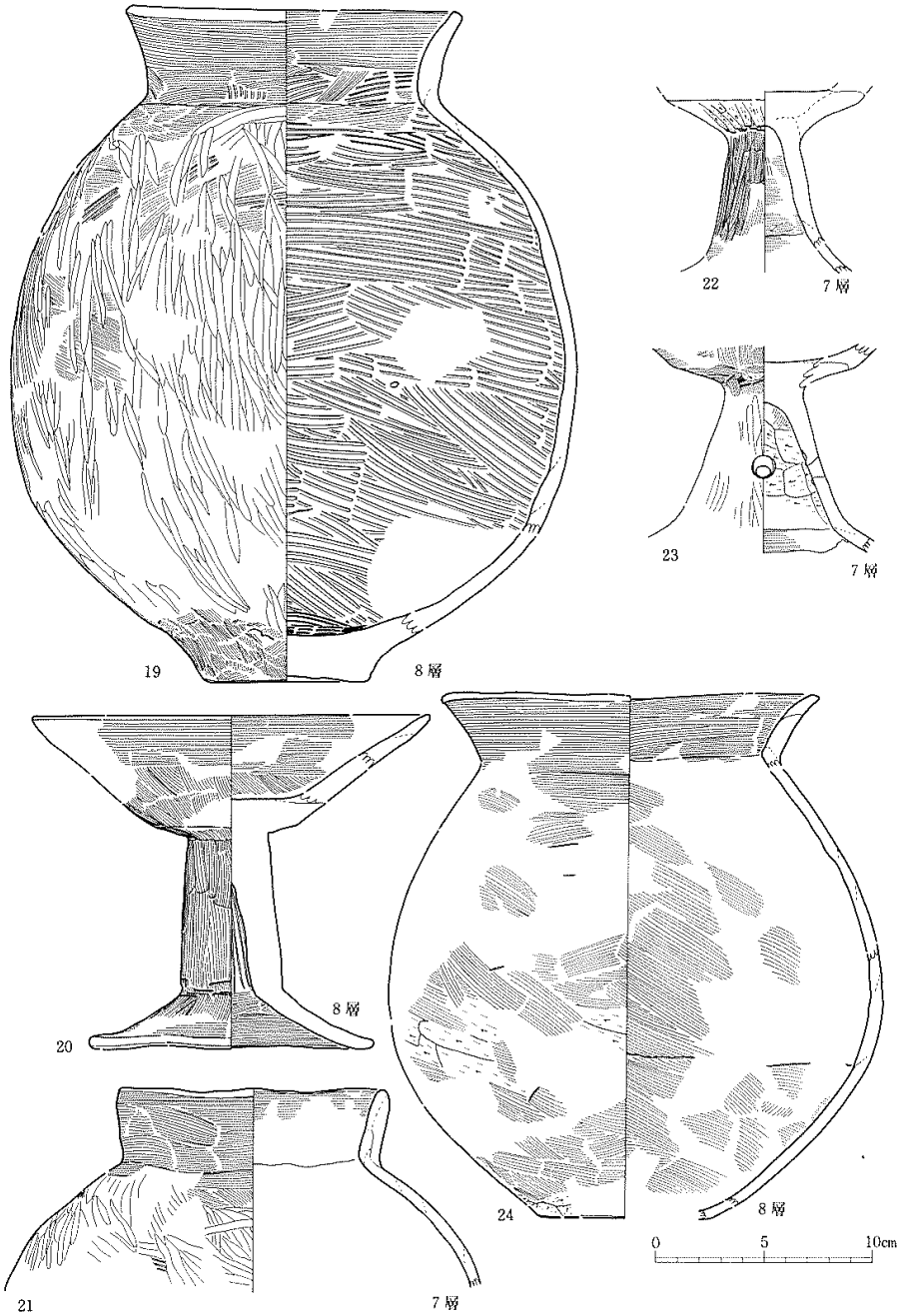
第104図　SD115出土遺物 (2)



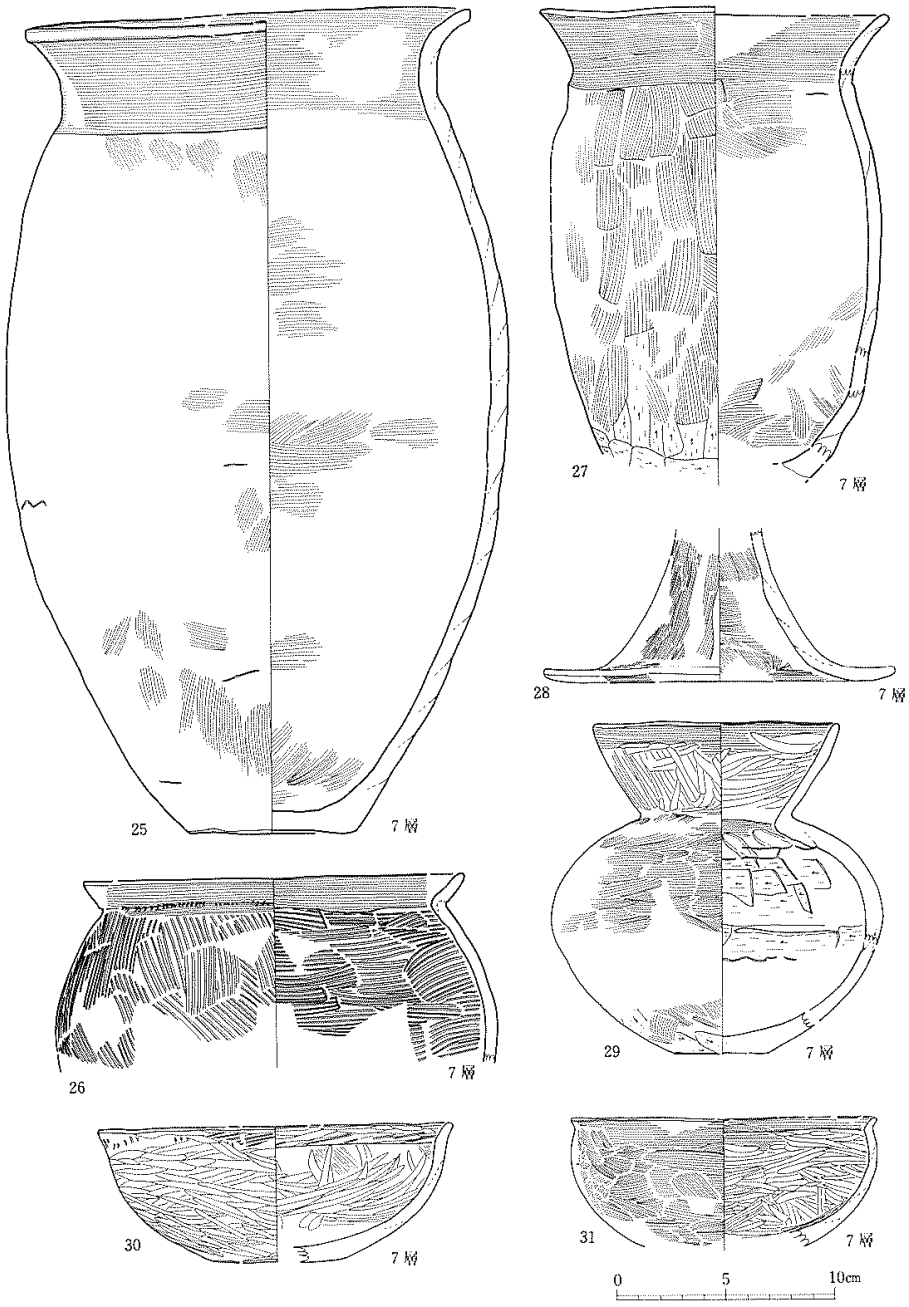
第105図　SD302出土遺物 (1)― 9 ・10層



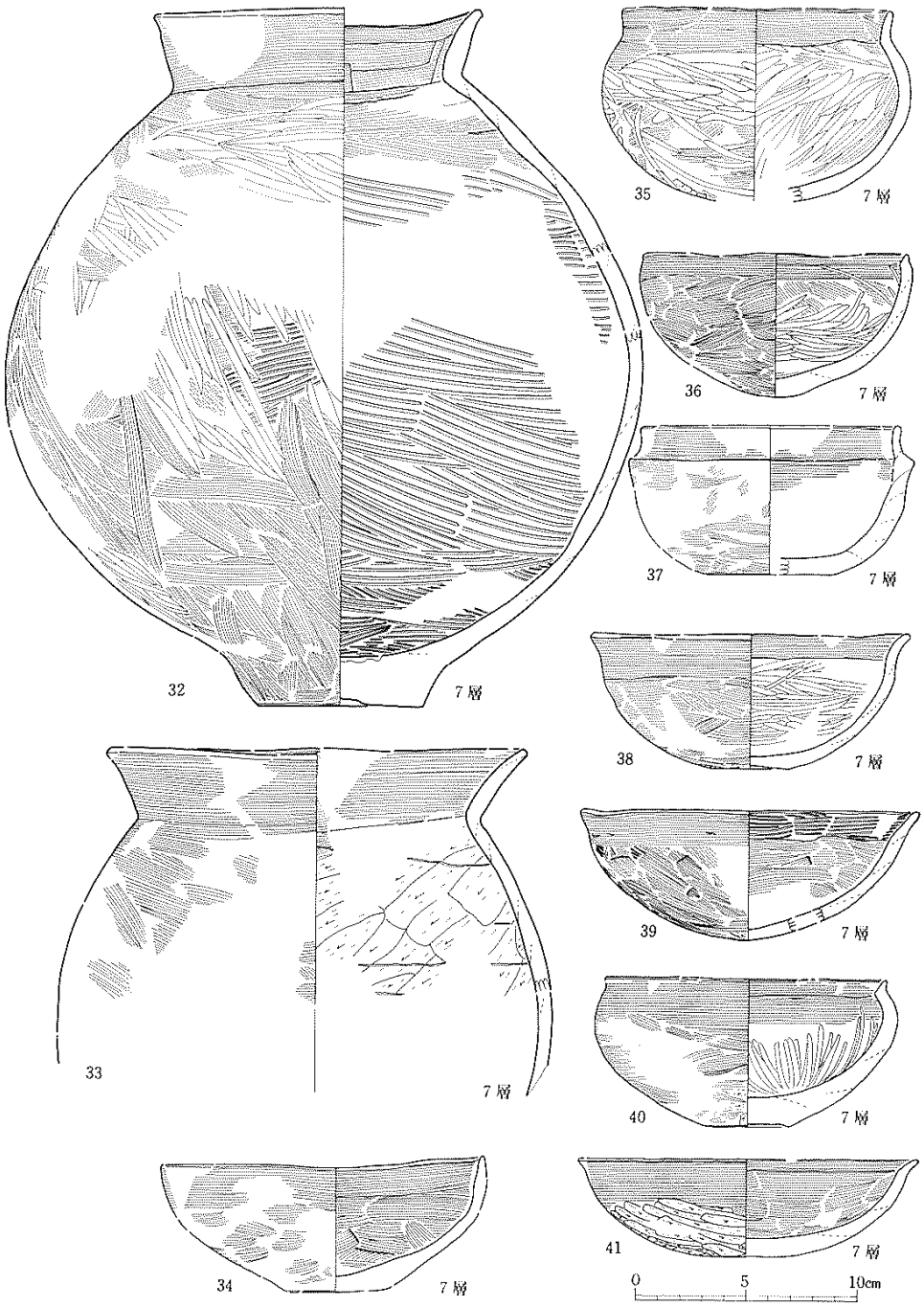
第106図　SD302出土遺物 (2)― 9 ・10層



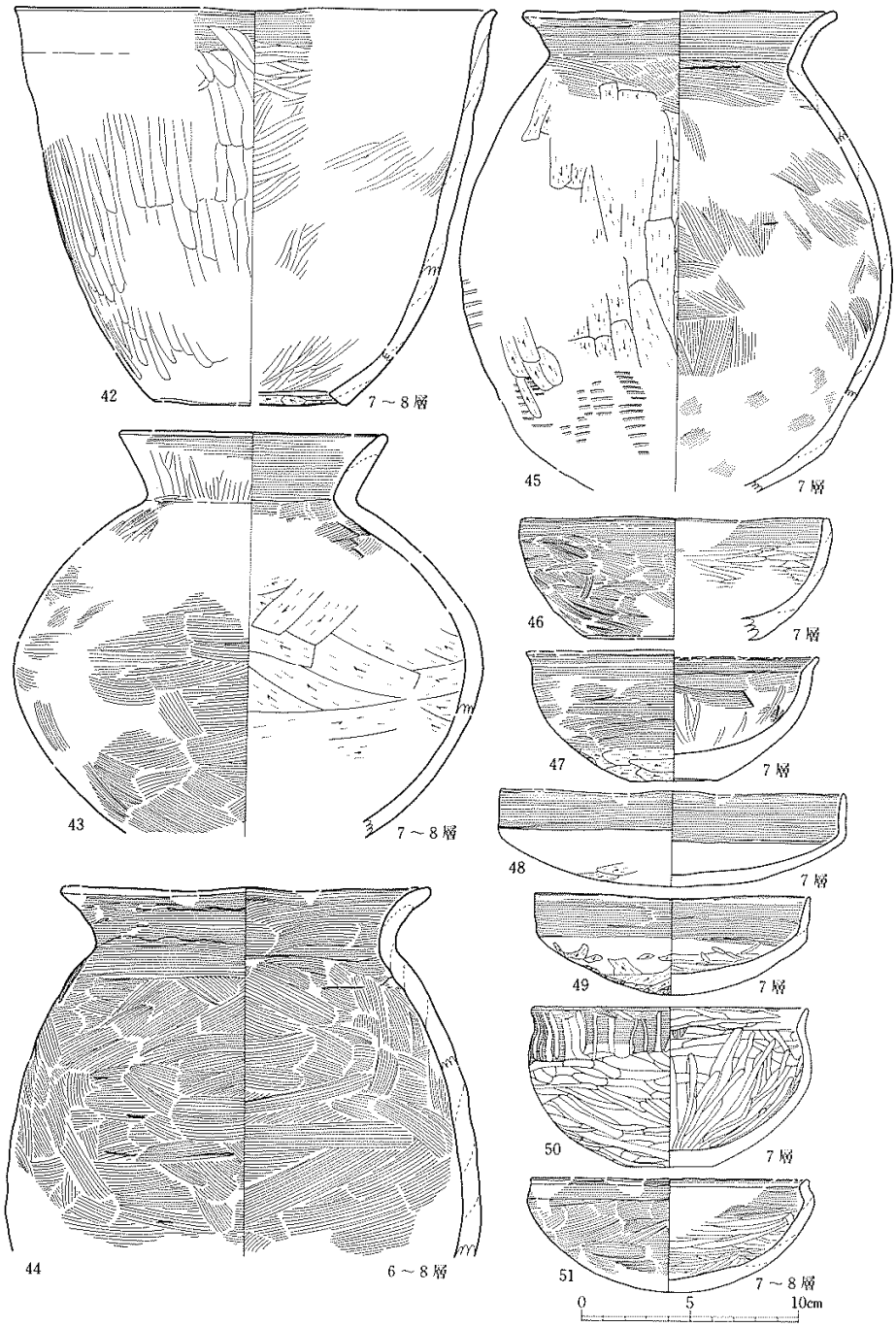
第107図　SD302 出土遺物 (3)― 7 ・ 8 層



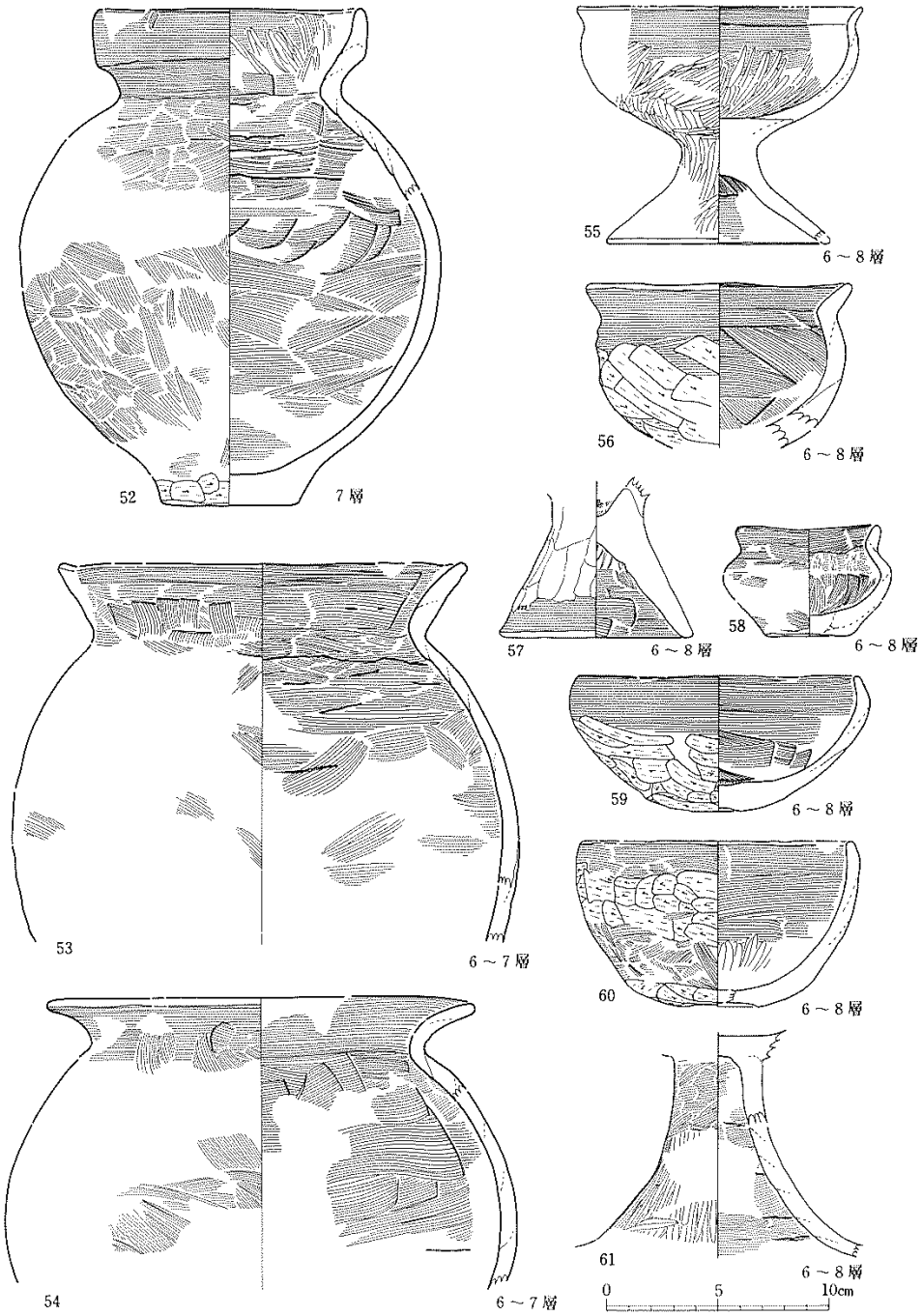
第108図　SD302出土遺物 (4)― 7 層



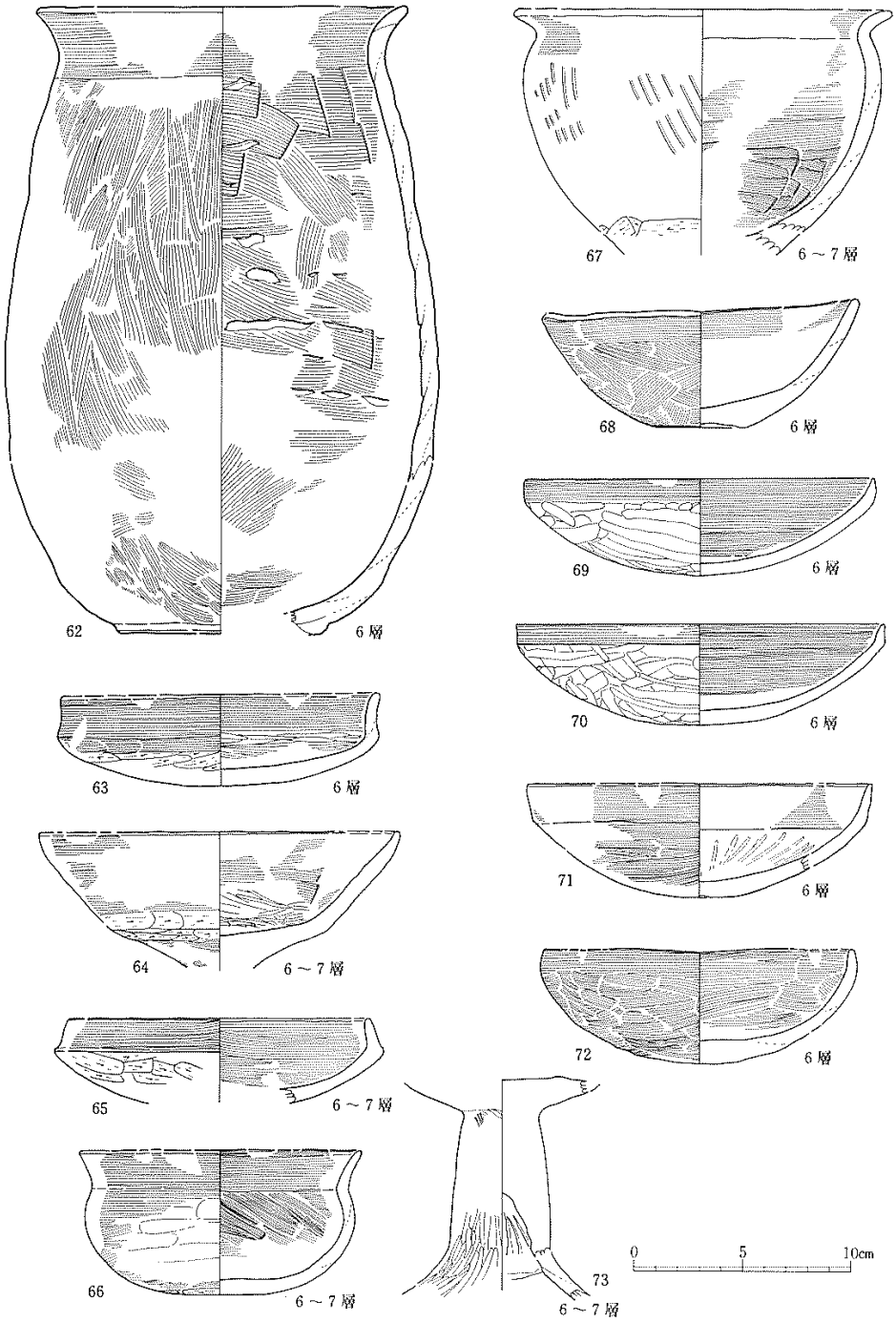
第109図　SD302出土遺物 (5)― 7 層



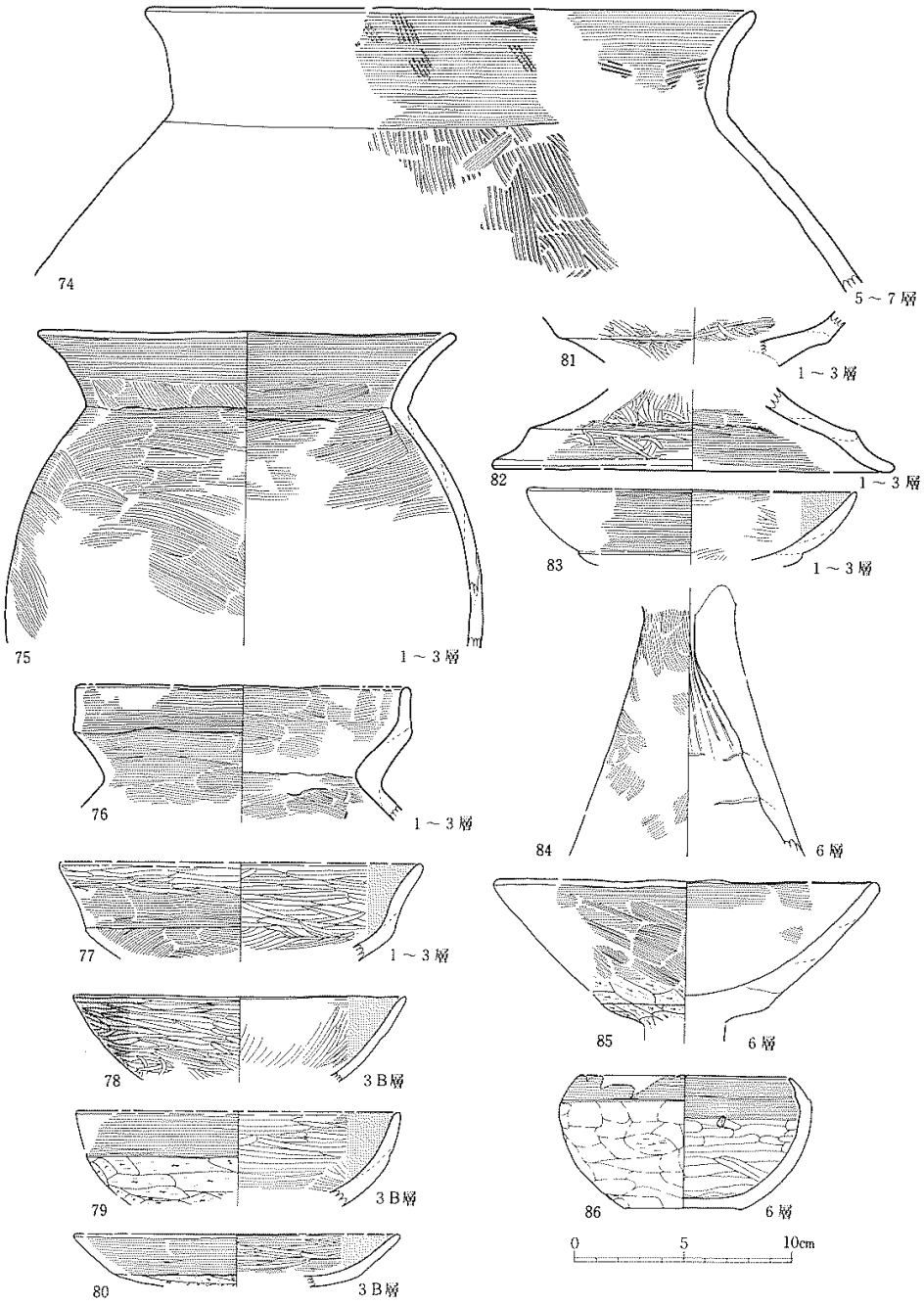
第110図　SD302出土遺物 (6)― 6～8・7～8・7層



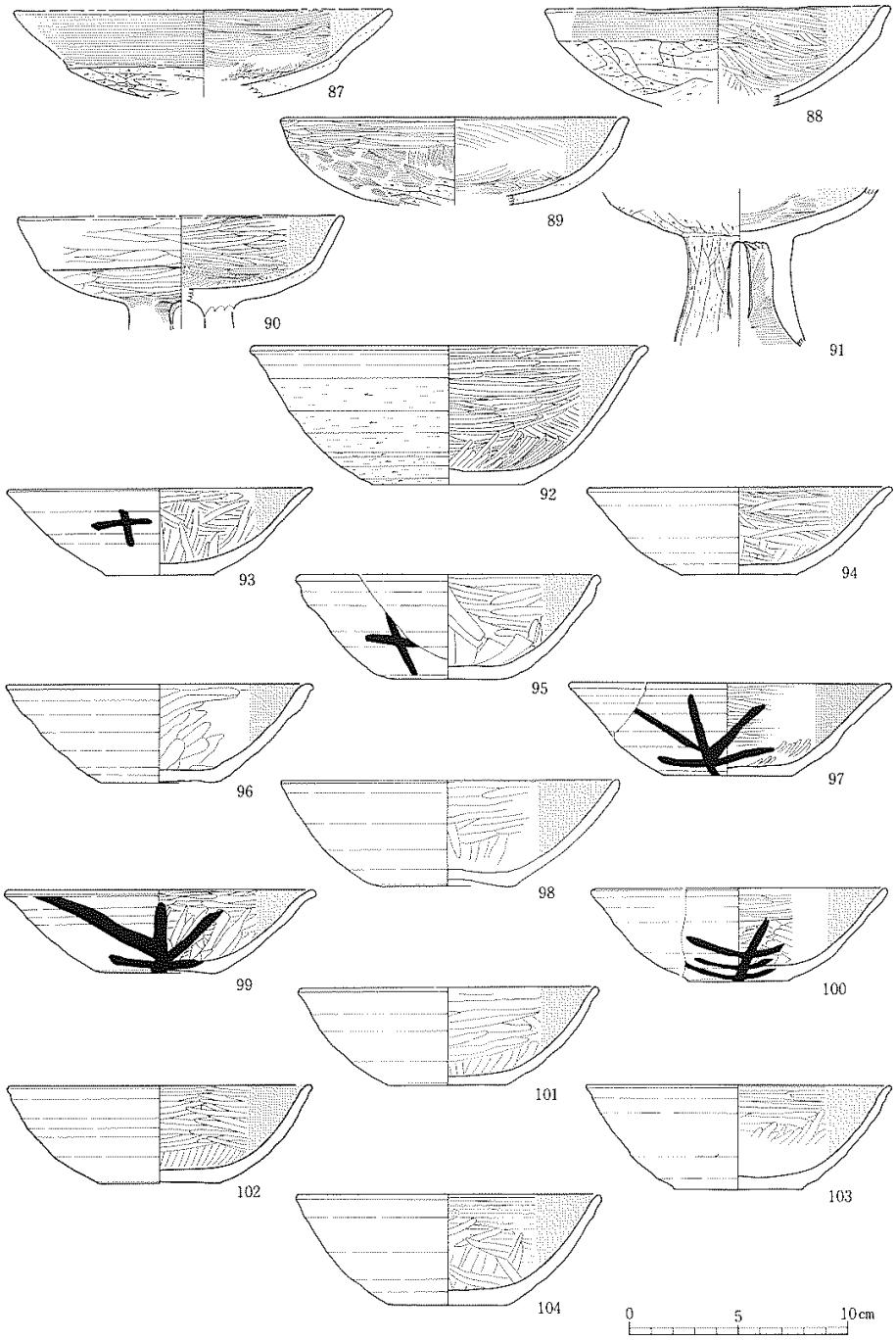
第111図　SD302出土遺物 (7)― 6 ～ 7 ・ 6 ～ 8 層



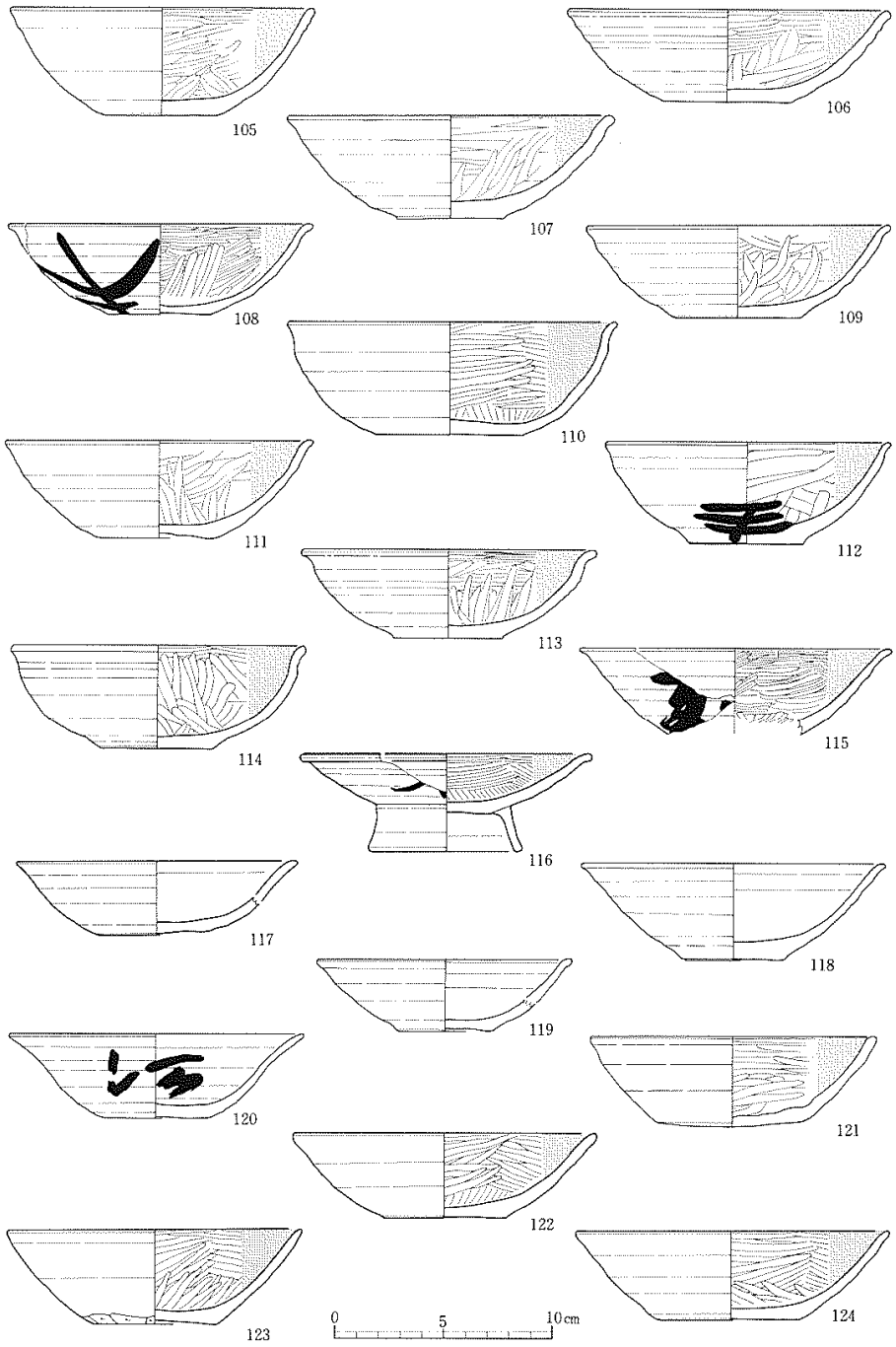
第112図　SD302出土遺物 (8)― 6 ・ 6 ～ 7 層



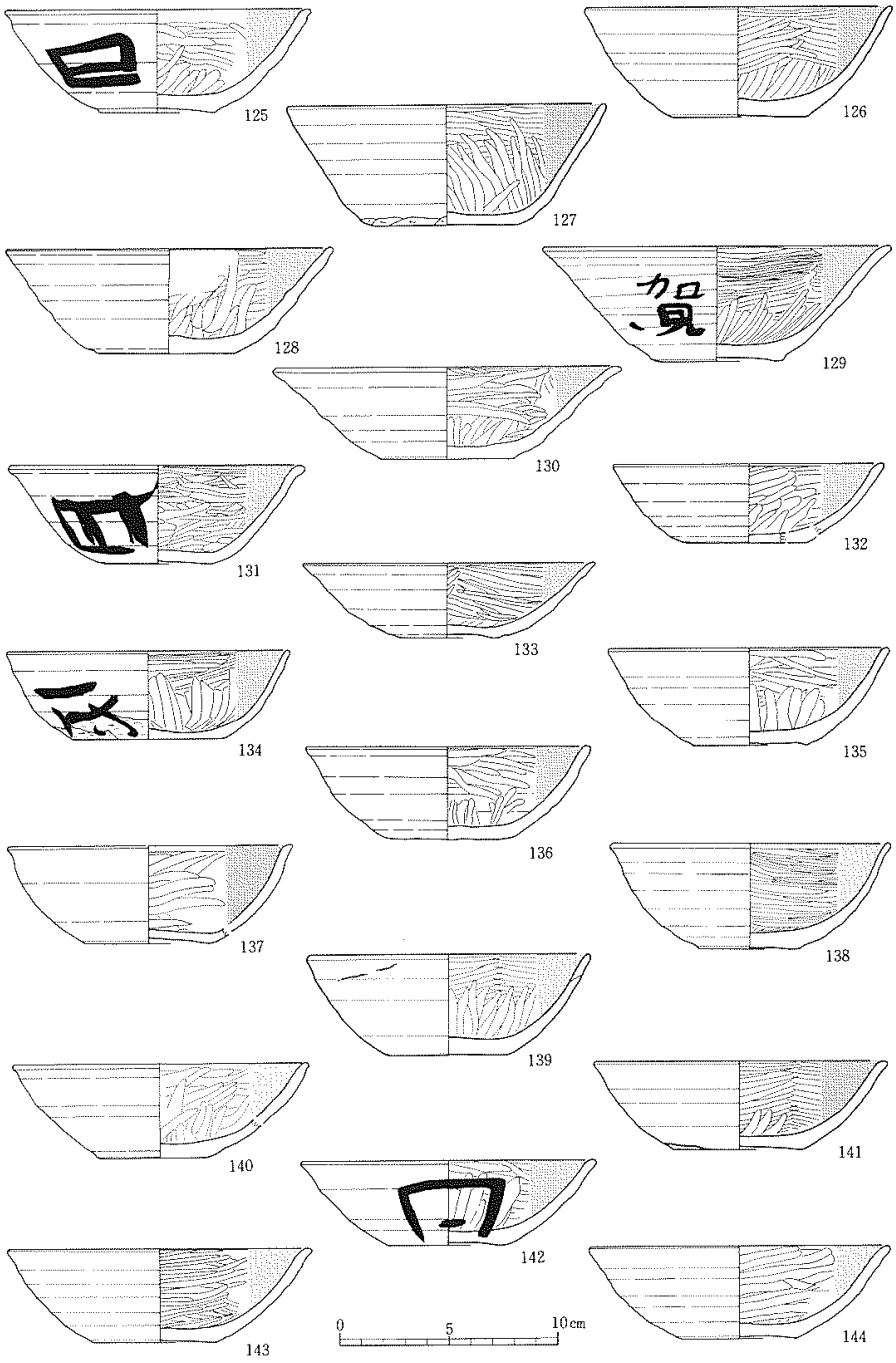
第113図　SD302出土遺物 (9)― 1～3・3B・5～7・6層



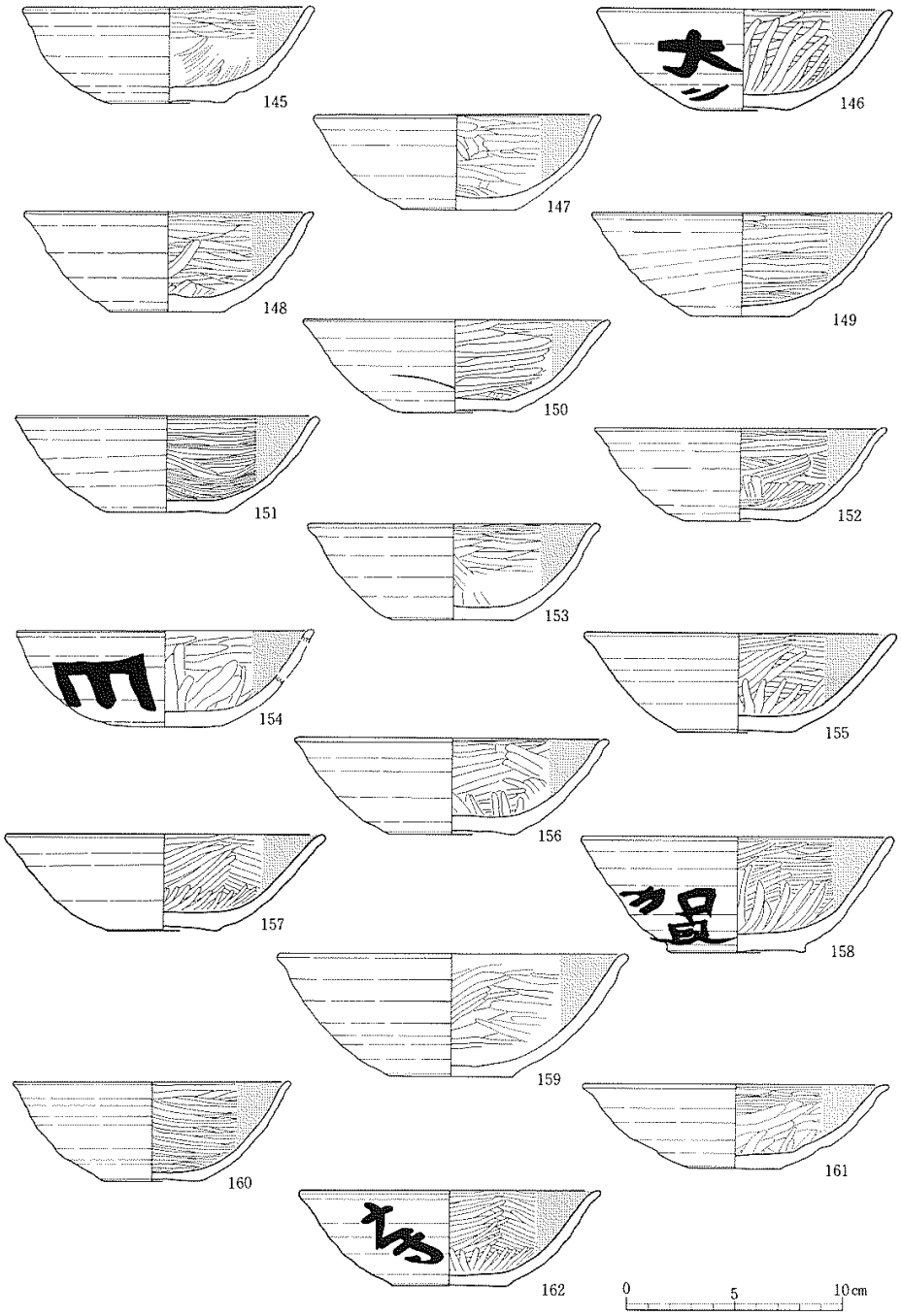
第114図　ＳＤ302出土遺物（10）－３Ｂ・５層



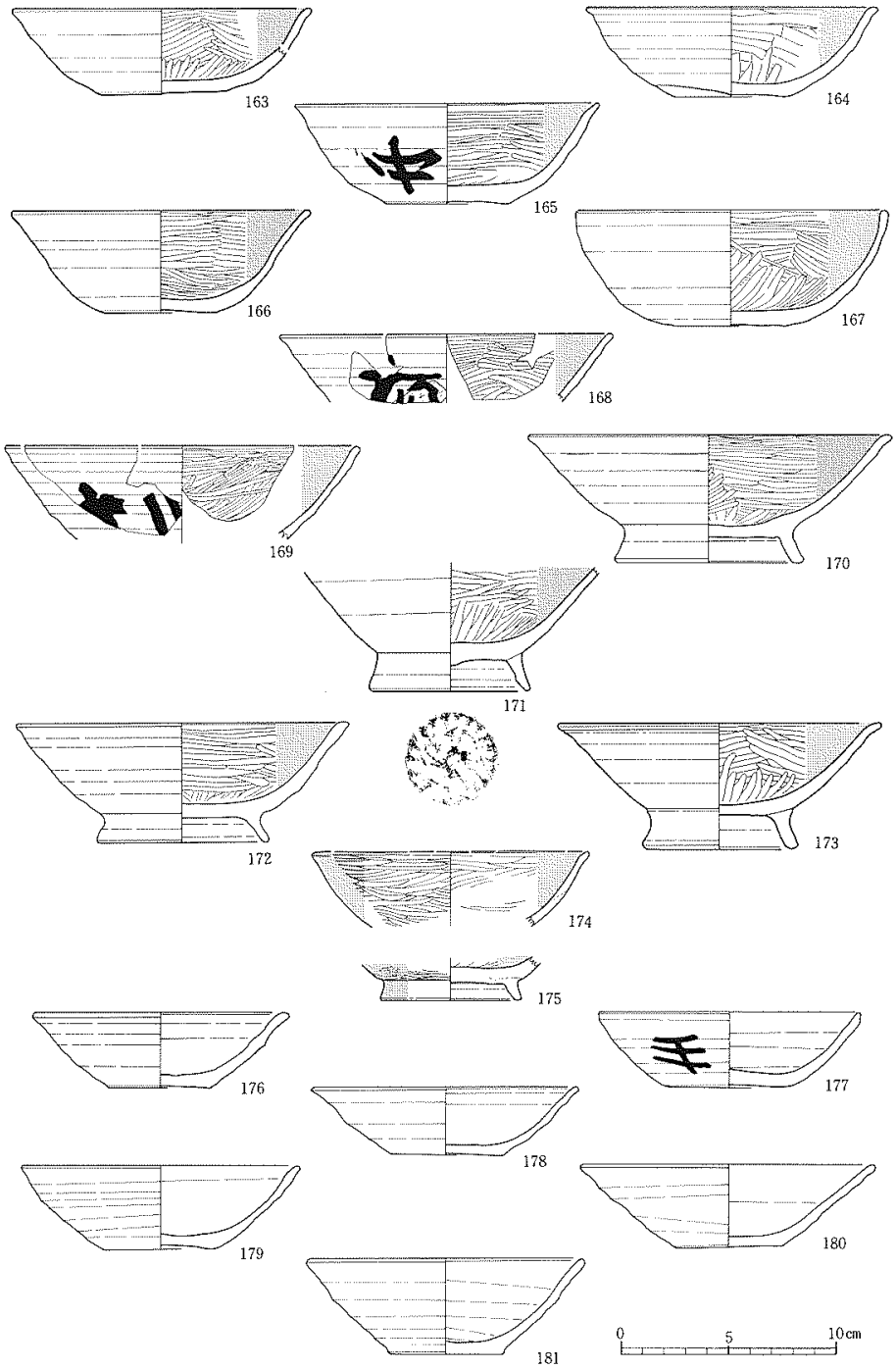
第115図　ＳＤ302出土遺物（11）－１・１～３・３Ｂ層



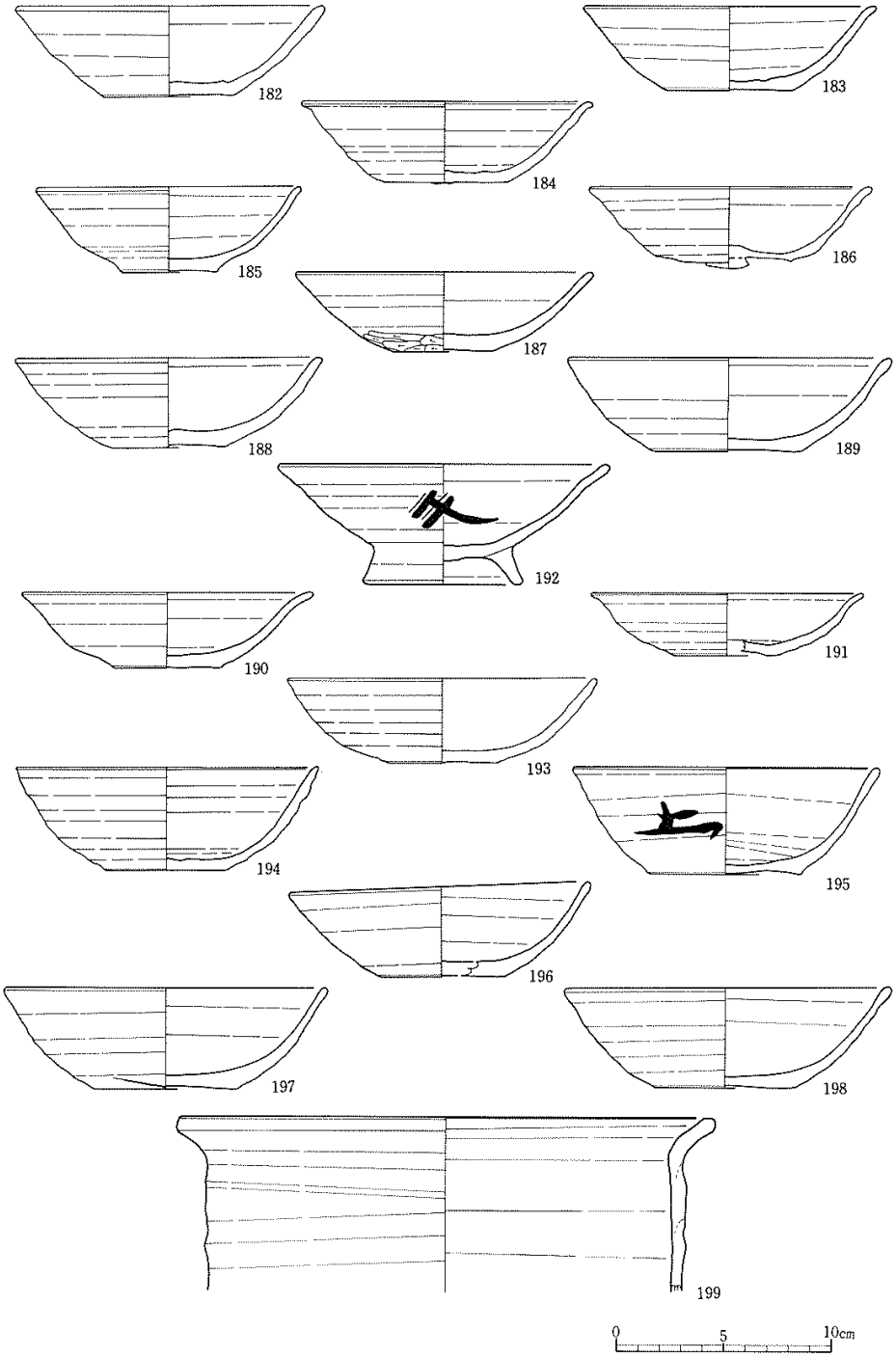
第116図　ＳＤ302出土遺物（12）―１層・Ｂ区Ｃ溝



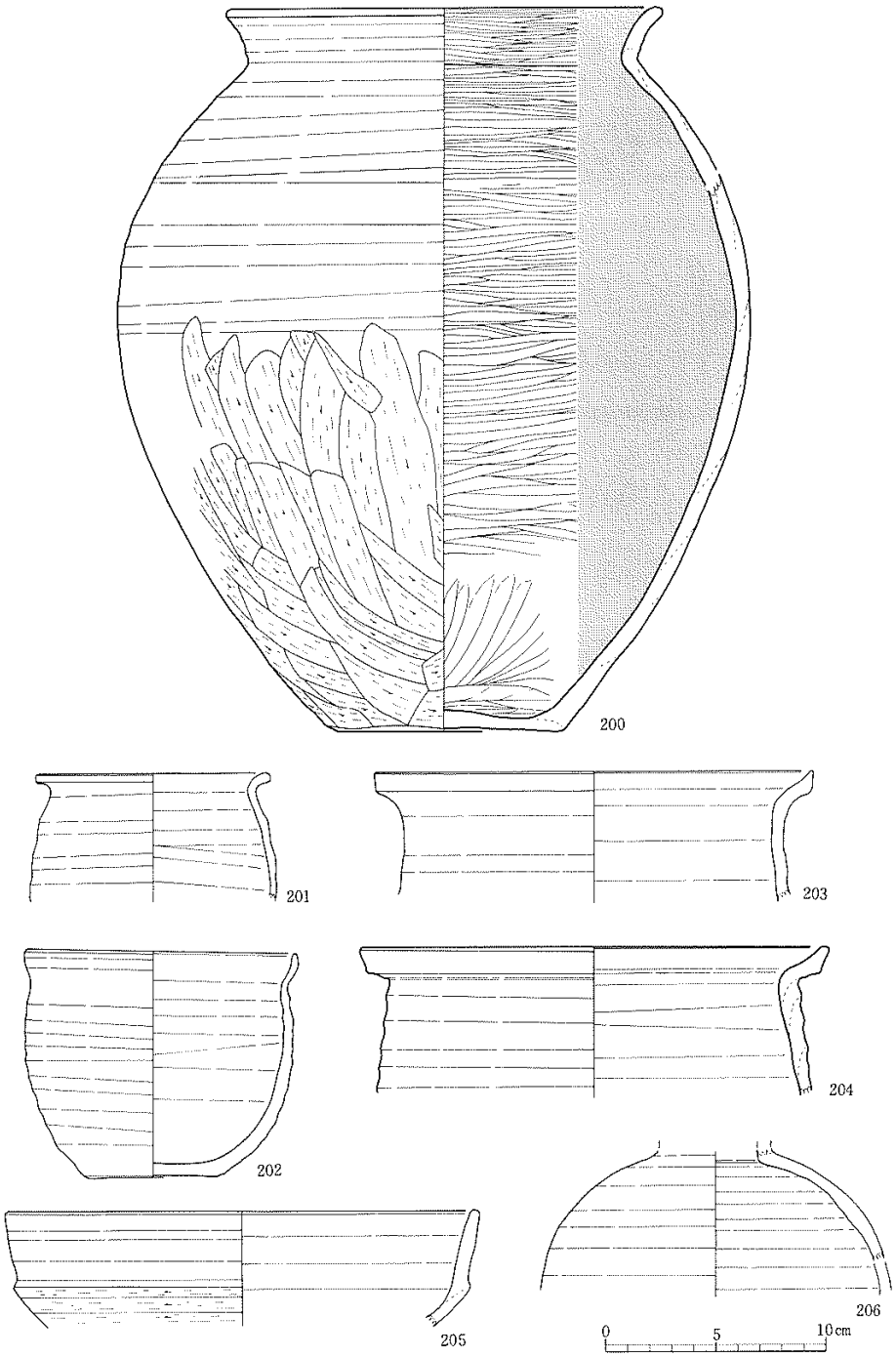
第117図　ＳＤ302出土遺物（13）－１層・Ｂ区Ｃ溝



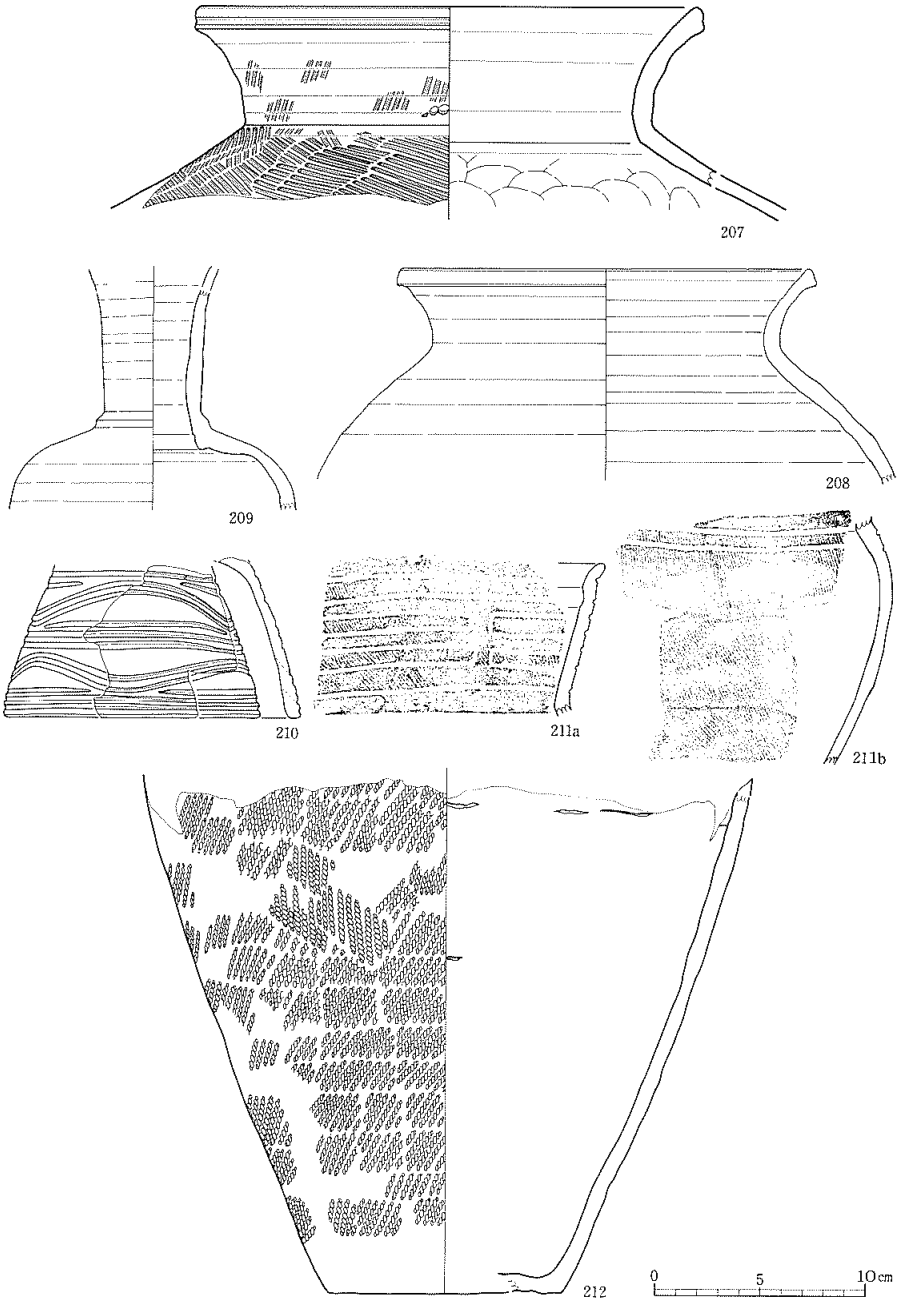
第118図　ＳＤ302出土遺物（14）―１層・Ｂ区Ｃ溝



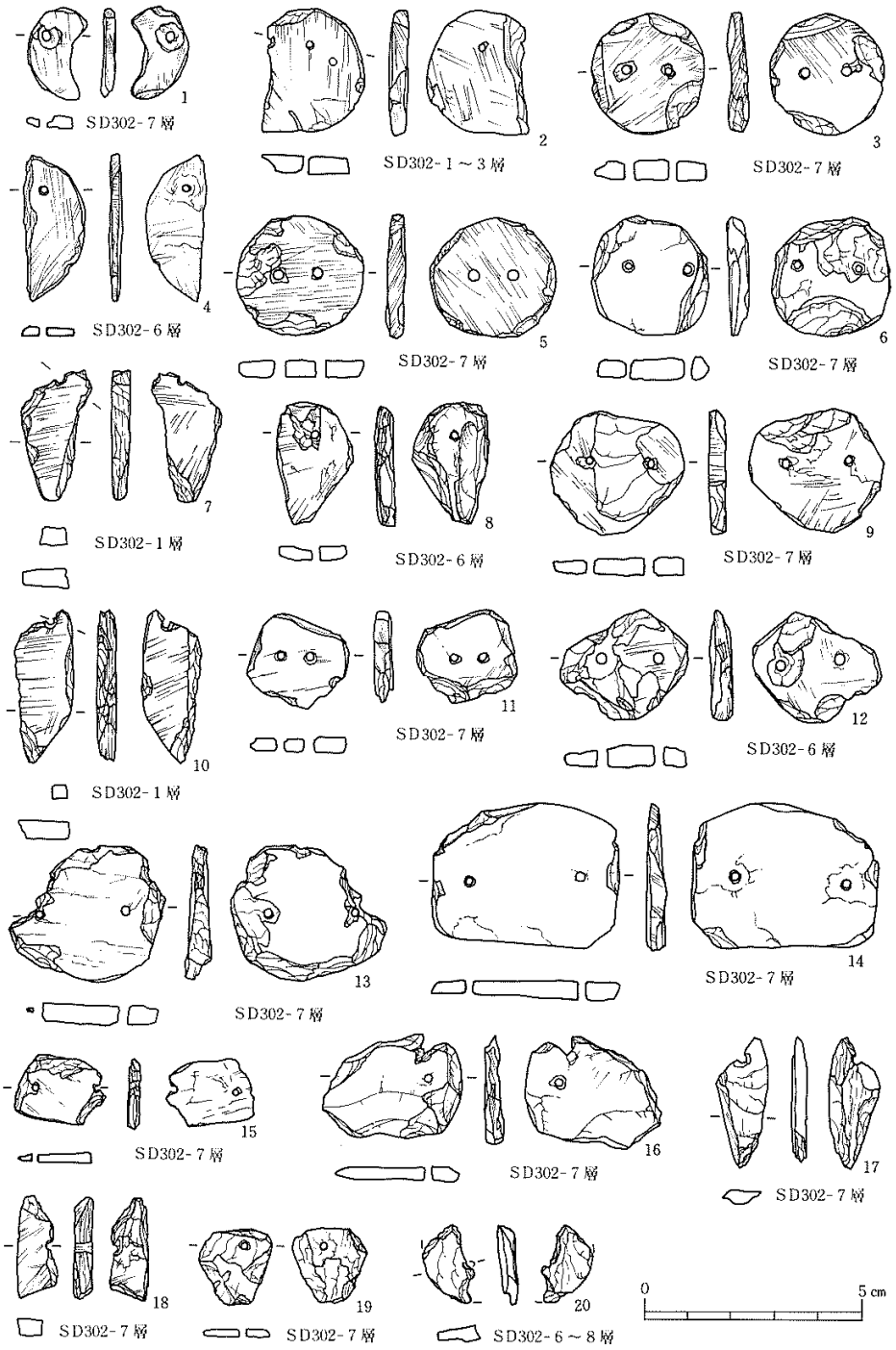
第119図　ＳＤ302出土遺物（15）－１層・Ｂ区Ｃ溝



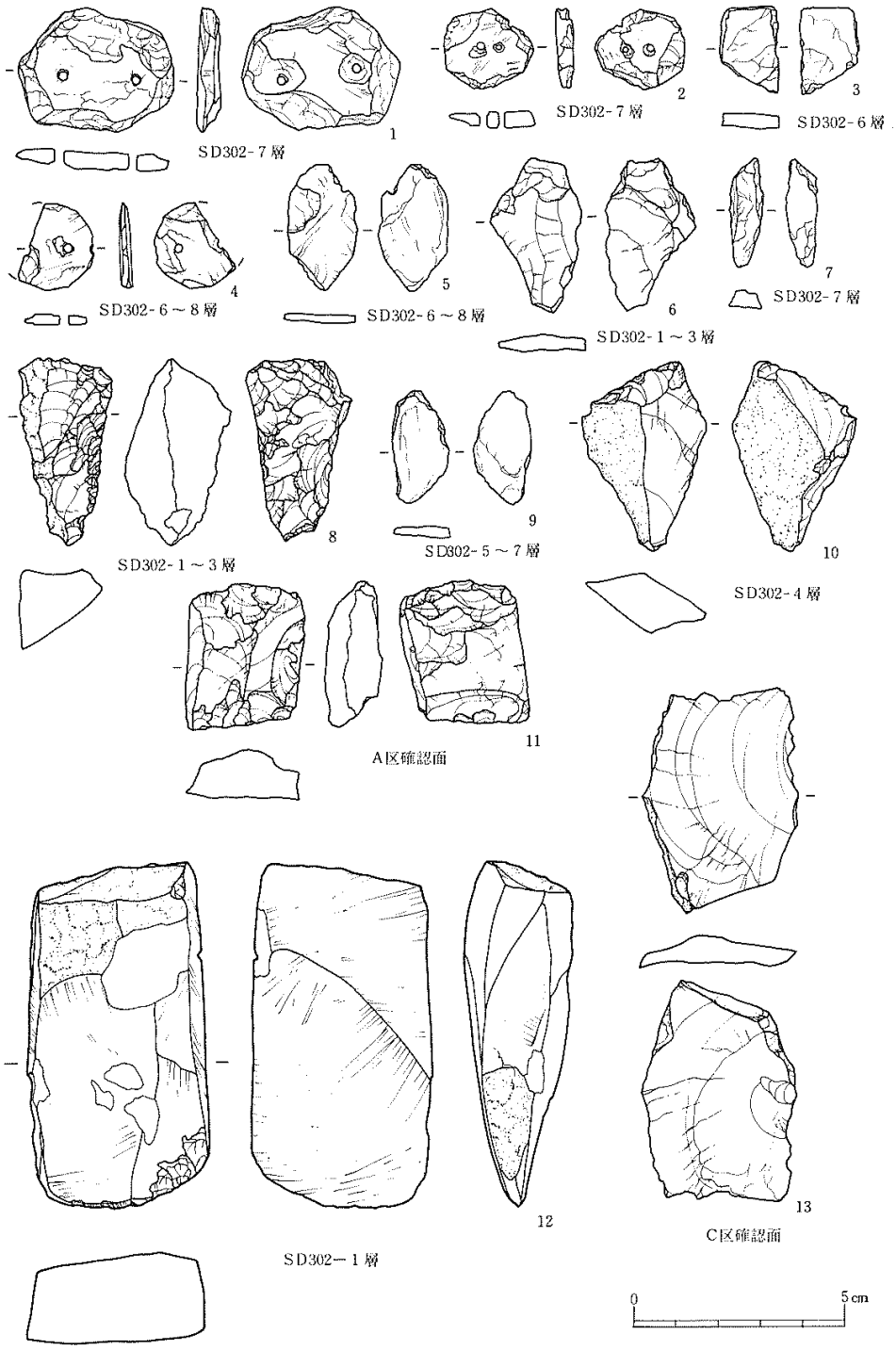
第120図　ＳＤ302出土遺物（16）－１・１～６・３Ｂ層



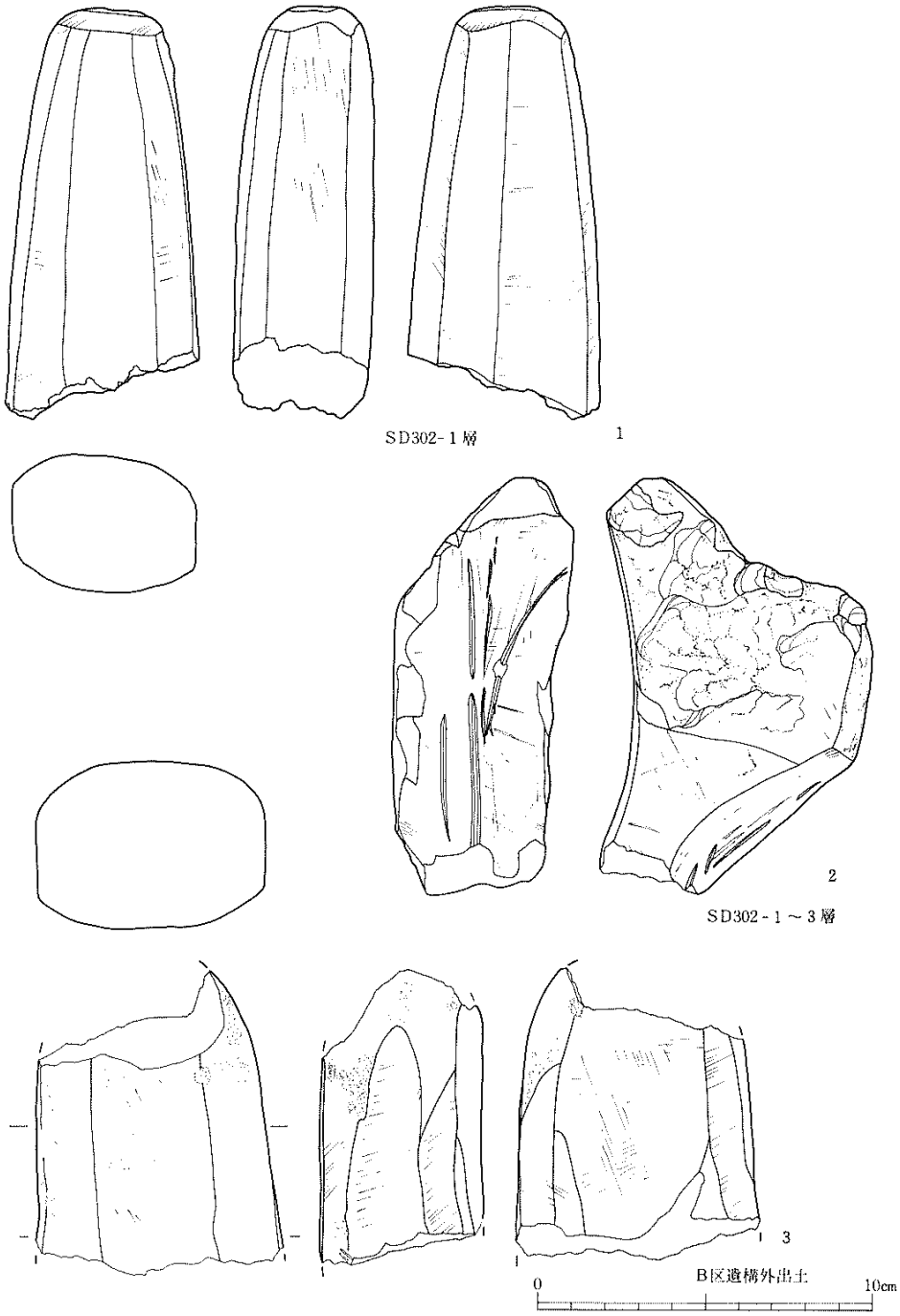
第121図　出土遺物（17）－1～3・3A・3B層



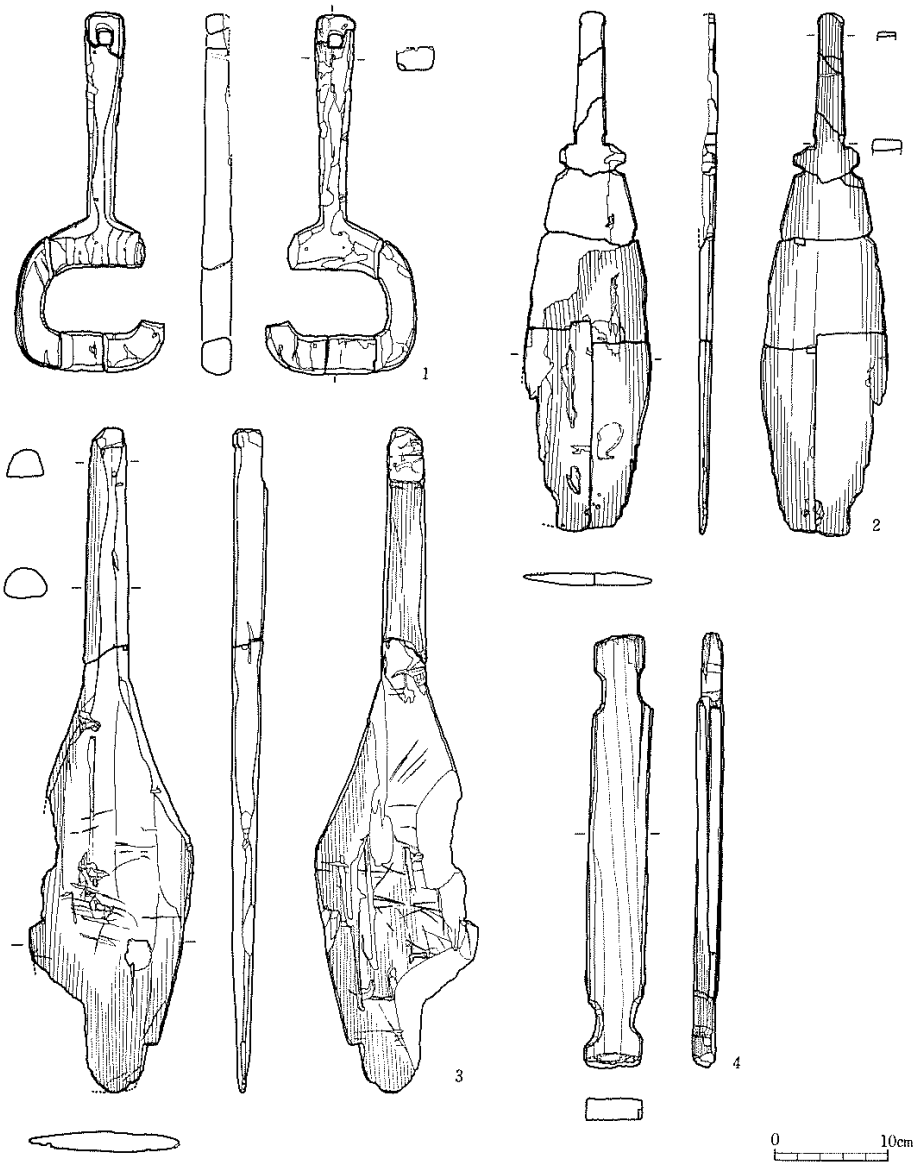
第122図　SD302出土遺物（18）—各層（石製模造品）



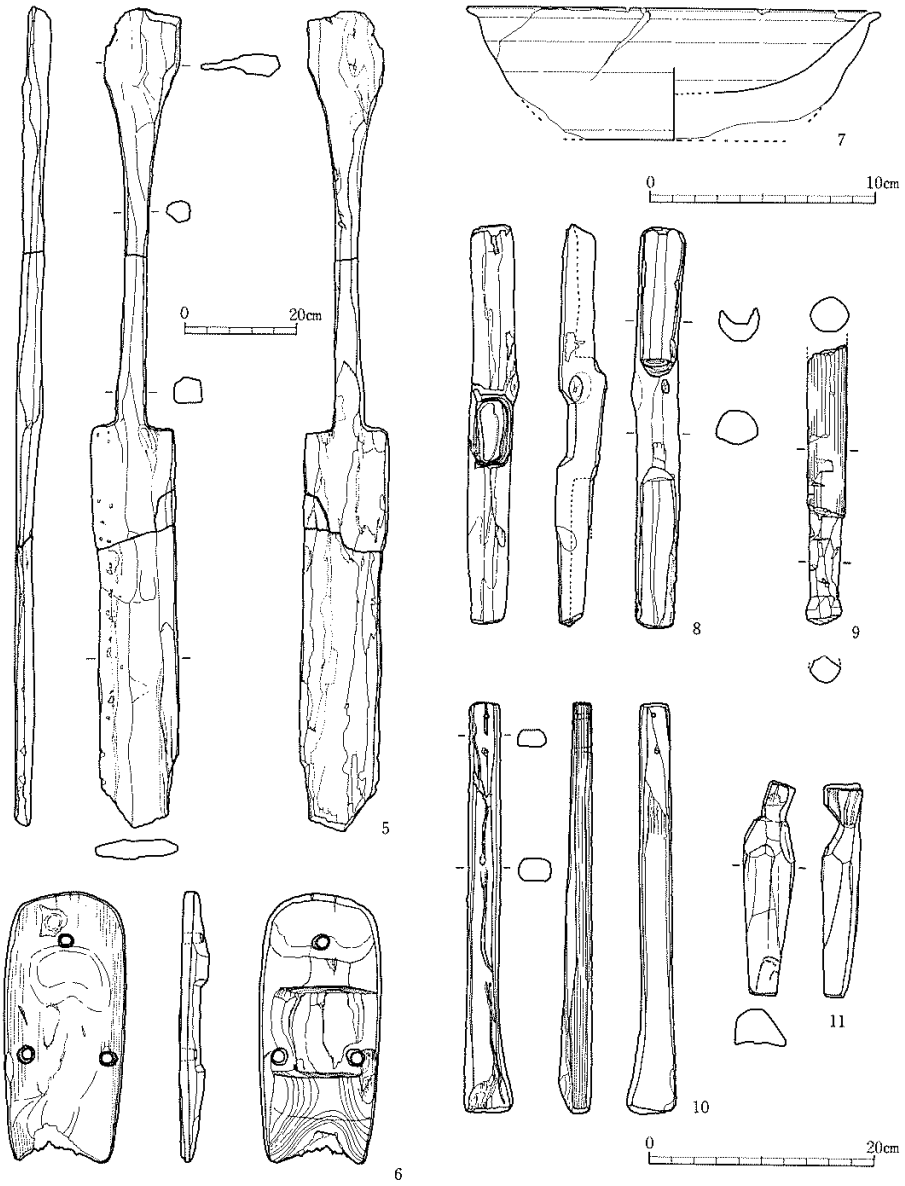
第123図　SD302他出土遺物（19）－各層（石器）



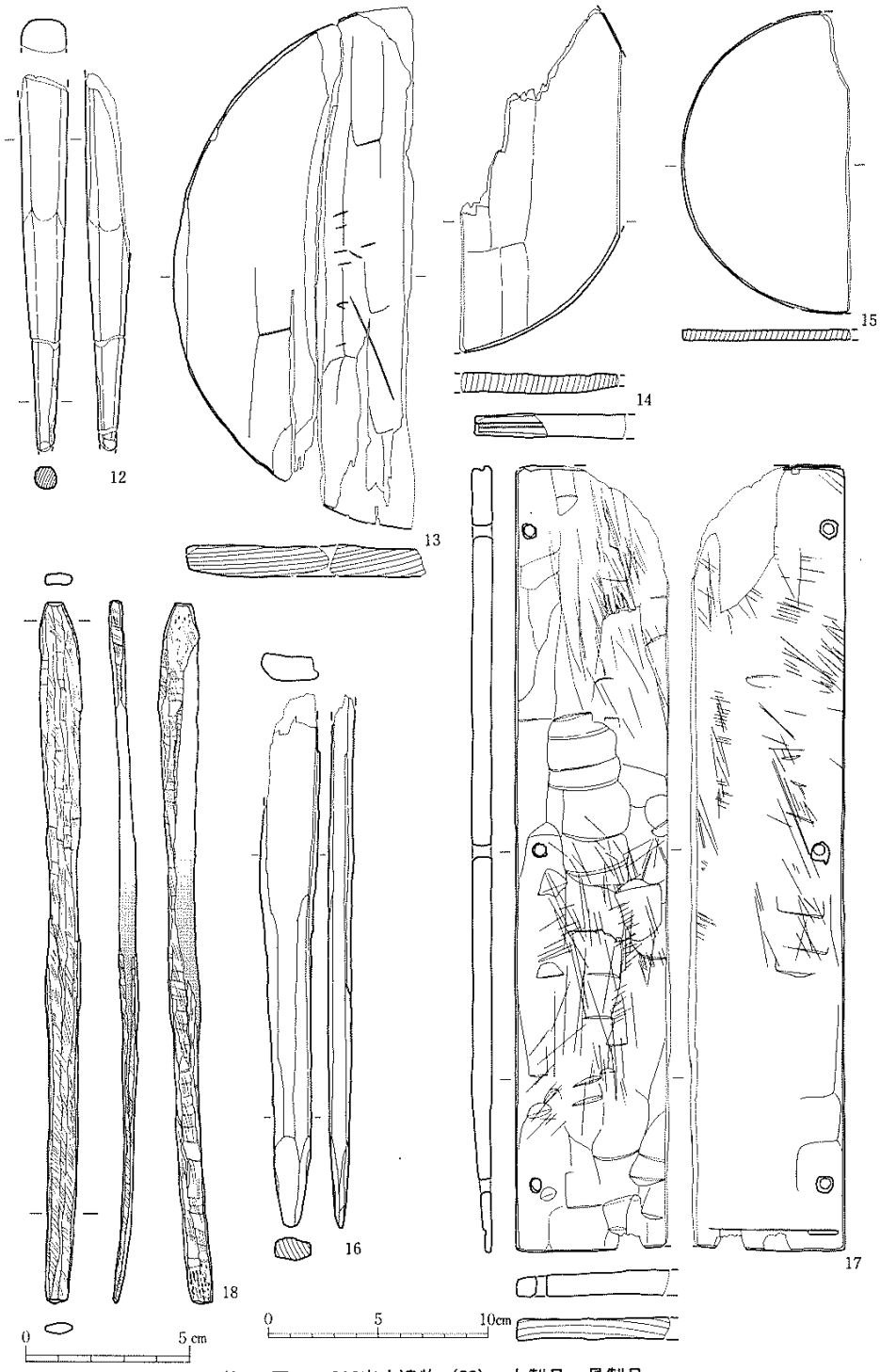
第124図　SD302他出土遺物（20）－各層（石器）



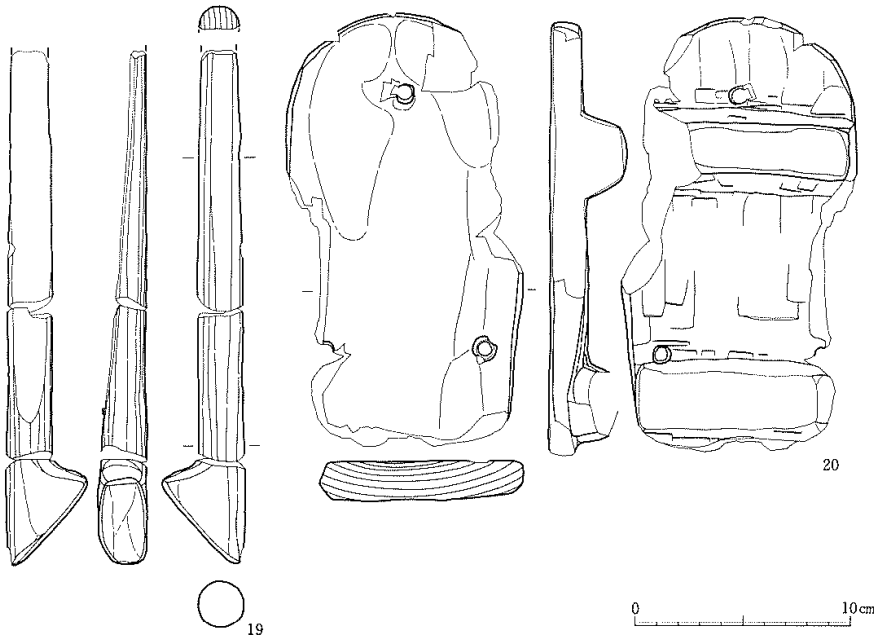
第125図　ＳＤ302出土遺物（21）―木製品



第126図　SD302出土遺物（22）—木製品



第127図　SD302出土遺物（23）―木製品・骨製品



第128図　SD115・302出土遺物（24）ー木製品

第105～121図　ＳＤ302出土土器観察表

番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	頸径	体径	底径	器高	胎土	残存	備考	写真図版
1	土師器台付甕	10層	[口] ヨコナデ [体] ハケ [台] ハケ→ナデ→ヨコナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ケズリ [台] ナデ	18.2	15.2	26.7	6.3	32.9	A,B,C	2/3	台部の直径11.2cm	55－1
2	土師器　甕	10層	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ナデ [体] ヘラナデ [底] ヘラナデ	22.2	17.0	23.3	7.2	24.3	A,B,C,E	2/3	南側土器集中地点	55－4
3	土師器　坏	10層	[口] ヨコナデ [体] ナデ [底] ケズリ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	－	－	16.4	－	(5.2)	A,C,D,E	1/3		
4	土師器　ミニチュア	9層	[口～体] ナデ→ヘラナデ	[口～体] ナデ	(8.8)	－	－	(5.1)	5.6	A,C,D	1/4	北側土器集中地点	55－3
5	土師器　鉢	9層	[口] ハケ→ヨコナデ→ミガキ [体] ハケ→ミガキ [底] ナデ	[口] ヨコナデ→ミガキ [体] ヘラナデ→ミガキ	(15.5)	－	－	4.4	8.5	C	1/3		58－7
6	土師器　坏	10層	[口] ヨコナデ [体] ナデ [底] ケズリ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	－	－	16.4	－	(5.2)	A,C	1/3		
7	土師器　坏	9層	[口] ヨコナデ [体～底] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ミガキ	15.4	－	－	－	4.9	A,B,C	1/6		
8	土師器　甕	10層	[口] ヨコナデ→ミガキ [体] ナデ→ミガキ→ケズリ [底] ナデ	[口] ナデ [体] ナデ→ヘラナデ [底] ヘラナデorミガキ	(13.2)	(11.0)	(12.6)	4.8	12.6	A,C,D,F,E,B	2/5	南側土器集中地点	55－2
9	土師器　甕	10層	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ→ナデ	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	(20.0)	(17.2)	(22.4)	－	(21.0)	A,C,D,B,E	1/4	南側土器集中地点	
10	土師器　甕	9層	[口] ヨコナデ [体] ケズリ	[口] ミガキ→ヨコナデ [体] ナデ	(17.0)	(13.7)	(22.2)	－	(19.5)	A,B,C,F	1/5	北側土器集中地点	
11	土師器　高坏	9層	[坏] ミガキ [脚] ミガキ	[坏] ミガキ [脚] 絞り目→ケズリ→ナデ	(8.5)	4.2	－	－	(10.2)	A,B,C	4/5		55－9
12	土師器　高坏	9層	[坏] ミガキ	[坏] ミガキ	10.0	9.0	9.7	－	8.5	A,C	4/5		55－7
13	土師器　甕	9層	[口] ヨコナデ [体] ヨコナデ→ナデ	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ヨコナデ→ヘラナデ	11.2	9.4	10.9	－	(10.0)	A,B,C,E,D	4/5	北側土器集中地点	55－6
14	土師器　壺	9層	[口] ヨコナデ→ハケ	[口] ハケ→ナデ	(12.4)	(8.4)	－	－	(4.0)	A	1/4		
15	土師器　壺	9層	[口] ハケ→ヨコナデ	[口] ハケ→ヨコナデ→ミガキ→ヘラナデ→ナデ	(17.6)	(11.4)	－	－	(6.6)	A,B,C	3/5	北側土器集中地点	55－8
16	土師器　鉢	9層	[口～体] ナデ→ハケ	[口～体] ハケ→ナデ	9.9	－	－	4.5	5.2	A,C	1/1		55－5
17	土師器　壺	9層	[口] ヨコナデ→ミガキ [体] ミガキ	[口] ヨコナデ→ミガキ [体] ナデ	(8.4)	(7.8)	(10.0)	－	(4.7)	A,B,C	1/4		
18	土師器　甕	9層	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ナデ	(16.4)	(15.7)	(21.2)	－	(22.0)	A,B,C	1/6		
19	土師器　甕	8層	[口] ヨコナデ [体] ハケ→ヨコナデ→ハケ→ヨコナデ→ミガキ→ナデ	[口] ハケ→ヨコナデ [体] ハケ	15.5	13.4	25.2	7.6	31.5	A,B,C	4/5	南側土器集中地点	56－1
20	土師器　高坏	8層	[坏] ヨコナデ→ナデ [脚] ナデ→ヘラナデ→ヨコナデ	[坏] ヨコナデ→ナデ [脚] 絞り目→ナデ→ヨコナデ	(18.4)	3.0	6.6	13.0	(15.5)	A,B,C,D,E	3/5	南側土器集中地点	56－2
21	土師器　壺	7層	[口] ヨコナデ→ナデ [体] ハケ→ナデ→ミガキ	[口] ヨコナデ [体] 不明	12.4	11.8	－	－	(9.9)	A,B,C,F	1/2	南側土器集中地点	58－5
22	土師器　高坏	7層	[坏] ケズリ [脚] ナデ→ヨコナデ	[坏] 不明 [脚] 絞り目→ナデ→ヨコナデ	－	3.3	(3.9)	－	(8.5)	A,B,C	3/5	南側土器集中地点	58－2
23	土師器　高坏	7層	[坏] ナデ→ヘラナデ [脚] ミガキ	[坏] ナデ(ミガキ) [脚] ナデ→ヨコナデ	－	3.6	(8.2)	－	(9.7)	A,B,C,F	2/3	南側土器集中地点	57－10
24	土師器　甕	6層	[口] ヨコナデ [体] ナデ→ケズリ→ナデ→ケズリ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	17.4	13.7	22.8	(8.1)	24.3	A,B,C	7/10	南側土器集中地点	56－4
25	土師器　甕	7層	[口] ヨコナデ [体] ヘラナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	20.4	16.2	23.0	7.6	38.0	B,C	4/5	南側土器集中地点	60－4

番号	種別	層位	特徴		法量(cm)					胎土	残存	備考	写真図版
			外面	内面	口径	頸径	体径	底径	器高				
26	土師器 甕	7層	[口] 3ヨナデ [体] ハケ→3ヨナデ→ハケ	[口] 3ヨナデ [体] ハケ	(17.4)	(15.7)	(20.2)	–	(8.7)	A.E	1/5	南側土器集中地点	58-6
27	土師器 甕	7層	[口] 3ヨナデ [体] ヘラナデ→ヤスリ	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	16.0	12.5	15.6	–	(21.7)	A.B.C	4/5	南側土器集中地点	60-2
28	土師器 高坏	7層	[脚] ナデ(工具痕)→3ヨナデ	[脚] ナデ→3ヨナデ	–	–	–	16.2	(7.1)	A.B.C	1/3		60-6
29	土師器 壺	7層	[口] 3ヨナデ→工具 [体] ハケ→ナデ→ヤスリ→ナデ	[口] 3ヨナデ→工具 [体] ヤスリ	11.7	6.4	14.7	(4.4)	15.3	A.B.C.E.F	4/5		58-4
30	土師器 坏	7層	[口～体] ハケ→工具 [底] ナデ	[口～体] ハケ→工具	16.3	–	–	(5.6)	6.2	A.B.C	1/2	南側土器集中地点(北)	59-2
31	土師器 坏	7層	[口～体] 3ヨナデ→ナデ	[口～体] 3ヨナデ→工具	14.0	–	14.4	–	(5.9)	C.F	2/3	南側土器集中地点	59-1
32	土師器 甕	7層	[口] 3ヨナデ [体] ナデ→工具→ハケ	[口] 3ヨナデ→ハケナデ [体] ナデ→ハケ	14.8	13.0	28.8	7.4	31.6	A.B.C.F	3/5	南側土器集中地点	58-3
33	土師器 甕	7層	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	[口] 3ヨナデ [体] ヘラナデ	18.0	15.5	22.2	–	(15.7)	A.B.C	4/5	南側土器集中地点	60-7
34	土師器 坏	7層	[口～底] 3ヨナデ→ナデ	[口～体] 3ヨナデ→ナデ→ヘラナデ	14.7	–	–	4.2	6.2	A.C.D.F.E	4/5		58-5
35	土師器 坏	7層	[口～底] 3ヨナデ→工具→ハケ→ナデ→ヤスリ	[口～体] 3ヨナデ→ナデ→工具	(12.2)	(12.0)	(13.9)	–	(6.8)	A.B.C.E	1/3	南側土器集中地点	58-8
36	土師器 坏	7層	[口～底] 3ヨナデ→ナデ	[口～体] 3ヨナデ→ナデ→工具	11.9	–	12.2	丸底	6.5	A.C.D.F	3/5	南側土器集中地点	
37	土師器 坏	7層	[口] 3ヨナデ [体] ナデ [底] ナデ	[口] 3ヨナデ [体] 不明	(11.7)	–	(12.8)	(5.6)	6.7	A.F	1/5	南側土器集中地点	
38	土師器 坏	7層	[口～底] 3ヨナデ→ナデ→ヤスリ	[口～体] 3ヨナデ→工具	14.4	–	13.3	3.4	6.2	A.B.C.F	1/2	南側土器集中地点	
39	土師器 坏	7層	[口～体] 3ヨナデ→ハケ→ナデ→ヘラナデ→ヤスリ→ナデ→ヘラナデ	[口～体] ハケ→ナデ→ヘラナデ	15.2	–	–	丸底	5.9	A.C.F.E	1/1	南側土器集中地点	59-8
40	土師器 坏	7層	[口～体] 3ヨナデ→ナデ→ヤスリ→ナデ [底] ヤスリ→ナデ	[口～体] 3ヨナデ→工具	(12.7)	12.6	13.6	3.9	6.7	A.B.C.F	3/5	南側土器集中地点	59-3
41	土師器 坏	7層	[口～底] 3ヨナデ→ヤスリ	[口～体] 3ヨナデ→ナデ	(15.2)	–	–	(3.4)	4.4	A.C	1/4	南側土器集中地点	
42	土師器 甑	7-8	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	[口] 3ヨナデ [体] 工具 [底] ヤスリ	(22.2)	–	–	(8.8)	18.3	A.B.C.E	1/4	南側土器集中地点 孔径(7.2)	56-3
43	土師器 壺	7-8	[口] 3ヨナデ→工具 [体] ナデ→工具→ナデ	[口] 3ヨナデ [体] ヘラナデ→ヤスリ	(12.4)	(9.6)	21.6	–	(18.7)	A.B.C	3/5	南側土器集中地点	
44	土師器 甕	6-8	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	[口] 3ヨナデ→ナデ [体] ナデ	(17.0)	13.8	(21.9)	–	(17.0)	A.B.C.E.G	1/3	北側土器集中地点	57-1
45	土師器 甕	7層	[口] 3ヨナデ [体] ナデ→ヤスリ→ハケ→ヤスリ	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	14.4	11.5	18.8	–	(26.0)	A.B.C.F.E	1/3	南側土器集中地点	60-5
46	土師器 坏	7層	[口～体] 3ヨナデ→ナデ [底] ナデ	[口～体] 3ヨナデ→工具	14.2	–	14.4	(8.3)	5.6	A.B.C	2/3	南側土器集中地点	59-7
47	土師器 坏	7層	[口～体] 3ヨナデ→ヤスリ→ナデ→ヘラナデ [底] ヤスリ→ナデ	[口～体] 3ヨナデ→ナデ→ヘラナデ→工具	13.4	13.2	12.8	4.0	6.1	A.B.C.F.E	1/1	南側土器集中地点	59-4
48	土師器 坏	7層	[口～底] 3ヨナデ→ヤスリ	[口～体] 3ヨナデ	(16.0)	–	(15.6)	丸底	4.4	A.B.C.D	1/4	北側土器集中地点(南)	59-10
49	土師器 坏	7層	[口～底] 3ヨナデ→ヤスリ	[口～体] 3ヨナデ→工具	12.7	–	12.5	丸底	4.6	B.C.A	1/2	南側土器集中地点	59-9
50	土師器 坏	7層	[口～体] 3ヨナデ→ハケ→工具→ヘラナデ [底] ヘラナデ→ヤスリ	[口～体] ハケ→工具	11.4	–	–	4.0	7.1	A.C	1/1		58-9
51	土師器 坏	7-8	[口] 3ヨナデ [体～底] ナデ	[口～体] ナデ→工具	12.8	–	13.2	丸底	5.2	A.B.C	1/2		56-6
52	土師器 壺	6-8	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	[口] 3ヨナデ→工具→ヘラナデ [体] ヘラナデ→ハケ	12.2	9.9	(19.0)	6.2	(8.7)	A.B	3/5		60-1・3
53	土師器 甕	6-7	[口] 3ヨナデ→ナデ→ヘラナデ [体] 不明	[口] 3ヨナデ→ナデ→ヘラナデ [体] ナデ	(18.4)	(14.9)	(22.9)	–	(17.2)	A.C.B.E	2/5	南側土器集中地点(北)	57-6
54	土師器 甕	6-7	[口] 3ヨナデ→ナデ [体] ナデ	[口] 3ヨナデ [体] ヘラナデ	18.3	15.0	(23.1)	–	(13.3)	A.B.C.D.F	3/5	南側土器集中地点(北)	57-4
55	土師器 高坏	6-8	[坏] 3ヨナデ [脚] 工具	[坏] 3ヨナデ→工具 [脚] ナデ→3ヨナデ	(12.8)	3.3	(12.5)	(10.0)	10.7	A.B.C.E	1/6	南側土器集中地点	56-8
56	土師器 坏	6-8	[口] 3ヨナデ [体] ナデ→ヤスリ	[口] 3ヨナデ [体] ヘラナデ	12.0	10.6	11.2	–	(7.5)	A.B.C.E	4/5	南側土器集中地点	56-5
57	土師器台付甕	6-8	[台] 3ヨナデ	[甕] ナデ [台] 絞り目→ヘラナデ	–	4.1	–	8.7	7.3	A.C.E	1/1	北側土器集中地点	57-2
58	土師器 [illegible]	6-8	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	[口] 3ヨナデ [体] ナデ→ヘラナデ	6.4	6.1	7.6	4.0	5.0	A	1/4	北側土器集中地点	57-3
59	土師器 坏	6-8	[口～体] 3ヨナデ→ヤスリ [底] ヤスリ	[口～体] 3ヨナデ→ヘラナデ	12.6	–	13.5	6.2	6.2	A.B.C.F	1/2	南側土器集中地点	57-5
60	土師器 坏	6-8	[口～体] 3ヨナデ→ナデ→ヤスリ→ナデ [底] ヤスリ	[口～体] 3ヨナデ→工具	(12.4)	–	(12.8)	(8.3)	7.5	A.B.C.F.E	2/5	北側土器集中地点	56-7
61	土師器 坏	6-8	[口] 3ヨナデ [体～底] ヤスリ→ナデ→ヤスリ	3ヨナデ→工具	(12.4)	–	(12.8)	(8.3)	7.5	A.B.C.F.E	2/5	北側土器集中地点	
62	土師器 甕	6層	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	[口] 3ヨナデ [体] ヘラナデ	(17.0)	(15.0)	(20.0)	(9.7)	(29.0)	A.B.C.F	1/5	南側土器集中地点	
63	土師器 坏	6層	[口] 3ヨナデ [体～底] ヤスリ→ヘラナデ→ヤスリ	3ヨナデ→工具 黒色処理	(14.7)	–	(14.8)	丸底	4.2	A.B.C.E.F	1/4	南側土器集中地点	59-13
64	土師器 高坏	6-7	[坏] 3ヨナデ→ナデ→ヤスリ	[坏] ナデ→ヘラナデ→工具	(16.6)	3.1	(10.0)	–	(6.3)	A.B.C.F	1/6	南側土器集中地点(北)	
65	土師器 坏	6-7	[口] 3ヨナデ [体～底] ヤスリ	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	(13.9)	–	(15.2)	–	(3.9)	A.B.F	1/6	南側土器集中地点	
66	土師器 坏	6-7	[口] 3ヨナデ [体～底] ナデ→ヤスリ	[口] 3ヨナデ [体] ヘラナデ→ナデ	(13.0)	–	(14.4)	4.4	6.7	A.B.C.F	1/4	南側土器集中地点	57-7
67	土師器 鉢	6-7	[口] 3ヨナデ [体] ハケ→ヤスリ	[口] 3ヨナデ [体] ナデ→ヘラナデ	(17.4)	(15.3)	(16.5)	–	(11.4)	A.E	1/3	北側土器集中地点	57-8
68	土師器 坏	6層	[口] 3ヨナデ [体～底] ナデ	3ヨナデ	14.6	–	–	4.2	5.3	A.B.C.F	1/2	南側土器集中地点	59-15
69	土師器 坏	6層	[口] 3ヨナデ [体～底] ヘラミガキ	3ヨナデ 黒色処理	16.1	–	–	丸底	4.5	緻密	1/1		59-12
70	土師器 坏	6層	[口] 3ヨナデ [体～底] ヘラミガキ	3ヨナデ 黒色処理	16.9	–	–	丸底	4.7	C	1/1		59-11
71	土師器 坏	6層	[口] 3ヨナデ [体～底] ナデ	3ヨナデ→工具	18.0	–	15.3	2.5	5.3	A.F	2/5	南側土器集中地点	
72	土師器 坏	6層	[口] 3ヨナデ [体～底] ナデ	ナデ	14.3	–	14.6		5.3	A.B.C.E	1/2		59-14
73	土師器 高坏	6-7	[脚] ハケ→工具	[坏] 工具 [脚] 絞り目	–	3.4	4.7	–	(10.4)	A.B.C	1/1	南側土器集中地点(北)	57-9
74	土師器 甕	5-7	[口] ハケ→3ヨナデ [体] ハケ→ナデ	[口] ハケ→3ヨナデ [体] ナデ	(28.2)	(25.5)	–	–	(13.0)	A.B.C.D.E	1/12	南側土器集中地点(北)	
75	土師器 甕	1～3	[口] 3ヨナデ→ナデ [体] ナデ	[口] 3ヨナデ→ナデ [体] ナデ(ヘラナデ)	(19.2)	(14.8)	(22.0)	–	(14.6)	A.C.E	2/3	南側土器集中地点	
76	土師器 壺	1～3	[口] 3ヨナデ [体] ナデ	[口] ナデ [体] ナデ→ヘラナデ	(15.5)	(12.8)	–	–	(6.3)	A.B.C	1/5		
77	土師器 坏	1～3	[口] 工具→3ヨナデ [体] ナデ	工具 黒色処理	(16.8)	–	(14.2)	–	(4.5)	緻密.F	1/5		
78	土師器 坏	3b層	[口～体] 工具 黒色処理	工具 黒色処理	(15.4)	–	–	–	(3.9)	A.B.C	1/5		
79	土師器 坏	3b層	[口～体] 3ヨナデ→ヤスリ	工具 黒色処理	(15.0)	–	(14.0)	–	(4.4)	A.F	1/5	南側土器集中地点	
80	土師器 坏	3b層	[口] 3ヨナデ [体～底] ヤスリ	工具 黒色処理	(15.1)	–	(11.4)	丸底	(2.4)	A	1/6	南側土器集中地点	
81	土師器 高坏	1～3	[坏] 3ヨナデ→工具	[坏] 3ヨナデ→工具	–	–	(12.4)	–	(2.6)	A.B.C.F	1/12		
82	土師器 高坏	1～3	[脚] 工具→3ヨナデ→工具	[脚] ヘラナデ→工具	–	–	–	(18.6)	(3.9)	A.B.C.F	1/8		
83	土師器 坏	1～3	[口～体] 3ヨナデ	工具 黒色処理	(15.2)	–	–	(10.3)	(3.5)	A.F	1/8	南側土器集中地点	
84	土師器 高坏	6層	[脚] ナデ	[脚] 絞り目	–	4.2	–	–	(11.6)	A.B.C	1/2	南側土器集中地点	58-1
85	土師器 高坏	6層	[坏] 3ヨナデ→ナデ→ヤスリ	[坏] ヨコナデ	(17.6)	3.7	7.7	–	(7.5)	A.C.B.F.E	1/6	南側土器集中地点	
86	土師器 坏	6層	[口] 3ヨナデ [体～底] ヤスリ	[口] 3ヨナデ [体] 3ヨナデ→ヘラミガキ	9.7	–	–	5.4	6.1	A	1/1	南側土器集中地点	59-16

番号	種別	層位	特徴		法量(cm)			胎土	残存	分類	備考	写真図版
			外面	内面	口径	底径	器高					
87	土師器 坏	3B層	[口～体] ﾖｺﾅﾃﾞ･ｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	(17.4)	丸底	(4.0)	A.B.C.	1/5		南側土器集中地点	
88	土師器 坏	3B層	[口～体] ﾖｺﾅﾃﾞ･ｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	(15.8)	−	(4.6)	A	1/5		南側土器集中地点	
89	土師器 坏	3B層	[口] ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ [体～底] ﾅﾃﾞ･ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	(16.0)	丸底	(4.1)	A.B.C	1/5		南側土器集中地点	
90	土師器 高坏	3B層	[坏] ﾅﾃﾞ	[坏] ﾐｶﾞｷ [脚] ｹｽﾞﾘ 黒色処理	(15.0)	−	(4.9)	A.C	1/4		南側土器集中地点	
91	土師器 高坏	−	[坏] ｹｽﾞﾘ [脚] ｹｽﾞﾘ	[坏] ﾐｶﾞｷ [脚] ﾅﾃﾞ 黒色処理	(12.1)	−	(7.3)	A	3/5			
92	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ･回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [底] 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	(18.2)	6.9	6.4	A.B.C.E.F	1/2			
93	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	粗いﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.0	4.0	C.D	完形	AⅠa	墨書「十」	64−4
94	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	(14.0)	5.3	4.3	A.C	2/5	AⅠa		
95	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	4.8	4.8	C	1/2	AⅠa	墨書「口」	64−6
96	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切 →ﾅﾃﾞ	粗いﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.1	5.4	4.6	A.C	3/4	AⅠa		64−11
97	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	粗いﾐｶﾞｷ 黒色処理	15.0	6.0	4.3	A.C	1/2	AⅠa	墨書「木」	62−10
98	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	15.5	6.3	4.9	致密	1/2	AⅠa		
99	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.2	3.9	C	完形	AⅠa	墨書「木」	61−4
100	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.6	4.6	4.3	A.C	1/1	AⅡa	墨書「 」	61−9
101	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.8	5.4	4.5	A.C	1/2	AⅡa		63−13
102	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.7	4.5	致密	4/5	AⅡa		64−3
103	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.8	4.8	C	3/4	AⅡa		64−5
104	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	粗いﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.4	5.1	A.C.D	9/10	AⅡa		64−9
105	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	粗いﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.2	5.0	A.C	1/2	AⅡa		64−1
106	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.8	(5.8)	4.3	C	1/2	AⅡa		64−7
107	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	粗いﾐｶﾞｷ 黒色処理	15.0	4.9	4.8	C	完形	AⅡa		64−10
108	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.1	4.8	4.2	A.C	1/4	AⅡb	墨書「木」	
109	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.6	4.3	C	3/4	AⅡb		63−14
110	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] ？→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	15.2	6.6	5.2	A	1/2	AⅡb		64−2
111	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	粗いﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.2	5.4	4.5	A.C	完形	AⅡb		64−12
112	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.2	5.2	4.7	C	完形	AⅡc	墨書「 」(王ｶ)	63−15
113	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	粗いﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.6	5.0	5.1	A	完形	AⅡc		64−6
114	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.6	5.1	4.9	致密	3/4	AⅡc		63−11
115	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	(14.4)	−	(4.0)	A.B.C.D	1/5		墨書「口」	
116	土師器高台皿	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切→ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.5	−	4.5	A.C.D.F	4/5		墨書「口」 高台径6.7 cm	62−6
117	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (ﾛｸﾛ目が不明瞭)	13.0	5.0	3.3	致密	1/2	Ⅱa		
118	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	14.0	4.5	5.5	致密.A	1/2	Ⅱa		62−2
119	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (ﾛｸﾛ目が不明瞭)	11.7	4.3	3.3	致密.A.C	1/2	Ⅱb		
120	土師器 坏	3B層	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	13.6	4.6	3.9	致密.A	1/1	Ⅱd	墨書「河」	62−3
121	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.2	6.4	4.2	致密.C	4/5	AⅠa		62−15
122	土師器 坏	1～3	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.8	3.9	致密.C	1/2	AⅠa		61−2
123	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切	粗いﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.7	5.7	4.3	A.B.C.D.E.F.G	完形	AⅠa	器面は粗く、砂粒や小礫が顕著	61−14
124	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	(14.4)	6.2	4.1	致密.A	1/2	AⅠa		63−3
125	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.3	4.7	致密	完形	AⅠa	墨書「 」(日ｶ)	
126	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	6.0	4.8	C.D	完形	AⅠa		
127	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→軽い手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.6	6.5	5.5	致密	1/2	AⅠa		63−10
128	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	6.0	4.8	致密.C	1/2	AⅠa		63−4
129	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	16.0	5.4	5.3	A.B.D.F	完形	AⅠa	墨書「賀」	65−8
130	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	16.0	6.0	4.2	A.C	3/4	AⅠa		63−16
131	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.3	4.9	4.6	C	完形	AⅠb	墨書「 」(日ｶ)	61−12
132	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	12.4	5.2	3.6	C	4/5	AⅡa		62−16
133	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.3	4.5	3.5	A.B.C.F	2/3	AⅡa	B区SD302C溝出土	53−13
134	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ･手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ [底] ？→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.0	7.0	4.1	A.B.C	完形	AⅡa	墨書「口」(厨ｶ)	65−9
135	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	12.9	5.4	4.5	致密.C	完形	AⅡa		64−15
136	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.0	5.2	4.3		完形	AⅡa		
137	土師器 坏	1～3	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	(13.1)	5.6	4.5	A	1/3	AⅡa	南側土器集中地点(やや北寄り)	
138	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	12.8	4.1	4.9	A.B.C.F	3/5	AⅡa	B区SD302C溝出土	
139	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	12.8	5.0	4.6	A.C	3/4	AⅡa		63−7
140	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.6	4.9	4.3	C.G	3/5	AⅡa		63−2
141	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.5	5.8	4.0	致密.C	完形	AⅡa		64−14
142	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.6	5.0	3.9	A.C.D.F	4/5	AⅡa	墨書「 」	65−4
143	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	14.0	5.0	4.3	致密.C	完形	AⅡa		
144	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.8	5.2	4.3	致密.C	完形	AⅡa		65−1
145	土師器 坏	1～3	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.5	5.4	4.5	A.C	3/5	AⅡa		61−8
146	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.6	4.4	4.7	A.C	完形	AⅡa	墨書「大口」(大万ｶ)	
147	土師器 坏	−	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ [底] 回転糸切無調整	ﾐｶﾞｷ 黒色処理	13.4	5.2	4.6	致密	4/5	AⅡa		62−11

番号	種別	層位	特徴		法量(cm)			胎土	残存	分類	備考	写真図版
			外面	内面	口径	底径	器高					
148	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	13.6	5.0	4.7	A	4/5	AⅡa		63－9
149	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	13.8	4.6	4.8	A.B.C.F	完形	AⅡa	B区SD302C溝出土	53－12
150	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	14.1	5.8	4.4	C	完形	AⅡa		65－2
151	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	14.1	5.6	4.5	A.C.D	完形	AⅡa		65－5
152	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	13.5	5.1	4.3	A.B.D.F	完形	AⅡa	B区SD302C溝出土	53－4
153	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切→手持ちヘラケズリ	ミガキ 黒色処理	13.6	5.6	4.5	緻密	3/5	AⅡa		63－8
154	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切→ナデ	ミガキ 黒色処理	13.7	5.0	4.5	C	3/4	AⅡa	墨書「 」	63－1
155	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	14.5	5.6	4.6	C	完形	AⅡa		62－13
156	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	14.6	5.9	4.5	緻密.C	完形	AⅡa		64－16
157	土師器 坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切→ナデ	ミガキ 黒色処理	14.9	5.2	4.5	緻密	3/4	AⅡa		64－13
158	土師器 坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	粗いミガキ 黒色処理	14.5	6.1	5.4	A.C.D.F	完形	AⅡa	墨書「賀」	65－7
159	土師器 坏	1～3	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	16.2	5.8	5.6	A	3/4	AⅡa		61－7
160	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	(12.9)	4.7	4.6	A.B.D.F	1/2	AⅡb	B区SD302C溝出土	53－10
161	土師器 坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	14.2	4.2	3.9	A.C	3/4	AⅡb		63－12
162	土師器 坏	1～3	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	14.0	5.2	4.2	A	完形	AⅡb	墨書「口」	61－11
163	土師器 坏	1～3	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	(14.0)	5.6	4.0	A	2/5	AⅡb	南側土器集中地点	
164	土師器 坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	13.8	5.0	4.2	緻密.C	完形	AⅡb		65－3
165	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	14.1	5.6	4.7	A.C	3/4	AⅡb	墨書「中」B区SD302C溝出土	53－5
166	土師器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ 黒色処理	14.0	5.4	4.8	A.C.D	1/2	AⅡd	B区SD302C溝出土	53－3
167	土師器 坏	1層	ロクロナデ→ナデ［底］回転糸切→ナデ（周縁）	ミガキ 黒色処理	14.5	5.0	5.4	A.C	3/5	AⅡe	鋺●を意識して、丸底風に仕上げている	65－6
168	土師器 坏	1層	ロクロナデ→ケズリ	ミガキ 黒色処理	(15.6)	–	(3.2)	A.B.C	一部		墨書「口」（有ヵ）	
169	土師器 坏	1層	ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	(16.6)	–	–	A.C.F	一部		墨書「口口」	
170	土師器高台坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切→ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	(17.0)	–	6.0	A.B.C	2/5	A	高台径7.8cm	63－6
171	土師器高台坏	1層	ロクロナデ［底］？→菊花状調整痕→ロクロナデ	粗いミガキ 黒色処理	–	(6.6)	–	A.C.E	3/5		高台径7.4cm	
172	土師器高台坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切→ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	15.6	–	5.6	緻密	4/5	A	高台径8.0cm	62－14
173	土師器高台坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切→ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	15.0	–	5.8	A	4/5	A	高台径6.4cm 外面に漆状付着物	63－5
174	土師器高台坏	1層	［口～体］ミガキ 黒色処理	ミガキ 黒色処理	(13.0)	–	–	B	一部	B	175と同一個体か	
175	土師器高台坏	1層	［体］ミガキ［台］ロクロナデ［底］回転糸切 黒色処理	ミガキ 黒色処理	–	(6.6)	–	A.E	一部	B	174と同一個体か	
176	須恵系土器坏	1～3	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	12.0	4.8	3.5	緻密	4/5	Ⅰa		61－1
177	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ	12.3	5.5	3.6	A.C.D.E.F	完形	Ⅰa	墨書「 」（王ヵ）	61－16
178	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	12.5	5.2	3.1	C	完形	Ⅰa		61－6
179	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	13.0	5.2	4.0	A.B.C.D.F	完形	Ⅰa		61－5
180	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ	13.8	5.0	4.0	C	1/1	Ⅰa		62－1
181	須恵系土器坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ	13.0	5.1	4.5	A.C.F	3/5	Ⅰa	B区SD302C溝出土	53－11
182	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	14.4	6.0	4.3	A.B.C.E	完形	Ⅰa		61－3
183	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ	13.6	5.9	3.9	緻密.C	完形	Ⅰb		62－4
184	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ	13.6	5.7	3.7	A	2/3	Ⅰb		62－7
185	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	12.4	4.5	3.9	A.B.C	4/5	Ⅱa	内面に漆状付着物	65－10
186	須恵系土器坏	3B層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	13.1	5.0	3.8	A.B.C	完形	Ⅱa	灰白色火山灰層直上	61－10
187	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ→軽い手持ちヘラケズリ［底］回転糸切	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	13.8	4.6	3.7	緻密.C.F	1/1	Ⅱa		61－15
188	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	14.2	5.3	4.2	A	4/5	Ⅱa		62－8
189	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	14.8	6.8	4.4	C	1/2	Ⅱa		
190	須恵系土器坏	1層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ミガキ	13.6	5.1	3.5	A.C	1/2	Ⅱb	内面に漆状付着物	62－9
191	須恵系土器坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ナデ痕	12.6	4.8	2.9	A	3/5	Ⅱb	B区SD302C溝出土	
192	須恵系土器高台坏	1～3	ロクロナデ［底］回転糸切→ロクロナデ	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	15.4	–	5.7	緻密.A	完形		墨書「口」高台径7.4cm	62－5
193	須恵器 坏	1～3	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ナデ	14.4	5.0	4.0	A	1/2	Ⅱa	南側土器集中地点	
194	須恵器 坏	1～3	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ	14.0	6.0	4.8	緻密	2/5	Ⅱa		
195	須恵器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ	14.3	7.1	5.0	A.B.C.F	2/5	Ⅱ	墨書「上」B区SD302C溝出土	
196	須恵器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ	(13.8)	(5.8)	(4.3)	A.C	1/2	Ⅱ	焼成不良 B区SD302C溝出土	
197	須恵器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	(15.0)	6.6	4.7		1/2	Ⅱ	焼成不良 B区SD302C溝出土	
198	須恵器 坏	–	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ（ロクロ目が不明瞭）	14.9	6.6	4.7		3/5	Ⅱ	焼成不良 B区SD302C溝出土	
199	土師器 甕	3B層	［口～体］ロクロナデ	［口～体］ロクロナデ	(25.0)	–	–	A.B.C.E.F	一部	BⅠ	南側土器集中地点	
200	土師器 甕	3B層	［口～体］ロクロナデ・手持ちヘラケズリ［底］手持ちヘラケズリ	［口～体］粗いミガキ 黒色処理	(19.6)	11.0	33.1	A.B	3/5	A		65－12
201	土師器 甕	1～3	［口～体］ロクロナデ	［口～体］ロクロナデ	(10.7)	–	–	A.C	一部	BⅡ	南側土器集中地点	
202	土師器 甕	3B層	ロクロナデ［底］回転糸切無調整	ロクロナデ	12.3	6.0	10.4	A.C	4/5	BⅡ		61－13
203	土師器 甕	1～3	［口～体］ロクロナデ	［口～体］ロクロナデ	(20.0)	–	–	A.C	一部	BⅠ	南側土器集中地点	
204	土師器 甕	1～6	［口～体］ロクロナデ	［口～体］ロクロナデ	(21.4)	–	–	A.B.C.F	一部	BⅠ	南側土器集中地点（北）	
205	須恵器 盤	1～3	有段 ［口］ロクロナデ［体］回転ヘラケズリ	［口～体］ロクロナデ	(21.6)	–	–	A.E	一部		胎土に海綿状骨針を多く含む	
206	須恵器長頸瓶	1～3	［頸～体］ロクロナデ	［頸～体］ロクロナデ	–	–	–	緻密	一部		湖西窯跡群産か	
207	須恵器 甕	1層	［口～頸］ロクロナデ［胴］平行タタキ→ロクロナデ	［口～頸］ロクロナデ［胴］無文あて具→ロクロナデ	24.1	–	–	A.B.C.E	一部			
208	須恵器 甕	3B層	［口～体］ロクロナデ	［口～体］ロクロナデ	(19.5)	–	–	B	一部			

番号	種別	層位	特徴 外面	特徴 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	残存	分類	備考	写真図版
209	須恵器長頸壺	3A層	[頸～体] ていねい	[頸～体] ていねい	－	－	－	A	一部		頸部のつけ根にリング状隆帯	65－11
210	弥生土器高杯	1層	平行沈線・波状文による変形工字文	工具		－	－	A	一部		文様は3単位と思われる	54－7
211	弥生土器 壺	1層	沈線・撫り消し手法による工字文　地文は斜縄文	工具		－	－	A	一部		文様は3単位と思われる	
212	弥生土器 壺		[胴] 縄文（L R）	工具	－	11.1	－	A,B,C	2/3			54－8

第122図　ＳＤ302出土遺物　石製模造品

No.	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	孔の数	孔の大きさ（タテ×ヨコ）		石材	備考
1	2.1	1.1	0.3	1	0.1	0.1	滑石	
2	2.2	1.7	0.4	（2）	0.1	0.1	〃	1孔は未貫通，一部欠損
3	2.2	1.9	0.3	2	0.1	0.1	〃	ほぼ完形品
4	2.6	1.0	0.2	1	0.1	0.1	〃	半欠品
5	2.2	2.3	0.3	2	0.2	0.2	〃	ほぼ完形品
6	2.0	2.0	0.4	2	0.1	0.1	〃	
7	2.3	1.0	0.3				〃	頭部欠損，有孔
8	2.2	1.4	0.3	1	0.1	0.1	〃	
9	2.2	2.4	0.3	2	0.1	0.1	〃	
10	2.7	1.0	0.3				〃	頭部欠損，有孔
11	1.7	1.7	0.3	2	0.1	0.1	〃	
12	1.9	1.1	0.4	2	0.2	0.2	〃	
13	2.4	2.5	0.4	2	0.1	0.1	〃	一部欠損
14	2.5	3.3	0.3	2	0.1	0.1	〃	
15	1.1	1.6	0.2	2	0.1	0.1	〃	一部欠損
16	1.8	2.4	0.3	1	0.1	0.1	〃	頭部欠損，有孔
17	2.3	0.9	0.2				〃	一部欠損，有孔
18	1.7	0.6	0.3				〃	
19	1.3	1.3	0.1	1	0.1	0.1	〃	欠損品，有孔
20	1.4	0.8	0.2				〃	

第123図　ＳＤ302他出土遺物　石製模造品，石器

No.	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	孔の数	孔の大きさ（タテ×ヨコ）		石材	備考
1	1.0	1.6	0.3	2	0.1	0.1	滑石	
2	1.4	1.6	0.2	2	0.1	0.1	〃	
3	1.6	1.0	0.2				〃	破片
4	1.2	1.6	0.2	2	0.1	0.1	〃	欠損品，一孔は一部破損
5	2.3	1.3	0.1				〃	未製品？穿孔あり
6	2.7	1.6	0.2				〃	破片
7	1.9	0.5	0.3				〃	破片
9	2.0	1.0	0.1				〃	破片

No.	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	石材	備考
8	二次加工ある剥片	3.4	1.0	1.6	玉髄	
10	剥片	3.4	2.3	1.1	チャート	
11	ピエス・エスキーユ	2.6	2.0	1.0	流紋岩	両極剥離
12	磨製石斧	8.0	3.4	2.6	凝灰質シルト岩	
13	剥片	4.0	2.7	0.4	流紋岩	

第124図　ＳＤ302出土石器

No.	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	石材	備考
1	磨製石斧	12.2	5.6	4	安山岩	刃部欠損
2	砥石	12.5	7	4.8	石英安山岩質，凝灰岩	溝状の擦痕あり
3	磨製石斧	8.1	7.0	5	砂岩	欠損品

第125～128図　ＳＤ302出土木製品・骨製品

No.	器種	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
1	輪鍵	9層上面	31.9	(13.2)	最大 2.6	嵌込部一部欠損（嵌込部内径約9.0）
2	鍵	〃	53.8（柄13.8）	最大 13.2	最大 1.6	柄の厚さ1.1
3	〃	6Ａ層	56.6（柄22.3）	最大(15.4)	最大 2.3	柄の厚さ3.0
4	不明	9層上面	38.1	最大 5.1	2.1	
5	鍵	3Ｂ層	145.7	最大 15.1	4.6	ほぼ完形，未製品
6	下駄	〃	(24.0)	最大 10.7	2.5	一部破損
7	柄	〃	推定直径 18.9	高さ 5.9	深さ 3.9	一部破損
8	不明	〃	35.4	最大 4.1	最大 4.2	ほぼ完形
9	横櫛	〃	(25.0以上)	最大歯径	3.5	上半部欠損
10	柄	〃	36.5	最大 5.3	2.9	完形
11	型ジロ	〃	19.2	最大 4.6	最大 3.3	完形
12	不明	〃	(17.3)	(2.2)	(1.9)	破損品
13	曲物底板	〃	(23.8)	(10.8)	1.4	半分欠損
14	〃	〃	(15.7)	(7.2)	最大 0.9	
15	〃	〃	径 13.8	(7.7)	0.5	半分欠損
16	不明	〃	(24.4)	22.6	1.3	
17	焼物？	〃	36	(7.0)	1.1	
18	骨製品	〃	21.4	1.0	0.6	
19	櫛の柄	〃	(24.0)	2.1	2.1	一部欠損
20	下駄	〃	(20.3)	(11.6)	最大 3.6	一部欠損

Ⅴ　考　察

今回の調査では、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡、方形周溝墓、掘立柱建物跡、水田跡、河川跡をはじめとして多くの土壙・溝などを検出している。また遺構を中心に、弥生時代～平安時代にかけての遺物が多量に出土している。以下では、遺物と遺構について、遺物から検討してゆくことにする。

1：遺物について

遺物は、土器・木製品・動物遺体・骨角製品の他に石器、石製模造品、土製品などが出土している。ここでは、土器、木製品、動物遺体・骨角製品について検討する。

Ａ：土器

土器には弥生土器、古墳時代～平安時代の土師器と須恵器がある。弥生土器は4個体出土しているだけであるが、古墳時代の土師器は竪穴住居跡、河川跡、土壙、溝を中心に最も多く出土している。また、平安時代の土器は、主にＳＤ302－Ｃ河川跡から出土している。

〔弥生時代〕

弥生土器はＳＤ302河川跡から3点とＣ区の表土から1点出土している。ＳＤ302河川跡からは、Ｃ区のＳＤ302－Ａの堆積層から甕が1点（121－212）と、Ｄ区の河川東側の落ち際から甕と高坏が各1点（121－210・211）出土している。

Ｃ区のＳＤ302－Ａの堆積層出土の甕は、胴部下半から底部にかけての資料で、胴部外面には横位のＲＬ縄文が施されている。またＤ区出土の甕は、大型甕の口縁部～体部上半にかけての破片で、ややまとまって出土している。胴部上位で軽く屈曲してやや長い頸部を持ち、口縁部が短く屈曲して外反するもので、頸部には充填手法による工字文、胴部には擬似縄文が施されている。高坏は脚高がやや低い脚部破片である。2 本の平行沈線によって上下二段の文様帯が画されており、それぞれには2本の沈線による波状文が描かれ、波状部の空間には1本の沈線が施されている。Ｃ区の表土からは、壺の胴部下半の破片が出土しており、縦位の撚糸文が施されている。

この中のＤ区から出土した大型甕は、類例が宮城県仙台市南小泉遺跡、多賀城市桝形囲貝塚などで出土しており、桝形囲式（伊東：1960）のものと考えられる。桝形囲式の資料は仙台平野で出土例が増加しているが、須藤隆氏によって細分が試みられており（須藤：1990）、それによれば文様の特徴から桝形囲式でも古い段階のものと考えられる。また、高坏の脚部は類例が宮城県一迫町青木畑遺跡などで出土しており、青木畑式（加藤：1982）のものと考えられる。青木畑式は宮城県北部に特徴的な土器として知られていた（佐藤：1980、須藤：1984）が、今回の発見によって仙台平野の中央部まで分布することが明きら

かとなった。

〔古墳時代〕

古墳時代の土器は、竪穴住居跡・方形周溝墓・土壙・溝跡・河川跡から出土している。器種としては、高坏・器台・坏・鉢（註 1）・甕・壺などがある。以下では最初に河川出土の土器について層位ごと整理し、その結果を参考にして遺構出土の土器を検討してゆく。

（1）ＳD302 河川跡出土の土器

ＳD302 河川跡は、前章でふれたように、堆積層が大きくみて 3 時期に分けられる（A➡B➡C）。このなかで古墳時代の土器が出土しているのはB期のもので、第 5 層から最下層の第 10 層にかけて出土している。なお、土器の出土した各堆積層は、第 6〜8・10 層が黒色の粘土、第 9 層が薄い粘土層が部分的に互層状にみられる砂層となっている。

出土した土器はほとんどが土師器で、いずれも非ロクロ調整のものある。また出土量は全体としては比較的多いが、各層ごとにみるとそれほど多くはなく、特に第 9 層は極端に少ない。最も多く出土した第 7 層をみても、器種の欠落がみられ、個体数も十分とはいえない。また、河川の堆積層では、当然のことながら新しい堆積層に古い堆積層の遺物が含まれるため、土器の共伴関係の把握が困難である。したがってここでは、各器種ごとの分類やそれに基づいた土器群の検討はおこなわず、これまでの土器研究の成果を参考にして、各層出土の土器群の編年的位置付けを第 10 層から順におこなってゆくことにする。

「各層出土土器群の編年的位置付け」

第 10 層からは台付甕の他に小型の壺、甕、坏が出土している（第 105・106 図）。この中の台付甕については、名取市野田山遺跡第 10 号住居跡（吾妻・須田：1992）や仙台市今泉城跡第 19 土壙（篠原・工藤他：1980）、志波姫町鶴ノ丸遺跡第 5 号住居跡（手塚：1982）から出土しており、古墳時代前期の塩釜式（氏家：1957）の土器とされている。したがって台付甕とともに出土した第 10 層出土の土器群は、塩釜式の土器と考えられる。

第 9 層からは比較的多くの土師器が出土しており、器種には高坏・坏・鉢・甕・壺がある（第 105・106 図）。この中で、図示したものは大部分が塩釜式の土器であるが、図示していないものには、古墳時代中期の南小泉式（氏家：1957）の土器と共通する特徴を有する坏や高坏も一定量出土している。したがって第 9 層からは、塩釜式の土器と南小泉式の土器がともに出土していることになり、これは本層が薄いスクモ層を互層状に含む砂層を主体とする堆積層であることから、第 10 層の堆積後から南小泉式期までの間に砂が押し出されるような比較的強い水の流れが断続的にみられたためと考えられる。

第 8 層からは、出土量は極めて少ないが、高坏・甕が出土している（第 107 図）。この中

の高坏は、脚部が中空で柱状をなし、裾部が屈曲して外反気味に開く南小泉式の高坏に典型的にみられるものである。

第7層からは比較的多量の土師器が出土しており、器種には高坏・坏・甕・壺などがある（第107～111図）。出土した土器の中では坏の占める割合が大きく、土器郡の特徴から南小泉式の土器と考えられる。

第6層からは、土師器の坏・甕・高坏などが出土している（第112・113図）。第6層では、形態的特徴が古墳時代後期の住社式（氏家：1957）の土器に特徴が類似している坏や甕が出土しており、その他に112図の69・70のように関東地方からの搬入品があるいはその影響を受けた漆塗の土師器の坏も出土している。

第5層は、10世紀前葉頃（註2）に降下した灰白色火山灰層（第4層）に覆われていることから下限年代が10世紀前葉頃と捉えられる。なお、第5層からは奈良時代と平安時代の土師器の坏・甕などが少量出土している。

このようにＳD302－Ｂ期の河川跡からは、古墳時代の土器が層位的に出立している。

次ぎに河川以外の遺構出土の土器について、古墳時代前期から順に検討してゆく。

（2）古墳時代前期の土器

古墳時代前期の塩釜式の土器を出土した遺構としては、A区のＳＩ112・114住居跡、ＳD105・106方形周溝墓、ＳD120溝、ＳK122・ＳK137土壙、B区のＳＩ202住居跡、ＳD224溝、ＳK238・239・271土壙、C区のＳＩ13住居跡、ＳK309・310土壙、D区のＳＩ401住居跡、ＳK404・409・410・412・414土壙などがある。また出土した土器の種類には台付甕、甕、甑、鉢、高坏、器台がある。全体の出土量は比較的多いが、個々の遺構から出土している土器の量はさほど多くはない。最初に土器の器種ごとの分類をおこない、その後に土器群の設定と編年的な位置付けをみてゆくことにする。

なお土器の分類に際しては形態上の特徴を基本にしておこなった。調整については実測図と観察表を参照していただきたい。

①；土器の分類（第129～131図）

〈甕〉

甕は、台付甕と平底甕の2つに大別できる。また、大きさと胴部の形態から、最大径が20㎝以上の大型もの（B・C・D類）、15～20㎝の中型のもの（E類）、15㎝以下の小型のもの（F類）に細分できる。

［甕A］台付甕で、最大径が胴部上位にある長胴をなし、直線状に外傾する単純口縁のもの（A1類）。この他にＳD302－B河川跡第10層から、S字状口縁で最大径が胴

部の中央にある球形に近い胴部を持つもの（A2 類）が出土している。

［甕B］縦長の胴部を持つ平底甕。最大径は胴部上位または中位にあるもの。口縁部の形態から 3 つに細分できる。

B1：端部が薄く中央部が肥厚する短い口縁部が鋭く屈曲して外反するもの。

B2：中位がわずかに肥厚する口縁部が強く屈曲して直線気味に外反するもの。屈曲部の器壁ほやや薄い。

B3：口縁部が屈曲してゆるやかに外反するもの。

［甕C］横長の胴部を持つ平底甕。口縁部の形態と最大径の位置から 4 つに細分できる。

C1：口縁部が屈曲して大きく外反するもの。最大径は胴部上位にある。

C2：口縁部は短く、屈曲して開くもの。口縁端部を面取りするものも見られる。最大径は胴部中位にある。

C3：ゆるやかに大きく外反するもの。最大径は胴部中位やや下にある。

C4：屈曲して外反するもの。屈曲部が厚く、口縁端部に行くほど薄くなる。最大径は胴部中位やや下にある。

［甕D］球形に近い胴部を持つ平底甕。口縁部の形態から 2 つに細分できる。

D1：強く屈曲して大きく外反するもの。口縁部は長く、口縁端部を面取りするものもある。

D2：屈曲して緩やかに外反するもの。口縁端部は丸い。

［甕E］中型の平底甕。球形に近い胴部を持つ。口縁部の形態から 3 つ細分できる。

E1：口縁部が屈曲して外反するもの。

E2：強く屈曲して短く直線気味に外反するもの。

E3：ゆるやかに大きく外反するもの。

［甕F］小型の平底甕。口縁部は直線気味に開く。

〈甑〉

甑は、胴部が軽く内湾しながら立ち上がる鉢形のものが 1 点出土している。小さな底部に径 1～2 ㎝の孔を持ち、口縁部は内側に折り曲げて肥厚させている。

〈鉢〉

口径に比して器高がほぼ同じもの、またはそれよりもやや小さいものを「鉢」とした。鉢は大きさから、胴部の最大径が 20 ㎝以上ある大型のもの（A類）、15～20 ㎝の中型のもの（B類）、15 ㎝以下の小型のもの（C～Ⅰ類）に大別し、中型や小型のものについては形態的特徴から細分した。

［鉢A］大型で、口径が 25 ㎝以上のもの。深い胴部に屈曲して内湾気味に開く口縁部を持

ち、底部は大きな平底である。

［鉢B］中型で、胴部が球形のもの。直立気味に外傾する口縁部を持つ。底部は比較的小さな平底で、口縁部の形態から2つに細分できる。

B1：口縁部が長いもの。

B2：口縁部が短いもの。

［鉢C］口縁部が短く、内傾もしくは直立する小型のもの。胴部は球形に近い。

［鉢D］口縁部が短く、外反する平底の小型のもの。口縁部・胴部の形態から2つに細分できる。

D1：底部が大きく扁球状の胴部をなし、口縁部が外反するもの。

D2：底部が小さく半球状の浅い胴部で、口縁部が屈曲して直線気味に外傾するもの。

［鉢E］口縁部が比較的長く、扁球状の胴部を持つ小型のもの。口縁部と底部の形態により以下のように細分できる。

E1：大きな平底で、口縁部が強く屈曲して直線気味に開くもの。

E2：口縁部が軽く屈曲して内彎気味に開くもの。胴部の特徴からさらに2つに細分できる。

a類：胴部の張りが弱く、底部が丸底風の平底のもの。

b類：胴部の張りが強く、底部が小さい平底のもの。

［鉢F］口縁部が長く、浅い半球状の胴部を持つ小型で平底のもの。

［鉢G］丸底または小さな凹み底ないし平底の小型のもの。口縁部は長く外反する。胴部の形態から2つに細分できる。

G1：胴部の張り出しが強く扁球状のもの。

G2：胴部の張り出しが弱く半球状のもの。胴部の形態からさらに2つに細分できる。

a類：口径に比して器高の低いもの。

b類：口径に比して器高の高いもの。

［鉢H］強く張り出した球状の胴部に、屈曲して外反する短い口縁部を持つもの。

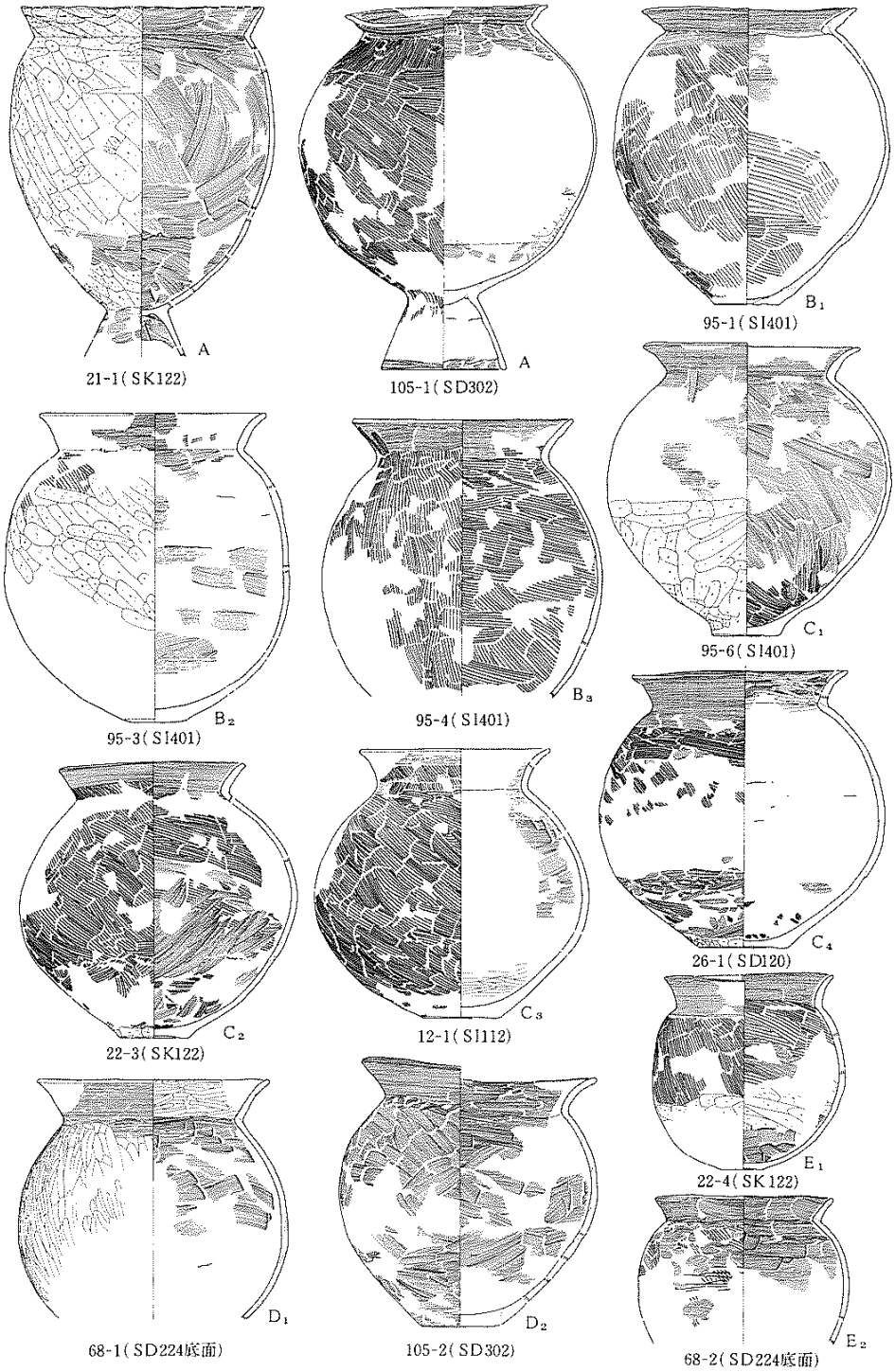
［鉢Ｉ］この他に、河川出土のものであるが、小型で平底の底部からゆるやかに口縁部まで立ち上がるものがある。

〈壺〉

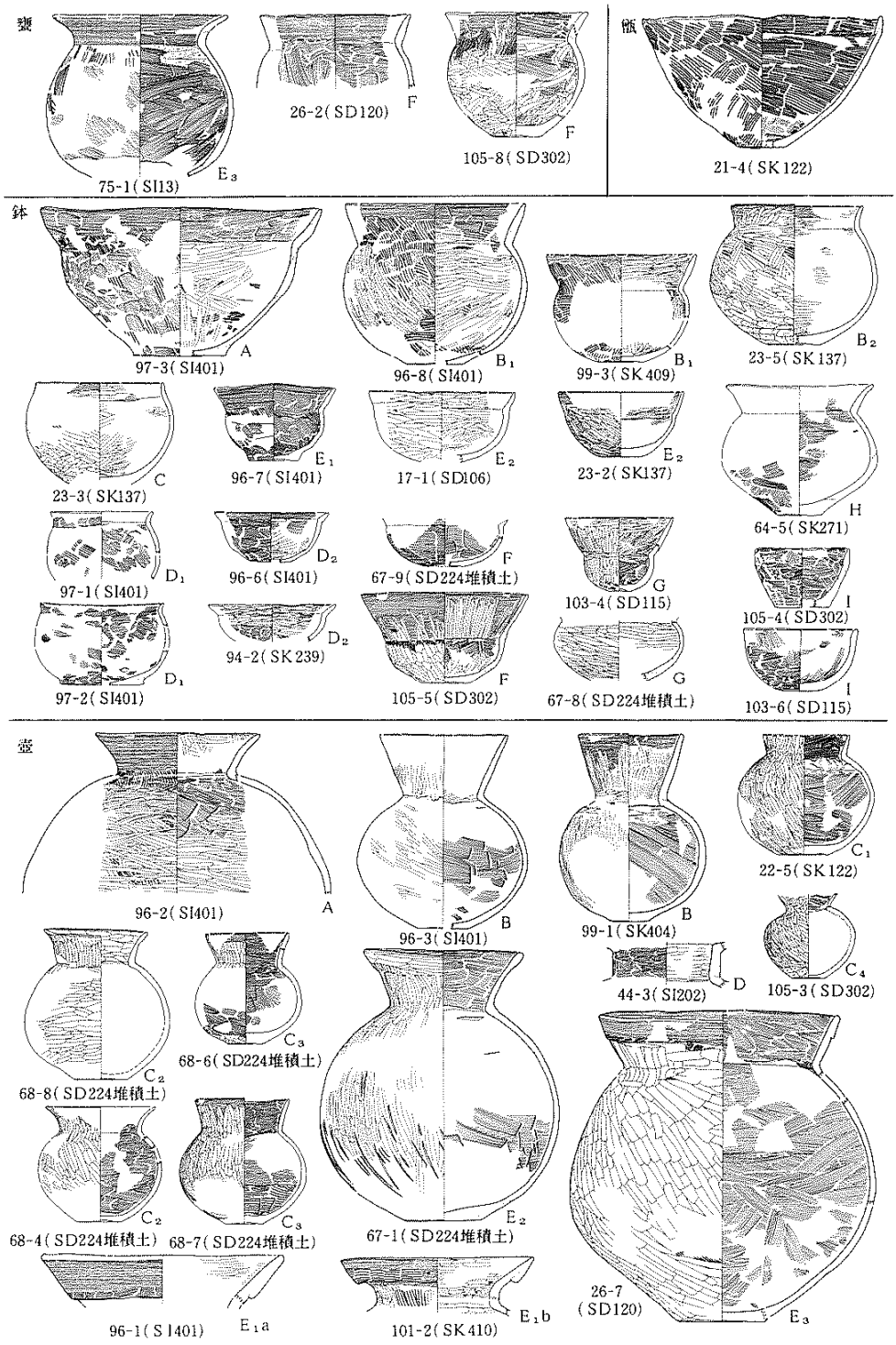
壺は、大きさや口縁部・頸部・胴部・底部の形態から、以下のように分類できる。

［壺A］単純口縁の大型壺。口頸部が比較的短く、胴径に比して口径が小さいもの。口縁部の形態から2つに細分できる。

A1：口縁部が外反するもの



第129図　甕分類図一(1)　(古墳時代前期)



第130図　甕・甑・鉢・壺分類図（古墳時代前期）

A2：直線気味に外傾するもの

［壺B］単純口縁の中型壺。球状の胴部に、直線気味に外傾する長い口頸部を持ち、底部が小さい平底のもの。胴部の形態から２つに分けられる。

B1：胴部に膨らみを持ち最大径が胴部中央やや上位にあるもの

B2：胴部が球形のもの

［壺C］口頸部が短い単純口縁の小型の壺。胴部はほぼ球形をなし、底部は小さな平底で、最大径は胴部にある。口頸部の形態から４つに細分できる。

C1：口頸部が短く直立気味に立ち上がるもの。口径は比較的大きい。

C2：口頸部が比較的短く外反するもの。口径がやや小さく最大径が胴部中央やや下にあるもの（a類）と、口径がやや大きく最大径が胴部中央やや上にあるもの（b類）がある。

C3：口頸部がやや長く外傾するもの。

C4：口径が小さいもの。頸部の径は他に比して小さい。

［壺D］二重口縁の壺。頸部のみの破片であるために詳細は不明であるが、頸部は短く直立し、屈曲して口縁部に至るものと思われる。

［壺E］複合口縁の壺。口縁部の形態から３つに細分できる。

E1：肥厚した口縁部が明瞭なもの。頸部は比較的短い。肥厚した口縁部の幅が広いもの（a類）と狭いもの（b類）がある。

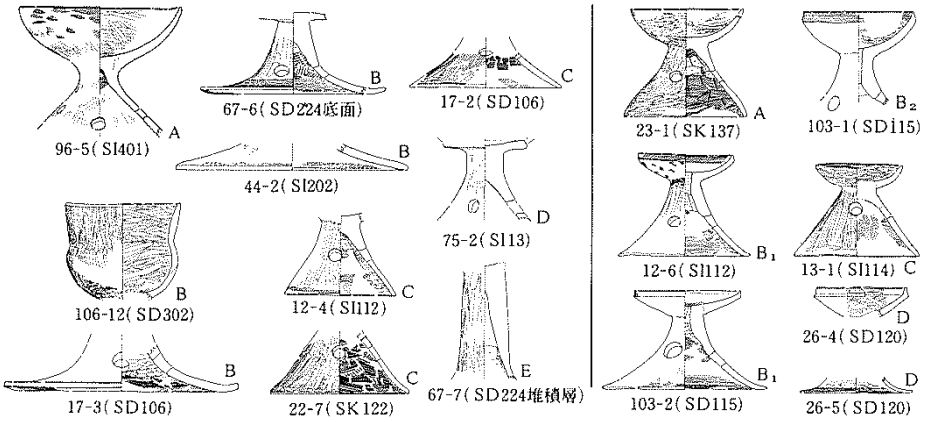
E2：肥厚した口縁部の段があまり明瞭ではなく、頸部が長く大きく外反するもの。

E3：口径が他に比べて大きいもの。

〈高坏〉

高坏は、脚部と坏部の形態から、以下のように分類できる。

［高坏A］内湾気味に開く円錐状の脚部に、浅い椀状の坏部が付くもの。脚上部は短い柱



第131図　高坏・器台分類図（古墳時代前期）

状に似た形態をなし、屈曲して「ハ」字状に開いて裾部へと続く。脚部には現状で円孔が4つ見られる。

［高坏B］脚部の裾が大きく開くもの。直線的に開くもの（B1 類）と大きく外反するもの（B2 類）がある。円孔は3孔と4孔のものがある。坏部の形態は不明であるが、小型丸底鉢と同様の形態のものも存在すると思われる。

［高坏C］脚部が円錐状のもので、やや内彎気味に開くもの（C1 類）とゆるく外反しながら開くもの（C2 類）がある。円孔は3孔と4孔のものがある。坏部の形態は不明である。

［高坏D］脚上部が中実で、脚下部が円錐状に広がるもの。

［高坏E］脚部が中空の柱状を呈し、裾部が屈曲して広がるもの。

この他、図示していないが、脚部が中実の柱状をなし裾部が屈曲して広がるものが1点みられる。

〈器台〉

器台は、受部と脚部の形態から、以下のように細分した。

［器台A］浅い椀状の受部に円錐状の内湾する脚を持つもの。受部には貫通孔が見られない。脚部には円孔が3つあり、脚端部は面取りされている。

［器台B］緩く外反しながら開く円錐状の脚部を持つもの。受部には貫通孔が見られ、口縁部は外面に稜線を持って短く立ち上がる。脚部には円孔が3つある。受部が浅いもの（B1 類）の他、河川跡から深いもの（B2 類）が出土している。

［器台C］脚部が直線的に開く円錐状を呈するもの。受部に貫通孔は見られず、口縁部はゆるやかに立ち上がる。

［器台D］受部が直線気味に立ち上がり、屈曲して直立ないしは内傾する短い口縁部を持つもの。脚部は不明な点が多いが、脚端部径が受部径に近似し、脚裾部が強く外反するものと思われる。

②；土器群の設定

ａ、出土状況

ＳD224 では、底面と堆積土からそれぞれ土器が出土しており、層位的に2つの土器群として捉えられる（註 3）。底面からは、高坏・甕・壺が出土している。高坏には脚部の裾が大きく開くＢ類、甕には球形に近い胴部をなし口縁部が屈曲して大きく外反するD1類と中型で球形に近い胴部をなし口縁部が強く屈曲して短く直線気味に外反するE2 類、壺には胴部がほぼ球形をなし口縁部がやや長く外傾するC3 類がある。

一方、堆積土からは、高坏・鉢・甕・壺が出土している（註 4）。高坏には脚部が中空の

柱状をなし裾部が屈曲して広がるＥ類、鉢にはいわゆる小型丸底鉢である小型で口縁部が長く、浅い半球状の胴部のＦ類と胴部が大きく張り出す扁球状をなし口縁部が長く外反するG1 類、甕には口縁部が直線気味に開く小型のＦ類、壺には球形の胴部をなし直線気味に外傾する長い口縁部のＢ類・底部が小さな平底で球形の胴部をなし口縁部が比較的短く外反するC2 類・口縁部がやや長くて外傾するC3 類・口径が小さいC4 類・肥厚した口縁部の段があまり明瞭でなく、頸部が長く大きく外反する複合口縁のＥ2 類がある。

このＳＤ224 出土の両土器群の内容を比較してみると、ともに出土している高坏では、底面からはＢ類が出土しているのに対して、堆積土からはＥ類だけが出土している。また、組成上の欠落の可能性も考えられるが、堆積土からは小型丸底鉢である鉢Ｆ類とG類が出土しているが、底面からは出土していないというような土器群の様相の違いが認められる。

このように層位的に細分されると考えられたＳＤ224 出土の両土器群は、器種ごとの細別類型のあり方からみた場合でも内容の異なる土器群として捉えられる。この両土器群については、溝からの出土ということで、住居跡出土の一括土器からみれば時間幅の長い土器群と考えられるが、ここではＳＤ224 底面出土土器を第Ⅰ群土器とし、堆積土出土土器を第Ⅱ群土器と捉えておくことにする。

第Ⅰ群土器：ＳＤ224 底面出土土器で、器種には高坏・甕・壺がある。高坏には脚部の裾が大きく開くＢ類、甕には球形に近い胴部をなし口縁部が屈曲して大きく外反するD1 類・中型で球形に近い胴部をなし口縁部が強く屈曲して短く直線気味に外反するＥ2 類、壺には胴部がほぼ球形をなし口縁部がやや長く外傾するC3 類がある。

第Ⅱ群土器：ＳＤ224 堆積土出土土器で、器種には高坏・鉢・甕・壺がある。高坏には脚部が中空の柱状をなし裾部が屈曲して広がるＥ類、鉢には小型で口縁部が長く、浅い半球状の胴部のＦ類・胴部が大きく張り出す扁球状をなし口縁部が長く外反するG1 類、甕には口縁部が直線気味に開く小型のＦ類、壺には球形の胴部をなし直線気味に外傾する長い口縁部のＢ類・底部が小さな平底で球形の胴部をなし口縁部が比較的短く外反するC2 類・口縁部がやや長くて外傾するC3 類・口径が小さいC4 類・肥厚した口縁部の段があまり明瞭でなく、頸部が長く大きく外反する複合口縁のＥ2 類がある。

③；土器群の編年的位置

東北地方の古墳時代前期の土器は、1957 年に氏家和典氏によって「塩釜式」として型式設定がなされて以来(氏家：1957）、調査成果の蓄積によって土器編年を中心とした研究がなされてきた。宮城県ではその成果をもとに、丹羽茂氏により、塩釜式の３段階４時期の細分案と変遷案が示され（丹羽：1985）、加藤道男氏や古川一明・白鳥良一氏らによる細

分案も示されている（加藤：1989、古川・白鳥：1991）。近年、次山淳氏によって高坏・小型丸底鉢・甕の3器種の変遷を軸とした6段階の細分案が示された（次山：1992）。さらに、辻秀人氏が次山氏の研究をふまえて東北地方南部を中心とした土器編年を提示している（辻：1993）。

これら各編年案をみると、基準となった資料である土器群の変遷はほぼ一致しているが、時期の細分に違いがみられる。各編年案では、丹羽編年のⅠ段階にあたる県内の塩釜式の最も古い時期とⅡB段階ついてはほぼ一致しているが、丹羽編年でⅡB段階としている鶴ノ丸遺跡第7号住居跡出土土器群（手塚：1981）を次山編年では伊古田遺跡第14号住居跡出土土器群（高橋：1984）とあわせて丹羽編集のⅡA段階の当初にあたる2段階へ位置付けている。また辻編年では、鶴ノ丸遺跡第7号住居跡出土土器群を丹羽編年のⅡA段階を3分割してその2番目のⅢ−1期に位置付けている。このように、丹羽編年のⅡ期を細分するといったかたちで次山・辻編年案が提出されているが、各編年案における時期細分の妥当性を検証できる確実な基準資料が捉えられていない現段階では、各編年案の基軸となっている丹羽編年に主に従ってみてゆくことにする。

ａ、第Ⅰ群土器について

第Ⅰ群土器は、高坏B類、甕D1・E1類、壺C3類からなる。このような特徴を持つ類例を県内で求めると（比較に際しては本遺跡でおこなった細別類型で示すことにする）、蔵王町大橋遺跡第1号住居跡（太田：1980）、仙台市戸ノ内遺跡第4号住居跡（主浜・渡部：1984）、亘理町宮前遺跡第53号住居跡（丹羽：1983）、色麻町色麻古墳群第11号住居跡（古川：1983）などがあげられる。

大橋遺跡第1号住居跡からは第Ⅰ群土器の特徴である高坏B類のほか、高坏C類、甕C2類、鉢E1・E2ａ類が出土している。戸ノ内遺跡第4号住居跡からも高坏B類とC類、鉢ではD1類が、また宮前遺跡第53号住居跡からは高坏B類のほか、鉢ではE2ｂ類などが出土している。色麻古墳群第11号住居跡からは高坏B類のほか、鉢B2・E1・E2類などや甕ではC1・C2類が出土している。このように高坏B類が出土し、鉢では小型丸底鉢が認められない土器群は、第Ⅰ群土器と共通する特徴を持っていると考えられる。

これらの各遺跡出土の土器群については、大橋遺跡第1号住居跡・戸ノ内遺跡第4号住居跡・宮前遺跡第53号住居跡出土の各土器群は、丹羽編年のⅠ段階、次山編年の1段階、辻編年のⅡ−1 期の基準資料となっており、各編年案でも一致して塩釜式の土器では宮城県で最も古い段階に位置付けられている。また色麻古墳群第11号住居跡出土の土器群は、丹羽編年のⅡA段階、辻編年ではⅡ−2期に対応させられている。以上より、第Ⅰ群土器

は、丹羽編年のⅠ～ⅡA段階、次山編年の１段階、辻編年のⅡ－1～Ⅱ－2 期に対応することになり、古墳時代前期塩釜式の前半を中心とした時期の土器群と考えられる。

b、第Ⅱ群土器について

第Ⅱ群土器は、量的にも少なく甕も出土していないなど土器群の組成に欠落もみられるが、鉢には第Ⅱ群土器を特徴づける鉢F類・G1 類と高坏E類のほか、甕F類、壺B類・C2 類・C3 類・C4 類・E2 類からなる。

このような特徴を持つ土器群の類例を県内で求めると、小牛田町山前遺跡大溝出土土器群（宮城県文化財保護課：1976）、志波姫町鶴ノ丸遺跡第 5～7 号住居跡出土土器群（手塚：1981）、河南町須江糠塚遺跡第 4 号住居跡出土土器群（阿部・高橋：1987）、築館町伊治城跡ＳD261 出土土器群（佐藤：1992）などがある。これらの中では山前遺跡大溝と須江糠塚遺跡第 4 号住居跡から第Ⅱ群土器と共通する特徴を持つ高坏E類と鉢G2b類が出土している。また伊治城跡ＳD261 からは鉢G1 類のほか鉢G2a・G2b類と壺C3 類、鶴ノ丸遺跡第 5・6・7 号住居跡からは、鉢F類・G1 類のほか鉢G2 類など第Ⅱ群土器にみられる小型丸底鉢と類似した特徴を持つ土器がそれぞれ出土している。

なお、第Ⅱ群土器の鉢G2 類は、本遺跡ではＳD115 河川跡第 5B層から出土しているだけで、遺構における他の土器との共伴関係は捉えられないが、伊治城跡ＳD261 では鉢G1 類と鉢G2a類・G2b類が共伴している。また山前遺跡大溝・須江糠塚遺跡第 4 号住居跡では、鉢G2b類と高坏E類が共伴していることから、鉢G2a・G2b類は第Ⅱ群土器に伴うものと考えられる（註 5）。

これらの中で、鶴ノ丸遺跡第 5・6・7 号住居跡と山前大溝出土の土器群は、丹羽編年のⅡB段階に相当するとみられることから、第Ⅱ群土器は、古墳時代前期の中頃を中心とした時期の土器群と考えられる。しかし前述したように、丹羽編年でⅡB段階に対応させている鶴ノ丸遺跡第 7 号住居跡出土土器群は、次山・辻編年では丹羽編年より古く考えて 2 段階とⅢ－1 期にそれぞれ位置付けられている。このことから丹羽編年のⅡB段階に位置付けられる土器群は、比較的時間幅を持っている可能性も考えられる。また第Ⅱ群土器は、溝の堆積層から出土したものであることからみると、住居跡出土の土器群と較べれば時間幅の長い土器群と考えられる。

なお、伊治城跡ＳD261・須江糠塚遺跡第 4 号住居跡出土のものは、丹羽編年のⅡB期に対応すると思われる。

④；各遺構における器種ごとの細別類型のあり方

ＳD224 以外に塩釜式の土器を出土した遺構ついて、器種ごとの細別類型のあり方をみると、以下の表のようになる。

遺構名	甕	甑	鉢	坏	高坏	器台	壺
SD105	A ・C2						
SD106	D1		H		B・C		
SI112	C3		B2		C	B	
SI114						C	
SD120	C3・C4・F				D	D	A1・ E3
SK122	A1・C2・E1	A	H		C		A1・C1
SK137	E1		B2・C・ E2a			A	
SI202	E1				B		D
SI 13	E3				D		
SK239	B2		D2				
SI401	B1・B2・B3・C1		A・B1・D1・D2・E1		A		A1・B

第１表　遺構における土器の細別類型のあり方（古墳時代前期）

この中では、土器の出土量が比較的多く、焼失住居跡であることから出土土器に一括性があり、ＳＤ224 出土土器に較べ土器群の時間幅もより限定されるＳＩ401 出土土器群について検討する。

⑤；ＳＩ401 出土土器群について

ＳＩ401 床面からは高坏・鉢・甕・壺が出土している。高坏には内湾気味に開く円錐状の脚部に浅い椀状の坏部が付くＡ類、鉢には大きな平底で深い胴部に屈曲して内湾気味に開く口縁部のＡ類・胴部が球形で長い口縁部が直立気味に外傾するＢ1 類・平底で胴部が扁球状をなし口縁部が短く外反するＤ1 類・浅い半球状の胴部で屈曲して直線気味に外傾するＤ2 類、大きな平底の扁球状の胴部で、口縁部が強く屈曲して直線気味に開く小型のＥ1 類、甕では縦長の胴部を持つＢ1・Ｂ2・Ｂ3 類・胴部の張り出しが強く胴部の高さより最大径が大きいＣ類、壺には口頸部が比較的短く口縁部が外反する大型のＡ1 類がある。

本土器群は、高坏に第Ⅱ群土器にみられるＥ類がみられないこと、また鉢にはＡ・Ｂ1・Ｄ1・Ｄ2・Ｅ1 類といった多くの種類がみられるものの小型丸底鉢である鉢Ｆ類・Ｇ2 類がみられないことから、第Ⅰ群土器と共通した特徴を有していると考えられる。そしてこのような土器群の類例としては、野田山遺跡第 19 号住居跡出土土器群（吾妻他：1992）があげられる。

野田山遺跡第 19 号住居跡からは、鉢ではＣ類とＤ1 類、甕ではＢ1 類・Ｂ2 類、壺ではＥ1ａ類が出土しており、この中の鉢Ｄ1 類と甕Ｂ1・Ｂ2 類が、本土器群出土のものときわめて類似した特徴を持っている。そして野田山遺跡第 19 号住居跡出土土器群が、丹羽編年のⅠ～ⅡＢ段階のなかでも古い様相を持つとされていることから、ＳＩ401 出土土器群は第Ⅰ群土器

におよそ対応する考えられる。

ところで、前述のようにＳＩ401 出土土器群は第Ｉ群土器と共通した様相を持つ土器群と考えられるが、第Ｉ群土器と本土器群を比較してみると、土器群の組成の欠落も考えられるが、本土器群から出土している高坏A類は第Ｉ群土器にはみられず、また甕でも第Ｉ群土器にみられないＢ類・Ｃ類が出土している。さらに本土器群からは、高坏A類や鉢A類といった県内でもほとんど類例のみられない土器も出土しており、第Ｉ群土器とのあいだに明らかな様相の違いも認められる。しかし、この両土器群のあいだの相違については比較検討のできる資料のみあたらないこの段階では、第Ｉ群土器が溝出土のもので比較的時間幅のある土器群である可能性も含めて、今後の資料の増加をまってあらためて検討することにしたい。

なお、この他の遺構出土の土器群については、土器の出土量も少なく組成に欠落もみられるが、ＳＤ106 は第Ｉ群土器と甕D1 類と高坏Ｂ類を共有し、鉢Ｆ・Ｇ類が出土していないことより、またＳＩ202 ほ高坏Ｂ類が出土し、鉢Ｆ・Ｇ類が出土していないことから第Ｉ群土器に含められる。またＳＫ122 は、ＳＤ106 と高坏Ｃ類と鉢H類を共有し、鉢Ｆ・Ｇ類がみられないことからやはり第Ｉ群土器に含められると思われる。ＳＫ137 は、比較的鉢が多く出土しているにもかかわらず、鉢Ｆ・Ｇ類がみられないことから第１群土器に含められる可能性が考えられる。

（3）古墳時代中期の土器

古墳時代中期の土器を出土した遺構としては、Ａ区のＳＩ103 住居跡、ＳＤ115 溝、Ｂ区のＳＩ20・21・22・201・245 住居跡、Ｃ区のＳＩ14・15・16・17・301・304 住居跡、ＳＫ312 土壙などがある。この他、1990 年度の確認調査で検出したＳＸ01 土器集積遺構がある（真山：1991）。また出土した土器の種類には土師器の甕・甑・坏・壺・高坏・ミニチュア土器・鼓形土器・コップ形土器などがある。個々の遺構から出土している土器の量はさほど多くはないが全体としては多量の土器が出土している。以下では中期の土器について分類をおこないその後に各遺構における共伴関係から土器群の設定と編年的な位置付けを検討してゆく。

①；土器の分類（第 132～133 図）

〈甕〉

胴部・口縁部の形態から次のように分類できる。

［甕Ａ］胴部上位がやや張り出す縦長の胴部を持つもので、口縁部は屈曲して外反する。胴部最大径が 20 ㎝以上の大型のもの(1 類)、と 20 ㎝未満の小型のもの（2 類）に

細別できる。

［甕B］球形に近い胴部を持つもので、口縁部は屈曲して外反する。最大径は胴部のほぼ中位にある。胴部最大径が20㎝以上の大型のもの（1類）、と20㎝未満の小型のもの（2類）に細別できる。

［甕C］中位が膨らむ縦長の胴部を持つもので、口縁部は強く屈曲して外反する。口縁部の形態には、直線気味に外反するものと緩やかに大きく外反するものがある。大きさから2つに細分できる。

C1：中型のもので、口径の大きいもの（a類）とやや小さい（b類）がある。

C2：口縁部が大きく外反する大型のもの。

［甕D］縦長の楕円形をなす胴部を持つもので、口縁部は直立気味に外反する。口径は胴径に比して小さく、最大径は胴部の中位またはやや下にある。

［甕E］長胴形の胴部を持つもので、口縁部が屈曲して緩やかに外反する。最大径は胴部の中位にある。

〈甑〉

甑は口縁部・胴部および底部の形態から次のように分類できる。

［甑A］鉢型の甑で、単孔のもの。器形と口縁部の形態から2つに細分できる。

A1：鉢状のもの。口縁部が肥厚し、短く屈曲して外反する。

A2：深い椀状のもの。底部から緩やかに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。

［甑B］長胴の無底の甑で、口縁部の特徴から2つに細分できる。

B1：口縁部が肥厚して軽く屈曲するもの。底部から緩やかに外に開くもの（a類）と、胴部中央から直立気味に立ち上がるもの（b類）がある。

B2：口縁部で軽く外反し、端部に行くほど先細りするもの。内面には明瞭な稜線を持つ。底部から緩やかに外に開くもの（a類）と、胴部中央から直立気味に立ち上がるもの（b類）がある。

［甑C］やや丸みのある長胴をなし、軽く屈曲して直線気味に立ち上がる口縁部を持つ無底のもの。口縁部は外側に肥厚し、頸部には軽い段ができる。

〈壺〉

壺は、口頸部の形態から単純口縁のもの（A・B類）、複合口縁のもの（C類）、有段口縁のもので（D・E類）に分け、大きさや胴部・底部の形態から細分できる。

［壺A］球状の胴部に短い口頸部を有する単純口縁のもの。口頸部は短く直立ないしは内湾気味に立ち上がる。底部は小さな平底をなし、最大径は胴部にある。大きさから2つに細分できる。

A1：胴部の最大径が 20 ㎝以上の大型のもの。

A2：胴部の最大径が 15 ㎝以下の小型のもの。

［壺B］扁球状の胴部に外傾する口頸部を持つもの。大きさと口縁部の長さで 2 つに細分できる。

B1：胴部の最大径が 18 ㎝以上の大型のもので、口縁部が比較的短いもの。

B2：胴部の最大径が 16㎝ 以下の小型のもので、口縁部が比較的長いもの。

［壺C］複合口縁の壺。肥厚した口縁部は明瞭で幅は狭く、頸部は比較的短い。

［壺D］頸部に段や稜を持つ有段口縁のもの。頸部の特徴から 2 つに細分できる。

D1：外反する頸部の中央に突帯状のものを持つもの。

D2：稜線が施されるもの。

［壺E］頸部のほぼ中央で屈曲して短く直立気味に立ち上がる有段口縁の壺。屈曲部には明瞭な稜線ができる。

この他、図示していないが、単純口縁の長頸壺が出土しているが、口頸部の破片で胴部の形態は不明である。また須恵器の𤮊を模倣した土器が 1 点出土している。

〈高坏〉

高坏は、脚部と坏部の形態から以下のように分類できる。

［高坏A］屈曲せずに緩やかに外反する脚部を持つもの。坏部は逆台形をなし、底部は平らなもの、傾斜を持つもの、やや丸みを持つものの 3 形態がある。脚部のほぼ中央に円孔を 1 つ持つものがある。

［高坏B］脚部は柱状をなし、裾部が屈曲して軽く外反するもの。坏部は逆台形を呈する。脚部には中空のものと脚上部が中実のものがある。また、中には脚部ほぼ中央に円孔を持つものがある。

［高坏C］坏部と脚裾部に稜線や段を持つもの。小破片のため全体の器形は不明である。

［高坏D］大きく深い坏部を持つもの。坏部の破片のみで詳細は不明である。

〈坏〉

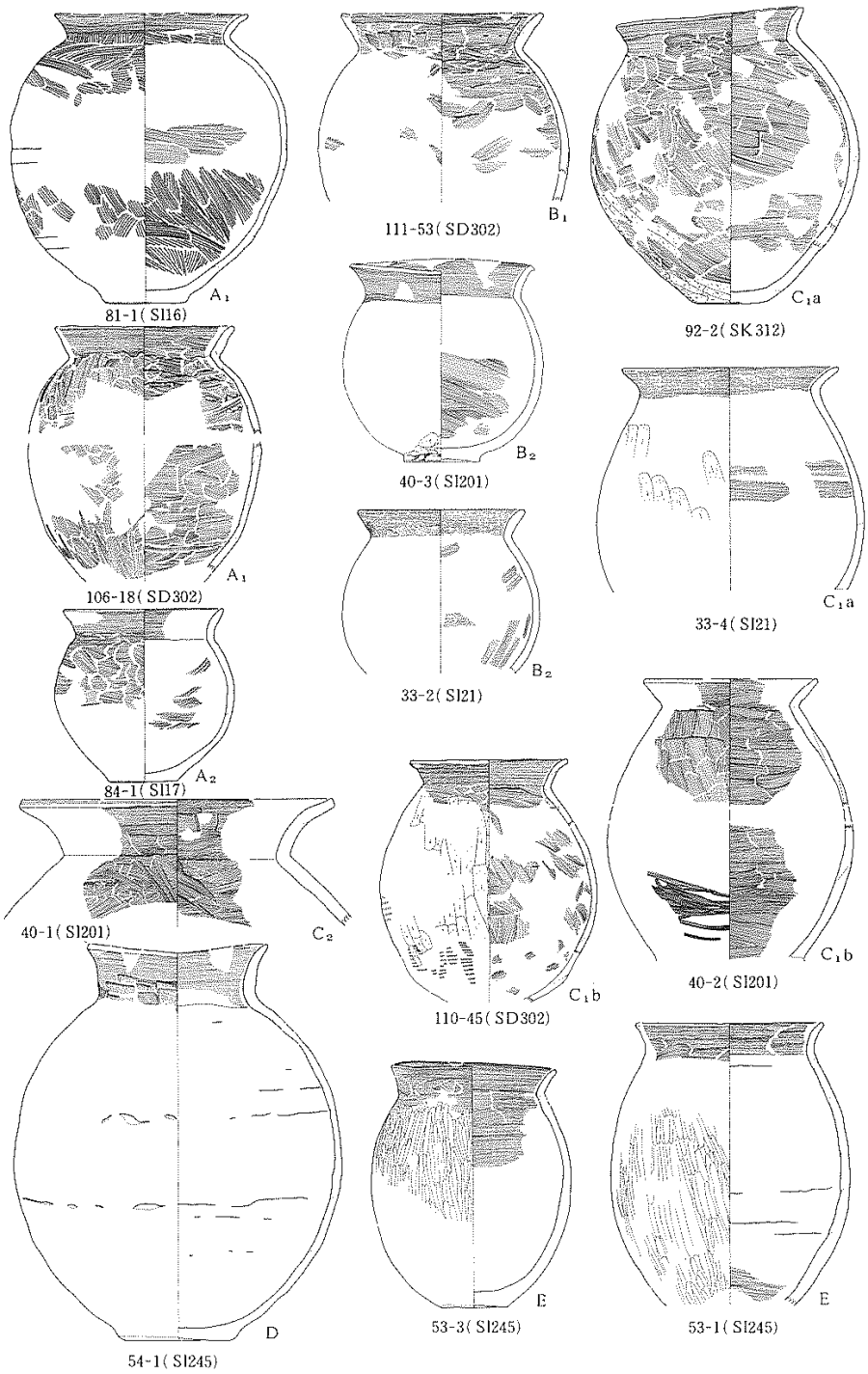
形態的には口径が大きく器高が低いもので、口縁部・胴部・底部の形態や大きさから、以下のように分類できる。

［坏A］底部から緩やかに口縁部にいたるもの。平底と丸底、小さな凹み底のものがある。口縁部の形態から 3 つに細分できる。

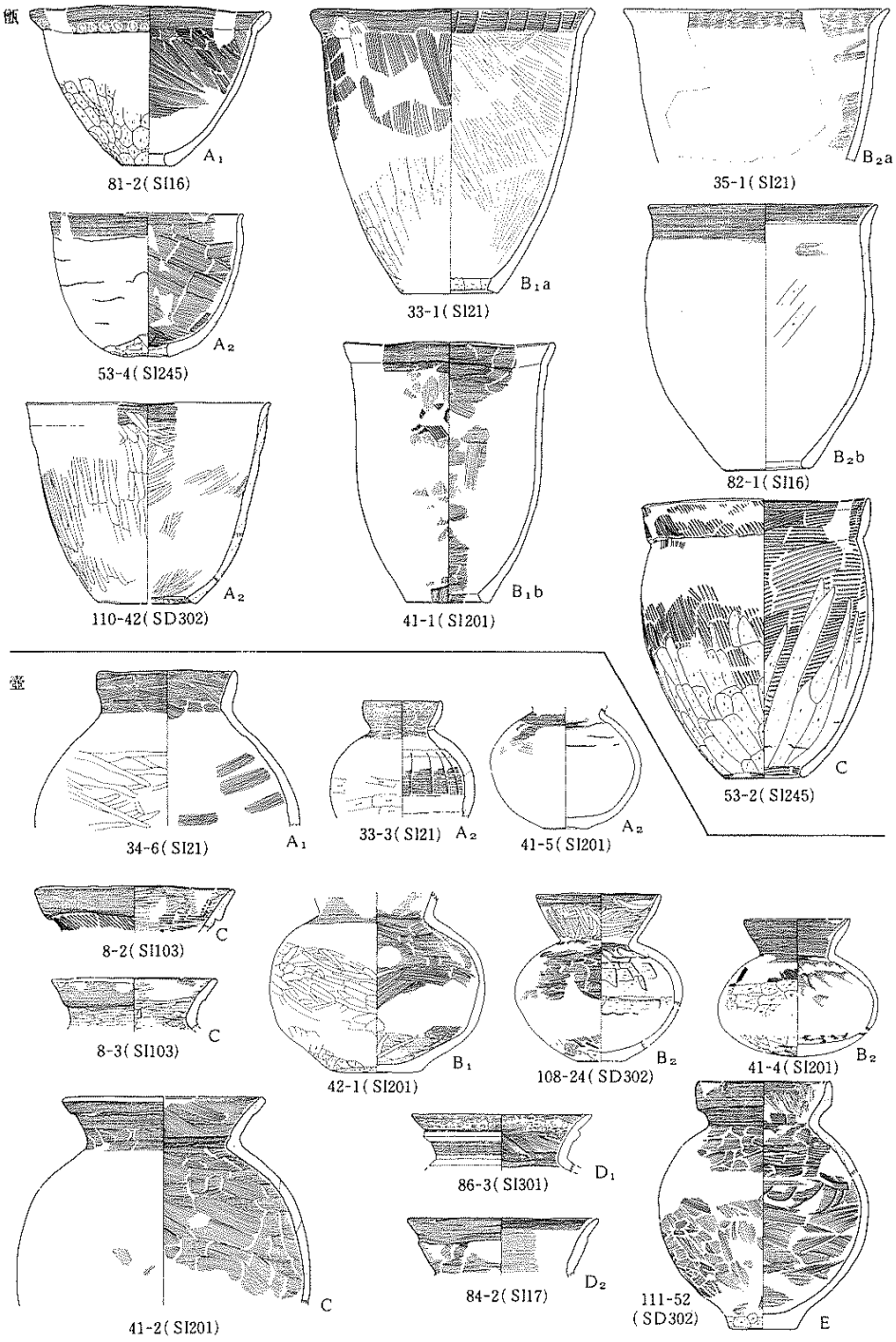
A1：口縁部が内湾する深い鉢状のもの。

A2：口縁部が直線的に外に開くもの。

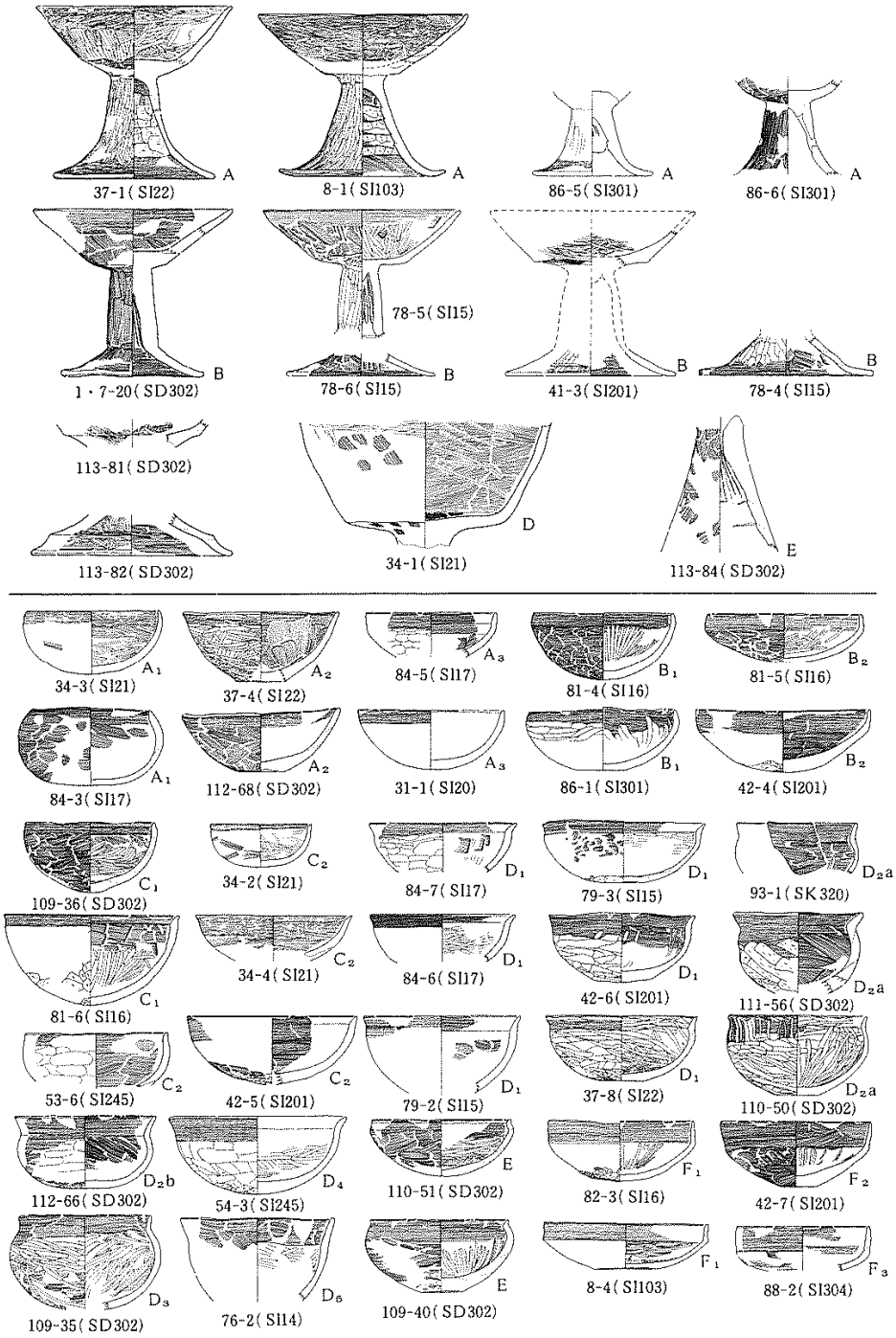
A3：口縁部が直立気味に立ち上がるもので、やや浅いものと深いものがある。



第132図　甕分類図（古墳時代中期）



第133図　甑・壺分類図（古墳時代中期）



第134図　高坏・坏分類図（古墳時代中期）

［坏B］平底あるいは丸底で、口縁部が短く、屈曲して内傾ないしは直立するもの。外面には弱い稜線ができる。深いもの（B1類）と浅いもの（B2類）がある。

［坏C］胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反するもの。内面には弱い稜線ができ、口縁端部ほど器壁が薄くなる。平底と丸底がある。深いもの（C1類）と浅いもの（C2類）がある。

［坏D］外反する口縁部を持つもので平底と丸底がある。口縁部や胴部の形態から5つに細分できる。

D1：半球状の胴部に、短く外反する口縁部を持つもの。

D2：扁球状の強く膨らんだ胴部に、外反する口縁部を持つもの。椀状の深いもの（a類）と比較的浅い胴部に大きく外反する口縁部を持つもの（b類）がある。

D3：直立気味に立ち上がる口縁部に扁球状の強く膨らんだ胴部を持つもの。

D4：半球状の胴部に大きく外反する口縁部を持つもの。

D5：張りの弱い胴部に軽く屈曲して外反する長い口縁部を持つもの。

［坏E］胴部上半が軽く屈曲または強く張り出して、口縁部が再び外反するもの。口縁部がS字状に近い形をなす。丸底と平底がある。

［坏F］有段・有稜のもの。口縁部は直立ないしは内傾する。平底または丸底風の平底をなし、底部と口縁部の形態、器高から以下のように細分した。

F1：比較的大きな平底で、浅いもの。

F2：小さい平底または丸底風の平底で、深いもの。口縁部は比較的長い。

F3：口縁部が長く、胴部の浅いもの。須恵器蓋を忠実に模倣したものとみられる。

この他、ミニチュア土器が少量出土している。

②；土器群の設定

a、遺構における器種ごとの細別類型のあり方

名遺構における器種ごとの細別類型のあり方をみると次のようになる。

遺構名	甕	甑	壺	高坏	坏
SI 103			C	A	(F1)
SI 14					A3・ (D5)
SI 15	D			B	B・ D1
SI 16	A1	A1・B2b			B・C1・ F1・(D1)
SI 17	A2・ D		D2		A1・ D1・ (A3)
SI 20				(A)	A3
SI 21	C1b・ (B2・C1a)	B1a	A1・A2	D	A1・B・C2
SI 22			(B)	A	A2・ D1・ (F)
SI 201	B2・C1b・C2	B1b	A2・B1・B2・C	B	A3・B・C2・D1・F2
SI 245	D・E	A2・C			A3・B・C ・D4
SI 301	A2		D1	A	B
SI 304					(D1・F3)

※（ ）内は堆積土出土のもの

第2表　遺構における土器の細別類型のあり方（古墳時代中期）

以上の他にC区のＳD302 河川跡の落ち際で発見した第１号土器集中遺構（ＳX01）から、高坏・壺・坏がまとまって出土している（真山：1991）。

ＳＩ15 住居跡からは、坏では胴部が半球状をなし口縁部が短く外反するD1 類が 3 点・口縁部が短く屈曲して直立あるいはやや内傾し、外面には弱い稜線のみられるＢ類が 1 点・高坏では脚部が中空の柱状をなし裾部が屈曲して外反気味に開くＢ類が 2 点・甕では胴部が縦長の楕円形をなし、口縁部が直立気味に外反するＤ類が１点出土している。またＳＩ17 住居跡からは、坏ではD1 類が 2 点・底部から緩やかに口縁部まで立ち上がり口縁部が内湾するA1 類が１点の他、壺では頸部に稜線が施される有段口縁のD2 類が１点、甕ではD類とやや縦長の胴部をなし口縁部が屈曲して外反する小型のA2 類が各１点出土している。以上のＳＩ15・17 出土の土器群をみると、坏D1 類と甕D類がともにみられる。このように複数の器種の異なる細別類型を共有するＳＩ15・17 出土の両土器群は、１つのまとまりを持つ土器群である可能性が高いと考えられる。そして、坏では胴部が半球状をなし口縁部が短く外反するD1 類が主体を占めている。

ＳＩ22 住居跡からは、高坏では坏部が逆台形をなし、脚部が屈曲せずに緩やかに外反するA類１点の他に、坏では底部から屈曲することなく口縁部まで立ち上がり、口縁部が直線的に外に開くA2 類１点とD1 類が 2 点出土している。そして、坏ではD1 類が主体を占めるとみられることから、ＳＩ22 出土土器群もＳＩ15・17 出土土器群と共通した内容を持つ土器群であると思われる。

一方、ＳＩ16 住居跡からは、坏では口縁部が短く屈曲し直立あるいはやや内傾するＢ類が 3 点・胴部が内湾気味に立ち上がり口縁部がわずかに外反して深いC1 類が１点・胴部と口縁部の境に稜がみられ、口縁部が比較的長く直立するＦ1 類が１点、甕では大型でやや縦長の胴部に屈曲して外反する口縁部のA1 類が１点出土している他、新たに鉢型の単孔で口縁部が肥厚して短く外反する甑A1 類と長胴の無底で口縁部が軽く外反する甑B2ｂ類が各１点出土している。またＳＩ21 住居跡からは、坏では底部から屈曲することなく口縁部まで内湾しながら立ち上がるA1 類が１点･口縁部が屈曲してほぼ直立するＢ類が１点・浅い胴部で口縁部がわずかに外反するC2 類が 2 点、甕では縦長の胴部で口縁部が強く外反するC1ｂ類が１点出土している他､甑では長胴の無底で肥厚した口縁部が軽く外反するB1ａ類が１点、壺では球状の胴部に短い口頸部を持つ単純口縁で大型のA1 類が１点と小型のA2 類が 2 点、高坏では大型坏部を持つＤ類が１点出土している。

以上のようにＳＩ16・ＳＩ21 両住居跡出土土器群では、長胴で肥厚した口縁部が軽く外反する無底の甑B1 類が共通してみられる。また坏ではＢ類とＣ類が主体を占めている。そして､胴部と口縁部の境に稜や段がみられ、口縁部が比較的長く直立するＦ1 類が新たに

出現し、細別類型の欠落も考えられるが、前述のＳＩ15・17・21 出土土器群で主体を占めた坏D1 類は出土していない。

この他の住居跡出土の土器についてみると、ＳＩ201 住居跡からは、坏では底部から緩やかに屈曲することなく口縁部にいたり、口縁部が直立気味に立ち上がるA3 類２点・Ｂ類１点・C2 類１点・D1 類２点、高坏ではB類４点、甕では最大径がほぼ中位にある球形に近い胴部で口縁部が屈曲して外反する小型のB2 類・C1ｂ類・最大径がほぼ中位にある縦長の胴部で口縁部が大きく外反する大型のC2 類が各１点、壺ではA2 類・B1 類・B2 類・C類が各１点とともに、坏F2 類と甑B1ｂ類および須恵器の瓿を模倣したとみられる土器が出土している。この中の坏F2 類は、形態的特徴がＳＩ16 出土土器群の中にみられた坏F1 類と類似しており、また長胴で無底の甑は、ＳＩ16・ＳＩ21 から出土しているものと特徴が共通している。

ＳＩ245 住居跡からは、坏ではA3 類・B類・C類・D4 類が各１点、甕には胴部が縦長の楕円形をなし、口縁部が直立気味に外反するD類１点・最大径が中位にある長胴形の胴部で口縁部が屈曲して緩やかに外反するＥ類２点、甑には底部から緩やかに立ち上がり口縁部がわずかに外反する深い椀状をなす単孔のA2 類と口縁部が外側に肥厚し頸部に軽い段のあるやや丸みのある長胴で無底のC類が各１点出土している。このようにＳＩ245 出土土器群は、甕が長胴のＤ・Ｅ類主体であること、甑に長胴で無底のC類がみられる点でＳＩ16・21 出土土器群と共通している。ただし、両土器群にみられる甑は、長胴であることでは一致しているが、細部の形態的特徴や調整技法に違いが認められる。またＳＩ245 出土の甕は、ＳＩ16・21 出土のものより長胴化が顕著であるなどの違いもみられる。

以上からＳＩ15・16・17・21・22・201・245 住居跡出土の土器群は、次の２群に分けて捉えられる。

第Ｉ群土器：ＳＩ15・17・22 住居跡出土の土器群で、器種としては坏・高坏・甕・壺がある。坏には底部から屈曲することなく口縁部まで立ち上がりるA類、口縁部が短く屈曲し直立するＢ類、半球状の胴部に短く外反する口縁部のD1 類がみられ、この中ではD1 類が主体を占めると考えられる。高坏には坏部が逆台形をなし、脚部が屈曲せずに緩やかに外反する脚部のA類・坏部が逆台形をなし、脚部が中空の柱状をなし裾部が屈曲して軽く外反気味に開くＢ類、甕では最大径が上半部にあるやや縦長の胴部をなし口縁部が屈曲して外反する小型のA2 類・胴部が縦長の楕円形をなし、口縁部が直立気味に外反するＤ類、壺では頸部に稜線が施される有段口縁のD2 類がみられる。

第Ｉ群土器の特徴としては半球状の胴部に短く外反する口縁部の坏D1 類が主体を占め

ることと、高坏は第Ⅱ群土器に較べて出土量が多く、坏部が逆台形をなし、脚部が屈曲せずに緩やかに外反するA類がみられることがあげられる。

第Ⅱ群土器：ＳＩ16・21・201・245住居跡出土の土器群で、器種としては坏・高坏・甕・壺・甑などがある。坏では底部から屈曲することなく口縁部まで内湾しながら立ち上がるA1類・口縁部が屈曲し直立するＢ類・口縁部がわずかに外反するＣ類の他、新たに胴部と口縁部の境に稜あるいは段がみられ直立する口縁部のＦ類が少量みられ、この中ではＢ・Ｃ類が主体を占めると考えられる。この他には長胴の無底で肥厚した口縁部が軽く外反する甑B1類がみられ、甕も胴部が縦に長いＣ類およびＤ類・Ｅ類が主体になる。高坏には脚部が中空の柱状をなし裾部が屈曲して外反気味に開くＢ類、大型坏部を持つＤ類が出土している。この他、ＳＩ201から須恵器の瓮を模倣したとみられる土器が出土している。なお、ＳＩ245出土土器群では、長胴で無底ということでは共通するが、細部の形態的な違いや調整技法の異なる甑がみられ、また坏D4類は他のＤ類の坏に較べて身の部分が深いなど、ＳＩ201やＳＩ16出土土器群とは異なる特徴もみられる。また甕では長胴の甕であるＥ類が多くみられるなどＳＩ201・16・21 出土土器群と較べて新しい様相もみられることから、第Ⅱ群土器は細分できる可能性も考えられるが、資料がＳＩ245 出土土器だけと少ないことから、ここではその可能性を指摘しておくだけにとどめておく。

第Ⅱ群土器の特徴としては、坏ではＢ・Ｃ類が主体を占めること、また高坏ではA類がみられないことの他、長胴で無底の甑がみられ、甕では長胴のものが主体となっていることがあげられる。

この他に、出土した土器の量は少ないが、南小泉式の土器を出土している住居跡としては、ＳＩ103・301やＳＩ14・20・304がある。この中で、ＳＩ103・301住居跡出土遺物についてみると、ＳＩ103・301からは脚部が円錐台状で裾部が開く高坏A類が出土している。そして高坏A類が第Ⅱ群土器にはみられず第Ⅰ群土器のＳＩ22出土土器群にみられることから、ＳＩ103・301出土土器群は、第Ⅰ群土器に含めて考えておきたい。なお、ＳＩ14・20・304 住居跡出土土器群については、土器群の特徴を把握できるほど土器が出土していないことから一括して南小泉式の土器として捉えておくことにする。

以上の他に、住居跡以外で土器がまとまって出土した遺構として、ＳX01土器集中遺構がある（真山：1991）。ＳX01土器集中遺構からは、高坏8点と坏2点、甕1点が出土している。高坏には脚部が円錐台状で裾部が大きく開くA類が7点と中空で柱状のＢ類が1点あり、また坏には底部から口縁部まで内湾しながら立ち上がるA1類と口縁部が外反す

るD1 類が各 1 点、壺は頸部から口縁部にかけての資料であるため全体的な特徴はつかめないが、口頸部の長いものである。このように本土器群は、出土した土器群の器種が高坏・坏・壺だけであることから組成の欠落も考えられ、また高坏の占める割合が非常に高いなど他の遺構出土の土器群のあり方とは大きく異なっている。

ところで、このＳX01 土器集中遺構出土土器群については、高坏と坏の特徴の検討から、西野田遺跡第 10 号住居跡出土土器群➡ＳX01 土器集中遺構出土土器群➡山王遺跡第 3 号遺構出土土器群といった変遷が想定されており、その位置付けについては、“……中略……複雑な様相を示す塩釜式後半～南小泉式においては、安易な位置付けをさしひかえ、今後確実な資料の蓄積を待って内容を整理し、全体的な視点から再検討することにしたい。”（1991：真山）と考えられている。しかし、高坏A類が南小泉式の土器である第Ⅰ群土器にみられることに注目して、ここでは一応、ＳX01 出土土器群を南小泉式の土器群として捉え、第Ⅰ群土器に含めて考えておくことにする（註 6）。

③；土器群の編年的位置

東北地方の古墳時代中期の土器は、氏家氏により第 2 型式の「南小泉式」と第 3 型式の「引田式」が設定された（氏家：1957）。しかし、その後宮城県内では、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡出土土器の検討から「引田式」は独立した型式とは認められないとする見解が示され（白鳥・加藤：1974）、以後「引田式」は南小泉式に含めて考えられるようになった。その後、この認識をもとに加藤道男氏や丹羽茂氏によって細分案が示された（加藤：1989、丹羽：1983）。近年、藤沢敦氏によって研究史の再整理が行われ、器種の消長に基づいた中・後期の変遷案が提示され（藤沢：1992）、また山元町合戦原遺跡では中期から後期にかけての土器の整理も行われている（岩見：1991）。

これらの各編年案・細分案をみると、資料とした各土器群自体の変遷はほぼ共通しているが、型式としての南小泉式の捉え方や細分案にそれぞれ違いがみられる。すなわち、加藤・丹羽両氏は、氏家氏が設定した「引田式」を南小泉式に含めて捉えられるとした立場から、南小泉式をそれぞれ 2 段階、3 段階に細分している（註 7）。藤沢氏は、氏家氏が「引田式」と設定し、白鳥・加藤両氏の検討によって南小泉式の範疇として考えられた土器群をも含めた南小泉式の土器群を、研究史と土器群の再検討を通して、あらためて引田式土器として位置づけ、南小泉式の土器には南小泉遺跡第 12 次調査 1 号住居跡出土土器群（佐藤他：1985）および清水遺跡第Ⅱ群土器（丹羽他：1981）をあてている（註 8）。しかし、藤沢氏が南小泉式の土器群設定の根拠とした、脚部中空裾広がりで坏部下端に稜を有する高坏の盛行と、口径が胴部径にほぼ等しいか、口縁部の高さと胴部の高さがほぼ同じである小型壺の存在は、南小泉遺跡第 12 次調査 1 号住居跡出土土器群を見る限りでは、明確に

示されているとはいい難い。また、後述する山王遺跡ＳＸ230 出土土器群では、藤沢氏が共伴しないという口径が胴部径にほぼ等しいか、口縁部の高さと胴部の高さがほぼ同じである小型壺と口縁部の径が胴部のそれより小さく、口縁部の高さも胴部のそれより低い小型壺が共伴している。したがって、ここでは、白鳥・加藤両氏の見解に従ってゆくことにする。

南小泉式の土器群の変遷については、多賀城市山王遺跡第 3 号遺構出土土器群（高倉他：1981）、亘理町宮前遺跡第 42 号住居跡出土土器群（丹羽：1983）などは古く位置付けられており、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第 1 号住居跡出土土器群（白鳥・加藤他：1974）、亘理町宮前遺跡第 25・45 号住居跡出土土器群（丹羽：1983）、村田町新峯崎遺跡土壙出土土器群（阿部：1991）、大河原町台ノ山遺跡第 5 号住居跡出土土器群（阿部・千葉：1980）、仙台市富沢埴輪窯跡祭祀土器群（渡辺：1974）および合戦原遺跡第 4 号住居跡出土土器群（岩見：1991）へ変遷していると考えられている。

ａ、第Ｉ群土器について

第Ｉ群土器については、その類例として多賀城市山王遺跡八幡地区ＳＸ230 出土の土器群（吾妻他：1994）があげられる。ＳＸ230 からは、本遺跡の分類でみると、高坏ではＡ類とＢ類がともに出土しており、量的にはＡ類が主体を占めている。また、坏にはＡ類・Ｂ類・Ｄ類がみられ、この中ではＡ類とＤ類が主体を占めている。さらに甕では、胴部が球形をなすものが多くみられるが、ナデ調整主体で胴部が多少縦に長く口縁部が直立気味に外反するＤ類も見られる。このようなＳＸ230 出土土器群の特徴は、前述した本遺跡第Ｉ群土器の特徴と共通しているといえる。そして、山王遺跡ＳＸ230 出土土器群は、同じ山王遺跡第 3 号遺構との比較検討から、これとほぼ共通した様相を示す土器群とみられ、両者で時間差を想定すれば、ＳＸ230 出土土器群がより古い様相を持つと考えられている（吾妻他：1994）。

以上より、第Ｉ群土器は、山王遺跡ＳＸ230 出土土器群および同遺跡第 3 号遺構出土土器群と共通する様相を持っていることから、加藤編年の 1 段階および丹羽編年のＡ期にあたる南小泉式の古い時期に相当すると考えられる。

ｂ、第Ⅱ群土器について

第Ⅱ群土器については、坏では第Ｉ群土器にみられなかったＦ類が新たに認められる。坏Ｆ類は口縁部と胴部の境に段もしくは稜をもち口縁部が比較的長くほぼ直立する坏で、これに類似する資料としては、新峯崎遺跡と合戦原遺跡で少量出土している。新峯崎遺跡のものは、2ｂ類と分類されたものの中にみられる坏であり、合戦原遺跡では、第 2 群土器のＶ類とされた坏がこれにあたる。また第Ⅱ群土器には長胴の無底の甑Ｂ2ｂ類もみられ、

これと極めて類似した特徴を持つ甑が合戦原遺跡第４号住居跡外周溝から出土しており、この甑は、合戦原遺跡では第２群土器に伴うとされている（岩見：1991）。甕は胴部が縦に長い楕円形のものや長胴のものが主体をしめるが、このような特徴を持つ甕は岩切鴻ノ巣遺跡で第１号住居跡から出土している。

以上より第Ⅱ群土器は、特徴が類似する坏や甑・甕などが岩切鴻ノ巣遺跡第１号住居跡出土土器群や合戦原遺跡第４号住居跡出土土器群にみられることから、加藤編年の２段階および丹羽編年のＢ・Ｃ期にあたる南小泉式の新しい時期に相当すると考えられる。

④；土器群の実年代

土器群の実年代については、第Ⅱ群土器に含まれるＳＩ201 出土の須恵器瓶を模倣した土師器が手がかりになる。この土器は、その形態から陶邑窯式ＯＮ46 からＴＫ208 前後の須恵器を模倣して作られたものと判断される。須恵器を基準にした実年代については、須恵器の初源をいつに置くかによって異なってくるが（註９）、陶邑窯式ＯＮ46 からＴＫ208 前後の時期は５世紀後半代とみられている。したがってＳＩ201 出土土器群の年代は、陶邑窯式ＯＮ46 からＴＫ208 前後の時期の年代観から、およそ５世紀後半代と想定できる。また第Ⅰ群土器の年代は、第Ⅱ群土器の年代からみて５世紀前半と推定される。

（4）古墳時代後期の土器

古墳時代後期の土器が出土している遺構としては、ＳＩ11・19・229・ＳＤ113・ＳＤ203・ＳＫ218 などがあるが、いずれも土器の出土量が少なく、ほとんどが小破片である。そこでここでは、土器の分類はおこなわず、出土状況の良好な遺構について、個別に記述してゆくことにする。

ＳＤ113 では、堆積土中からはロクロ調整によらない土師器の坏・甕・高坏が出土している。坏には内面が黒色処理されたもの（以後内黒という）と内外面に漆が塗られているものがある。内黒の坏には平底で底部から内湾気味に緩やかに口縁部まで立ち上がるもの・浅い丸底で胴部が屈曲して外傾するもの・胴部下半に膨らみを持ちながら立ち上がり口縁部がやや外反するものがある。漆を塗った坏は、浅い丸底で口縁部が屈曲して直立するものである。甕には最大径が胴部のほぼ中央にある長胴をなし、口縁部が緩やかに外反するものと頸部に稜を持つもの、高坏には「ハ」字形に開く短い脚部を持つもの・脚上部がやや裾広がりの中空で、裾部が屈曲して短く開くもの・脚裾部に段を持つものがある。

この中の平底で底部から内湾気味に緩やかに口縁部まで立ち上がる内黒の坏と浅い丸底で胴部が屈曲して外傾する内黒の坏は、古墳時代後期の栗囲式の土器にみられ、類例は、仙台市郡山遺跡のＳＩ301（木村他：1983）やＳＫ394（木村他：1983）から出土している。

そして、これらの住居跡や土壙の年代は、7 世紀代を中心とした時期と考えられている。また、浅い丸底で口縁部が屈曲して直立する漆が塗られている坏は、類似した特徴を持つものが仙台市郡山遺跡のＳＩ260（木村他：1983）から出土している。このような特徴を持つ土師器の坏は、最終的に漆を塗って仕上げていることや形態的な特徴から、関東地方から搬入されたかあるいはその影響を強く受けて作られた土器と考えられ、その年代は 6 世紀後葉～7 世紀前半頃と考えられている（註 10）。従ってＳD113 出土土器群の年代は、7 世紀代を中心とした時期と考えられる。

ＳＩ19 住居跡からは浅い丸底で口縁部が短く屈曲して直立する土師器の坏が出土しており、この類例は、仙台市郡山遺跡ＳＩ301(木村他：1983)出土土器群の中にみられる。またＳＩ229 住居跡出土の深い鉢型の無底で口縁部が肥厚し、屈曲して外反する甑の類例は、名取市清水遺跡第 40 号住居跡･第 73 号住居跡(丹羽他:1981)出土土器群などでみられる。

ＳD203 からは、ＳＩ19 から出土した坏と類似した浅い丸底で口縁部が短く屈曲して直立する土師器の坏の他に、胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する土師器の坏も出土しており、類例は郡山遺跡ＳB311（木村他：1983）・ＳB507（木村他：1985）出土土器にみられる。そして、郡山遺跡ＳＩ301 住居跡出土の土器は 7 世紀代のもの、また清水遺跡第 40 号住居跡出土の土器群は住社式（氏家：1957）の土器に、第 73 号住居跡出土の土器群は栗囲式（氏家：1957）の土器に相当するとされている。また、郡山遺跡ＳB311・ＳB507 は、郡山遺跡第Ⅰ期官衙の建物跡であることから、出土土器の年代は、7 世紀後半以前と考えられる。以上から、ＳＩ19・229、ＳD203 の年代は、概ね 7 世紀代を中心とした時期と考えられる。

〔平安時代〕

平安時代の土器には土師器・須恵器・須恵系土器（註 11）がある。これらのうち、図示できた土器を中心に整理・分類し、それらの組合せや特徴から年代・性格について検討を行なう（註 12）。平安時代の土器が出土した遺構としては、ＳK217・ＳK228・ＳK242・ＳK243 土壙のほかＳD115 河川跡があり、さらにＳD302 河川跡はC期の 3Ｂ層をはじめとして堆積層から大量に出土している。

①土器の分類（第 135 図）

〔**土師器**〕

坏・高台坏・高台皿・甕がある。うち高台皿は 1 点のみである。すべて製作に際し、ロクロを使用している。

坏：90 点ある。内面はすべてヘラミガキののち黒色処理される。ミガキの方向は体部が横

位、体下部が放射状であり、放射状ミガキの幅が広いものやミガキの施し方が雑なものが多い。底部の切り離し技法は、確認できるものすべてが回転糸切りである。なかでも離し糸切り（小川：1979）が目立つ。これらのうち、再調整が認められるものは回転ヘラケズリが1点、手持ちヘラケズリが4点であり、主体を占めるのは再調整の施されないものである。

土器の法量や器形、細部の特徴によって以下のように分類することができる。

【A類】89点ある。口径が12～16.5㎝の中・小形品で、13～14㎝台のものが多い（第136図）。底部から直線的に外傾するもの（Ⅰ類）と内弯気味に立ちあがるもの（Ⅱ類）とがあり、それぞれ口縁部や体部のあり方から細分される。

［AⅠa類］17点ある。底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるものである。口径に対する器高の割合が他よりも大きい深めの坏が2点ある。器高の低いものと高いものそれぞれ1点ずつに体部下端に軽い手持ちヘラケズリ調整が施されている。

［AⅠb類］2点ある。底部から直線的に外傾し、口縁部が軽く外反するものである。

［AⅡa類］53点ある。底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたるものである。口径に対する器高の割合が他よりも大きい深めの坏が2点ある。1点のみ体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

［AⅡb類］12点ある。底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾して口縁部が軽く外反するものである。口径が15㎝をこす大振りな坏が1点あり、これには底部全面に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

［AⅡc類］3点ある。AⅡb類と較べて底部が厚く、内弯の度合いが強いものである。

［AⅡd類］1点ある。底部から内弯気味に立ちあがり、体部中央で外反し、そのまま口縁部にいたるものである。

［AⅡe類］1点ある。底部から内弯気味に立ちあがり、そのまま口縁部に到るものである。

【B類】1点ある。口径が18㎝以上の大形品で、体部から底部全面に回転ヘラケズリが施される。

高台坏：5点ある。内面を黒色処理されたもの（A類）と両面を黒色処理されたもの（B類）とがあり、前者が主体を占める。双方を比較すると、後者は小振りで高台の高さも低い。

【A類】4点ある。底部から直線的に立ちあがるものと内弯気味に立ちあがるものとがあ

り、後者が主体を占める。台はすべて付け高台で、高く外側に開く形態のものである。内面のミガキの方向は体部が横位、体下部が放射状に施される。坏に較べてミガキの施し方は丁寧なものが多い。底部の切り離し技法は、確認できるものすべてが回転糸切りである。菊花状のナデツケ（菊花状調整痕）が施されるものが1点ある。

【B類】1 点ある。底部から内弯気味に立ちあがり、口縁部で軽く外反している。底部の切り離し技法は回転糸切りである。

高台皿：1 点ある。底部から内弯気味に大きく開き、口縁部で軽く外反する。台は付け高台で、高く「ハ」字状にひらいている。底部の切り離し技法は回転糸切りである。

甕：16 点ある。内面が黒色処理されたもの（A類）とそうでないもの（B類）とがある。

【A類】1 点ある。平底で最大径が胴部中央にあり、頸部で「く」字状に屈曲している。胴下部から底部全面にはヘラケズリが施される。内面のミガキの施し方は雑で、部分的にロクロナデが残るところがある。

【B類】15 点ある。全体の器形がわかるものは少なく、口径によって大・小に分けた。

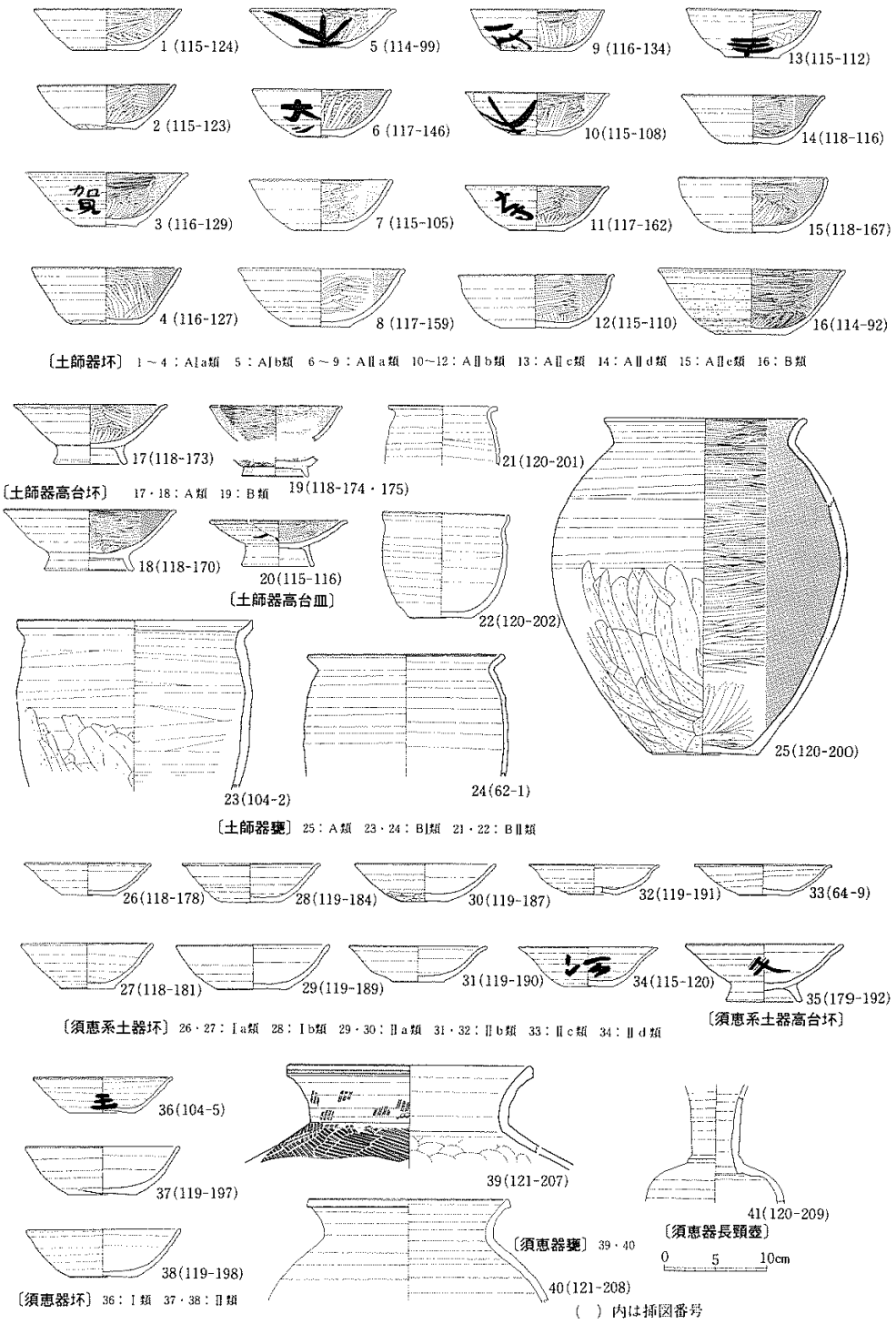
［BⅠ類］13 点ある。口径が 19～25 ㎝ほどの大形で、長胴形を呈すると考えられる。すべて頸部で「く」字状に屈曲しており、口縁端部は直立もしくは内傾気味につまみ出され、縁帯状となるものが多い。最大径が口縁部にあるものと胴部にあるものとがある。胴上部もしくは中央部からヘラケズリを施されるものがある。

［BⅡ類］2 点ある。口径が 10～13 ㎝ほどの小形のもので、最大径が胴部にあるものと口径と胴部径がほぼ同じものとがある。前者は頸部が「く」字状につよく屈曲する。後者は頸部の屈曲が弱く、口径に対する器高の割合が低い鉢状のものである。底部の切り離し技法は回転糸切りである。

〔**須恵系土器**〕

坏・高台坏がある。器面調整は内外面ともロクロナデによるものである。底部はすべて回転糸切りであり、なかでも離し糸切り（小川：1979）が目立つ。再調整の施されるものはきわめて少ない。

坏：27 点ある。口径が 13.5～14.5 ㎝のものが多く、土師器と較べて相対的に小形である（第 136 図）。底部から直線的に外傾するもの（Ⅰ類）と内弯気味に立ちあがるもの（Ⅱ類）とがあり、それぞれ口縁部や体部の特徴から細分される。また、Ⅱ類の内面、特に体下部はロクロ目が不明瞭で、器面がなめらかなものが主体を占める。これは土器の製作時にロクロを回転させた際、外面を指で押さえ、内面にコテ状の工具をあてがい、最後に口縁部を布や革などを用いて仕上げた結果と考えられる（註 13）。



( ) 内は挿図番号

第135図　平安時代の土器分類図

［Ⅰａ類］8 点ある。底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるものである。

［Ⅰｂ類］2 点ある。底部から直線的に外傾し、口縁部が軽く外反するものである。

［Ⅱａ類］12 点ある。底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたるものである。口径に対する底径の割合が小さい（0.32～0.38）ものが多い。体部下端に軽い手持ちヘラケズリ調整が施されるものが 1 点ある。

［Ⅱｂ類］6 点ある。底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾して口縁部が軽く外反するものである。

［Ⅱｃ類］3 点ある。Ⅱｂ類と較べて小振りで、器高が低く、口縁部がつよく外反するものである。

［Ⅱｄ類］1 点ある。底部から内弯気味に立ちあがり、体部中央で外反し、そのまま口縁部にいたるものである。

高台坏：2 点ある。底部から内弯気味に立ちあがり、そのまま口縁部に到るものと口縁部で大きく外反するものとがある。台は付け高台で、前者は低いが、後者は高く外側に開いている。底部の切り離し技法は回転糸切りである。体下部の内面はロクロ目が不明瞭で、器面がなめらかである。坏Ⅱ類と同様、土器の製作時にコテ状の工具を用いて仕上げた結果と考えられる。

〔**須恵器**〕

坏・甕・壺がある。いずれも土師器や須恵系土器に比べて量はきわめて少ない。

坏：7 点ある。土師器や須恵系土器と較べて口径に対する底径の割合が大きい。底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるもの（Ⅰ類）と底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたるもの（Ⅱ類）とがあり、後者が主体を占める（6 点）。底部の切り離し技法は、Ⅰ類がヘラ切りでⅡ類が回転糸切りである。Ⅱ類はⅠ類と較べて色調が灰白色を呈し、軟質である。また、Ⅱ類の内面、特に体下部はロクロ目が不明瞭で、器面がなめらかなものがある。これは須恵系土器の坏と同様、土器の製作時にコテ状の工具を用いて仕上げた結果と考えられる。

甕：2 点ある。両者とも胴部下半を欠損しているが頸部で「く」字状に外反し、口縁端部は上下にのびて縁帯状をなすものである。肩のはるものとなで肩のものとに分かれ、前者は頸部から胴部外面に平行タタキが施されている。

壺：2 点ある。いずれも長頸壺と考えられる。頸部のつけねにリング状の隆帯をもつものがある。

(2) 土器の組合せと年代

遺構No	土師器														須恵系土器							須恵器			
	坏								高台坏		高台皿	甕			坏						高台坏	坏		甕	壺
	AⅠa	AⅠb	AⅡa	AⅡb	AⅡc	AⅡd	AⅡe	B	A	B		A	BⅠ	BⅡ	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd		Ⅰ	Ⅱ		
SK217													4												
SK228			1														1								
SK242			1																2						
SK243			1																						
SD115			1										1				1		1			1			
SD302-3B	6	1	15	5	3			1			1	1	2	1	1		3	3		1				1	
SD302	11	1	34	7		1	1		4	1			10	1	7	2	7	3			2		6	1	2

第3表　各遺構出土土器一覧表

②出土土器の組合せ

分類した出土土器を遺構ごとにまとめたものが第 3 表である。これをみると、ＳD302Ｃ河川跡を除いて土器の出土点数が少なく、遺構ごとの比較や共伴関係を考えることはできない。そこで、遺物量が多く灰白色火山灰との関係が明らかなＳD302Ｃについて検討する。とくに 3Ｂ層は灰白色火山灰の上層で、そのブロックを多量に含むこと、また完形の土器が単独あるいは数個体まとまって出土していることから、火山灰の降下後さほど時間をおかずに廃棄された土器群と認定できる。よって、まず3Ｂ層出土土器の検討を行ない、つぎに上層の 1～3A層を考え、その後この成果をもとに他の遺構のものについて考えることにする。

〔ＳD302Ｃ河川跡 3Ｂ層出土土器〕

土師器坏ＡⅠａ・ＡⅡａ・ｂ類を主体とし、これに土師器坏ＡⅠｂ・ＡⅡｃ・Ｂ類、土師器高台皿、土師器甕Ａ・Ｂ類、須恵系土器坏Ⅱａ・ｂ・ｄ類、須恵器甕がともなう。土師器坏A類は底径が小さく、底部から内弯気味に立ちあがり、口縁部で外反ないし外傾するものが多い。底部の切り離し技法は回転糸切りで、再調整のものは少ない。再調整はすべて手持ちヘラケズリであり、軽く施されたものが目立つ。これに対し、土師器坏B類は口径と総高がそれぞれが 18 ㎝と 6 ㎝を超える大形品で、A類にはない回転ヘラケズリ調整が施されている。土師器高台皿は高い脚をもつ。須恵系土器坏は土師器に較べて小振りなものが多く、底部から内弯気味に立ちあがる。

〔ＳD302Ｃ河川跡 1～3Ａ層出土土器〕

土師器坏ＡⅠａ・ＡⅡａ類、土師器ＢⅠ類を主体とし、これに土師器坏ＡⅠｂ・ＡⅡｃ・

ｄ・ｅ類、土師器高台坏Ａ・Ｂ類、土師器甕ＢⅡ類、須恵系土器坏Ⅰ・Ⅱａ・ｂ類、須恵系土器高台坏、須恵器坏Ⅱ類、須恵器甕・壺がともなう。土師器坏は底径が小さく、底部から内弯気味に立ちあがり、口縁部で外傾ないし外反するものが多い。底部の切り離し技法は回転糸切りで、再調整のものは少ない。再調整はすべて手持ちヘラケズリであり、軽く施されたものが目立つ。土師器高台坏Ａ類は比較的高台が高い。須恵系土器坏は土師器に比べて小振りで、底部から直線的に外傾するものと内弯気味に立ちあがるものとがある。須恵器坏Ⅱ類はすべて回転糸切り無調整で、軟質化、還元不良化が目立つ。

以上がＳＤ302Ｃ河川跡３Ｂ層とその上層出土土器の特徴である。双方を比較すると、主体となる土師器坏ＡⅠａ・ＡⅡａ・ｂ類が共通し、他の土師器・須恵系土器の坏についても器形の細部に違いが認められるものがあるが、法量や切り離し技法、再調整のあり方は共通する部分が多い。同様の点は土師器や須恵器の甕についても言える。よって、ＳＤ302Ｃ出土土器は河川跡の堆積層からの出土ということで、ある程度の時間幅を持つもののひとつの土器群として考えることができる。ＳＤ302Ｃ河川跡出土土器の特徴をまとめると以下のようになる。

〔ＳＤ302Ｃ河川跡出土土器の特徴〕

土師器坏Ａ類を主体とし、これに須恵系土器坏や須恵器坏Ⅱ類、土師器や須恵系土器の高台坏、土師器高台皿、土師器甕、須恵器甕・壺がともなう。これらを機能の点から大別すると、食膳具、煮炊具（土師器甕Ｂ類）、貯蔵具（須恵器甕）に分けられ、食膳具（坏・高台坏・高台皿・壺）の割合が88％ときわめて高い。また、食膳具における土師器・須恵器・須恵系土器の割合は、それぞれ72％・6％・22％であり、土師器が主体を占めている。

土師器は、すべて製作に際しロクロを使用している。坏Ａ類は底径が小さく、底部から内弯気味に立ちあがり、口縁部で外傾ないし外反するものが主体を占める。底部の切り離し技法は回転糸切りで、再調整のものは少ない。再調整はすべて手持ちヘラケズリであり、軽く施されたものが多い。内面のミガキの方向は体部が横位、体下部が放射状であり、放射状ミガキの幅が広いものが目立ち、ミガキの施し方自体、雑なものが多い。これに量は少ないが、口径が18㎝を超える大形の坏Ｂ類がともなう。

須恵系土器坏は土師器に較べて小振りで、器壁が薄い。底部から直線的に外傾するものと内弯気味に立ちあがるものとがある。須恵器坏Ⅱ類は底部から内弯気味に立ちあがる。両者とも底部はすべて回転糸切りであり、なかでも離し糸切りが多い。再調整の施されるものはきわめて少ない。内面の仕上げにコテ状工具が使われているものが多い。須恵器坏は軟質化、還元不良化が目立つ。

土師器高台坏Ａ類の高台は比較的高く、Ｂ類は両面を黒色処理されている。また、土師

器高台皿の台部はいわゆる足高高台である。須恵器甕は口径が30㎝以下の中形品で、胴部中央に最大径があり、口縁部から胴部上半はロクロナデで仕上げられるものが多い。

〔ＳＫ217・228・242・243土壙、ＳＤ115河川跡出土土器〕

以上のような視点でＳＫ217・228・242・243土壙出土土器をみると、ＳＫ217からは土師器甕ＢＩ類、ＳＫ228からは土師器坏ＡⅡａ類と須恵系土器坏Ⅱａ類、ＳＫ242からは土師器坏ＡⅡａ類と須恵系土器坏Ⅱｃ類、ＳＫ243からは土師器坏ＡⅡａ類などが出土している。これらはすべてＳＤ302Ｃ出土土器群のもつバラエティのなかに含まれることから、上記の遺構についても同時期のものと思われる。ＳＤ115河川跡については、灰白色火山灰層である4層から上の出土土器には土師器坏ＡⅡａ類、須恵系土器坏Ⅱａ・ｃ類、土師器甕ＢＩ類などがあり、ＳＤ302Ｃ出土土器と共通するが、5層出土の須恵器坏Ｉ類は器形や切り離し技法が異なり、より古い時期のものと考えられる。

〔坏類の器形について〕

ＳＤ302Ｃ河川跡出土土器の坏類で主体を占めるＡⅡ類やⅡ類について考える。器形は底部から内弯気味に立ちあがるもので、口縁部は外傾もしくは軽く外反するものが多い。7世紀中頃以来、坏類の形は逆台形を基本としてきた。これに対しＡⅡ類は一般に「椀」形坏と呼ばれている（小川：1987、村田：1992・1994）。坏類の器形の変化やそれと軌を一にする底径の縮小化は、回転糸切り技法が「離し糸切り」へと向かう発展過程のなかで生まれた必然性（小川：1979）とともに、9世紀後半以降、官衙や寺院およびその周辺の集落を中心に供給された、当時における高級品ともいうべき施釉陶器（とくに灰釉陶器椀）の形を、より身近な素材で写したものと理解される。

須恵器や須恵系土器坏Ⅱ類において内面の仕上げにコテ状工具が用いられていることを指摘したが、コテによる内面の調整技法は施釉陶器の椀・皿に認められる（前川：1984）。このことから、椀形坏は形態に加え技法的にも施釉陶器を目指していたと考えられる。

在地の土器における「施釉陶器指向」の結果生まれた椀形坏は、須恵器では多賀城政庁跡遺構期の第Ⅳ−1期の瓦を生産した仙台市安養寺中囲窯跡（古窯跡破究会：1973、小川：1987、村田：1988）や同市五本松窯跡Ｂ・Ｃ群窯跡（小川：1987）で、土師器は多賀城跡第61次調査第11層(柳沢・進藤：1992)で認められ、9世紀第3四半期には出現している。

また、須恵系土器は同じ第61次調査の第10層から認められ、9世紀第4四半期には出現している（註14）。

③土器の編年的位置と実年代

〔研究略史〕

藤田新田遺跡から出土した平安時代の土器のうち土師器についてみると、いずれも製作に際しロクロを使用している。このような特徴をもつ土師器を東北地方南部の土師器編年のなかに位置づけると、最終型式にあたる表杉ノ入式＝第7型式（氏家：1957）に比定される。「表杉ノ入式期」はほぼ平安時代全般に対応するものと考えられているが、その間には土師器坏類を中心とした土器群の様相の違いからいくつかの段階が設定されている。

宮城県における表杉ノ入式土器についての近年の研究史を簡単にまとめてみる。1980年に白鳥良一は多賀城跡の出土資料を検討し、平安時代の土器を4段階に分け、土器群および各器種の変遷や実年代を検討している（白鳥：1980）。2年後にはＥ・Ｆ群土器の実年代を訂正しているが、土器群の理解はそのままである（白鳥：1982）。同年、加藤道男は著しく増加した発掘調査資料を取り入れて県内の土師器研究の成果をまとめ、該期の土器を5段階に分けて検討を加えている（加藤：1992）（註15）。この変遷の主な根拠は、坏の器形変化と、それにともなう形での口径に対する底径の大きさの変化であり、後者の数値の分布範囲は時代とともに漸位的にずれていく。さらに、底部切り離し後の再調整の有無もひとつの目安となり、全体に占める割合は第1段階が最も多く、しだいに減少する。また、同じような視点から田中則和も該期の土器を大別Ⅲ期、細別5期に分ける編年案を提示している（田中：1984）。

1983年以降はこうした成果を踏まえ、より限定された地域での変遷を考えるようになる。これは1時期における地域差の混在を避けるためである。まず県内を北と南に2分することからはじめ、北部については森貢喜や古川一明の論考があり（森：1983、古川：1984）、南部は丹羽茂がまとめている（丹羽：1983）。1985年には双方の成果をうけて、菊地逸夫が県中央部に位置する中峯遺跡の検討を行なっている（菊地：1985）。

最近はこの傾向が進み、一郡単位での土器様相の研究が行なわれている。八木光則は陸奥国の中部における古代末期の土器群を検討するなかで宮城郡周辺の土器変遷について述べ（八木：1993）、10世紀後半から12世紀代を8段階に分けて考えている（註16）。村田晃一も宮城郡の9～11世紀代の土器について考え、資料数の多い9～10世紀代を7段階に分けて理解している。さらに多賀城周辺において10世紀代に顕著にみられる土器溜の検討から、この地域で消費される非内黒土師器（本報告書では須恵系土器と呼んでいる）を中心とした多量の土器は、日常の器として用いられたものではなく、主に宴会や儀式、宗教もしくは祭祀的な行為に使われたと考え、食膳具の主体は別の材質のものへと変換したと想定している（村田：1994）。

〔**藤田新田遺跡出土土器の位置付け**〕（第136～139図）

ＳＤ302Ｃ河川跡出土土器の編年的位置を、本遺跡が所在した宮城郡内の遺跡出土資料と

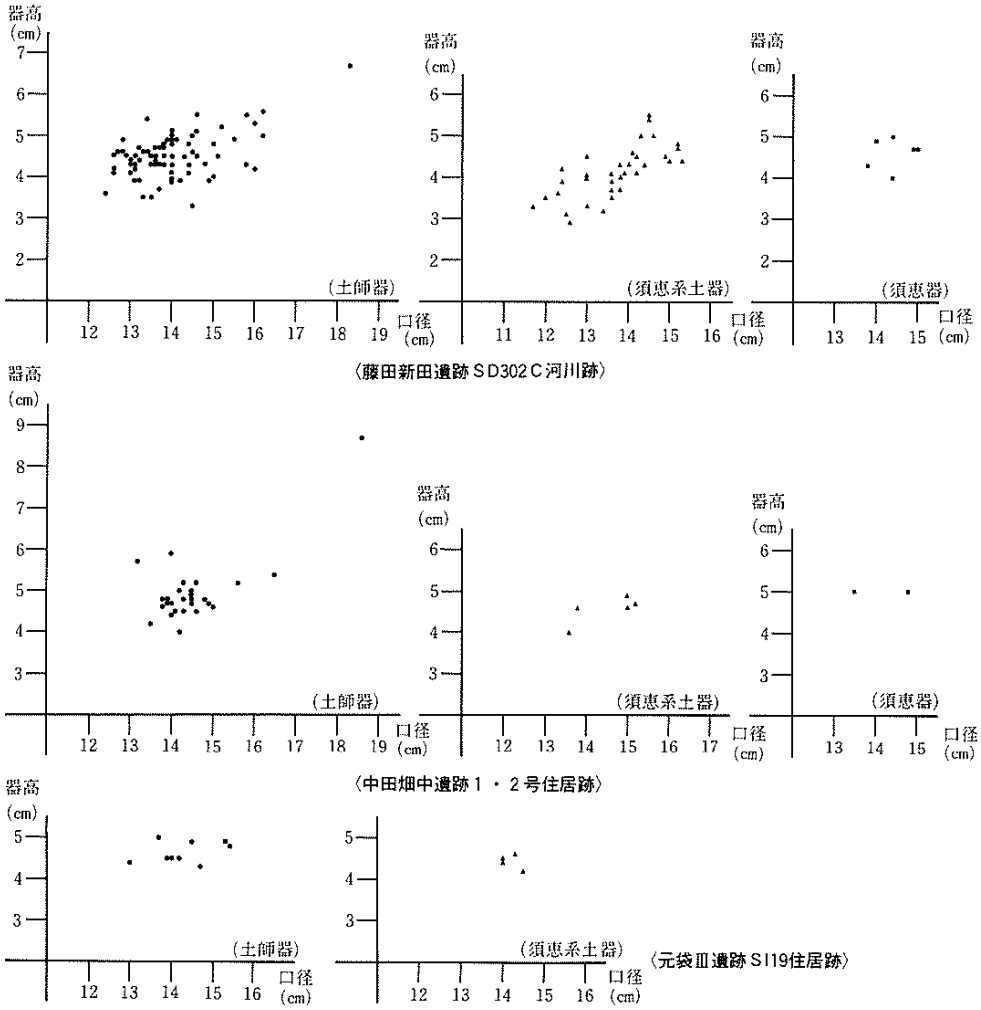
対比することによって考える。宮城郡は奈良・平安時代をとおして陸奥国府がおかれた地域で、その範囲は現在の仙台市・多賀城市・塩釜市・七ヶ浜町・利府町・松島町にわたる。本郡の土器様相の研究は近年複数の論考がある（白鳥：1980・1982、八木：1993、村田：1994）。その理由としては、多賀城跡とその周辺をはじめとして長年にわたる発掘調査資料の蓄積があること、紀年銘の入った文字資料や実年代を知る手がかりとなる施釉陶器・瓦と共伴する例が多いことなどがあげられる。なお、土器の検討では藤田新田遺跡で行なった細別類型を用いる。特にその主体を占める坏類については、法量の違いから口径10～11.9㎝、器高3～4.5㎝を小形坏、口径12～16.9㎝、器高3～5.4㎝を坏、口径12㎝以上、器高2.9㎝以下を皿状坏、口径17㎝以上、器高5.5㎝以上を大形坏と呼ぶことにする。

ＳＤ302Ｃ出土土器と共通した内容をもつものには、多賀城市山王遺跡ＳＫ161土器溜出土土器（千葉：1989、高倉：1991）、同遺跡ＳＸ543土器溜出土土器（石川・相沢：1991）、多賀城市高崎遺跡井戸尻地区土器集積遺構出土土器（高野：1991）、仙台市元袋Ⅲ遺跡ＳＩ19住居跡出土土器（渡部：1987）、仙台市中田畑中遺跡第2次調査第1・2号住居跡出土土器（佐藤甲二：1985）などがある。この土器群は、灰白色火山灰の上下で認められる。

山王遺跡ＳＸ543は灰白色火山灰よりも古いと考えられる土器溜で（註17）、土師器坏ＡＩａ類・ＡⅡａ類、須恵系土器坏Ⅱａ類を主体とし、これに土師器坏Ｂ類（大形坏）、須恵系土器皿状坏、土師器内黒甕などを加えた合計265点の土器が出土している（註18）（第138図）。土師器・須恵器・須恵系土器の割合は33%・1%・66%であり、須恵系土器が7割弱を占めている。このほかの遺物としては越州窯系青磁水注がある。同遺跡ＳＫ161は灰白色火山灰よりも新しい土器溜で、土師器坏ＡＩａ類・ＡⅡａ類、須恵系土器坏Ⅰａ類・Ⅱａ類を主体とし、これに須恵器坏Ⅱ類、土師器や須恵系土器の小形坏・高台坏などを加えた合計202点の土器が出土している（註19）。土師器・須恵器・須恵系土器の割合は40%・6%・54%であり、須恵系土器が過半数を超えている。

高崎遺跡土器集積遺構は灰白他火山灰との関係は不明であるが、部分的な調査であったにもかかわらず、土師器や須恵系土器を中心とした食膳具の出土総数は642点になる。このうち無作為に抽出した2割強の実測図が紹介されている。それによると、土師器坏ＡⅡａ類、須恵系土器Ⅰａ類・Ⅱａ類を主体とし、これに土師器小形坏・高台坏Ａ類・Ｂ類（小形）、須恵系土器小形坏・皿状坏、須恵器坏Ⅱ類などがともなう（註20）（第138図）。土師器・須恵器・須恵系土器の割合は 40%・3%・57%であり、須恵系土器が過半数を超えている。

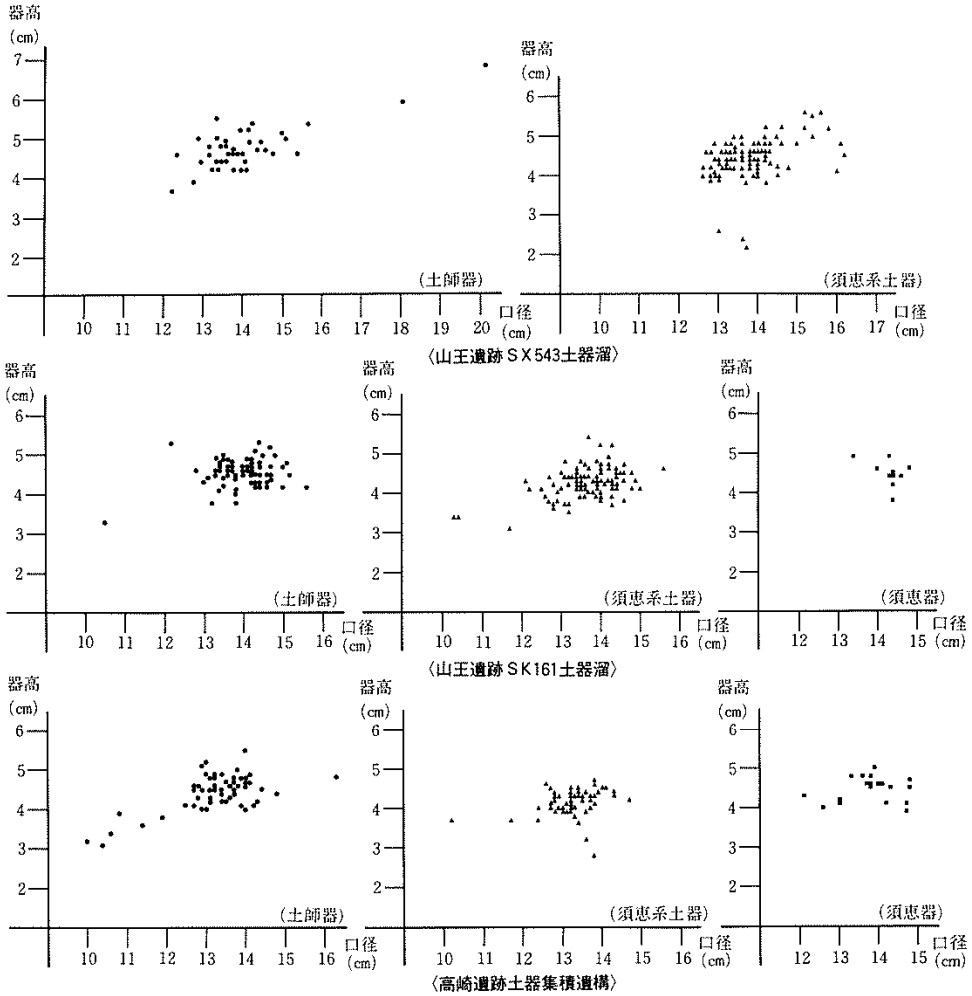
元袋Ⅲ遺跡ＳＩ19住では、灰白色火山灰に覆われる堆積土から土師器坏ＡⅡａ類、須恵系土器Ⅱａ類を主体とし、これに須恵系土器高台坏、土師器甕ＢⅠ類・ＢⅡ類などを加え



第136図　坏の法量（１）

た17点の土器が出土しており、これらは住居廃絶後の一括資料と考えられている（第139図）。中田畑中遺跡１住の床面や貯蔵穴からは土師器坏ＡⅠａ類・ＡⅡａ類を主体とし、これに須恵系土器Ⅱａ類、土師器甕ＢⅠ類・須恵器甕などを加えた18点の土器が出土している。また、同遺跡２住の床面や住居にともなう施設からは土師器坏ＡⅠａ類・ＡⅡａ類、土師器甕ＢⅠ類を主体とし、これに須恵系土器坏Ⅱａ類、非ロクロ調整の土師器甕など36点の土器が出土している（第139図）。

これに、ＳＤ302Ｃ河川跡出土土器を加えた土器群の様相をまとめると以下のようになる。本土器群は土師器・須恵器・須恵系土器などからなる。この時期の特徴は、食膳具における須恵器の割合が激減し、かわって土師器や須恵系土器が増えることである。こうし



第137図　坏の法量（２）

たあり方は多賀城周辺が顕著で、須恵器は全体の１割にみたない。食膳具の構成をみると、多賀城周辺とそこから離れた一般集落とでは違いが認められる。前者では土師器坏ＡⅡａ類と須恵系土器坏Ⅱａ類が主体を占め、場所によっては須恵系土器の方が多い場合がある。後者は土師器坏ＡⅡａ類が主体を占める。これは、須恵系土器の本格的な導入が多賀城周辺では前段階から、一般集落では本段階から行なわれたためと考えられる。

土師器坏は口径13～14.5㎝、器高が４㎝台、底径/口径は0.4前後のものが多い。底部の切り離し技法はすべて回転糸切りで、切り離し後の再調整は施されないものが８割以上となる。再調整は軽い手持ちヘラケズリが主体である。内面体下部のミガキは放射状のものがほとんどで、前段階に出現した幅の広いミガキが多くなり、土器製作における仕上げ

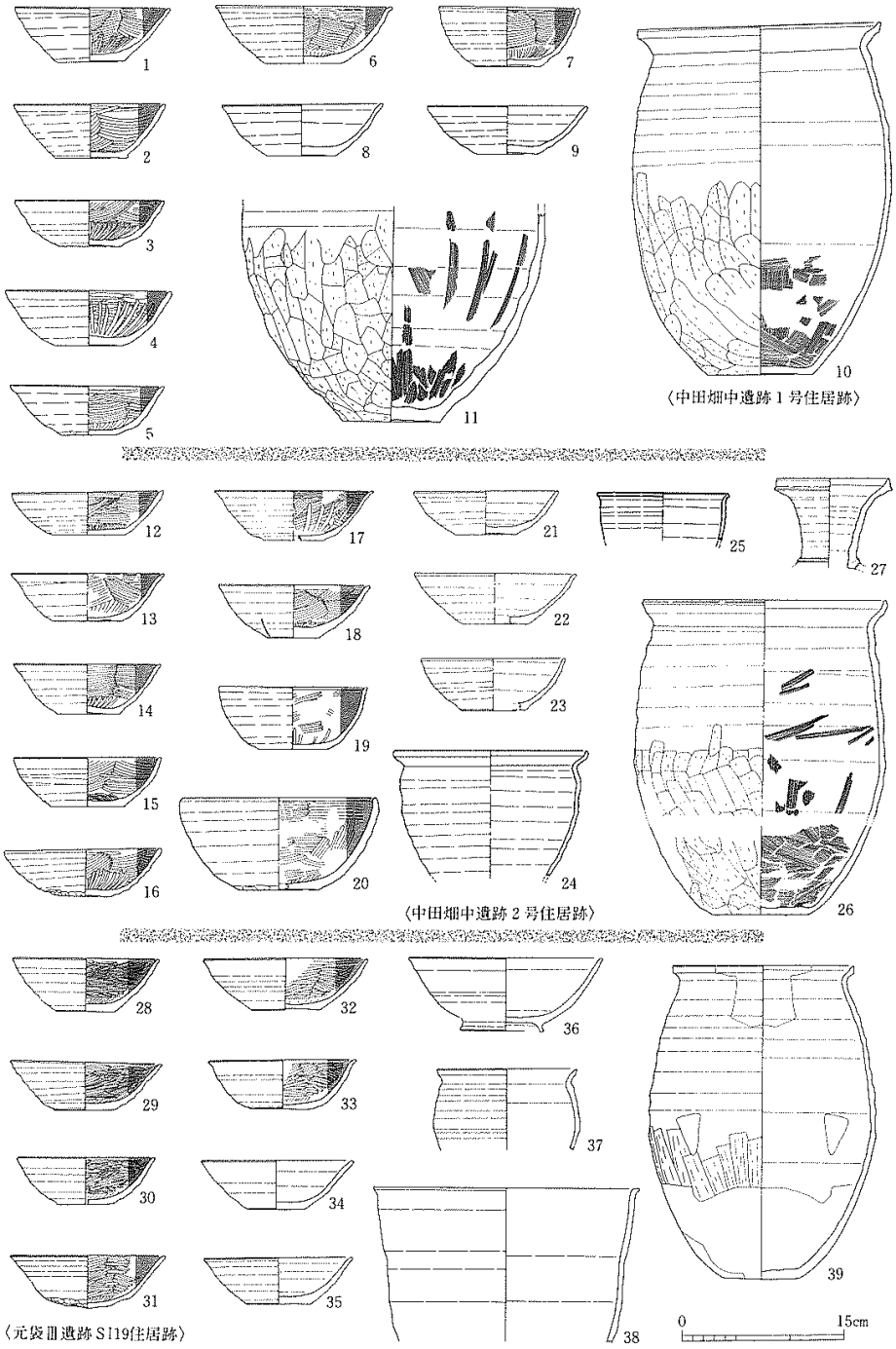
の省略化が進む。口径が 17 ㎝を超える大形坏（坏Ｂ類）や口径が 12 ㎝未満の小形坏が組成に加わる。

須恵系土器坏は口径 13 ㎝台、器高が 3.5〜4.5㎝ のものが多く、土師器と較べて底径に違いはないが、底径に対して口径が小さく、器高も低めである。口径が 13 ㎝以上で、器高が 3 ㎝未満の皿状坏や小形坏が出現する。須恵器坏の主体はⅡ類で、底部はすべて回転糸切り無調整であり、軟質化・還元不良化が目立つ。他の器種としては土師器高台坏・高台皿・耳皿・甕、須恵系土器高台坏、須恵器甕・壺などがある。高台をもつものには菊花状調整痕が認められるものがある。

こうした特徴は、前述の宮城郡内の遺跡を対象にした編年案と対応させると、白鳥編年のＥ群土器、村田編年の 5 群土器にあたる（註 21）。実年代の検討にあたっては、まず、5 群土器の存続中に降灰した灰白色火山灰の年代について考える。灰白色火山灰との関係を整理すると、元袋遺跡ＳＩ19 住居跡は灰白色火山灰に覆われ、山王遺跡ＳＸ543 土器溜は灰白色火山灰より古いと考えられる。これに対し、山王遺跡ＳＫ161 土器溜は間に井戸をはさみ、さらに古い竪穴遺構の堆積土に灰白色火山灰が認められる。藤田新田遺跡ＳＤ302Ｃ河川跡も灰白色火山灰より新しい。

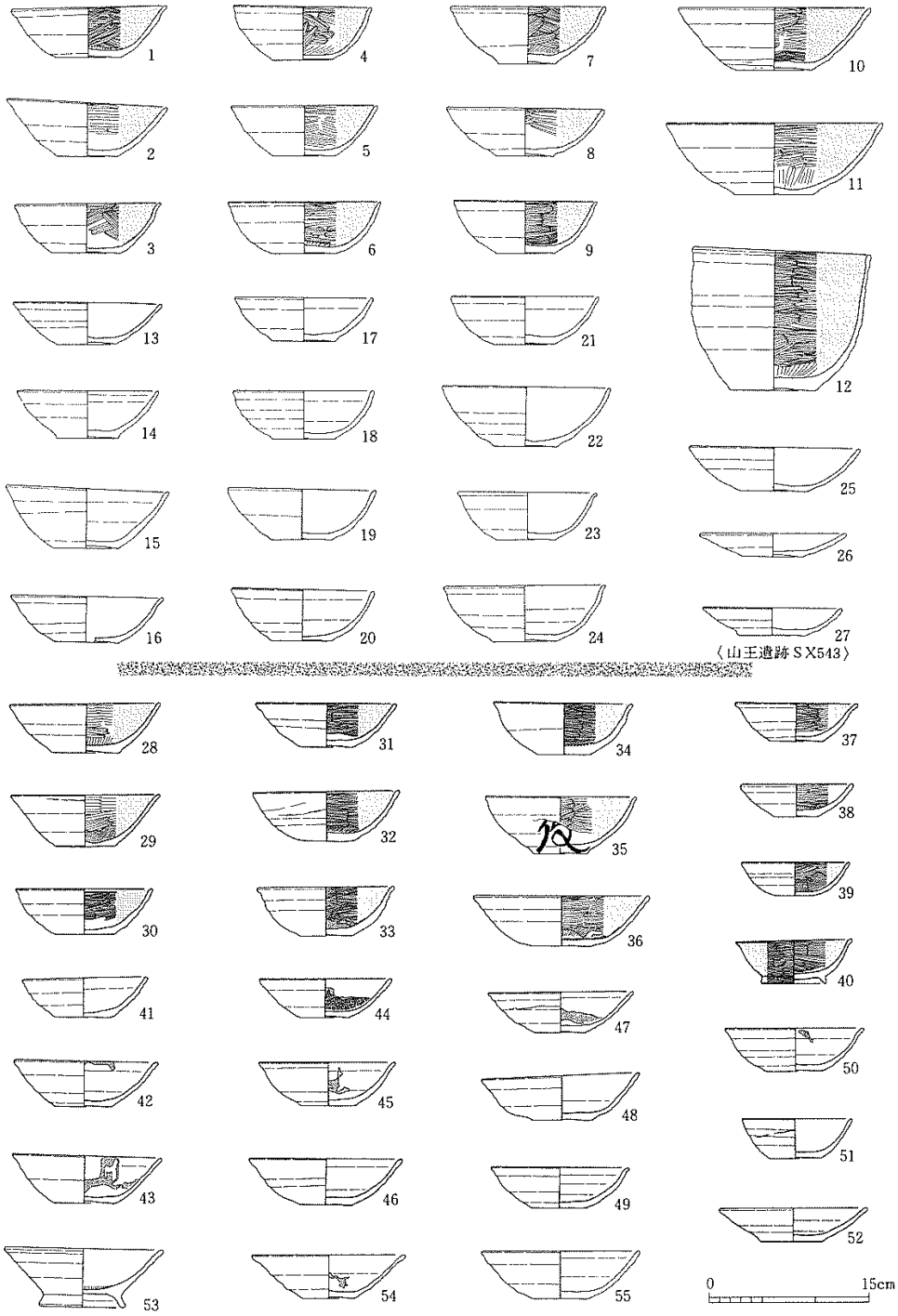
灰白色火山灰の年代については、白鳥良一が陸奥国分寺の七重塔焼失にともなう焼土層との層位関係より 10 世紀前半頃と考えた。しかし、その一方で焼土層が灰白色火山灰である白土層を直接覆っていること、白土層の直上より相輪の破片が出土していることから、灰白色火山灰の年代が承平 4 年（934）閏正月 15 日の塔焼失に近い時期である可能性をも指摘している（白鳥：1980）。この陸奥国分寺の調査成果を重視すれば、灰白色火山灰の年代は 10 世紀前半頃と広くとらえず、934 年を下限とする 10 世紀前葉に限定できると考えられる（註 22）。したがって 5 群土器の年代は、本土器群より古い土器群の実年代が 9 世紀第 4 四半期を中心とする頃であること、10 世紀前葉に降下した灰白色火山灰の上下で認められること、新しい土器群の年代が 10 世紀中頃とみられることから、10 世紀前半代と考えられる（註 23）。

ところで、5 群土器に属する山王遺跡ＳＸ543 と同遺跡ＳＫ161、高崎遺跡の土器集積遺構の主体を占める土師器や須恵系土器の坏を比較すると、細かな点で違いが認められる。すなわち、後 2 者には法量が口径 10〜12 ㎝、器高が 3 ㎝台の小形坏や、これよりやや大きい口径が 12 ㎝台の小振りな坏がともなう(第 137 図)。双方とも坏類全体に占める割合は低いが、前者にはまったく認められない白灰白色火山灰との関係をみると、ＳＸ543 は古く、ＳＫ161 は新しい。本群以降の土器群は、新しくなるにつれて坏類の法量の縮小化が進むことが指摘できる(村田：1994)ことから、ＳＫ161 と高崎遺跡の土器集積遺構は 5 群土器の



第138図　各遺跡出土土器（1）

（1～10, 12～20, 24～26, 28～33, 37～39：土師器　8・9, 21・22, 34～36：須恵系土器　11, 23～27：須恵器）



第139図　各遺跡出土土器（２）

（１～12，28～40：土師器　13～27，41～53：須恵系土器　54・55：須恵器）

なかでも新しい様相をもつと考えられる。その場合、古→新への変換時期は灰白色火山灰の年代の下限である934年がひとつの目安となろう。

ただし、灰白色火山灰より新しい藤田新田遺跡ＳＤ302Ｃは、河川が埋没するまでの時間が存在するにもかかわらず、小形坏や小振りな坏は共伴していない。一般集落における坏類の小形化は次の土器群から認められる。こうしたあり方は、土器が出土した遺構の性格の違いを反映している可能性があるが、先述した食膳具における須恵系土器の導入時期の違いとあわせて、土器様相の変化が多賀城周辺から始まり、やがて一般集落に及んでいったことを示すと考えられる。

④墨書土器と河川への土器の投棄行為について

藤田新田遺跡からは、29点の墨書土器が出土している。それらの文字の内容や土器の種類・墨書の部位・出土遺構についてまとめたものが第4表である。これをみると、器種は坏・高台坏・高台皿に限られ、なかでも坏が27点（93%）と主体を占めている。また、全体の約90%にあたる26点の墨書土器は、ＳＤ302Ｃ河川跡から出土している。

特に、3Ｂ層では図示した土器44点のうち40点（91%）が坏・皿類で、その4分の1に墨書が施されている。3Ｂ層は多量の灰白色火山灰ブロックを含み、完形の坏が単独あるいは数個まとまって出土しており、比較的短期間に堆積したと考えられる。そこから出土した土器は器種に偏りがみられ、墨書土器の比率が高い。このことから土器は集落内の特定の行為にともなって選択的に使用され、その後河川へ投棄されたと思われる。

こうした、河川跡から坏類を中心に完形の土器が大量に出土し、その多くに墨書が施された例として福島県会津若松市上吉田遺跡（藤谷・佐原ほか：1990）があげられる。この遺跡では調査区を南北に流れる長さ65.0㎞以上、幅6.0～14.6㎞、深さ0.7㎞ほどの河川跡から全体の87%にあたる605点もの墨書土器が出土している。図示された資料から底面出土土器をみると、総数590点のうち、坏・皿・蓋類が539点（91%）を占め、その52%にあたる279点に墨書が施されている。土器の出土地点には6カ所以上のまとまりが認められる。これは、河川が形成された時期に複数の地点で墨書されたものを含む坏類を中心とした大量の土器が一括投棄されたことを示している。

これらの土器群は、墨書土器とともに灯明皿と考えられる坏・朱彩された坏・墨溜めと考えられる坏が出土していること、同一文字は短期間のうちに複数の人物によって書かれたとみられること、さらに墨書土器の集中地点からは人面墨書土器や人形などの祭祀遺物が出土していないことから、集落内で多量の墨書土器を必要とする祭祀が行なわれ、その終末に河川へ投棄されたと考えられている。

No.	墨書銘	種類	墨書部位	出土遺構・層位	挿図番号	写真図版
1	王	須恵器・坏	体部・中・～下－正位	ＳＤ115・５層	104－5	53－８
2	河	須恵系土器・坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・3Ｂ層	115－120	66－２
3	賀	土師器・坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・１層	116－129	66－３
4	賀	土師器・坏	体部・中～下－正位	ＳＤ302・１層	117－158	66－４
5	十	土師器・坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・3Ｂ層	114－93	66－５
6	上	須恵器・坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・Ｂ区Ｃ溝	119－195	66－６
7	中	土師器・坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・Ｂ区Ｃ溝	118－165	66－７
8	木	土師器・坏	体部－倒位	ＳＤ302・３Ｂ層	114－97	
9	木	土師器・坏	体部－倒位	ＳＤ302・3Ｂ層	114－99	66－８
10	木	土師器・坏	体部－倒位	ＳＤ302・3Ｂ層	115－108	
11	寺	土師器・坏	体部・中～下－倒位	ＳＤ302・3Ｂ層	114－100	66－９
12	冊	土師器・坏	体部・中央	ＳＤ302・１層	117－154	66－10
13	久	須恵系土器・高台坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・１層	119－192	62－５
14	大□	土師器・坏	体部・中～下－正位	ＳＤ302・１層	117－146	
15	丰（王カ）	須恵系土器・坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・１層	118－177	66－１
16	主（王カ）	須恵系土器・坏	体部・中央－正位	ＳＫ228・５層	64－８	
17	主（王カ）	土師器・坏	体部・下半－倒位	ＳＤ302・3Ｂ層	115－112	
18	口(十)	土師器・坏	体部・中～下－正位	ＳＤ302・3Ｂ層	114－95	
19	甘（日カ）	土師器・坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・１層	116－125	67－３
20	日（日カ）	土師器・坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・１層	116－142	
21	日（日カ）	土師器・坏	体部・中央－横位	ＳＤ302・１層	116－131	
22	口(有カ)	土師器・坏	体部・中央－正位	ＳＤ302・１層	118－168	
23	寺（寺カ）	土師器・坏	体部・中央－斜位	ＳＤ302・１～３層	117－162	67－１
24	厂（厨カ）	土師器・坏	体部・中～下－正位	ＳＤ302・１層	116－134	67－２
25	口（寺カ）	須恵系土器・坏	体部・中央－正位	ＳＫ243・１層	64－12	
26	口	土師器・坏	体部・中央	ＳＤ302・3Ｂ層	115－115	
27	口	土師器・坏	体部・中央	ＳＤ302・１層	118－169	
28	口	土師器・高台	体部・中央	ＳＤ302・3Ｂ層	115－116	
29	口	土師器・坏	体部・中央	ＳＤ302・Ｂ区Ｃ溝		67－４

第４表　墨書土器一覧表

註1）　鉢の中で小型のものは、従来、東北地方の前期土器研究の中で「坏」とされてきたものである。本報告書では、他地域の研究においても「鉢」と表記されており、比較研究する際の混乱を避ける上でも用語が統一されることが望ましいと判断し、辻秀人氏の指摘に従い（辻：1994）、「鉢」と呼ぶこととする。

註2）　灰白色火山灰の降下年代については、陸奥国分寺の発掘調査の成果と承平4（934）年の焼亡記事から、年代を10世紀前半頃（白鳥：1980）と考えてきたが、後述する平安時代の土器についての年代の検討から、陸奥国分寺の焼亡記事以前の10世紀前葉に限定できる可能性が高くなったため、ここでは灰白色火山灰の降下年代を10世紀前葉としておく。

註3）　ＳＤ224では底面と堆積土からともに壺C3類が出土している。しかし、出土状況から底面出土土器と堆積土出土土器が時間差をもつことは明かであることから、壺C3類は、底面土器の時期から堆積土土器の時期までの比較的長い期間存続したものと考えられる。

註4）　なお、ＳＤ224堆積土1層からは南小泉式の高坏と石製模造品が各1点出土しているがこれは混入と考えられる。

註5）　鉢G1類には伊治城跡ＳＤ261出土土器にみられるような口縁部の長いもの（伊治城跡第18次調査：第26図3）と中田畑中遺跡ＳＩ－3竪穴住居住居跡出土土器にみられるような口縁部の短いもの（中田畑中遺跡：第17図6、伊治城跡18次調査第26図1・2）があり、さらに、本遺跡から出土しているものの他に、山前遺跡大溝、田道町遺跡第3号住居跡などで出土しているような、これらと異なる小さな平底で口縁部が短く外反する口径が大きい浅目の鉢などがあり、胴部と口縁部のあり方に多様性が認められ、時期差を示し得る細別器種を導き出すことも可能かと思われるが、本遺跡出土土器ではこうした特徴を有する土器群であるＢ群土器が少ないことから今後の課題とし、他の検討に委ねたい。

註6）　なお、ＳＸ01土器集中遺構は、ここでは南小泉式の範疇で捉え、第I群土器に含めて考えたが、真山氏の指摘にもあるように、古墳時代前期の土器から中期の土器への変化の解明は重要な問題であり、今後の資料の増加を待ちたい。

註7）　丹羽茂氏は亘理町宮前遺跡出土土器をもとに宮城県内の資料を検討して、Ａ・Ｂ・Ｃの3段階の細分案を示し、また、加藤道男氏は発表時期は遅れるものの、丹羽氏の細分案が示される以前に2段階の細分案を示している。

註8）　藤沢氏はその論考の中で、氏家氏の研究を再検証することによって宮城県内で前提とされている岩切鴻ノ巣遺跡の認識に疑義を提示し、岩切鴻ノ巣遺跡出土土器を古川市引田遺跡出土土器と共通する特徴を有するとして「引田式」を再提唱し、脚部中空裾広がりで坏部下端に稜を有する高坏の盛行と口径が体部径にほぼ等しい小型壺の存在する段階を「南小泉式」と位置づけた。

註9）　田辺昭三氏による5世紀中葉以降とする年代観（田辺：1981）と白石太一郎氏などによる4世紀末から5世紀初頭とする年代観（白石：1985、坂口一：1987）がある。

註10）　田熊清彦氏（栃木県教育委員会）、梁木誠氏（宇都宮市教育委員会）には資料を実見する機会を与えて頂き、多くのご教示を頂いた。また、服部敬史氏（八王子市博物館）、服部実喜氏（神奈川県教育庁文化財保護課）、浅野晴樹氏（埼玉県教育庁文化財保護課）、福田健司氏（東京都教育庁文化課）、長谷川厚氏（神奈川県立埋蔵文化財センター）からもご教示を頂いた。なお、関東系土器と考えられる資料は、他に坏B類などに見られ、宮城県内で発見例が増加しており、分布状況やその位置づけなど今

後の研究が待たれる。

註11）　須恵系土器とは、坏類を中心とした小形品のうち製作に際してロクロを使用し、内面のヘラミガキ・黒色処理をともなわず、酸化炎焼成されたものを指す。この土器については、本来土師器に含まれるものであるが、いわゆる内黒土師器と区別する意味で赤焼土器と呼ばれたり、最近では非内黒土師器などと呼ばれているが、本書では須恵系土器の名称を使うことにする。

註12）　土器の残存率が1/4以上のものは基本的に実測図を作成したが、多量に出土したＳＤ302の土器については事前に分類を行ない、その中から土器を選択している。ただし、第3表の土器組成一覧や第136図の土器法量を示すグラフは実測可能な土器のすべてのデータを踏まえて作成した。

註13）　土器の製作技法については、小川淳一（1987）に製作実験をふまえた論考があり、これを参考にした。

註14）　多賀城跡第61次調査出土土器群の年代は第11層が9世紀後半頃、これより新しい第10層も9世紀後半代におさまるものと報告されている。今回の年代観は村田報告（1994）に基づいている。

註15）　加藤論文の稿了は1982年であるが、これを含めた論文集が刊行されたのは1989年である。また、同氏はこの考え方を踏まえ、1993年に新資料を加えて9～11世紀代の土器を7段階に細分している。

註16）　八木は10世紀後半から11世紀代の土器変遷を概ね四半世紀ごとにとらえているが、宮城郡周辺では11世紀第三四半期の土器が不明としている。

註17）　報告書によれば、ＳＸ543土器溜の埋土には灰白色火山灰粒を含むとの記載はあるが、調査を担当した多賀城市理蔵文化財調査センターの石川俊英氏は、灰白色火山灰より古い時期のもの（B1ａ期）と判断している（同氏のご教示による）。

註18）　報文では赤焼土器と報告しているが、本報告書の呼称にならい、赤焼土器については以下須恵系土器と呼ぶことにする。

註19）　ＳＫ161については概略しか公表されておらず、土器の検討にあたって多賀城市埋蔵文化財調査センターの千葉孝弥・相沢清利の両氏に未公表分を含めてご教示いただいた。記して感謝する。なお、ＳＫ161出土土器の本報告は両氏を中心にまとめられる予定であり、今回のデータは整理途中での中間報告に基づいている。

註20）　須恵器とした中には須恵系土器が含まれており、須恵系土器の割合はさらに増える（筆者実見）。

註21）　村田（1994）では、高崎遺跡の土器集積遺構を6群土器に含めて考えていたが、今回の考察にあたって再検討した結果、5群土器に属すると判断した。なお、宮城郡における平安時代前半から中頃の土器については、別稿を用意し、そこで全体をとおした検討を行なう予定である。

註22）　灰白色火山灰の年代については、最近の多賀城跡調査研究所の年報でも陸奥国分寺の七重塔焼失にともなう焼土層との関係から求めた、承平4年（934）閏正月15日以前の10世紀前葉と記載されている（柳沢・進藤：1992）。

註23）　土器群の年代は、共伴した灰釉土器の年代観を参考にして求めている。5群土器より古い4群土器は猿投窯・黒笹90号窯式期、新しい石群土器は東濃窯・大原2号窯式期の椀がともなう（村田：1994）。村田報告では6群土器の年代を10世紀中葉としたが、再検討した結果、10世紀中頃と改める。

Ｂ：木製品

木製品は主にＳＤ115・302 河川跡から出土しているが、ここでは国内で初めての出土である木製の輪鐙について若干検討してみることにする。

近年、沖積地の調査が増加し、様々な木製品が発見されるようになった。従来、古墳から副葬品として出土することの多かった馬具も少数ながら発見されてきており、本遺跡からは木製の輪鐙が出土している（第 125 図－1）。輪鐙の年代は、出土した土器の検討から年代が古墳時代中期の 5 世紀代と考えられ、古墳から出土した木芯鉄板張輪鐙を含めても古いものであることが明かとなった。しかも、集落から出土したものであることから、一般に実用に供された馬具の実態を知るうえでも好資料といえる。また、古墳時代のウマについては、確実に 4 世紀代に遡る例はなく、5 世紀代も地域がごく限られており全国的に普及するのが 6 世紀以降と考えられている（松井：1990）が、本遺跡の場合ウマそのものの出土ではないが、出土した輪鐙の年代が 5 世紀代であることから、今後、東北地方におけるウマの普及を知る上でも貴重な資料と考えられる。

（1）形態的特徴

輪鐙は、ＳＤ302 河川跡のＣ区南寄りの第 9 層上面から 1 点出土している。柄部の先端部で一ヶ所、輪部の五ヶ所で破損しており、輪部の一部を欠損しているが、ほぼ全体の形を知ることができるもので、全長 31.9 ㎝である。柄部の長さは 18.4 ㎝で、先端がわずかに丸みを持ち、やや角ばった形をしており、厚さは 2.0～2.3 ㎝である。先端部には 1 ㎝ほどの方形の力革（皮革帯）を受ける穿孔がある。幅は、先端部が 3.5 ㎝、下端が 2.3 ㎝と輪部に近くなるほど細くなっている。

輪部は外径が縦 13.5 ㎝・横約 13.2 ㎝、内径が縦約 6㎝・横約 9 ㎝で、厚さは 2.4～2.6㎝である。平面形は、底辺が平らな丸みを帯びた五角形に近い形とみられる。踏込部は底辺の中央部がわずかに膨らむ丸みを持った台形状を呈している。

このように柄部が長く輪部に近くなるほど細くなることや、力革を受ける柄の方形孔の位置が先端の近くにあるといった形態的な特徴は、全体として「きゃしゃ」な作りであることを示しており、馬上での身体の自由を確保するには、形態から判断される耐久性において必ずしも適したものではなかったと考えられる。

ところで、柄部の方形孔と輪部の断面形をみると、柄部の方形孔上側と輪部内側の断面にみられる傾きが一致しており、踏込部の断面形と合わせて判断すると、実測図に示した左側が前（表）であると考えられる。柄部の力革を受ける方形孔には、使用時に力革との摩擦によって生じたと思われる擦痕が認められ、前面の方形孔左上方が磨り減っている。以上のことから、この輪鐙は馬の左側に下げられていたものと推測される（註 1）。

（2）他遺跡出土の輪鐙との比較・検討

木製の輪鐙の類例としては、本遺跡の他に滋賀県長浜市神宮寺遺跡出土の１例（丸山：1993）が知られるのみである。神宮寺遺跡出土の輪鐙は、旧河川堆積土中から出土しており、5 世紀末～6 世紀後半の土器に伴って出土している。

輪鐙は柄部の先端に横長の孔があり、孔の上部と柄の先端部を欠損しているほか、輪部の踏込の中央部で一ヶ所破損しているが、ほぼ全体の形を知ることができる。現存長約 16 ㎝で、柄部は現存長 3.6 ㎝、幅は 2.3～2.4 ㎝、厚さ約 2 ㎝である。

輪部は外径が、縦約 13 ㎝、横約 15 ㎝、厚さ約 2 ㎝、内径が縦約 7 ㎝・横約 10 ㎝である。柄部先端の孔は横幅が推定で 1.5 ㎝ほどである。平面形は、底辺が平らな丸みを帯びた横長の五角形状をなし、踏込部は横長の楕円形である。そしてこの輪鐙は、形態的には滋賀県新開古墳出土の木心鉄板張輪鐙と比較的類似した特徴を有している。

神宮寺遺跡と本遺跡の輪鐙を比較すると、輪部の外形・大きさと側辺部が他の部分に比べて細いことや柄部の太さがほぼ同じ約 2 ㎝であることでは共通している。しかし、力革を受ける孔の形態が神宮寺遺跡のものは横長になるとみられるが、本遺跡のものは方形であること、また柄部は神宮寺遺跡のものが短く本遺跡のものは長いといった違いがあり、柄の長いことと力革を受ける孔の形が方形であることが本遺跡出土の輪鐙の特徴といえる。

次に製作技法は異なるが、古墳出土の輪鐙では主流を占める木芯鉄板張輪鐙と比較してみることにする。木芯鉄板張輪鐙は、木芯の材質土の弱さを鉄板で補強するために、破損し易い柄の先端部にある孔の部分、柄部から輪部にかけての部分、そして柄の部分は必ず鉄板で鋲留めされている。

日本で最も古いと考えられる馬具は、4 世紀末から 5 世紀初頭に現れると考えられており、鐙の最も古い例は 5 世紀前半頃に位置づけられる古墳から出土している（註 2）。5 世紀前半の輪鐙を出土した古墳には、福岡県浮羽郡吉井町月の岡古墳、大阪府和泉市七観古墳、滋賀県栗太郡栗東町新開 1 号墳、岐阜県揖斐郡池田町中八幡古墳などがあり、5 世紀後半の輪鐙を出土した古墳としては、大阪府藤井寺市長持山古墳、愛知県名古屋市志段味大塚古墳、東京都狛江市狛江亀塚古墳などがある。

小野山節氏は馬具を古式と新式に分け、古式の鐙の特徴を、イ）柄が比較的太く短い、ロ）柄の頭が丸く形づくられている、ハ）輪の上部と足を掛ける踏込の部分とが同じ厚さで同じ幅に作られている、ニ）前後の面では柄と輪の接合部だけに鉄板をあてるとしており、新式の鐙の特徴を、ホ）柄が細長い、ヘ）柄の頭が角ばる形につくられている、ト）踏込の部分が輪の上部よりずっと厚くなっており、幅は逆に少しせばまっている、チ）四

面全体を鉄板で覆った例が多くなるとしている（註3）。

千賀久氏は、踏込み部分の厚さと柄の太さから3つに分類し、踏込みの厚さが柄と輪の部分と同じ厚さで、柄の太さが3.5〜4.5㎝の太いものをⅠA式、柄の太さが2.5〜3.0㎝の細く長いものをⅠB式、踏込みの部分の厚さが輪から踏込みにかけて厚くなるものをⅡ式として、それぞれ5世紀前半、5世紀中葉から後半、5世紀中葉から6世紀初頭の年代を想定している（註4）。

これらの木心鉄板張輪鐙と本遺跡出土の輪鐙を比較した場合、本遺跡の輪鐙は、柄の先端部の孔の形が横長ではない点や踏込み部の大きさが小さいなどの他、柄が長いといった違いがみられ、小野山・千賀両氏の分類の中にも一致する類例は見あたらない。

以上のように本遺跡出土の輪鐙は、木製のものにおいても、木芯鉄板張輪鐙においても現在のところ国内では類例が見あたらない。しかし形態的な特徴に限ってみると、柄部が長く輪部の踏込みがやや膨らむ特徴を持つ輪鐙は、朝鮮半島のおおよそ5世紀代と考えられている七星山96号墓（註5）出土の木芯鉄板張輪鐙や、中国河南省の4世紀初頭〜中葉と位置付けられている安陽孝民屯154号墓（註6）の金銅製輪鐙と類似し、柄部が長く輪部の外形が丸みを持った五角形状を呈する特徴は、中国遼寧省の4世紀初頭から中葉に位置づけられている朝陽袁台子東晋壁画墓（註7）の木芯を皮で覆った輪鐙と類似する。

この中の現存する最古の例である朝陽袁台子墓では、輪鐙が一対見つかっているのに対し、安陽孝民屯154号墓で見つかっている輪鐙は1点だけで、副葬品から復元した馬具のあり方を見てみると、鐙は左側だけに認められる。樋口隆康氏は、中国湖南省の年代が永寧2年（A.D.302）と判明している長沙金盆嶺第21墓から出土した施釉の騎人俑には、鐙が左側にのみついており、騎乗者がこれに足を掛けていないことから、左側にのみみられる鐙を騎乗のときの足踏みとして利用されたものと考えている（註8）。

（3）小結

馬具は、4世紀末には日本へ伝来した可能性が考えられている（註9）ものの、国内で明らかに4世紀代に遡る発見は現在のところ知られていない。本遺跡出土の木製輪鐙は、日本国内では類例がみあたらず、材質が異なり直接年代的にも対応しないが、安陽孝民屯154号墓の金銅製輪鐙と形態的な類似点が認められる。そして、安陽孝民屯154号墓の金銅製輪鐙は、騎行時の鐙ではなく、騎乗のときの足踏みとして利用された可能性が考えられている。このように本遺跡出土の輪鐙については、直接比較できる国内の類例がないため、中国の類例を参考にすれば、騎乗のときの足踏みとして利用された可能性も考えられる。

以上のように本遺跡の輪鐙については、騎行時のもの他に騎乗のときの足踏みとして利用されたものである可能性も考えられるなど、その伝来の時期・経路など非常に重要な問

題も関連してくることから、資料が絶対的に少ないこの段階ではその判断は差し換え、今後確実な資料の蓄積をまって考えてゆくことにしたい。

註1）　方形孔の擦痕の所見と本鐙が左側で使用されたものと考える所見は、小野山節氏のご教示によるものである。

2）　馬具および出土古墳の年代観は下記の文献による。
小野山節「日本発見の初期の馬具」（『考古学雑誌』52－1　1966）。
「古墳時代の馬具」（『日本馬具大鑑』1　1990）。

3）　小野山節「日本発見の初期の馬具」（前掲書）、「古墳時代の馬具」（前掲書）。

4）　千賀　久「日本出土初期馬具の系譜」（『橿原考古学研究所論集』第九　1983）。

5）　集安県文物保管所「集安県両座高句麗積石墓的清理」（『考古』　1979－1）。
集安県文物保管所「集安県両座高句麗積石墓的清理」（『考古』　1979－1）では4世紀に遡る可能性が指摘されている。穴沢氏と馬目氏は5世紀後半まで降る可能性も否定できないとしており（註6）文献）、千賀氏は出土している轡から5世紀前半ないし中葉まで遡ると考えている（註4）文献）。

6）　中国社会科学院安陽工作隊「安陽孝民屯晋墓発掘報告」（『考古』　1983－6）。
穴沢　光・馬目順一「安陽孝民屯墓の提起する問題（Ⅰ）・（Ⅱ）」（『考古学ジャーナル』2277・228　1984）。

7）　遼寧省博物館文物隊、朝陽地区博物館文物隊、朝陽文化館「朝陽袁台子東晋壁画墓」（『文物』1984－6　1984）。
穴沢　光「五胡十六国の考古学　上」（『古代学評論』創刊号　1988）。

8）　樋口隆康「鐙の発生」（『青陵』№.19　橿原考古学研究所　1972）

9）　小野山節「古墳時代の馬具」（前掲書）。

C：動物遺体・骨角製品

(1) 動物遺体

動物遺体は、SD115・302河川跡の、10世紀前葉に降下したと考えられている灰白色火山灰層（第4層）を挟んだ上下の層から土器や木製品などともに出土している。第4層の上層から出土したものには、ニホンジカをはじめウシ、ウシ、タヌキなどの各種動物遺体がある。このうちウシ・ウマは骨全体にビビアナイト（藍鉄鉱）が析出するなど保存状況の悪く、同定不能な資料も多いが、その他の動物遺体については体的に保存状況が良く、廃棄当時の状況をそのまま遺存しているものとみられる資料が多い。第4層の下層からは、全体の種類・出土量とも少なく、ガンカモ科やウシ、ウマなどが数点出土しているだけである。

今回検出した各種動物遺体の同定および計測結果は、第5・6表に示した。以下、種類ごとに概要を述べていく。

脊椎動物門　Phylum Vertebrata

鳥綱　Class Aves

ガンカモ科の一種　Anatidae sp.indent.

哺乳綱　Class Mammalia

ニホンジカ　Cervus nippon

イノシシ　Sus scrofa

タヌキ　Nyctereutes procyonoides

ウシ　Bos taurus

ウマ　Equus caballus

第５表　出土動物種名表

遺構	層位	種類・部位	
SD15	3	ガンカモ科	烏口骨L
		不明鳥類	胸骨
		不明獣類	頭蓋骨破片
	5上	ウシ	頭蓋骨（P3＝20.9/15.5/14.0，M1＝21.0/23.0/7.9 M2＝24.2/23.1/8.0，M3＝31.3/22.2/8.5） 橈骨（GL＝〈270.0〉，Bp＝77.2，Dp＝38.8，Bd＝69.8，Dd＝39.8） 尺骨L（Bo＝49.4），助骨破片
		ウマ	肩甲骨L（GLP＝75.5，LG＝51.3，BG＝41.2）
		ウシ or ウマ	頭蓋骨破片
	5b	ガンカモ科	胸骨
		不明鳥類	橈骨L，R（GL＝207.4，Bp＝15.5，Bm＝8.2，Bd＝12.0）
		ウシ	軸椎，助骨破片
		ウシ or ウマ	助骨破片，膝蓋骨
		不明獣類	頸骨R
	5d-2	ウシ	上腕骨R（近位端未癒合）
SD302	3B	ガンカモ科	上腕骨R（Bp＝21.3㎜）
		ニホンジカ	（第７～10表参照）
		イノシシ	助骨L破片
		タヌキ	頭蓋骨（Zy-Zy＝〈56.8〉，P1-M3＝38.1）， 下顎骨R（Goc-Id＝85.4＋α，P1-M3＝45.0）， 大腿骨L（Bp＝23.5，Dp＝11.0），頸骨L（Bp＝17.3，Dp＝20.6）
		ウシ	下顎骨R（M3＝42.6/13.8/-，TM3＝75.2），助骨破片
		ウシ or ウマ	下顎骨L，R，胸椎

※１　L：左，R：右，Zy-Zy：頬骨弓幅，Goc-Id：下顎骨全長（角より），TM3：下顎体厚（M3の後），P1-M3：臼歯列全長，臼歯：臼歯長/臼歯幅/臼歯高（咬合面と歯槽縁の中心距離），GL：最大長，Bp：近位端幅，Dp：近位端径，Bm：骨体中央幅，Bd：遠位端幅，Dd：遠位端径，GLP：遠位端長，LG：関節高長，BG：関節高幅，Bo：尺骨肘頭幅，

※２　計測方法は、Driesch A（1976）に従った。単位：㎜，〈　〉：推定値

第６表　動物遺体の同定・計測結果一覧

①鳥類

ガンカモ科の一種

左烏口骨、右上腕骨、胸骨が出土している。上腕骨は遠位端を失っているため全長は不明であるが、近位端幅は21.3㎜を測る。各部位骨ともマガモ・カルガモ相当の大きさのものである。

種不明鳥類

胸骨の胸峰（龍骨突起）付近の破片と左右の尺骨が出土している。尺骨は大きさからみて同一個体のものとみられる完存資料で、関節部はサギ科のものに近似している。

②哺乳類

ニホンジカ

今回同定した動物遺体の中で最も出土量が多く、ＳＤ302－Ｃの第３Ｂ層からまとまって出土しており、河川に埋没していたためか、保存状況の良好な資料が多い。

ａ、各部位の出土状況（第７表）

〈頭骨〉頭蓋骨、上顎骨、下顎骨とも出土量が多く、最小個体数にして７個体分の頭骨が出土した。頭蓋骨と上顎骨はほとんどが破片資料であり、状況が明らかなものは少ないが、角については例外なく角座付近で切り取られている。また、前頭骨～頭頂骨付近に脳髄摘出のためとみられる打割痕の認められるものもある（図版 70－4）。下顎骨は保存状況が良く、ほとんどのものが下顎体（前臼歯～後臼歯）から関節枝まで残存している。この中には関節枝外側（頬側）に解体痕とみられる数条の横位切痕が認められるものもある。こうした状況からみて、頭蓋骨は解体の際に下顎骨と切り離され、角切断や脳髄摘出などが行われていたものと思われる。なお、鹿角については、落角および袋角状態の頭蓋骨が出土

していないことや枝先の摩滅が進んでいることなど、いずれも枯角化（9 月）した以後の状態にある。

〈椎骨・肋骨〉椎骨、肋骨とも、他の部位と比較して極端に出土量が少ない。いずれも骨質がもろく一般的には残存しにくく、破片で出土する頻度が多い部位であるが、本遺跡の場合比較的保存状況が良く、肋骨についてみれば左右で近似した出土傾向を示している。それにもかかわらず出土量が少ないのは、これら胴部の骨が基本的に他部位とは異なる扱われ方がなされたことによるものとみられる。捕獲後、別の場所で第一次的な解体処理が行われた可能性も考えられよう。

〈四肢骨〉前肢では上腕骨、尺骨、後肢では大腿骨、頸骨の出土量が多く、縄文時代の貝塚などにおいて一般的に残存率の高い手根・足根骨（踵骨、距骨 etc）、中手骨、中足骨、指骨などの四肢下半骨の出土量が少ない傾向にある。中手・中足骨については、出土資料の中に加工の痕跡を残すものは認められないが、笄型骨製品（第 127 図 18）など骨器の素材として利用されたことによるものとみられる。手根・足根骨、指骨の出土量の少なさは、人為的なバイアスを示している可能性が高いと思われるが、中手・中足骨を再利用するために、手根・足根骨以下の骨を関節したままの状態で抽出した可能性も考えられる。ところで、今回出土した四肢骨の大半は割れた状態にあり、全体の 1/3 以上の骨が生の状態で割れた螺旋（スパイラル）状を呈している。これは解体後に骨髄の摘出など、意図的に骨を割るような行為が行われたことを示しているものと思われる。

以上のように、ニホンジカは胴部の骨がかなり欠落しているものの、これ以外の部位についてはまとまった良好な状態で検出されている。遺跡内に持ち込まれて解体され、脳髄・骨髄の摘出や骨角製品等に利用された後すぐ、河川に一括廃棄されたものと思われる。

b、雌雄構成

頭骨によって算出された最小個体数 7 のうち、角の有無によって判定可能な 6 個体についてみてみると、雌が 2 個体に対して、雄は 4 個体であった。

c、年齢構成

〈歯による年齢推定〉下顎骨における歯の萌出・交換と歯頸線の出現状況、および歯の咬耗状態から年齢構成をみると（第 8 表、小池・大泰司：1984）、1 歳未満の幼獣の出土はなく、第 3 後臼歯（M3）が未萌出段階（1.5 歳）のものが 2 個体（同一個体のものを含めた資料数 3）、M3 萌出直後（2.5 歳）のものが 3 個体（同 4）、エナメル質咬耗がやや進み歯頸線がM2 舌側までおよんだ段階（4.5 歳）のものが 1 個体（同 1）、咬耗が進み歯頸線がM3 舌側までおよんだ段階（8.5 歳）のものが 1 個体（同 2）みられた。なお、死亡季節については、歯による査定基準が現生の近畿産および日光産のニホンジカをもとにしたもので

遺構	層位	頭蓋骨	下顎骨	椎骨	助骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	寛骨	大腿骨	頸骨	踵骨	距骨	中足骨	指骨
SD302	3B	♂4 ♀2 ?1	6 4	腰2 仙1	12 13	2p/1d 1p/2d	3d ③p/5d	1p 2①d	3p/1d 1②p	2p/1d 1p/1①d	2 1	1③p/②d 2①p/2②d	2③p/3d 2①p/2d	1 	②d 1	②d 1d	基1 中1

※上段：左，下段：右，腰：腰椎，仙：仙椎，基：基節骨，中：中節骨，p：近位端，d：遠位端，○：未癒合資料

第７表　ニホンジカの部位別出土状況

左右	臼歯の萌出と咬耗状況						歯頸線の出現状況						推定年齢	備考
	P1 m1	P2 m2	P3 m3	M1	M2	M3	M1		M2		M3			
							舌	類	舌	類	舌	類		
L	[ ]	P2	(P3)	M1 4-5	M2 6	(M3)	−	−	−	−			1.5	M3が1/3程萌出。 P2＝14.0/6.4
R	[ ]	(P2)	(P3)	M1 6	M2 6	(M3)	−	−	−	−				M3が1/3程萌出。 HM3≒38.5，M2＝21.9/7.5
L				(M1)	M2 5-6	(M3)	?	?	−	−			1.5	M3が2/3程萌出。 HM3≒36.6，M2＝20.3/9.5
L	[ ]	[ ]	[ ]	M1 5	M2 5	M3 7	?	−	−	−	−	−	2.5	
L	P1	P2	P3	M1 ?	(M2) ?	M3 6	+	−	−	−	−	−	2.5	P1-M3＝94.1，HM3≒35.3，HM1＝25.1，HP1≒23.4，P1＝5.9/2.1，P2≒13.0/5.5，P3＝13.5/6.6，M1＝15.8/8.5，M3＝23.8/7.8
L				(M1)	M2 5	M3 7	?	?	−	−	−	−	2.5	HM3＝38.3，M2＝21.1/10.1，M3＝24.6/8.1
R	P1	P2	P3	M1 4	M2 5	M3 7	+	±	−	−	−	−		P1-M3＝98.6，HM3≒39.1，HM1＝26.5，HP1≒21.3，P1＝8.1/3.3，P2≒14.5/6.2，P3＝15.1/7.6，M1＝17.4/9.6，M2＝21.2/9.8，M3＝24.4/7.6
L			P3	(M1) ?	M2 3	M3 4	+	?	±	−	−	−	4.5	P3＝13.4/8.1，M2＝18.3/11.1，M3＝24.2/9.6
L	P1	P2	P3	M1 2	M2 3	M3 3-4	+	+	+	±	±	−	8.5	P1-M3＝97.6，HM1＝28.6，HP1＝24.4，P1≒7.8/5.9，P2＝13.9/7.3，P3≒14.4/8.5，M1＝15.5/10.8，M2≒18.9/11.1，M3＝26.3/11.6
R	P1	P2	P3	M1 2	M2 3	M3 3-4	+	+	+	±	±	−		P1-M3＝98.7，HM3＝38.6，HM1＝29.8，HP1＝24.1，P1＝9.2/4.7，P2≒13.6/7.3，P3＝15.2/9.2，M1＝14.8/9.9，M2＝19.3/11.7，M3＝25.5/11.6

※１　（　）：萌出途中，［　］：破損および脱落歯，空欄は歯槽部が残存しないものを示す。
※２　後臼歯（M1～M3）の下段数字は，大泰司（1980）にもとづく臼歯の摩滅指数を示す。
※３　歯頸線の出現状況で，（−）は歯頸線が下顎上縁に達していないもの，（±）は一部出現したもの，（+）は完全に出現したものを示す。
※４　P1-M3：臼歯列全長，HM3：下顎体高Ⅰ（M3の後），HM1：下顎体高Ⅱ（M1の前），HP1：下顎体高Ⅲ（P1の前），臼歯：臼歯長／臼歯幅，単位：mm

第８表　ニホンジカの下顎臼歯による年齢推定

部位		ニホンジカ		ヒツジ
		未癒合	癒合	癒合終了年齢
上腕骨	近位	3	0	3－3.5年
	遠位	0	8	10ケ月
橈骨	近位	0	1	10ケ月
	遠位	1	2	3年
尺骨	近位	2	4	2.5年
中手骨	遠位	1	2	18-24ケ月
大腿骨	近位	4	3	2.5－3年
	遠位	4	2	3－3.5年
頸骨	近位	4	4	3－3.5年
	遠位	0	5	1.5－2年
中足骨	遠位	2	1	20－28ケ月

※ヒツジの化骨化終了年齢は、松井（1986）による。

第９表　ニホンジカの関節骨端化状況

部位		計測値
上腕骨	L	Bd＝45.7，49.4，52.5
	R	Bp≒*58.4，Bd＝35.8，39.0，45.9，47.3，49.0
橈骨	L	Bp＝42.2
	R	Bp≒32.8
尺骨	L	Bp＝22.6，23.7
	R	Bp≒*22.8，23.8
中手骨	L	{GL≒219.0/Bp≒31.0/Bd＝31.3}，Bp＝33.0
	R	{GL＝206.1/Bp＝27.7/Bd＝28.1}
大腿骨	L	Bd＝*55.5
	R	Bd≒*55.4，55.8，*60.4
頸骨	L	Bp＝*57.1，59.8，62.1，*66.5，Bd＝36.8，39.9，40.2
	R	Bp＝60.7，Bd≒36.9，41.5
中足骨	R	Bd＝29.3
距骨	R	GL＝26.9，GB＝42.2

※１　L：左，R：右，GL：最大長，GB：最大幅，Bp：近位端幅，Bd：遠位端幅，*：未癒合資料，{　}：同一資料
※２　計測方法は、Driesch A（1976）に従った。単位：mm

第10表　ニホンジカの計測表

あり、本遺跡出土のニホンジカに用いるにあたっては検討を要するが、これによると、いずれも誕生月（6月下旬頃）より約半年経過した特徴を示している。

〈骨の化骨化による年齢推定〉四肢骨における上下の関節端の化骨化状況をみてみると、上腕骨近位端3例（資料数3）、橈骨遠位端1例（同3）、尺骨肘頭2例（同6）、中手骨遠位端1例（同3）、大腿骨近位端4例（同7）、同遠位端4例（同5）、頸骨近位端4例（同8）、中足骨遠位端2例（同3）が未癒着であった（第9表）。ニホンジカにおける化骨化の終了年齢は明らかではないが、比較的近縁種であるヒツジと大きく違わないものとみられる(松井：1986)。ここではヒツジの化骨化年齢をもとに推定してみると、生後 10ヶ月で化骨化する上腕骨遠位端、橈骨近位端に未癒着の資料はないものの、1.5〜2.5歳に化骨化する部位では12例中5例、同様に2.5〜3.5歳では27例中16例の未癒着資料がみられた（第9表）。歯による推定と同様に、3.5歳以下の特徴を示すものが多い傾向こある。

d、個体の大きさ

各部位の計測値は第10表に示した。該期の比較資料がなく、本遺跡出土のニホンジカの個体群について詳しく述べることはできないが、現生の金華山（牡鹿町）や五葉山（岩手県大船渡市）のニホンジカに比べてかなり大きい個体群である。

上述のとおり、出土した四肢骨の中には関節部が未癒合のものが多く含まれている。ただし、近位端および遠位端の関節幅でみる限り、癒合終了のものとの間に大きな違いは認められず、中には関節部の癒合が終了したものより大きい個体もある。一方、五葉山のニホンジカにおける生育状況をみると、体重はオスが3.5歳、メスが2.5歳まで急激に増加し、それ以降は徐々に増加するものの、ほぼ安定する傾向にある（高槻：1992）。本遺跡における年齢構成からすると、若獣の中でもほぼ成獣なみの大きさに達した個体が多いものとみられる。

イノシシ

左肋骨（第8〜10付近）の体部破片のみ、2点出土している。

タヌキ

頭骨、右下顎骨、左大腿骨、左頸骨が出土している。頭骨は前頭骨から鼻骨にかけての資料で、上顎歯は左第3後臼歯（M^3）のみが残存し、他の臼歯は破損している。下顎骨は下顎体から関節枝まで残存する良好な資料であるが、前臼歯（P_2）のみで他の歯は欠損脱落している。

ウシ

ＳＤ115・302河川跡の灰白色火山灰層を挟んだ上下の堆積層から散在的に出土しており、顕著な一括性は認められない。頭骨、右下顎骨、軸椎、右上腕骨、左前腕骨（橈・尺

骨）、右大腿骨、上顎および下顎の遊離歯が出土している。このうち橈骨には骨体中位の内側部分に解体痕とみられる横位切痕が、また上腕骨にはニホンジカと同様に、骨髄を摘出したような痕跡（スパイラル・フラクチャー）が認められる。各部位の計測値は第 6 表に示したとおりである。橈骨の計測値から推定された第 5 層出土のウシの体高は 117.4±2.5 ㎝で、現存する古代以来の在来種である見島牛、口之島牛の雌の大きさに相当する。年齢については、第5層出土のものが上顎骨の歯高および咬耗状態からみて12.5～14歳（月齢で 163.7±13.8 ヶ月）、第 5ｄ－2 層出土のものが上腕骨近位端の癒着状況からみて 3.5～4.0 歳未満と推定される（註 1）。

ウマ

灰白色火山灰層直下の第 5 層から、左肩甲骨が 1 点出土している。計測値は遠位端長 7.55 ㎝、関節窩長 5.13 ㎝、関節窩長 4.12 ㎝で、古代以来の在来種であるトカラ馬（体高 114.5 ㎝,西中川他：1991）と同程度の小型馬に属する。

このほか破片資料のため特定できなかったが、大きさからみてウシもしくはウマとみられる下顎骨、肋骨、胸椎、膝蓋骨が出土している。

（2）骨角製品

ニホンジカと同様に第 3Ｂ層から、笄型骨製品（第 127 図 18）が 1 点出土している。中手骨あるいは中足骨とみられる長骨を内外に縦割し、薄く平坦に仕上げたもので、表裏両面とも金属器による削りの痕跡が顕著に認められる。具体的な使われ方については類例もなく明らかではないが、裏面の上下端には関節部の海綿質および髄腔壁が痕跡的にみられ、かなり大きな個体の素材を最大限利用したことが窺える。最大長 21.5㎝、上端幅 1.5 ㎝前後、下端幅 1.0㎝ 前後、厚さ 0.5 ㎝である。

鹿角は同一個体のもの 2 対を含む 5 点が出土している。4 尖をもつような大型の個体もみられる（図版 70－1・2）。おそらくこれらは角器製作のために切り取られたものであろう。ただし、左右の角が揃って出土した 2 対については、金属器によって頭骨から丁寧に切り離され、一部枝先が切り取られているものの、素材取りや二次加工は認められない。

（3）小結

今回出土した動物遺体と骨角製品は、ほとんどのものが灰白色火山灰層を挟んだ上下の層から出土しており、9 世紀代～10 世紀前半頃を中心とした平安時代のものとみられる。出土量は、比較的まとまって出土したニホンジカを除くと、各種とも数点ずつ出土しただけである。

ニホンジカについても算出された個体数は 7 体と少なく、今回の出土資料をもって生業活動全体の中での位置付けや狩猟のあり方などについて詳しく述べることはできないが、

雌雄構成についてみれば、雌に比べ雄の個体数が多い傾向にある。年齢構成は、1.5〜3.5歳の若獣が多く、壮齢の成獣や老獣は少ない。一方、1 歳未溝の幼獣については歯および四肢骨の化骨化の状況をみる限り、捕獲の対象となっていなかった可能性が高い。これらのことから、ニホンジカの捕獲にあたっては、肉量および個体群の繁殖力といった経済性や角器の素材としての利用価値などが考慮されていたものと推測される。ただし、若獣の占める割合が高いという年齢構成は、縄文時代以来の共通した傾向であり（小池：1992）、自然個体群の年齢構成や捕獲しやすさなどを反映したものである可能性が高い。捕獲季節については、季節推定の基準や方法などなお検討を要するが、歯の萌出・交換および歯頸線の出現状況や枯角化以後の特徴を示す頭骨の状態からみて、冬を中心とした時期の可能性が高い。

ウシ、ウマは、古代の遺跡から出土する平均的な大きさのもので、ウシは在来牛である見島牛、口之島牛の雌に、ウマはトカラ馬に相当する。家畜動物であるウシ・ウマは、古代にはこれまで郡山遺跡（木村・長島：1982）や多賀城跡（富岡他：1992）をはじめ、山王遺跡八幡地区（赤澤他：1990）、市川橋遺跡（註 2）などの官衙およびその周辺遺跡で比較的多く検出されている。この中の山王遺跡ではウマが比較的まとまって出土している（註 3）。一方、一般集落と考えられる仙台市泉崎遺跡（吉岡：1983）や富沢遺跡（工藤他：1988）の水田ではウシの足跡が検出されており、また多賀城跡で出土した私馬に関する漆紙文書（後藤・古川：1990）の発見は、この時期の一般集落におけるウシ・ウマの存在を示す資料であるが、一般集落からのウシ・ウマの出土はこれまであまり知られていない。このような中で、本遺跡で出土したウシ・ウマは、当時の一般集落におけるウシ・ウマの普及の問題や飼養のあり方などを明らかにしてゆくための貴重な資料といえる。

註 1）　体高および年齢については鹿児島大学農学部西中川駿氏に御教示頂いた

註 2）　多賀城市埋蔵調査センター相沢清利氏の御教示による。

註 3）　山王遺跡では古代の道路側溝や井戸跡、河川跡などから、かなりの頻度で出土している。とくに八幡地区では、8 世紀後半頃とみられる 3.0×2.0㎡ 程のくぼみ（ＳＸ200 ウマ集積遺構）から最小個体数で 9 個体分のウマが折り重なるような状態で検出されている（赤澤；1990）。

2. 遺構について

今回の調査で検出した主な遺構は、竪穴住居跡 31 軒・方形周溝墓 2 基、掘立柱建物跡 7 棟、円形周溝 6 基の他、柱列 1 条、水田跡および河川跡 2 条がある。そして、これら各遺構の時期は、古墳時代前期〜平安時代にわたっており、時期および重複関係から次のよう

な遺構群に分けられる。

1：古墳時代以前の可能性のあるもの……ＳＤ121、

2：古墳時代の竪穴住居跡、方形周溝墓、土壙など

ａ、古墳時代前期……ＳＩ112・114・202・13・401、ＳＤ105・106、ＳＫ122・137・239、ＳＤ224など

ｂ、古墳時代中期……ＳＩ103・20～22・201・245・14～17・301・304、ＳＸ01など

ｃ、古墳時代後期……ＳＩ19・229・11、ＳＤ113、ＳＤ203・211・306など

3：平安時代の掘立柱建物跡、水田跡……ＳＢ216・240・241・313、水田など

各時期の遺構については、遺構の性格・遺物からみて、いずれも一般の集落跡と考えられる。

以上の他に古墳時代以前から平安時代以降まで流れていた河川跡がある。河川跡は、Ｂ区からＤ区にかけて南北方向に流れ、Ｄ区南西部で西からの河川と合流しているＳＤ302とＡ区南端部で西から東へ流れ、Ａ区の調査外の東側でＳＤ302 と合流するとみられるＳＤ115である。そして遺構は、ＳＤ302河川跡の東西両側で発見されいるが、その大部分は河川の西側に集中している。一方、ＳＤ302東側については、検出した主な遺構はＳＩ401竪穴住居跡１軒である。

［各時期の様相］

重複関係から古墳時代以前の可能性のあるＳＤ121 溝は、遺物も出土していないことから時期・年代が特定できず、検出した遺構もこの溝だけであるため詳細は不明である。

【古墳時代前期の集落】

この時期の遺構としては、ＳＤ302河川跡西側で検出したＡ区のＳＩ112・114住居跡、ＳＤ105・106方形周溝墓、ＳＫ112・137土壙、Ｂ区のＳＩ202住居跡、ＳＤ224溝、Ｃ区のＳＩ13住居跡と、東側で検出したＤ区のＳＩ401住居跡、ＳＫ404･410土壙などがある。このように、古墳時代前期にはＳＤ302河川跡の東西で集落跡を発見している。

ＳＤ302河川跡東側では竪穴住居跡１軒といくつかの土壙を検出していることから、集落の存在とその時期が想定されるが、詳細は不明である。集落は、調査区外の東側に広がって行くものと思われ、河川西側の集落との関係の把握が今後の課題と言える。

西側の集落は、南をＳＤ115河川跡によって、また東をＳＤ302河川跡によって限られている。北はＤ区の南西部でＳＤ302 と合流する河川跡によって限られており、これを北の境界と考えれば、集落の広がりは、南北約250㎜で、東西は60㎜以上の広がりを有している。そしてこの集落の立地状況は、河川の規模と流路に多少の違いはみられるが、平安時代まで一貫して続いている。

集落内の遺構のあり方をみると、A区では西側の微高地部分に住居跡が2軒（ＳＩ112･114）と方形周溝墓が2基（ＳD105・106）に検出されている。方形周溝墓は南西端部で見つかっており、集落の南西部は墓域として利用されていた可能性がある。住居跡の方向は、ＳD115河川跡の方向とほぼ一致している。

Ｂ・Ｃ区では河川跡の西側に沿ってＳＩ202・13住居跡が2軒分布している。住居跡やＳD224溝の方向はＳD302河川跡とほぼ一致しており、住居の配置が自然地形を意識していたものと考えられる。

住居跡の規模には、5.5m前後のＳＩ112・202・13・401と2.8mほどのＳＩ114の2種類がみられる。

なお、前期と特定できる遺構は少ないが、Ｂ区にある古代の水田耕作土から前期の土器が出土しており、この水田跡の所にも前期の遺構が存在していた可能性がある。

【古墳時代中期の集落】

本遺跡で最も多くの住居跡が発見されている時期で、Ａ区のＳＩ103 住居跡、Ｂ区のＳＩ20・21・22・201・245住居跡、Ｃ区のＳＩ14～17・301・304住居跡などがある。

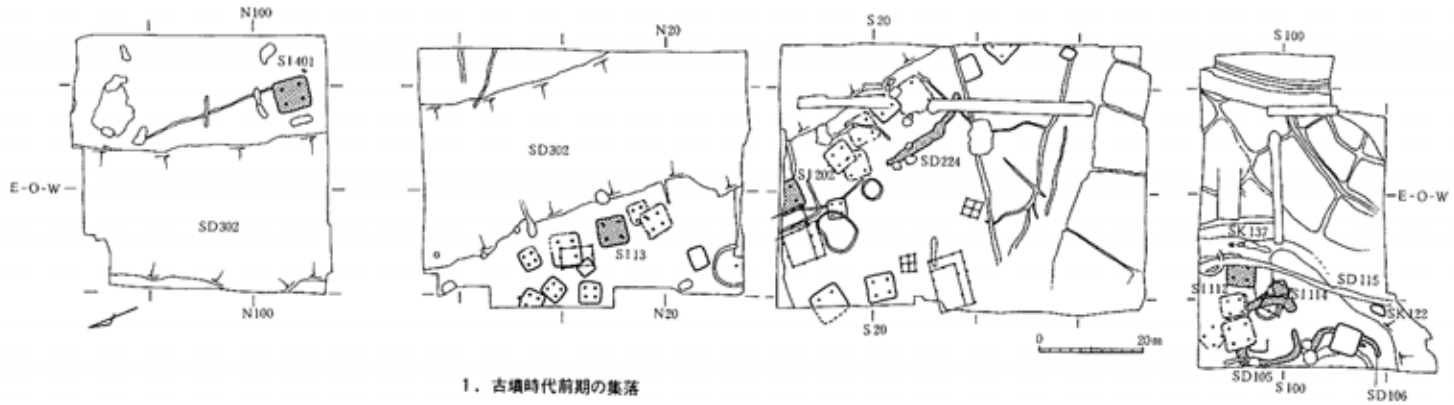
住居跡は、Ａ区南西部でＳＩ103、Ｂ区の北部でＳＩ20～22・201、Ｃ区西部でＳＩ14～17・301・304を検出しており、平面的には3つのまとまりとして捉えられる。この中のＢ区とＣ区のまとまりでは、第Ⅰ群土器を出土する住居跡と➡第Ⅱ群土器を出土する住居跡がそれぞれ認められることから、これら2つの住居跡のまとまりは、並存していた可能性が高いとみられる。住居の立地と方向は、河川跡の近くに位置する住居が河川跡とほぼ同じ方向を向き、河川跡から離れた西側に位置する住居では、方向が必ずしも河川跡と同じでない場合もみられる。住居跡の規模には、5～6mの大型のＳＩ103・20～22・14と4mほどの小型のＳＩ201・245・15～17・301・304の2種類がみられる。

なお、住居跡は12軒確認されているが、この中でカマドが確認されているのは5軒である。またＣ区のＳD302 河川跡の西側斜面からは、多くの土器とともに木製品などが出土しており、その分布範囲は住居跡のまとまりとほぼ一致している。

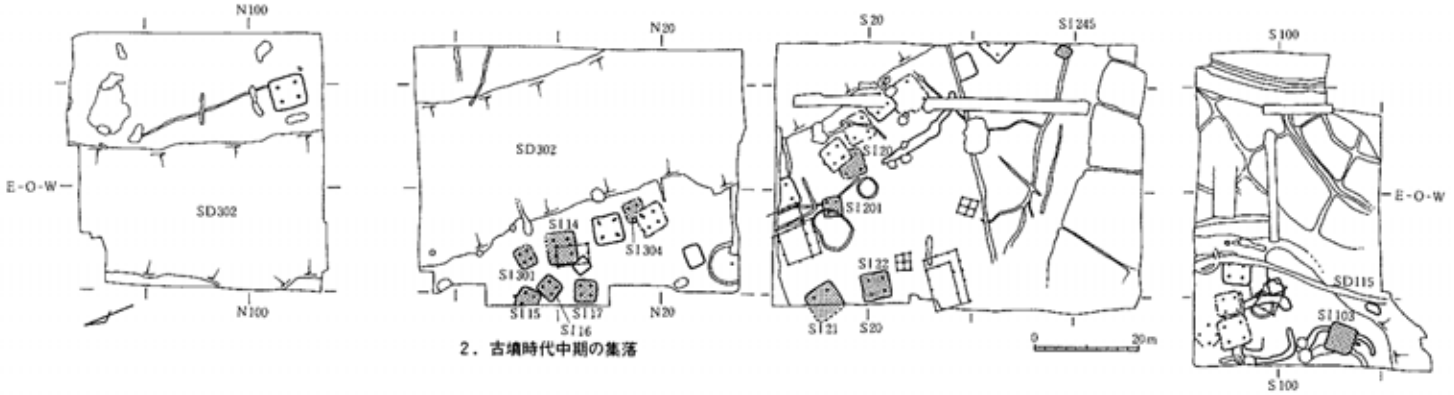
【古墳時代後期の集落】

この時期の遺構には、Ａ区のＳD113溝、Ｂ区のＳＩ19・229住居跡、Ｃ区のＳＩ11住居跡などがある。このうちのＳＩ11・19・229 は、古墳時代の後期の住居跡と考えられ、ＳD302河川跡沿いに列をなすように位置している。住居跡の規模は、いずれも5m前後である。また、Ａ区で検出したＳD113は、古墳時代後期の7世紀後半を中心とした時期の溝と考えられる。

なお、Ｂ区で検出したＳD203円形周溝は、直接切り合い関係はないが平安時代の建物跡



1．古墳時代前期の集落



2．古墳時代中期の集落

第140図　藤田新田遺跡における集落の変遷（1）

と重複している。また、堆積土の下層から古墳時代後期の土器が出土しているがロクロを使用した土器はみられないことから、時期が古墳時代後期～奈良時代のものと推定される。この他、B区で検出しているＳD211円形周溝とC区で検出しているＳD306円形周溝は、溝の掘り方が細いものの深くて急角度であり、人為的に埋め戻したと考えられる埋土が下層で認められる点でＳD203と共通していることから、ＳD203と同じ時期のものである可能性が考えられる。

【平安時代の集落】

この時期の遺構にはB区のＳB216・240・241 掘立柱建物跡、水田跡、C区のＳB313掘立柱建物跡などがある。この他に建物跡として、A区のＳB136 とB区のＳB209・210があるが、出土遺物などから年代を決めることはできず、また柱穴の形状や規模が平安時代の建物跡と異なることから平安時代以外の可能性も考えられるため、ここでは一応除外しておく。

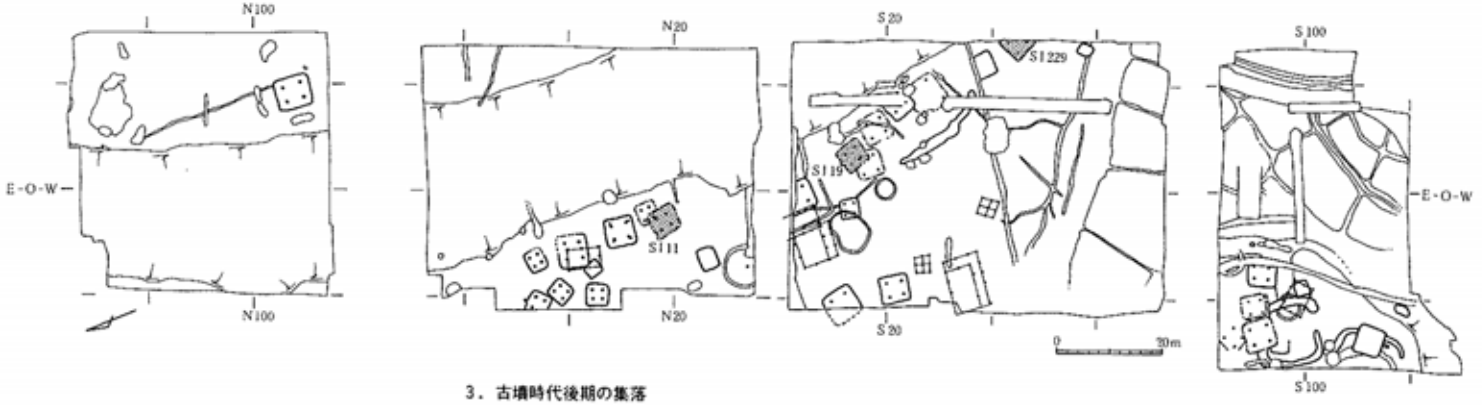
建物跡や土壙は、B区の北半部やC区の微高地上で検出されている。建物跡は、柱穴の規模が最大一辺0.8m前後で、南北・東西とも2間のＳB313、東西1間で南北が2間以上ＳB241といった小規模なもの以外に、廂を持つ比較的規模の大きいＳB216・240建物跡もみられるが、その配置に計画性がみられない。建物跡の方向は、いずれもほぼ真北を向いている。年代は、柱穴埋土に10世紀前半頃降下した灰白色火山灰小粒を含む建物跡があることから、10世紀前半頃を中心とした時期と考えられる。

一方、水田（水田Ⅲ・Ⅳ）は、居住区の南東から南にあたるB区南半部からA区東半部にかけての河川に向かって緩やかに傾斜してゆく低湿地部分で営まれている。畦畔は一定の方向を向いておらず、等高線に沿って作られていたと考えられる。年代は、建物跡と同様に、10世紀前半代を中心とした時期と考えられる。このように平安時代の集落では、内部が居住域と生産域に分けて利用されている状況を捉えることができた。

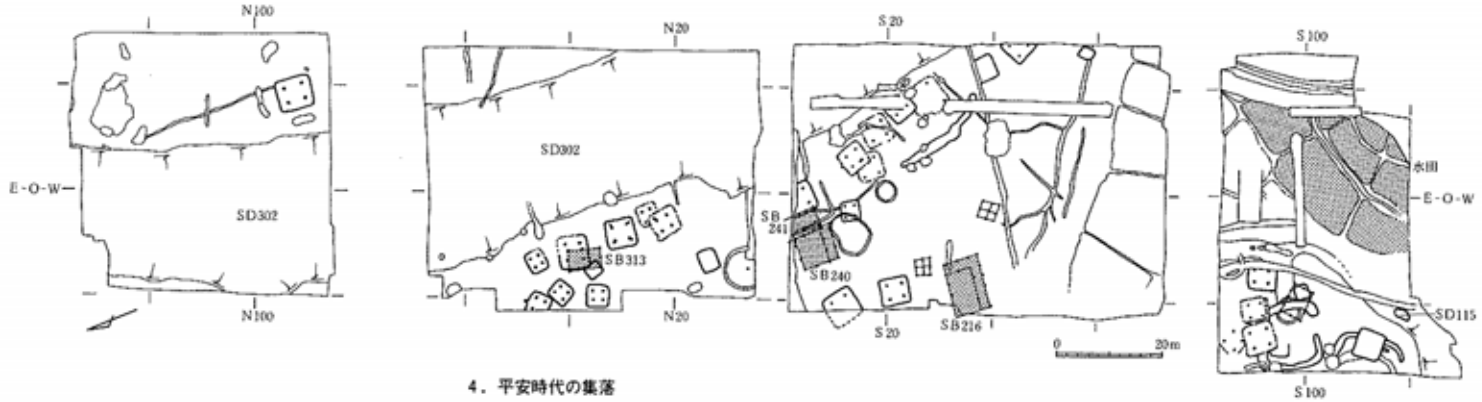
【平安時代以降】

時期を特定できる遺構はないが、A区の東側で検出された水田跡ⅠやＳD139 は他の水田跡Ⅱ～Ⅳを壊して作られたもので、畦畔の方向も明らかに異なることから、平安時代以降のものと考えられる。また、ＳD115・ＳD302河川跡は平安時代以降も埋まりきらずに存在し続けており、江戸時代の初めに新田開発が行われた際に水路として使用されていた可能性もある。

以上の他にＳD302－A河川跡から弥生土器が出土している。弥生時代の遺構は今回の調査区内では発見されていないが、調査区北西の微高地では弥生土器と石器が発見されている（伊東：1950）ことから、当時の集落はそこに存在した可能性も考えられる。



3．古墳時代後期の集落



4．平安時代の集落

第141図　藤田新田遺跡における集落の変遷（2）

Ⅵ　ま　と　め

1.　藤田新田遺跡は宮城県の中央部、仙台市若林区荒井字藤田新田に所在する。遺跡は約5000～4500 年前頃に形成された最も古い内側の列とされる浜堤上に立地し、現在の海岸線より約 3㎞ のところある。この地域一帯は江戸時代の初めに仙台藩の政策により新田開発が行われて以来、水田地帯として利用されており、旧宮城郡と旧名取郡の境界地でもあった。

2.　藤田新田遺跡は弥生時代の遺跡として知られていたが、調査の結果、弥生時代・古墳時代前期から平安時代・近世の遺構・遺物が検出された。主体は古墳時代と平安時代である。

3.　集落は、自然地形から河川跡によって画されていると考えられ、南北約 250㎜・東西60㎜ 以上の広がりを有していると想定される。空間の利用状況は、微高地部分が居住域として利用され、平安時代では、低地部分に水田が作られて生産域として利用されていたことが窺える。

4.　遺構は、河川跡西側の微高地を中心に古墳時代前期が竪穴住居跡 5 軒、方形周溝墓 2 基のほか土壙・溝など、中期が竪穴住居跡 12 軒のほか土壙など、後期が竪穴住居跡 3 軒、円形周溝 1 基など、平安時代が掘立柱建物跡 4 棟、土壙・溝が検出された。低湿地部分には平安時代と平安時代以降は水田跡が営まれており、全時代を通した遺構としては河川跡がある。

5.　古墳時代前期の土器は、ＳＤ224 の層位的な出土状況から、第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器に分けられた。第Ⅰ群土器は塩釜式の前半を中心とした時期に、また第Ⅱ群土器は塩釜式の中頃を中心とした時期に相当する土器群と考えられた。この他、ＳⅠ401 出土の一括土器群があり、土器群の内容から時期的には第 Ⅰ 群土器の時間幅の中に含まれるとみられた。なお、ＳⅠ401 出土土器群と第Ⅰ群土器との関係は今後資料の蓄積をまって検討することにしたい。

6.　古墳時代中期の土器は、出土土器の検討から第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器に分けられ、第Ⅰ群土器は南小泉式の前半段階に、第Ⅱ群土器は後半段階にそれぞれ対応すると考えられた。土器群の実年代としては、第Ⅱ群土器に見られる須恵器𤮈を正確に模倣した土師器の特徴から 5 世紀後半の年代が考えられ、第Ⅰ群土器は 5 世紀前半の年代が想定される。また、河川跡からは木製品が出土しており、農耕具の他に、日本で最初の発見例となった木製の輪鐙が出土し、馬具の系譜や一般集落での馬具のあり方を知る上でも重要な発見となった。

7.　古墳時代後期の土器は少ないものの、その特徴から 7 世紀代を中心とした年代が想定された。中には関東地方の土器の搬入品または模倣品と考えられるものも見られ、他地域との関係が想定される。

8.　平安時代の土器は、土器の特徴や河川跡での出土状況から 10 世紀代に位置づけられ、木製品やシカ・ウシの骨などが出土し、当時の生活を知る上で貴重な発見となった。

<引用・参考文献>

赤澤靖章　1990　「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 138 集　宮城県教育委員会

吾妻俊典・須田良平　1992　「野田山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 145 集　宮城県教育委員会・宮城県保健環境部

吾妻俊典・菅原弘樹　1994　「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 161 集　宮城県教育委員会・東北地方建設局仙台工事事務所

阿部博志・千葉宗久　1980　「(4)、台ノ山遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第 62 集　宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局

阿部　恵他　1991　「新峯崎遺跡」『宮城県村田町文化財調査報告書』第 9 集　村田町教育委員会

石川俊英・相沢清利　1991　「山王遺跡－第 9 次発掘調査報告書－」『多賀城市文化財調査報告書』第 26 集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

伊東信雄　1950　「仙台内の古代遺跡」『仙台市史 3』

伊東信雄　1957　「古代史」『宮城県史』第 1 巻

伊東信雄　1960　「東北北部の弥生式土器」『文化』第 24 巻第 1 号

今泉隆雄　1988　「多賀城の時代」『図説　宮城県の歴史』

岩尾正成　1987　「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報第 1 号　美濃古窯研究会

岩見和康・佐藤憲幸　1991　「合戦原遺跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第 140 集　宮城県教育委員会

氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯　東北史学会

宇野隆夫　1989　「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」

及川　司　1994　「平泉のかわらけ」『柳之御所跡の検討資料』平泉町文化財センター

太田昭夫　1980　「大橋遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第 71 集　宮城県教育委員会・日本道路公団

小川貴司　1979　「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第 26 巻第 1 号　考古学研究会

小川淳一　1989　「五本松窯跡」『仙台市文化財調査報告書』第 99 集　仙台市教育委員会

大泰司紀之　1980　「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13

加藤道男　1981　「植田前遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第 81 集　宮城県教育委員会・日本道路公団

加藤道男　1982　「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第85集　宮城県教育委員会
加藤道男　1989　「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
加藤道男　1993　「宮城県の土器様相」『北日本における律令期の土器様相』
兼田芳弘　1987　「宮城県仙台市南小泉遺跡」『埋蔵文化財発掘調査研究所報告書』第4集　南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財発掘調査研究所
菊地逸夫　1985　「中峯遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第108集　宮城県教育委員会
木村浩二　1982　「郡山遺跡Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書』第38集　仙台市教育委員会
木村浩二他　1983　「郡山遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書』第46集　仙台市教育委員会
木村浩二他　1985　「郡山遺跡Ⅴ」『仙台市文化財調査報告書』第74集　仙台市教育委員会
日下部善己他　1980　「付編　矢ノ目遺跡出土遺物ー祭祀遺物ー（伊達西部地区遺跡所収）」『福島県文化財報告書』第82集　福島県教育委員会
工藤哲司　1988　「富沢遺跡ー第24次富沢中学校地区発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第56集　仙台市教育委員会
小井川和夫　1981　「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡　宮城県文化財調査報告書』第78集　宮城県教育委員会
小井川和夫　1984　「いわゆる赤焼土器について」『研究紀要』第10巻　東北歴史資料館
小池裕子・大泰司紀之　1984　「遺跡出土ニホンジカの齢構成からみた狩猟圧の時代変化」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』
小池裕子　1992　「生業動態からみた先史時代のニホンジカ狩猟」『国立歴史民俗博物館研究報告』第42集　共同研究「動物考古学の基礎的研究」（続）
後藤秀一・古川淳一　1990　「多賀城跡第55次調査」『宮城県多賀城調査研究所年報』1989　宮城県多賀城跡調査研究所
古窯跡研究会　1976　「仙台市大連寺窯跡発掘調査報告書」『陸奥国官窯跡群Ⅱ』古窯跡研究会研究報告第4冊
佐々木和博　1984　「鹿島遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第101集　宮城県教育委員会
佐藤甲二　1985　「中田畑中遺跡ー第2次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第78集　仙台市教育委員会
佐藤敏幸　1993　「須恵窯跡群 関ノ入遺跡」『河南町文化財調査報告書』第7集　河南町教育委員会
佐藤　洋　1987ａ　「六反田遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書』第102集　仙台市教育委員会
佐藤　洋　1987ｂ　「南小泉遺跡ー第14次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第109集　仙台市教育委員会
佐藤信行　1980　「東北南部における縄文晩期終末とその直後の文化（上）」『考古風土記』第5号
佐藤則之・菅原弘樹　1991　「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第141集　宮城県教育委員会
佐藤則之　1992　「伊治城跡」『築館町文化財調査報告書』第5集　築館町教育委員会
庄子　敦　1988　「八幡崎Ｂ遺跡」『利府町文化財調査報告書』第4集　利府町教育委員会
白鳥良一・加藤道男　1974　「岩切鴻ノ巣遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報

告書』第35集　宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局　p.p.
白鳥良一　1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一　1982　「土器」『多賀城跡　政庁跡本文編』　宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一・古川一明　1991　「２土師器の編年８東北」『古墳時代の研究－6土師器と須恵器』雄山閣
主浜光朗・渡部弘美　1984　「戸ノ内遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第70集　仙台市教育委員会
菅原弘樹　1993　「多賀城周辺の様子」『日本歴史』1993年9月号
菅原弘樹　1994　「方格地割と遺跡の性格」『古代都市の成立とその様相－第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』　古代城柵官衙遺跡検討会
須藤　隆　1984　「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究1』清文堂
須藤　隆　1990　「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論〆』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
高倉敏明他　1981　「山王遺跡－山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第2集　多賀城市教育委員会
高倉敏明　1981　「山王遺跡」『多賀城市史4　考古資料』
高槻成紀　1992　『北に生きるシカたち』どうぶつ社
高野芳宏　1991　「高崎遺跡井戸尻地区の調査」『多賀城市史4　考古資料』
高橋勝也　1984　「Ⅲ. 伊古田遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書』第69集　仙台市教育委員会
高橋守克・阿部　恵　1987　「須江糠塚遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集　河南町教育委員会
田島明人　1992　「古代の土器と中世の土器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
田辺昭三　1981　「須恵器大成」
千葉孝弥　1989　「山王遺跡」『多賀城周辺の古代遺跡－第15回古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
千葉孝弥　1994　「多賀城周辺の道路遺構－特集　古代の道と考古学」『季刊　考古学』第46号
次山　淳　1992　「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
辻　秀人　1993　「東北南部の古墳出現期の様相」シンポジウム『東日本における古墳出現過程の再検討』資料　日本考古学協会1993年新潟大会
辻　秀人　1994　「東北南部のおける古墳出現期の土器編年－その1　会津盆地」『東北学院大学論集』歴史学・地理学第26号
手塚　均　1981　「鶴ノ丸遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集宮城県教育委員会・日本道路公団
土岐山武　1980　「安久東遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第35集宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局
富岡直人　1992　「多賀城跡第60・61次調査出土のト骨・骨角器と脊椎動物遺存体」『宮城県多賀城調査概究所年報』1991　宮城県多賀城跡調査研究所
Driesch A　1976　“A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites”Museam Bulletin Ⅰ,
西中川駿・本田道輝・松元光春　1991　『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に

関する研究』　鹿児島大学農学部獣医学科
丹羽茂・柳田俊雄・阿部　恵　1974　「西野田遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第35集　宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局
丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志　1981　「清水遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局
丹羽　茂　1983　「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集　宮城県教育委員会
丹羽　茂　1985　「今熊野遺跡Iー古代篇ー；今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚」『宮城県文化財調査報告書』第104集　宮城県教育委員会
平川　南　1991　「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集　国立民俗博物館
平川　南　1993　「総論　土器に記された文字」『特集　墨書土器の世界』平成5年11月号
藤沢　敦　1992　「引田式再論」『歴史』第79輯　東北史学会
藤谷・佐原他　1990　「上吉田遺跡ー東北横断自動車道遺跡調査報告9」『福島県文化財調査報告書』第241集
古川一明　1983　「色麻古墳群ー宮城県圃場整備等関連詳細分布調査報告書（昭和57年度）」『宮城県文化財調査報告書』第95集
古川一明　1984　「色麻古墳群ー遺跡詳細分布調査報告書（昭和58年度）」『宮城県文化財調査報告書』第100集
前川　要　1984「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『研究紀要III』瀬戸市歴史民俗資料館
前川　要　1989Ａ　「平安時代における施釉陶磁器研究の現状と課題」『歴史時代土器研究』第5・6号
前川　要　1989Ｂ　「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（上・下）」『古代文化』第41巻第8・10号
松井　章　1986　「亀井遺跡（切り広げ部）出土の動物遺存体」『亀井（その2）』大阪府埋蔵文化財調査センター
松井　章　1990　「動物遺存体から見た馬の起源と普及」『古代上　日本馬具大鑑ー』日本馬具大鑑編集委員会編　日本中央競馬会
松井　章　1991　「家畜と牧ー馬の生産」『古墳時代の研究ー4生産と流通I』雄山閣
松本秀明　1984ａ　「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動」『地理学評論第57巻第10号』p.p.720～738
松本秀明　1984ｂ　「沖積平野の形成からみた過去一万年の海岸線変化」『宮城の研究1』p.p.7～52
真山　悟　1991　「東山遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集　宮城県教育委員会・日本道路公団
真山　悟　1991　「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第142集　宮城県教育委員会・日本道路公団
真山　悟　1994　「多賀城跡第60次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』宮城県多賀城跡調査研究所
丸山雄二　1993　「神宮寺遺跡の調査」『滋賀考古』第9号　滋賀考古学研究会

宮城県教育委員会　1993　「山王遺跡ー多賀前地区第1次調査ー」『宮城県文化財調査報告書』第153集
宮城県多賀城跡調査研究所　1972　「多賀城跡第14次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1971』
宮城県多賀城跡調査研究所　1975　「多賀城跡第23次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1974』
宮城県多賀城跡調査研究所　1979Ａ　「多賀城跡第32次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1978』
宮城県多賀城跡調査研究所　1979Ｂ　「多賀城跡第33次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1978』
村田晃一　1988　「宮城県黒川郡大衡窯跡群」『研究紀要』第14巻　東北歴史資料館
村田晃一　1992　「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
村田晃一　1994　「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第3回東日本埋蔵文化財研究会資料
八木光則　1993　「陸奥中部における古代末期の土器群」『歴史時代土器研究』第8号
柳沢和明・進藤秋輝　1992　「多賀城跡第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』宮城県多賀城跡調査研究所
山内・田口　1994　「白土原14号窯発掘調査報告書」『多治見市埋蔵文化財調査報告書』第42号　多治見市教育委員会
吉岡恭平　1983　「泉崎遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第56集　仙台市教育委員会
渡部弘美　1983　「南小泉遺跡第5次調査」『仙台市文化財調査報告書』第55集　仙台市教育委員会
渡部弘美　1983　「元袋III遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第10集　仙台市教育委員会
渡辺泰伸他　1974　「富沢窯跡」『古窯跡研究会報告』第3冊